岩手県埋文センター文化財調査報告書第85集

小井田(こいだ)Ⅲ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県埋蔵文化財センター
日　本　道　路　公　団

小井田Ⅲ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

序

四国四県に匹敵する広大な面積をもつ本県にとって地域開発の基幹となる道路など、交通網整備事業は県政の重点施策の一つであります。

一方、本県は遺跡の宝庫といわれるほど数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しております。貴重な文化財の保護、保存と現代生活をより豊かにという開発との均衡を保つことも大きな課題となってきております。

当埋蔵文化財センターは、昭和52年発足以来、県教育委員会の指導と調整のもとに、止むを得ず開発によって消滅する遺跡については発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う関連遺跡の発掘調査として、昭和57・58年度に行った一戸町小井田Ⅲ遺跡の調査結果をまとめたものであります。調査地は丘陵の頂部及びその中腹部でありますが、頂部には多数の陥し穴状遺構が発見され、そのいくつかは規則的に並んでいることが確認されました。また中腹部では縄文時代早期の住居址が発見され、その遺物を見ますと谷を挟んで対峙して存在する平船Ⅲ遺跡と対照できるものであります。この中腹部にはそのほか縄文時代中期の住居址や弥生時代の住居址が発見されるなど、いくつかの注目される事実が確認されております。これらはこの地方の歴史解明の貴重な資料となるものと思っております。

この報告書が広く活用され、斯学の発展と埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いと思います。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成にご援助、ご協力を賜わりました日本道路公団一戸工事事務所、一戸町教育委員会をはじめ関係各位に心から感謝すると共に今後のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

昭和59年11月

財団法人　岩手県埋蔵文化財センター

理事長　金　子　彰　吉

例　言

1　本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う岩手県二戸郡一戸町「小井田Ⅲ遺跡」の緊急発掘調査の結果を報告したものである。

2　本書に用いた地形図は、国土地理院発行の地形図（５万分の１）、岩手県作成の北上山系開発調査図（５千分の１）、日本道路公団作成の東北縦貫自動車道八戸線一戸インターチェンジ詳細設計図（５百分の１）である。

3　本書に掲載した遺構図面の方位標示は、すべて日本道路公団作成の東北縦貫自動車道八戸線一戸インターチェンジ詳細設計図の座北を使用してある。

4　本書に掲載した遺構実測図の縮尺は、住居址においては当該ページにスケールを付し、ピットは1/40、陥し穴状遺構は1/60としてある。

5　遺構実測図には、調査区域における遺構の位置を示すために、方位と２点以上の座標値を明示している。座標値は、調査区グリッドの原点位置を０として各方向ともにｍ単位で表示してある。

6　本書に掲載した遺構には、住居址１～７、ピット 101～158、陥し穴状遺構 201～275 の通し番号を付し遺構名としてある。

7　本書に掲載した遺物実測図及び土器片拓影の縮尺は当該ページに表示してある。

8　遺跡における相層の色調観察には、小山・竹原編著「新版標準土色帳」日本色研事業(株)を用いた。

9　本報告書に用いたスクリーントーンの区表は、次のとおりである。

地　山　　撹乱・掘り過ぎ

10　資料の分析・同定を次の方々及び機関に依来した。（敬称略・順不同）

石質鑑定　佐藤二郎（岩手県立大船渡農業高等学校）

火山灰同定　松山　力（青森県立八戸高等学校）

^{14}C 測定　学習院大学

11　調査期間及び調査担当者は、次のとおりである。

調査期間　第一次調査　1982年７月16日～10月30日

第二次調査　1983年４月11日～７月31日

調査担当者　専門調査員　栃澤満郎（第一次調査・第二次調査）

専門調査員　渡辺洋一（第一次調査）

専門調査員　田鎖寿夫（第二次調査）

12　本報告書の執筆分担は、次のとおりである。

Ⅰ　調査に至る経過……調査課長　近　藤　宗　光

Ⅱ　調査の方法と室内整理の方法
Ⅲ　遺跡の立地と自然環境
Ⅳ　遺跡の現状
Ⅴ　縄文時代早期に属する土器の文様
Ⅵ　遺跡に関する事実報告
Ⅶ　まとめ
……栃　澤　満　郎

13　本書に掲載した図版の作成は、栃澤満郎と次の当センター期限付職員が行った。

浅　沼　啓　子（土器・石器実測、土器片拓影、遺構・遺物トレース）
米　倉　恵美子（土器・石器実測、土器片拓影、遺構・遺物トレース）
村　上　テイ子（土器・石器実測、土器片拓影、遺構・遺物トレース）
広　瀬　良　子（土器・石器実測、土器片拓影、遺構・遺物トレース）
阿　部　静　子（土器・石器実測）
吉　田　久美子（土器実測、遺物トレース）
岩　渕　希　士（遺物写真撮影）

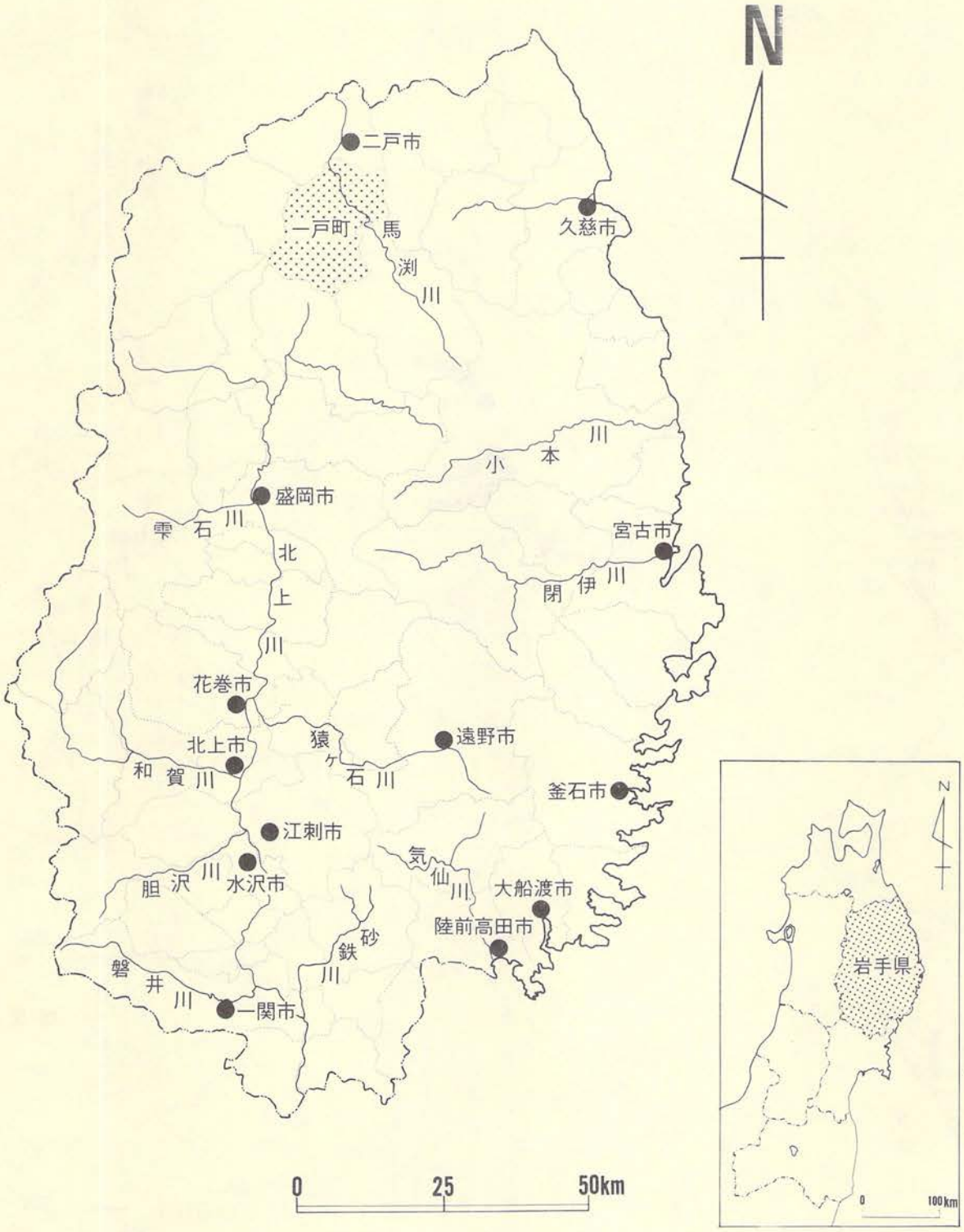
14　調査期間中並びに執筆にあたり、次の方々から御教授を受けた。（敬称略・順不同）

高田和徳（岩手県一戸町教育委員会）、熊谷常正（岩手県立博物館）、松山力（青森県立八戸高等学校）

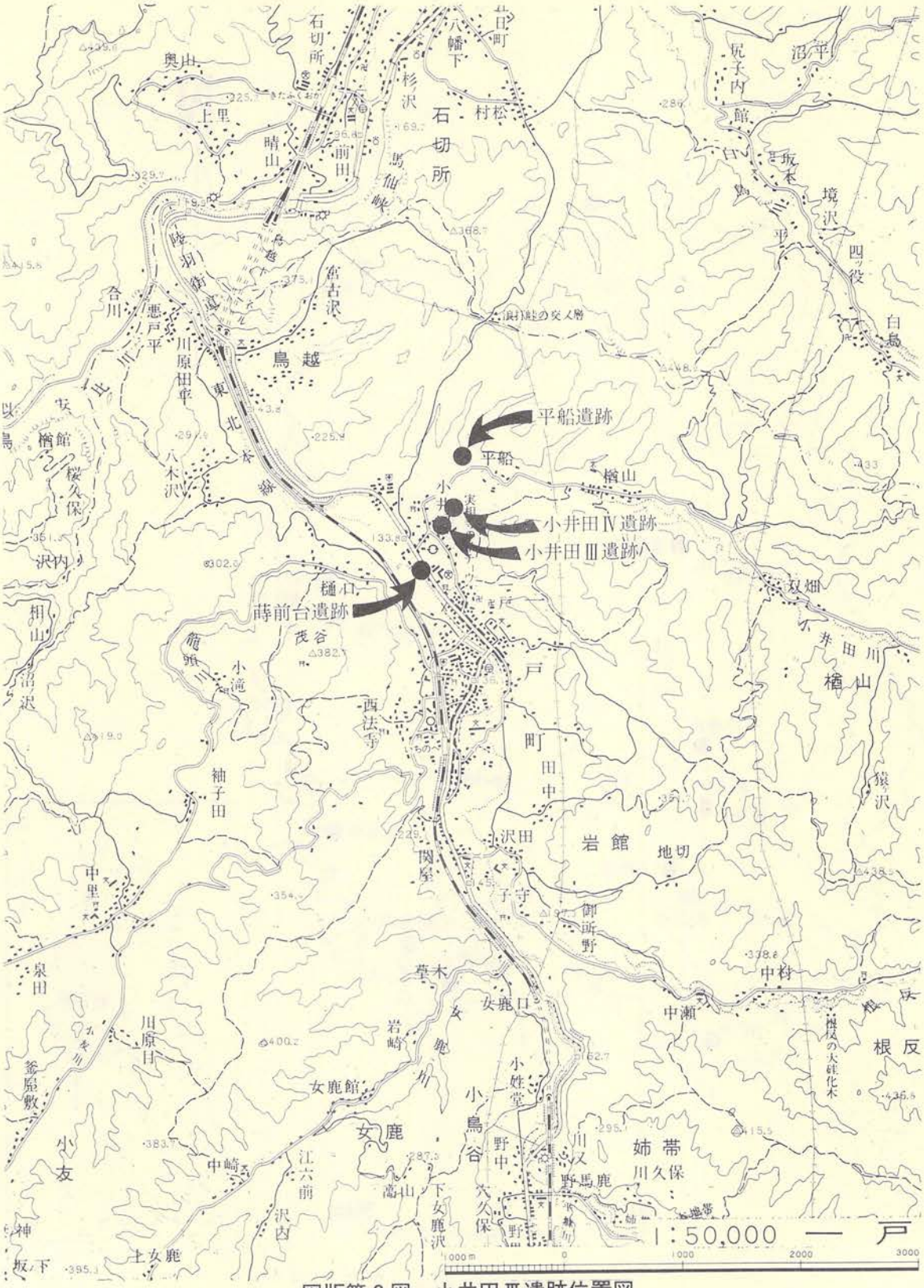
目　次

序
例言
岩手県全図……1
遺跡位置図……2
遺跡周辺地形図……3
Ⅰ　調査に至る経過……5
Ⅱ　調査の方法と室内整理の方法……6
Ⅲ　遺跡の立地と自然環境……8
地形区分図……9
火山灰編年表……10
調査区域地形図……11
調査区地区割図……13
A地区遺構配置図……15
B地区遺構配置図……17
遺跡周辺航空写真……19
A地区全景航空写真……20
B地区全景航空写真……20
土層断面図……21
Ⅳ　遺跡の現状……23
Ⅴ　縄文時代早期に属する土器の文様……24
Ⅵ　遺跡に関する事実報告……27
1　調査区域内の検出遺構と遺構の分布……27
2　検出した遺構と遺物……27
(1)　縄文時代早期に属する遺構と遺構内出土遺物……27
1号住居址
本文……27
遺構図版……31
遺構内出土遺物図版……32
遺構写真図版……189
遺構内出土遺物写真図版……190
2号住居址
本文……35
遺構図版……39
遺構内出土遺物図版……38・40
遺構写真図版……193
遺構内出土遺物写真図版……193
(2)　縄文時代早期に属する遺構外出土遺物……46
本文……46
遺物図版……67
遺物写真図版……200
(3)　縄文時代中期に属する遺構と遺構内出土遺物……88
3号住居址
本文……88
遺構図版……91
遺構内出土遺物図版……92
遺構写真図版……218
遺構内出土遺物写真図版……219
(4)　縄文時代中期に属する遺構外出土遺物……89
本文……89
遺物図版……93
遺物写真図版……220
(5)　縄文時代晩期に属する遺構と遺構外出土遺物……94
本文……94
遺物図版……94
遺物写真図版……221
(6)　弥生時代に属する遺構と遺構内遺物……95
4号住居址

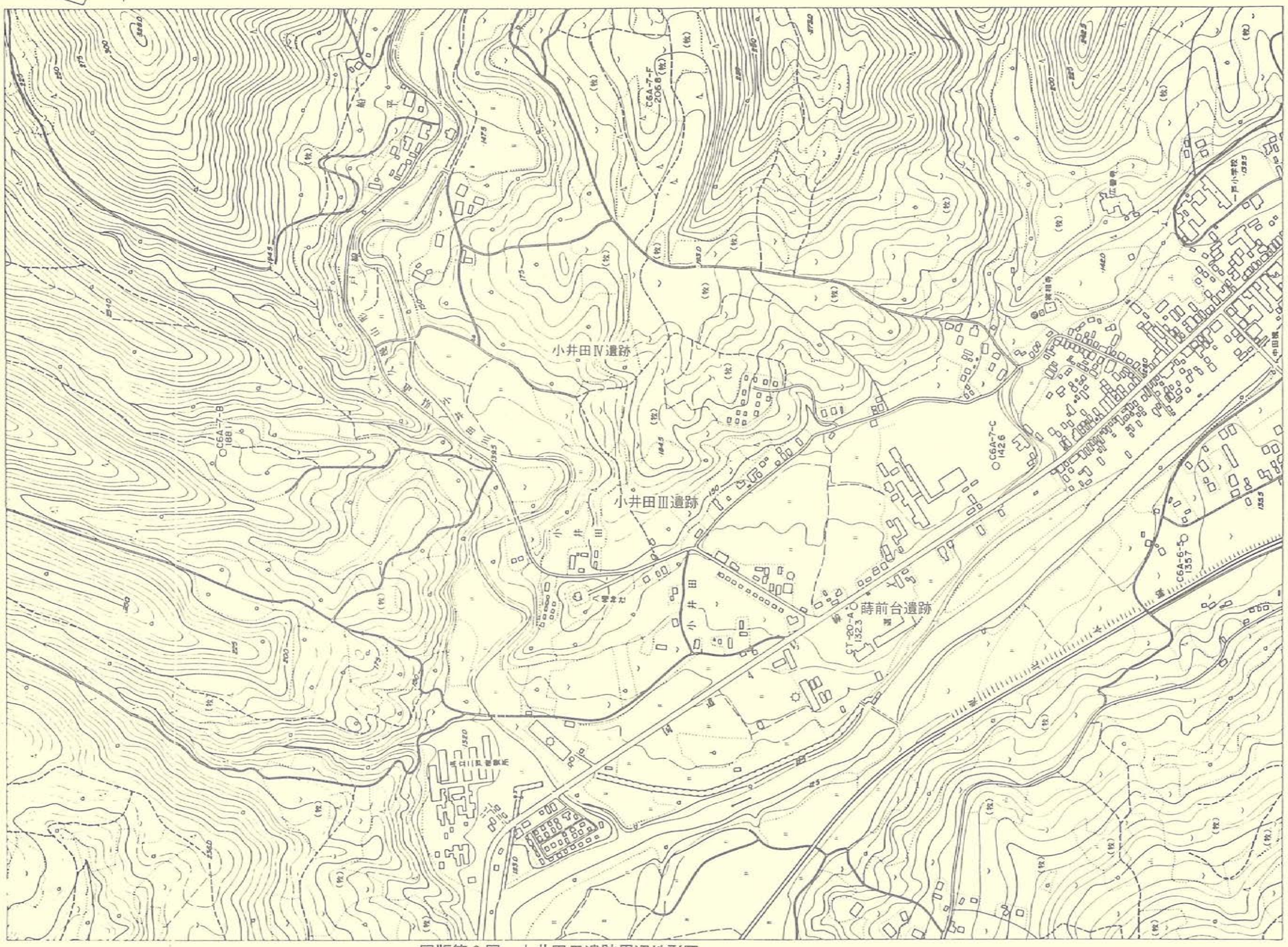
本文……95
遺構図版……99
遺構内出土遺物図版…… 100
遺構写真図版…… 222
遺構内出土遺物写真図版…… 223
5号住居址
本文……96
遺構図版…… 101
遺構写真図版…… 224
6号住居址
本文……96
遺構図版…… 102
遺構内出土遺物図版…… 102
遺構写真図版…… 225
遺構内出土遺物写真図版…… 225
(7) 弥生時代に属する
遺構外出土遺物……97
本文……97
遺物図版…… 103
遺物写真図版…… 226
(8) 縄文時代中期～弥生時代に属すると
考えられる遺構外石器遺物…… 105
本文…… 105
遺物図版…… 108
遺物写真図版…… 228
(9) ピット…… 114
本文…… 114
遺構図版…… 123
遺構写真図版…… 233
(10) 陥し穴状遺構…… 139
本文…… 139
遺構図版…… 140
遺物図版…… 180
遺構写真図版…… 243
遺物写真図版…… 260
Ⅶ まとめ…… 182
Ⅷ 2号住居址出土炭化物の放射性
炭素年代測定結果…… 186


N
二戸市
一戸町
馬
渕
川
久慈市
小
本
川
盛岡市
雫
石
川
北
上
川
宮古市
閉
伊
川
花巻市
北上市
和
賀
川
猿
ケ
石
川
遠野市
釜石市
江刺市
胆
沢
川
水沢市
気
仙
川
大船渡市
陸前高田市
砂
鉄
川
磐
井
川
一関市
0
25
50km
岩手県
0
100km

図版第１図　岩手県全図



図版第２図　小井田Ⅲ遺跡位置図



図版第３図　小井田Ⅲ遺跡周辺地形図

Ⅰ　調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は、青森線と二戸郡安代町で分岐し、一戸町を経由して青森県八戸市に至る約68kmの高速自動車道である。このうち本県にかかわる第７次施行命令区間は延長距離27.6kmで、二戸郡一戸町で国道４号と接続する一戸インターチェンジを起点とし、折爪岳の山裾をトンネルで貫き、九戸村・軽米町を通過し青森県南郷村へと続いている。

第７次施行命令は昭和48年10月に発表され、その後日本道路公団仙台建設局と県教育委員会事務局文化課とによって、埋蔵文化財の取扱いについて協議が重ねられた。文化課は昭和50年・昭和51年にわたり実施計画路線沿いに幅 400m を対象に埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行った。その結果にもとづき遺跡保存とルート設定について協議が両者間で行われた。

昭和52年９月に路線発表となり、中心杭、幅杭設置作業が開始され、昭和54年９月から用地取得へと進展した。その間、発表された路線幅内における遺跡調査が、併行して文化課によって実施された。しかし山林地帯であったので分布調査や確認調査が思うにまかせず、更に山林伐採後にも行うこととした。この時点における全計画路線内における遺跡数は14遺跡で約81,700㎡であった。

発掘調査は、文化課の調整と指導のもとに、昭和55年から開始され、当埋蔵文化財センターが担当することとなり、九戸村田代遺跡、軽米町叺屋敷Ⅰａ遺跡・君成田Ⅳ遺跡の３遺跡について実施した。同年９月には工事用道路予定地の分布調査が文化課によって行われ、一戸町沼山遺跡・滝野来田遺跡が追加となった。このうち滝野来田遺跡は文化課による立合調査となった。

昭和56年度は、軽米町土弓Ⅰ・叺屋敷Ⅰｂ・叺屋敷Ⅱ・叺屋敷Ⅲ・馬場野Ⅰ・馬場野Ⅱ各遺跡、九戸村道地Ⅱ・道地Ⅲ・嶽Ⅰ・嶽Ⅱ・江刺家・江刺家Ⅳ・江刺家Ⅴ・滝谷Ⅲ各遺跡、一戸町沼山・小井田Ⅳ各遺跡の発掘調査を行った。このなかで叺屋敷Ⅲ・馬場野Ⅱ・江刺家Ⅴ各遺跡は山林伐採後に遺跡確認されたものである。また馬場野Ⅰ・馬場野Ⅱ・嶽Ⅱ・小井田Ⅳ各遺跡は継続調査となった。

昭和57年度には、軽米町馬場野Ⅰ・馬場野Ⅱ・駒板各遺跡、九戸村嶽Ⅱ遺跡、一戸町小井田Ⅲ・小井田Ⅳ・平船Ⅲ各遺跡の発掘調査が行われた。このなかで駒板遺跡は山林伐採後に確認された遺跡である。また馬場野Ⅱ・駒板・小井田Ⅲ各遺跡は継続調査となった。

昭和58年度には、軽米町馬場野Ⅱ・駒板各遺跡、一戸町小井田Ⅲ遺跡を発掘調査し、第７次施行命令区間の発掘調査はすべて終了した。当埋蔵文化財センターがこの区間で発掘調査した遺跡は工事用道路分も含め、22遺跡で 231,010㎡ であった。

Ⅱ　調査の方法と室内整理の方法

1．調査の方法

発掘調査は、東北縦貫自動車道八戸線の路線敷内の14,380㎡を行った。調査は、1982年度・1983年度の二次にわたって行われた。1982年度の第一次調査では、調査区域の東側に位置する標高170m～183mの現況畑地及び山林を行い、1983年度の第二次調査では、調査区域の西側に位置する標高148m～162mの現況畑地及びりんご園部分を行った。

遺構の検出は、現地表面から遺構検出面までの土層が深い場所については、粗掘りの際に重機（バックホウ）を利用した。

重機による粗掘りを行った場所は、第一次調査区の東側及び西側に位置する２つの小さい埋積谷と第二次調査区南側の黒色土が堆積した南西緩斜面の部分である。埋積谷においては、谷筋に直交する幅３ｍのトレンチを各３ケ所ずつ入れて、遺構の検出面を確認したうえで重機の使用を開始した。南西緩斜面については、15m×15mのグリッドの２ケ所を手掘りして遺構検出面を確認したうえで重機の使用を開始した。

粗掘に次いで、層位毎にスコップ・鋤簾・移植ベラを用いて遺構の検出にあたった。精査にあたっては、住居址は４分法、ピット、陥し穴状遺構等については２分法を原則とし、土層の観察及び記録を行った。

遺構の粗査の手順は、①平面形の確認⟶②埋土の除去⟶③埋土の観察・写真の撮影・埋土の土層断面実測⟶④床面と壁の検出⟶⑤柱穴・ピット等の確認⟶⑥全体形の観察⟶⑦平面形の写真撮影⟶ ⑧炉等の平面形の写真撮影・実測⟶ ⑨炉等の半裁・ 観察 ・写真撮影・実測⟶貼床・柱穴等の確認の順で行った。

座標軸の設定にあたっては、第一次調査区域（A地区）では、日本道路公団測量の三角点を原点とし、これを通り磁北方向にのびる直線と原点を見通し、これと直交する直線を座標軸とした。

原点の位置は、平面直角座標第Ｘ系「**Ｘ値＋24974.219**」、「**Ｙ値＋39796.833**」である。

第二次調査区域（Ｂ地区）では、東北縦貫自動車道八戸線道路センター杭の任意の２点を基準点とし、これを結ぶ直線と任意の２点のうちの一方の点（原点）を通り、これと直交する直線を座標軸とした。

２点の平面直角座標第Ｘ系のＸ値、Ｙ値は、それぞれ次のとおりである。

基準点	**1**　（原点）	**Ｘ値＋25021.8186**	**Ｙ値＋39707.5730**
基準点	**2**	**Ｘ値＋24952.8894**	**Ｙ値＋39703.3185**

第一次調査区域、第二次調査区域共に、それぞれの座標軸の原点を０として30m 毎に区画

し、これに対して南北方向には北からA・B・C……を、東西方向には西からⅠ・Ⅱ・Ⅲ……の記号を付して大グリッドとした。さらに、この大グリッドを10等分して小グリッドとし、これには、北から南方向へa～j、西から東方向へ0～9の記号を付した。グリッド名は、これらの記号を組合せて、例えば「AⅠa0」、「BⅡb2」……とした。

遺構の実測方法は、30m×30mに組んだ大グリッドの交点に基準杭を打ち、これにトランシットを据えて基準線をおこす簡易な遣り方実測を行った。

遺構の実測図は、縮尺20分の1を基本とし、必要に応じて縮尺10分の1のものも作成した。実測図は、平面図、断面図の2通りを作成し、標高は基準となる標高を実測図毎に示し、それとの比高をcmを単位とし小数第1位まで表示している。

遺構の写真撮影に際しては、6×6cm版カメラ1台、35mm版カメラ2台を使用した。フィルムは、35mm版カメラ1台にカラースライドフィルムを用い、他はモノクロームを用いた。

2. 室内整理

遺物は、洗浄・ラベル打ちを調査現場の作業員が行った。注記には、白ポスターカラーを用いて遺跡の略号、出土遺構名又はグリッド名、出土層位を記入してある。

遺物の接合・復元、遺物の実測、拓影、掲載図版の作成は、本報告書執筆担当調査員と当センター期限付職員が行った。

出土遺物は、当センターに一括して保管してある。

Ⅲ　遺跡の立地と自然環境

岩手県の西部には、秋田県との県境を脊梁となって南北に縦走する奥羽山脈が位置し、東部には、県面積のおよそ３分の２を占める北上山地がある。

奥羽山脈は、青森県陸奥湾南部の夏泊半島から福島・栃木県境で帝釈山脈に合するまでの約500kmに及ぶ山脈であり、北上山地は、青森県八戸市付近から宮城県牡鹿半島に及ぶ南北約250km、東西最大80kmの紡錘形をした高原状の山塊である。この二つの山系の間を、県の北部においては、岩手県岩手郡葛巻町袖山南斜面に源を発し、青森県八戸市で太平洋に注ぐ馬渕川が北流している。流路の延長142.4km、流域面積2,054.6km²の河川である。

本遺跡の立地する一戸町は、岩手県の北部に位置し、町のほぼ中央部を南北に馬渕川が北流している。

町の東方には、北上山地の北端部に位置する折爪岳（852.2m）、小倉岳（652.3m）、傾城峠（735.9m）等の山岳が高原状をなし、馬渕川の方向と一致してほぼ南北方向に主分水嶺がのびている。この地域の山地は、南北に連っているが、一連の山地でなく独立した山塊の性質を示している。

一戸町の周辺の地形は、馬渕川を境界として、それ以東の折爪岳・小倉岳・傾城峠等の主分水嶺までの東西幅約８kmの地域と馬渕川以西の地域との２つの地域に大別できる。

馬渕川以東の地域は、第三紀層が基盤として露出する標高400m以下の山地が大半を占め、緩やかな傾斜地が少なく小さな丘陵が多い。

馬渕川以西の地域は、第四紀の火成岩が第三紀層をおおっている火山々麓丘陵である。この丘陵は、馬渕川から西方約22kmに位置する第四紀火山の稲庭岳及びその南に位置する第四紀火山の七時雨山の山麓部までの間、幅の広い台地状の尾根型を示しながら連続している。

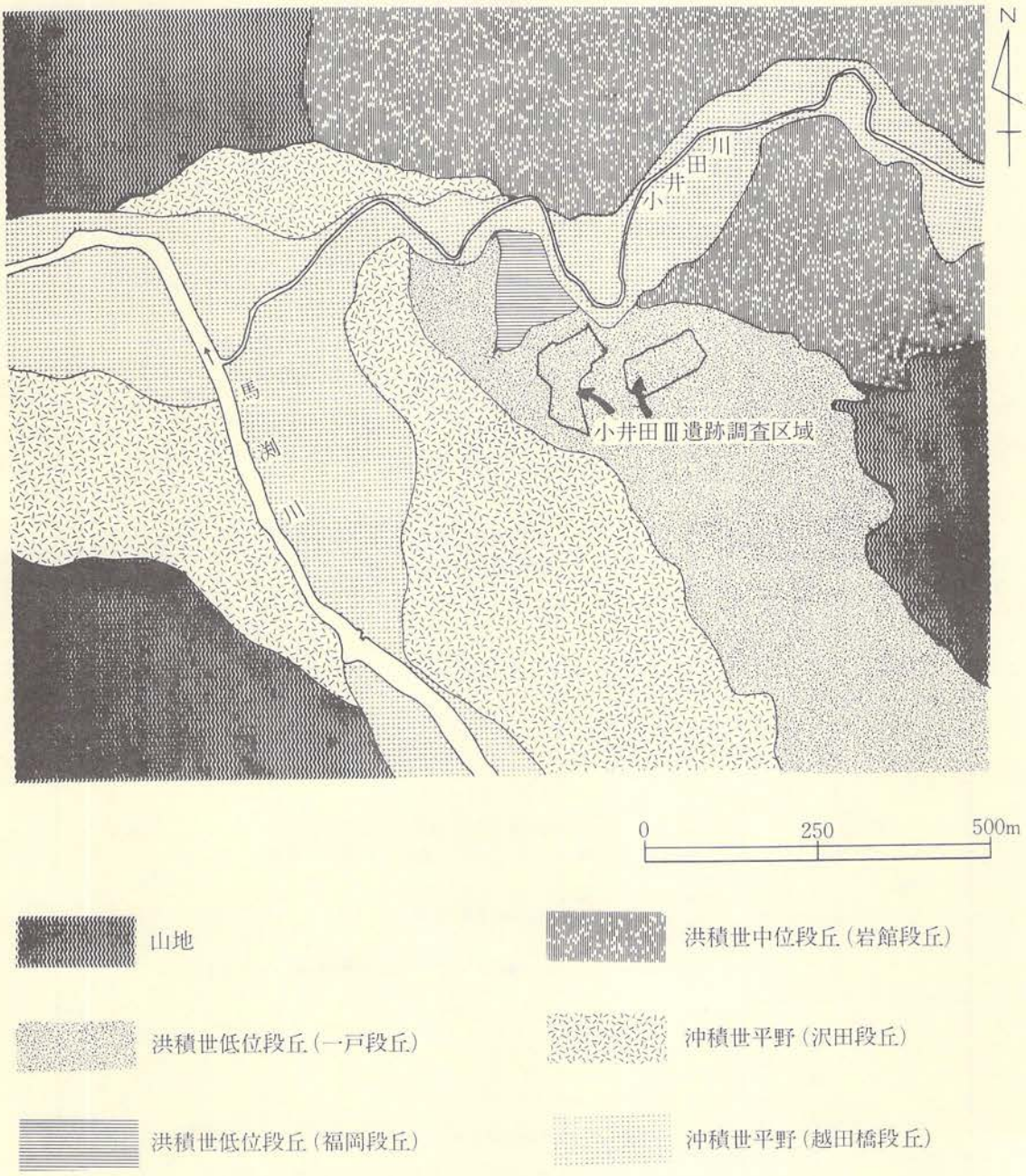
２つの地域の境界をなす馬渕川の両岸には、数段の段丘面がかなりの連続性をもって分布している。一戸地域のこれらの段丘を松山力は、沖積世平野「越田橋段丘」、沖積世平野「沢田段丘」、洪積世低位段丘「福岡段丘」、洪積世低位段丘「一戸段丘」、洪積世中位段丘「岩館段丘」の５つに区分している。（「一戸バイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅰ」1981年）

一戸町を流れる主な河川は、馬渕川とその支流の安比川、二ツ石川、小井田川、女鹿川である。低地は、馬渕川の氾濫平野と支流の谷底平野に分けられるが、段丘面の面積に比較して低地の面積は極めて少ない。

本遺跡は、馬渕川東岸の松山力による「一戸段丘」の最北端部に載っている。調査区域の北縁は崖となっており、崖下を小井田川が西流し、極小の谷底平野を形成している。調査区域の西縁は段丘崖となっており、段丘崖下から氾濫平野が東方にのび、調査区からおよそ650mの位置で馬渕川に至る。調査区域の東縁は段丘面が開析されて小さな谷となっており、段丘の東

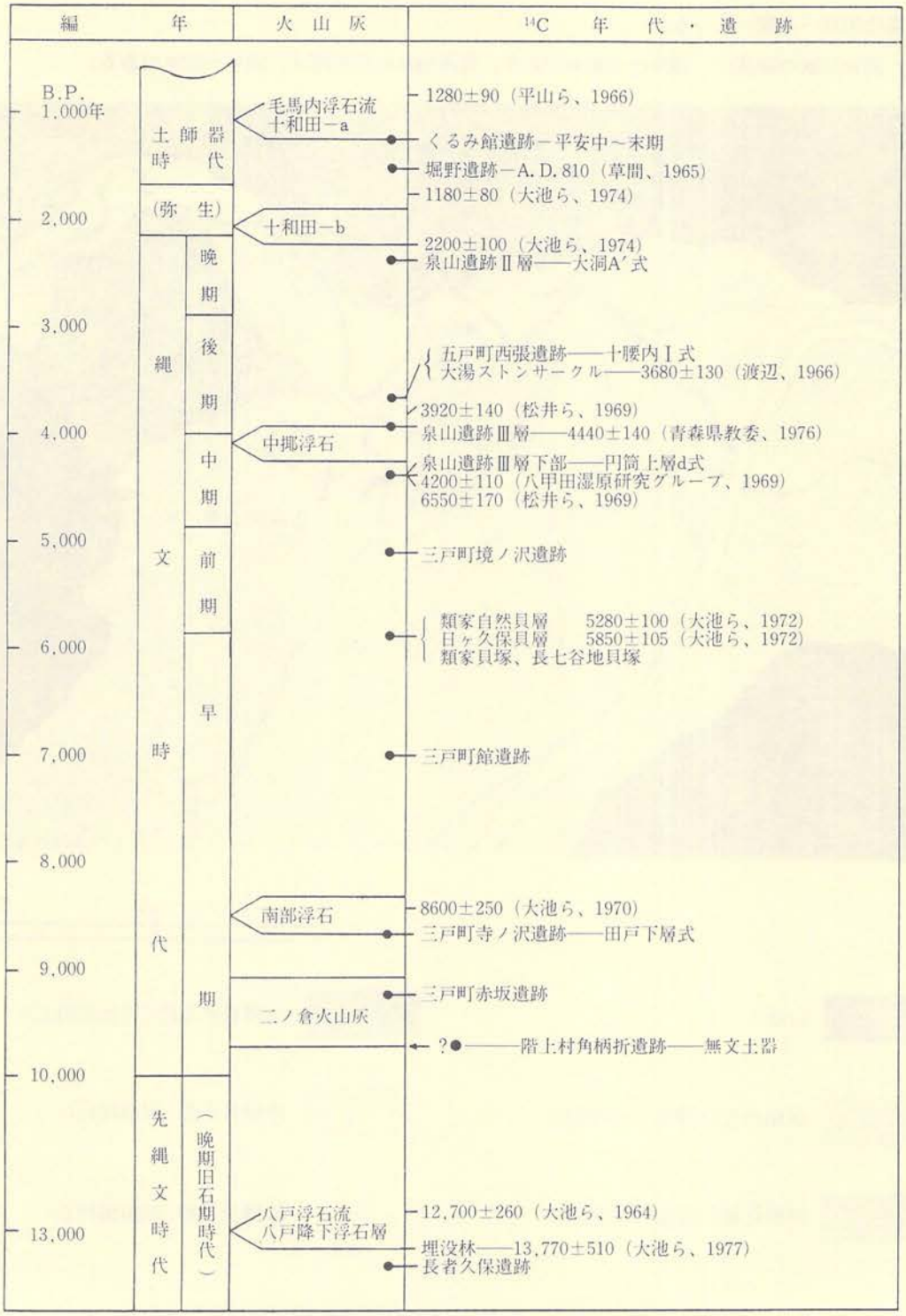
端は山地へと続いている。

調査区域の標高は、148m～183mであり、馬渕川からの比高は、25m～60mである。

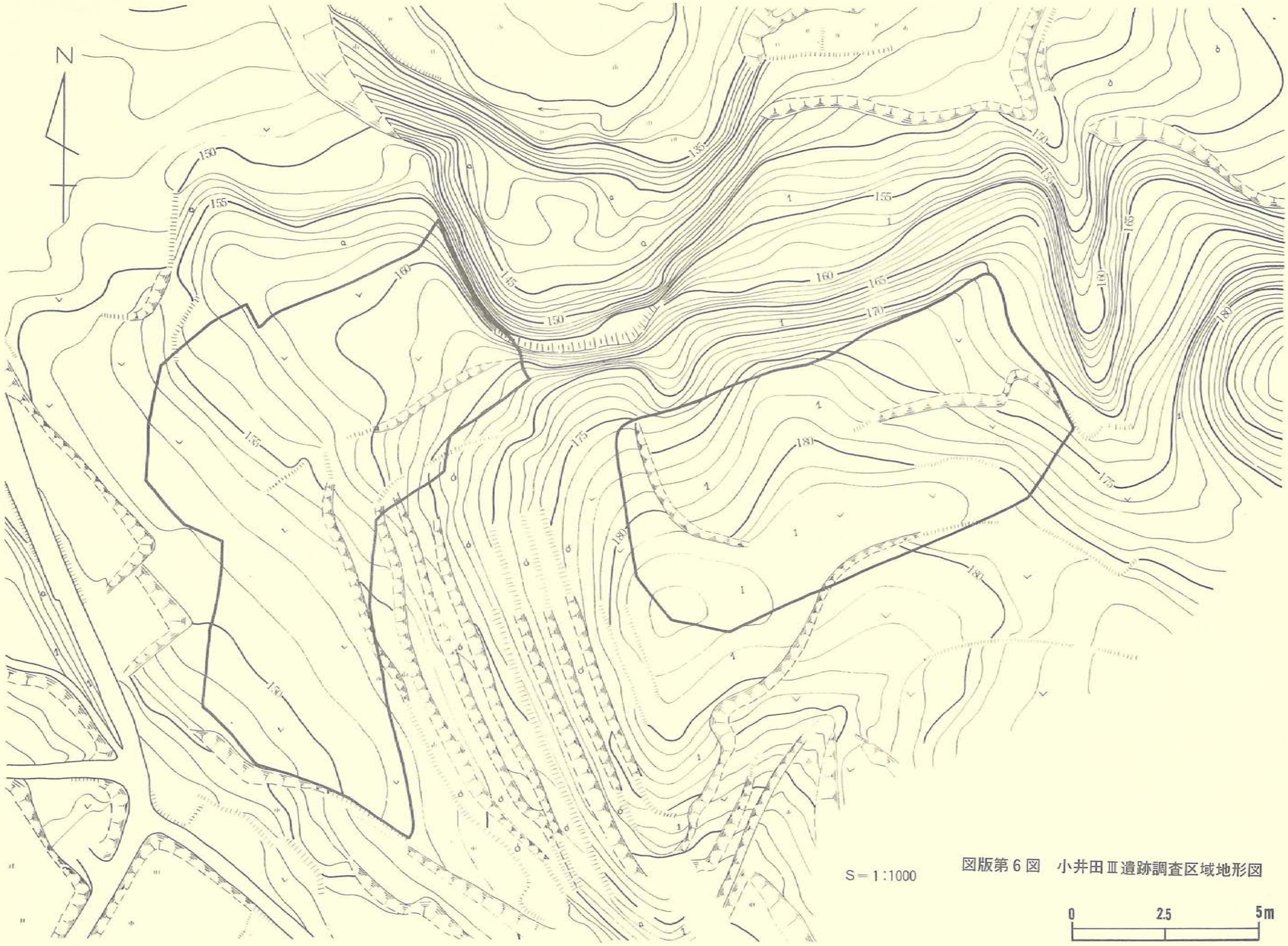


図版第４図　小井田Ⅲ遺跡周辺地形区分図
（一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ）

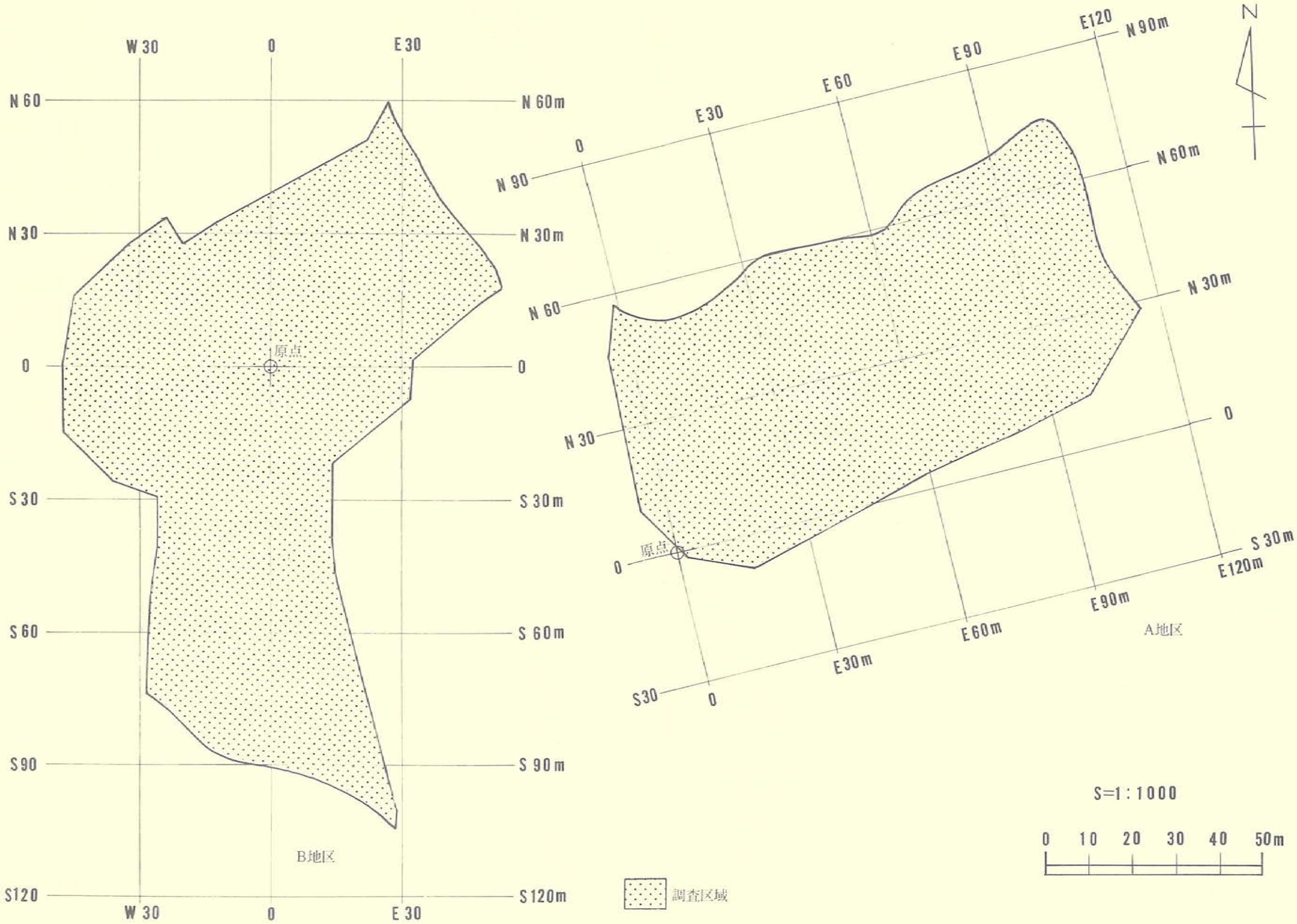
十和田火山完新世火山灰編年表（大池・中川、1979）



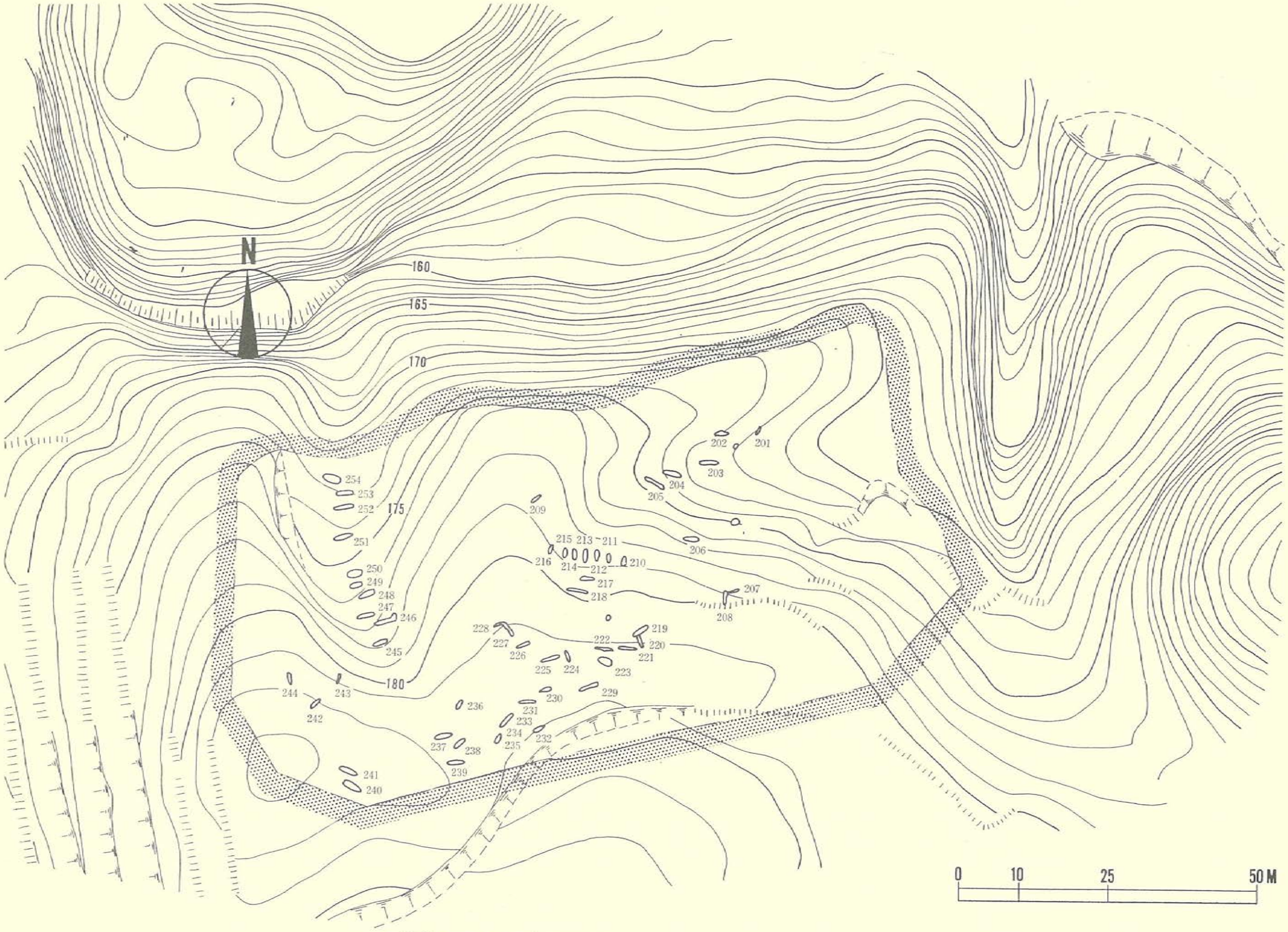
図版第5図



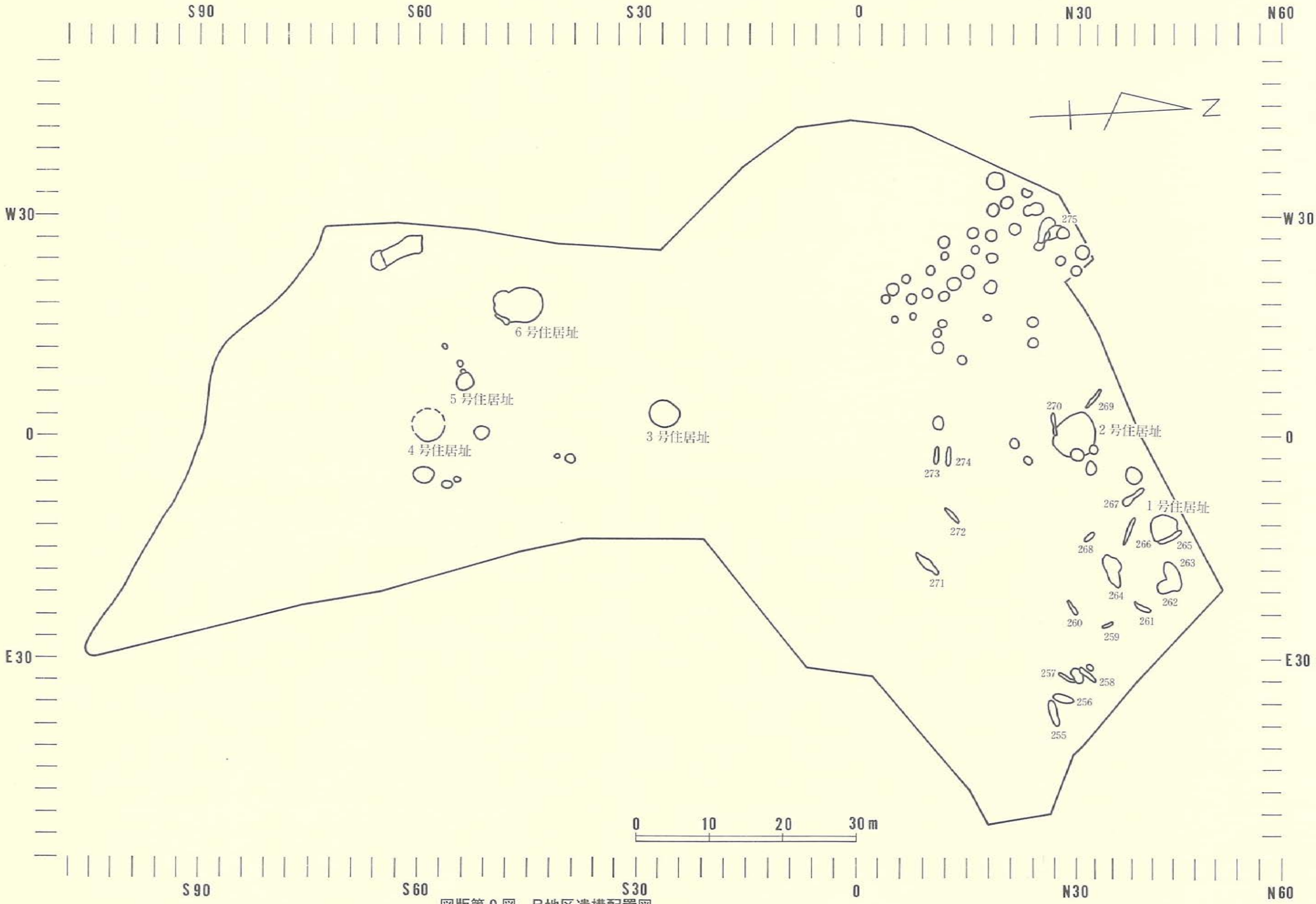
図版第６図　小井田Ⅲ遺跡調査区域地形図



図版第７図　小井田Ⅲ遺跡調査区域地区割り

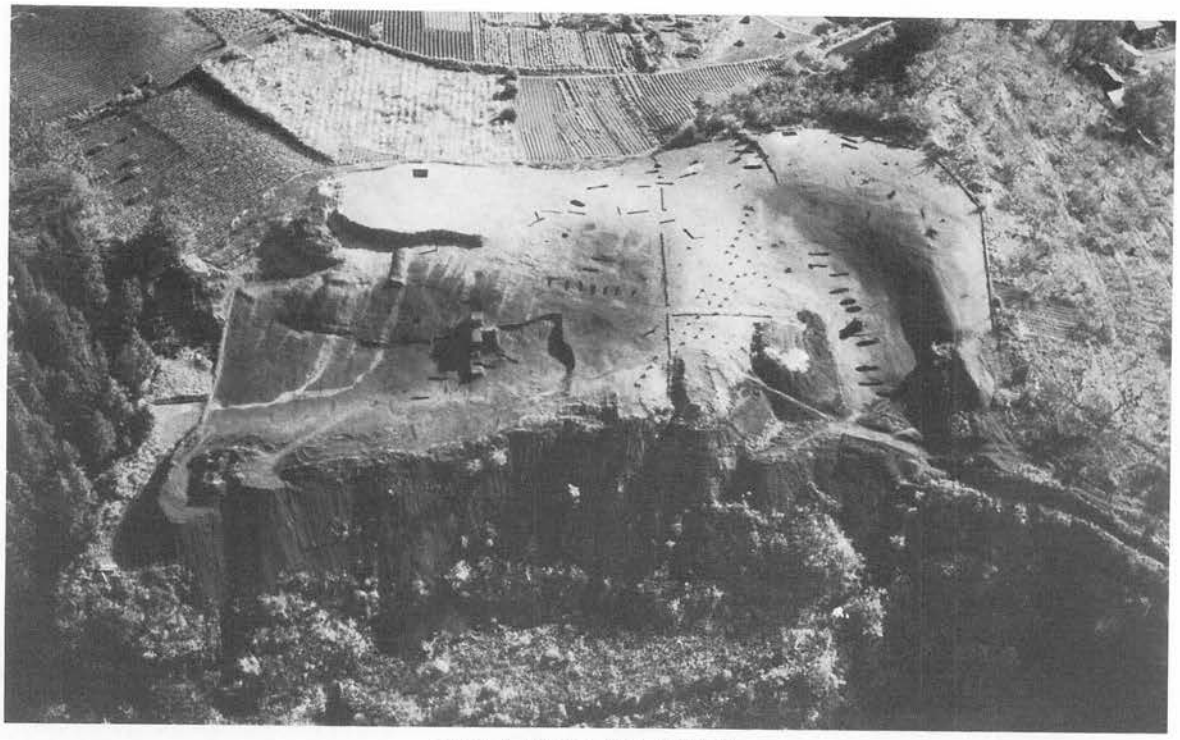


図版第８図　A地区遺構配置図



図版第 9 図　B地区遺構配置図

写真図版第１図　小井田Ⅲ遺跡周辺航空写真(北上空から撮影)

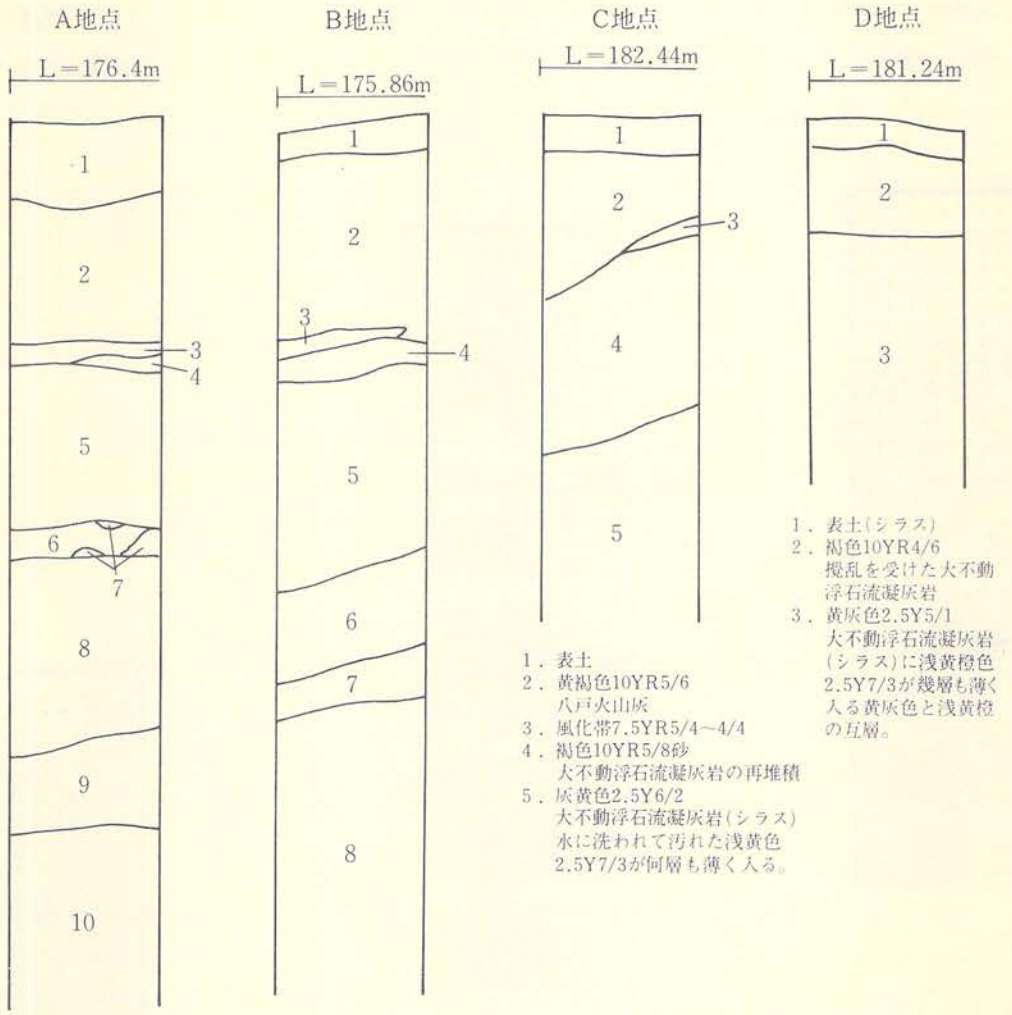


A地区全景(北上空から撮影)

B地区全景(北上空から撮影)

写真図版第2図

A地区　地質柱状図

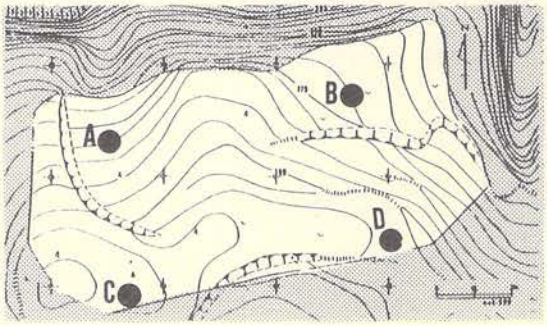


1．表土
2．黒色10YR1.7/1
3．黒褐色10YR3/1
4．暗褐色10YR3/3
5．黒色10YR1.7/1
6．黒色10YR1.7/1～2/1
7．灰オリーブ色5Y5/2
十和田a火山灰
8．黒褐色10Y2/2
9．黒色10YR1.7/1～2/1
10．暗褐色
中堀浮石の再堆積

1．表土(黒褐色7.5YR3/2)
2．黒色7.5YR2/1
3．灰オリーブ7.5Y5/2
十和田a火山灰
4．黒色7.5YR1.7/1
5．黒褐色7.5YR3/1
中堀浮石
6．黒褐色10YR3/4
7．暗褐色7.5YR3/4
8．褐色7.5YR4/6
南部浮石ブロックで混入

1．表土
2．黄褐色10YR5/6
八戸火山灰
3．風化帯7.5YR5/4～4/4
4．褐色10YR5/8砂
大不動浮石流凝灰岩の再堆積
5．灰黄色2.5Y6/2
大不動浮石流凝灰岩(シラス)
水に洗われて汚れた浅黄色
2.5Y7/3が何層も薄く入る。

1．表土(シラス)
2．褐色10YR4/6
撹乱を受けた大不動
浮石流凝灰岩
3．黄灰色2.5Y5/1
大不動浮石流凝灰岩
(シラス)に浅黄橙色
2.5Y7/3が幾層も薄く
入る黄灰色と浅黄橙
の互層。



図版第10図

B地区　地質柱状図

A地点

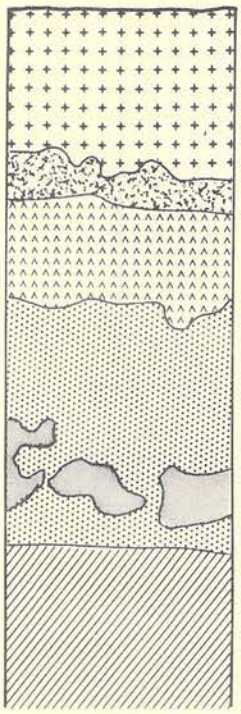
EL＝161.000m

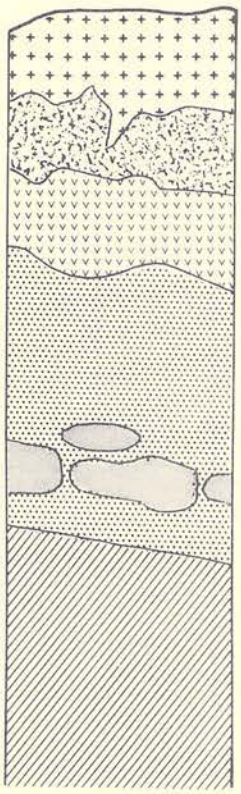
B地点

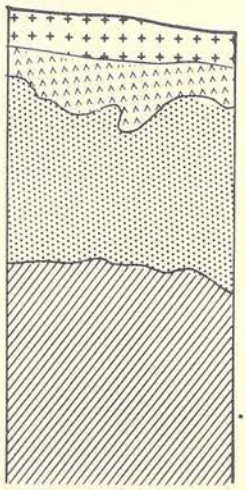
EL＝161.000m

C地点

EL＝161.000m







黒色土(10YR2/1)（表土）

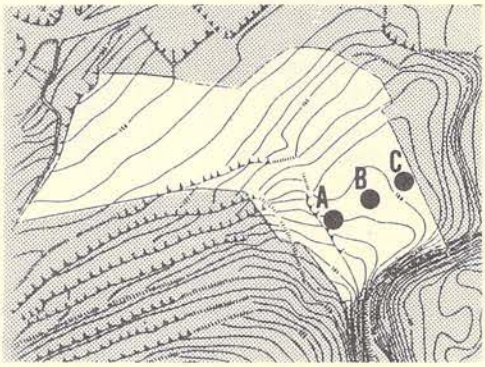
暗褐色土(10YR3/4) 砂(中揉浮石)

褐色(10YR4/6)シルト 八戸火山灰に黄橙の浮石が15%混入

黄橙(10YR7/8)シルト（大不動浮石流凝灰岩の撹乱）

にぶい黄橙(10YR7/4) 微砂(大不動浮石流凝灰岩)

にぶい黄橙(10YR7/3) 微砂(大不動浮石流凝灰岩)



図版第11図

Ⅳ　遺跡の現状

調査区域は、２つの地区から成立している。１つは、南北最大長63ｍ、東西最大幅 125 ｍ、面積7,000㎡の東西方向に長い地区（以下Ａ地区と呼称する）で、他は、南北最大長150ｍ、東西最大幅90ｍ、面積 7,380㎡ の南北方向に長い地区（以下Ｂ地区と呼称する）である。

Ａ地区は、北縁が崖、東縁と南側は段丘面が開析されてできた小谷、西縁が急斜面と四方が区切られた台地状を示している。この範囲の標高は、170ｍ～183ｍである。

Ａ地区の地形は、地区全体の南半分弱が平坦に近い北緩斜面で、この中央から北へ小さい尾根が張り出し、残りの部分を２分している。２分された東側は東斜面となり、西側は北斜面となっている。

南側の平坦に近い北緩斜面は、表土が10㎝～20㎝でその直下が東側で八戸火山灰層、西側で攪乱を受けた大不動浮石流凝灰岩となっている。

中央に張り出した尾根によって２分された東側斜面には、東に開口する凹地といってもさしつかえないほどの極小の埋積谷が位置している。また、２分された西側にも、東側と同様の極小の埋積谷が位置しているが、これは北に開口している。

Ａ地区の土地利用は、中央に張り出した尾根の西側が松の植林地、東側が畑地である。

Ｂ地区は、Ａ地区の東側急斜面下20ｍ～30ｍに位置している。Ａ地区とＢ地区の間に位置する急斜面は、現在段々畑となっており「りんご」の栽培がなされている。

Ｂ地区は、地形的に段々畑の最下段のＬ字状を呈する草地とこの草地の北側土手下のほぼ平坦地、平坦地の西縁から南西方向へのびる斜面と調査範囲南側に位置する南西緩斜面の４つに大別できる。

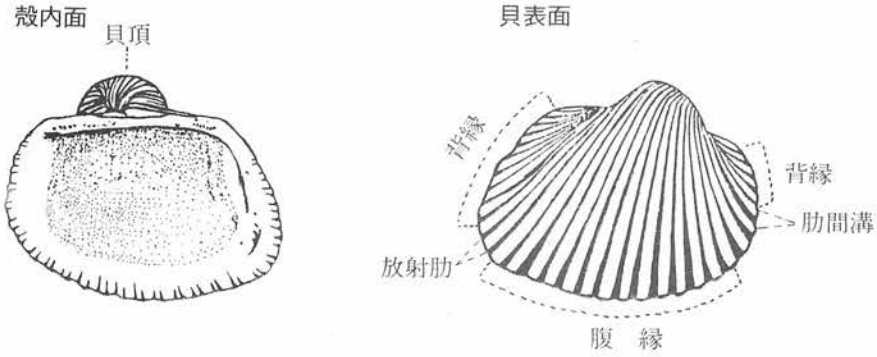
草地の土手下に位置する平坦地は、表土が土手下で約50㎝であるが他は10㎝～20㎝と薄く、表土直下は、八戸火山灰層となっている。この平坦地から南西へのびる斜面は、攪乱を受けている大不動浮石流凝灰岩が露出し、南側の南西緩斜面は、黒色土や中掫浮石火山灰が比較的厚く堆積している。Ｂ地区の土地は、畑地及びりんご園として利用されている。

Ｂ地区の西縁から南西縁にかけて段丘崖、東縁はＡ地区に続く上り斜面及び小井田川に下る崖によって区切られている。Ｂ地区の標高は148ｍ～162ｍである。

V　縄文時代早期に属する土器の文様

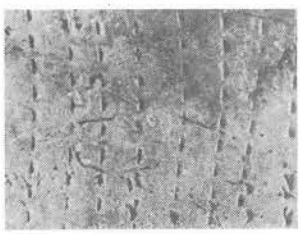
本遺跡で出土した縄文時代早期に属する土器の文様は、二枚貝による貝殻文、棒状工具・竹管・爪による刺突文である。これらの文様と施文手法についての記載にあたって本書では、次の図版に示す用語を用いた。

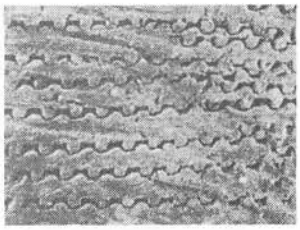
貝殻部の名称



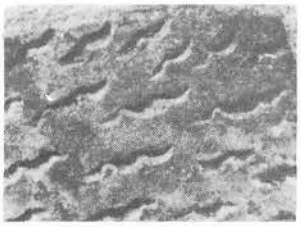
二枚貝による貝殻文

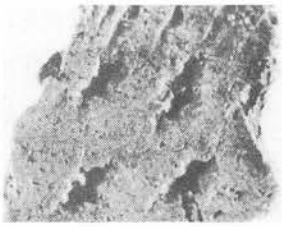
貝殻腹縁圧痕文
（腹縁を押圧して施文）





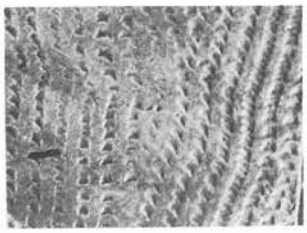
貝殻背縁圧痕文
（背縁を押圧して施文）



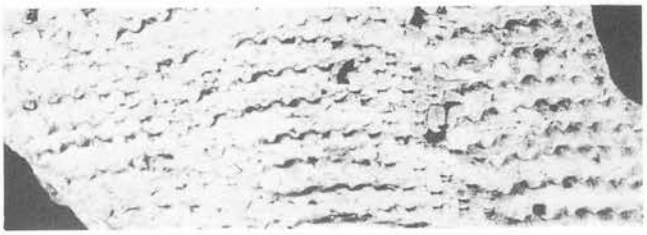


写真図版第３図

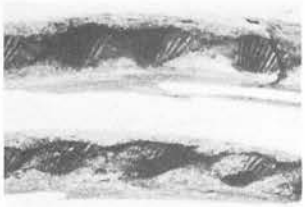
貝殻腹縁押し引き文
（貝殻腹縁を押し引きしながら施文）



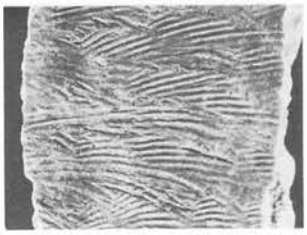
貝殻腹縁連続波状圧痕文
（腹縁文を連続波状形に施文）



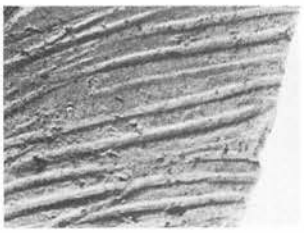
貝殻頂圧痕文
（貝頂を押圧して施文）



貝殻表圧痕文
（貝表面を押圧して施文）

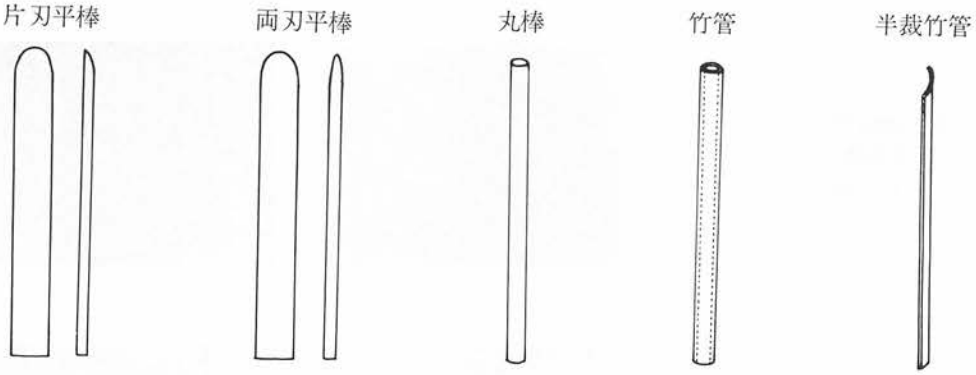


貝殻条痕文
（放射肋・肋間溝・貝表面による条痕）



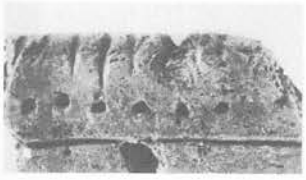
写真図版第４図

棒状工具の呼称



爪による刺突文

丸棒状工具による刺突文



片刃平棒工具による刺突文

両刃平棒工具による刺突文を折り返し、粘土瘤をもつ刺突文

竹管による刺突文

半裁竹管による刺突文

写真図版第5図

Ⅵ　遺跡に関する事実報告

1．調査区域内の検出遺構と遺構の分布

本遺跡から検出した遺構は、縄文時代早期に属する竪穴住居址２棟、縄文時代中期に属する竪穴住居址１棟、弥生時代に属する竪穴住居址３棟、縄文時代に属する陥し穴状遺構75基、縄文時代に属するピット58基、江戸時代に属する墓壙１基、近世掘立柱建物跡、時期不明の溝１条である。

縄文時代の遺構の分布のしかたは、調査区域の全域にわたっているが、遺構の所属する時期及び遺構の種類ごとにみると、その分布のしかたに地形的なまとまりがみられる。

縄文時代早期に属する竪穴住居址２棟は、Ｂ地区平坦地に位置し、縄文時代早期遺物もこの地区から出土している。

縄文時代中期に属する竪穴住居址１棟は、Ｂ地区の南西斜面南端の傾斜変換線付近に位置し、縄文時代中期遺物もこの住居址の周辺から出土している。

弥生時代に属する住居址３棟は、Ｂ地区の南側緩斜面に位置し、弥生時代の遺物もこの地区から出土している。

陥し穴状遺構は、Ａ地区のほぼ全域とＢ地区の平坦地縁辺付近に分布し、ピットは検出総数58基のうち38基がＢ地域の平坦地縁辺から南西にのびる斜面のおよそ1,040㎡の地域に分布している。

2．検出した遺構と遺物

（1）縄文時代早期に属する遺構と遺構内出土遺物

縄文時代早期竪穴住居址

1号住居址（図版第12図、写真図版第６図）

本住居址は、Ｂ地区平坦地の北側に位置している。検出面は、現地表面下10㎝～14㎝に位置する褐色土と黒褐色が大きい斑で混入しあうシルトに黄橙（10Ｙ R7/8）の浮石が７％混入する八戸火山灰の上面である。

検出面に、微砂混じりの黒褐色に汚れた南部浮石が直径３ｍの円形にひろがっており、その東端に黒色土の微砂が南北にひろがっていたことによって、住居址と陥し穴状遺構が重複して存在していることを確認した。

検出面での平面形は、ほぼ円形である。規模は、検出面での直径380㎝である。壁は、凹凸して立ち上がっている。壁の高さは、北側の壁で17㎝、南側の壁で55㎝である。

床は、大不動浮石流凝灰岩まで掘り込まれ、床面の全面に掘り方痕が認められる。埋土は２

層に分けられ、上層部は黒褐色を呈する微砂混じりの南部浮石で、埋土下層は黄橙を呈する南部浮石である。埋土下層の南部浮石は、床の掘り方痕まで充満している。柱穴及び炉は認められない。

出土遺物

遺物が出土した層位は、埋土上層部の微砂混じりの南部浮石層と床面である。埋土下層部の黄橙を呈している南部浮石層からの遺物の出土はみられない。

床面から出土した土器（図版第13図１～第14図18、写真図版第７図１～18）

床面から出土した土器破片点数は74点である。土器片の分布状況は床面全面であるが、特に床の中央付近から北側の壁にかけての範囲に多く分布している。これらの土器片から復元できたものは尖底深鉢土器２個体である。

（１）の尖底深鉢土器は、床面の中央付近に同一個体の口縁部から底部までの約¼個体分が押しつぶされた形で位置していたものと、床の中央付近から北側の壁際にかけての範囲に分布していた破片のなかのものとによって復元したものである。

器形は、砲弾形を呈する尖底深鉢土器で、口縁部が僅かに外反している。口縁部の形状は、逆「へ」字状の２波状の波状口縁である。口唇部の形態は一様でなく器表面方向に傾斜している部分とやや丸味を持っている部分及びナデ調整によって平坦になっている部分とがある。

大きさは、器高30.3㎝、口縁部の内径21㎝、器厚１㎝、尖底部の先端から器内底面までの厚さ（底部厚）3.2㎝である。

器表面は、ナデとミガキによって調整し、器内面はヨコナデ調整を行った無文の深鉢である。胎土には、繊維及び砂粒を含み、焼成は良好である。

（２）の尖底深鉢土器は、床面の中央付近から北側の壁にかけての範囲から出土した土器片のなかのものによって復元したものである。

器形は、砲弾形を呈する尖底深鉢土器で、胴部中央が僅かに脹み、口縁部がやや外反している。口縁部の形状は、逆「へ」字状の４波状の波状口縁である。口唇部の形態は、僅かに器表面方向に傾斜している。

口唇部には、斜位に貝殻腹縁圧痕文を密に施している。口縁部から底部にかけては、貝殻腹縁圧痕文を３㎜～８㎜程の間隔で斜条に浅く施文している。

大きさは、口縁部の内径27.4㎝、器厚1.1㎝、器高は尖底部を欠損しているがおよそ38㎝と推定される。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

（３～９）は、口唇部を有する口縁部片である。（３）の口唇部は、僅かに器表面方向に傾斜し、口唇部及び口縁部にミガキ調整を加えた無文のものである。（４～６）は、口唇部が器表面方向に傾斜し、口唇部に斜位の貝殻腹縁圧痕文を有している。口縁部には、貝殻腹縁圧痕

文のみを施文しているが、施文の方向は、（４・５）が斜条、（６）が横条である。（７）の口唇部は平坦ぎみで、貝殻腹縁圧痕文を縦位に施している。口縁部には、爪による縦位の刺突を一部に施し、その下部に縦条の貝殻腹縁圧痕文を施文している。（８・９）は、同一個体の破片である。口唇部は、器表面方向に傾斜し、貝殻腹縁圧痕文を斜位に施している。口縁部には、口唇直下から３条・２条・１条の沈線を横方向に巡らし、沈線間に片刃平棒工具による上方からの刺突文を２段重ねて横方向に連続的に施文している。この文様帯の下部には、縦条の貝殻腹縁圧痕文を施文している。

（10～13）は、胴部片である。（10）は、胴部下半の破片で無文である。（11～13）は、貝殻腹縁文を施文し、器内面にミガキ調整を行っている。

（14～18）は、底部片である。（14）は、器表面に縦方向にミガキ調整を加えた無文のものである。（15～17）は、斜条乃至は縦条に貝殻腹縁圧痕文を施している。（18）は、貝殻表圧痕文を全面に施し、その上から爪による刺突文を斜め方向に連続的に施文している。（１～18）共に胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

床面から出土した石器（図版第14図１～第15図３・第15図９、写真図版第８図１～３、第９図９）

床面から出土した石器は、剥片石器３点、礫石器１点である。

（１）は、チャート質粘板岩を用いた篦状石器である。形状は、台形状を呈し、側辺に両面細部調整を加え、刃部には片縁細部調整を行っている。裏面の側縁にある打瘤は加工され取り除かれている。

（２）は、珪質泥岩を用いた石器である。形状は不定形で、刃部に片縁細部調整を加えている。重さは20.85ｇである。

（３）は、珪質泥岩を用いた尖頭器である。長さ39㎜、幅18㎜、厚さ３㎜と小形のもので、側縁の一辺に両面細部調整を加え、他の一辺は先端部に両面細部調整を、残りの部分に片縁細部調整を行っている。重さは2.15ｇである。

（９）は、三角柱状の自然礫を用いた擦石である。稜の一辺に擦痕を有している。礫の両端部は欠損している。

埋土上層から出土した土器（図版第14図19～26、写真図版第７図19～第８図26）

埋土上層から出土した土器片は８点で、すべて胴部片である。（19）は、無文のもので、器表面にミガキ調整を加えている。（21～24・26）は、貝殻腹縁圧痕文を縦条乃至斜条に施文し、（25）は、１段の撚糸を疎らに圧痕し、器内面にミガキ調整を加えている。

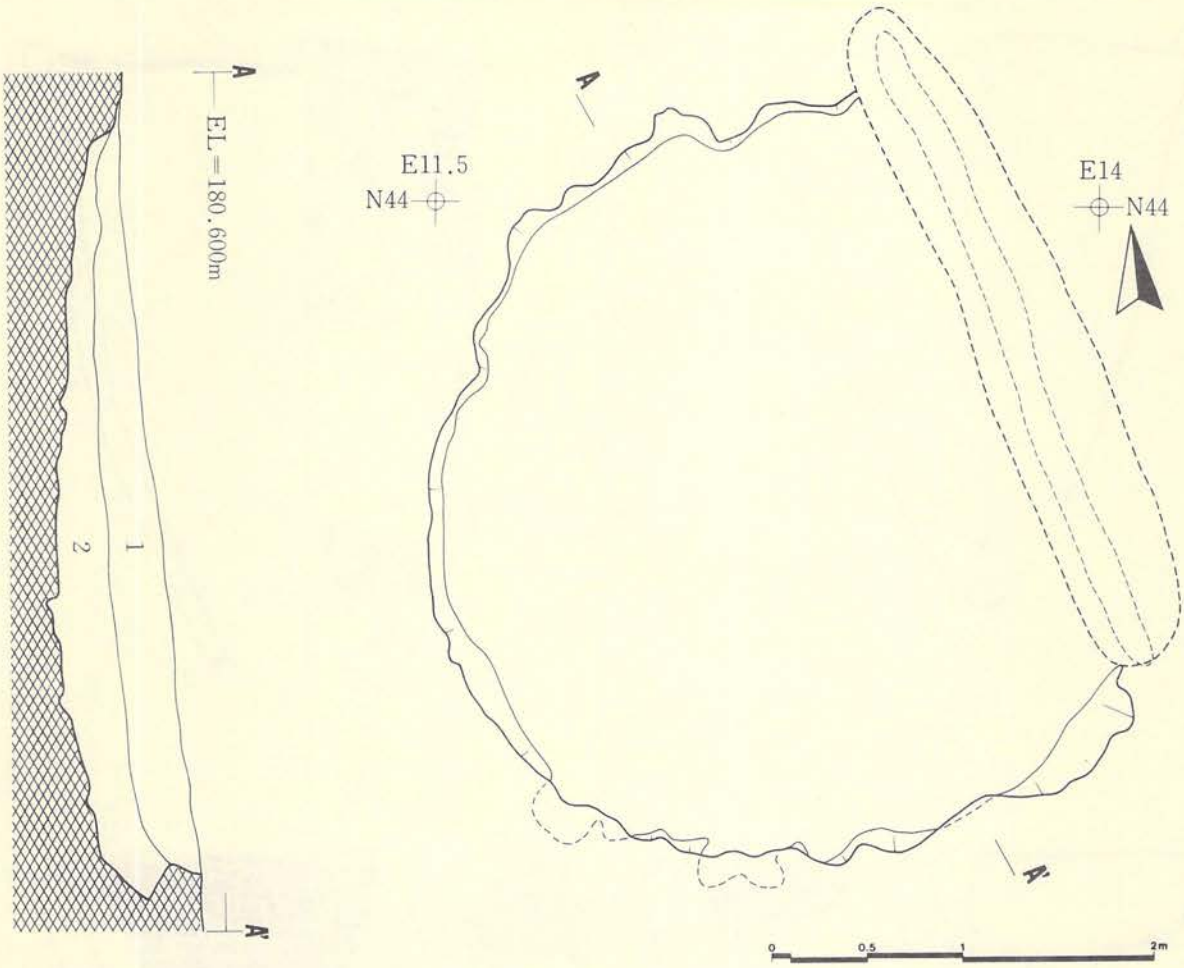
埋土上層から出土した石器（図版第15図４～８、10・11、写真図版第８図４～８、第９図10・11）

埋土上層から出土した石器は、剥片石器５点、礫石器２点である。（４）は、黒燿石を用いた凹基無茎鏃である。両面細部調整を行っている。先端部と基部が欠損している。重さは2.85ｇである。

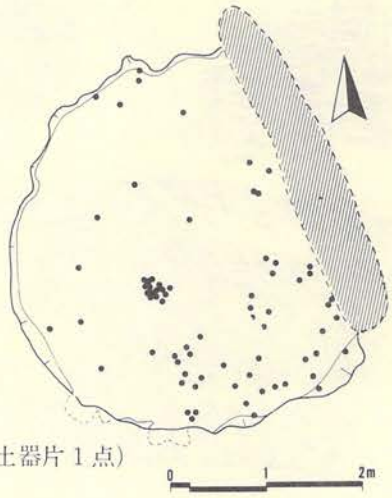
（５・６）は、一次加工面を刃部としている不定形な剥片石器である。（５）は、凝灰質珪質泥岩を用いた重さ6.9ｇのもので、（６）は、輝緑凝灰岩を用いた重さ3.7ｇのものである。

（７・８）は、篦状石器で、形状は共に台形状を呈し、刃部に両縁細部調整を加えている。（７）は、硬質泥岩を用いた重さ26.25ｇのもので、（８）は、輝緑凝灰岩を用いた重さ18.15ｇのものである。

（10）は、楕円体状の自然礫を用いた擦石で、稜の一辺に平坦になるまで擦られた擦痕を有している。（11）は、直径４㎝弱のほぼ球形の自然礫で、所謂、弾投と呼称されているものである。磨痕や敲打痕等の痕跡は認められない。

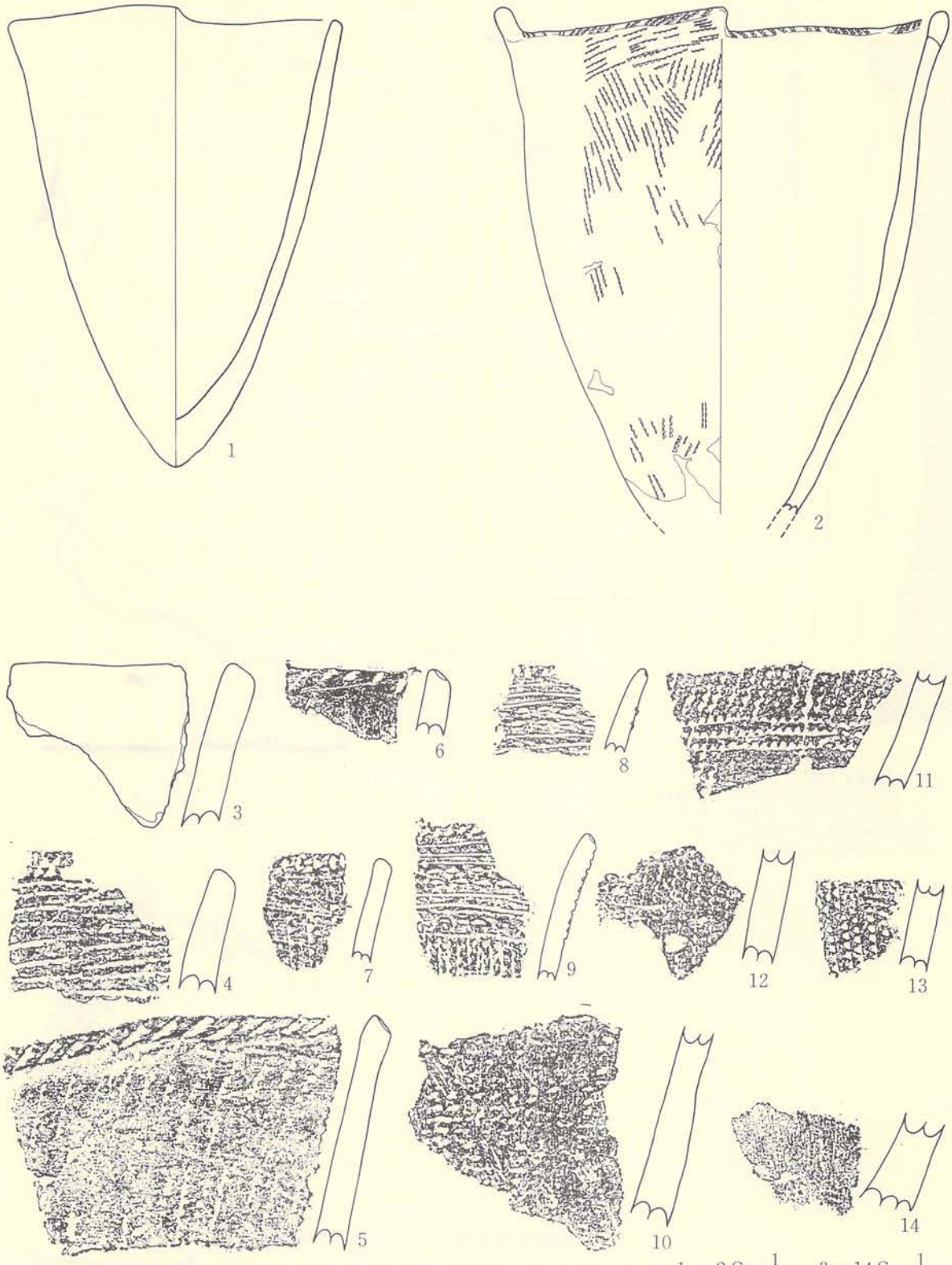


1号住居址埋土注記
1．黒褐色(10YR2/2～2/3)を呈する南部浮石。
2．黄橙(10YR7/8)、浅黄橙(10YR8/3)、及び明黄褐色(10YR6/6)の南部浮石、粒径10～30mmの浮石が1層より2層に多く混入している。



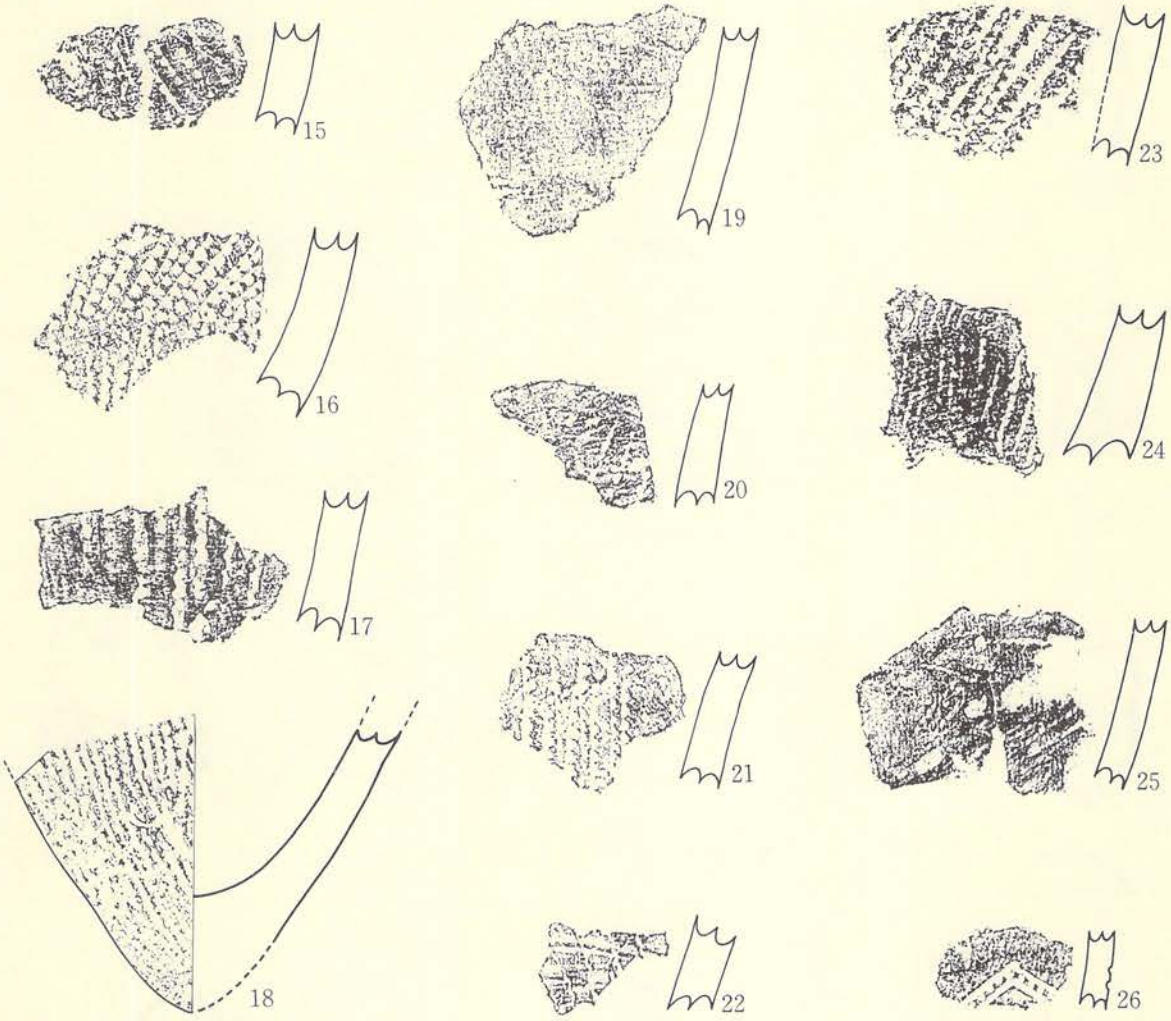
床面出土土器分布図（●印土器片1点）

図版第12図　1号住居址

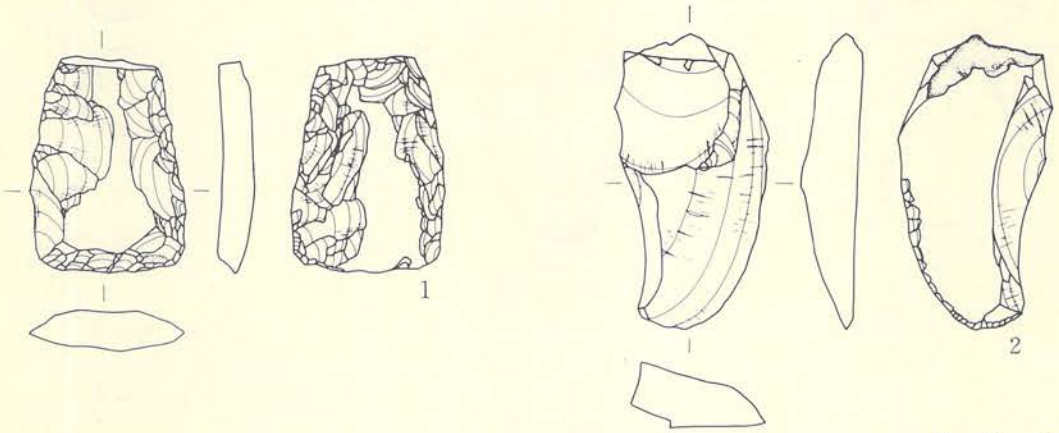


1・2 S＝$\frac{1}{4}$　3～14 S＝$\frac{1}{2}$

図版第13図　1号住居址遺構内出土土器遺物

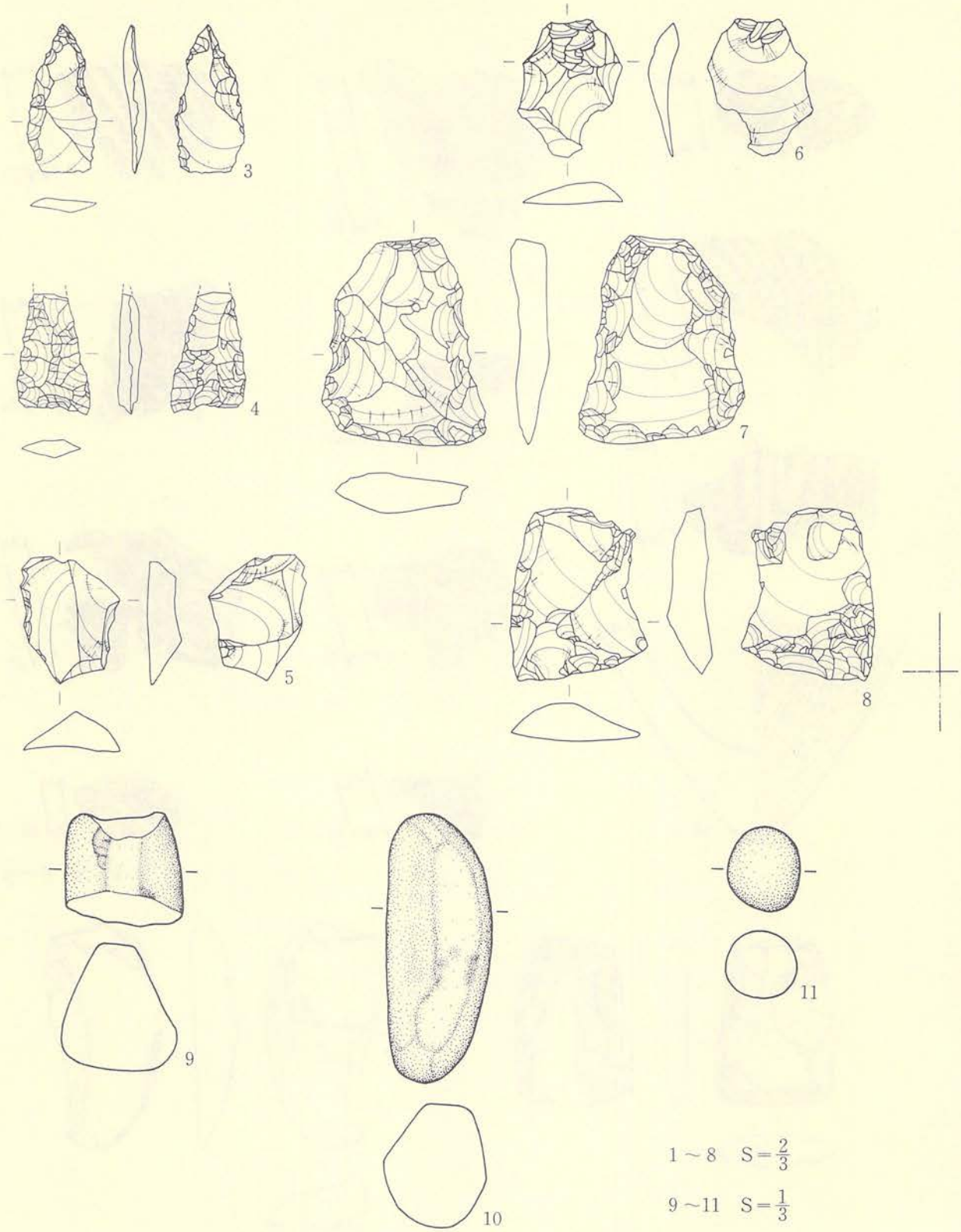


1～26　S＝$\frac{1}{2}$



1～2　S＝$\frac{2}{3}$

図版第14図　1号住居址遺構内出土、土器・石器遺物



図版第15図　1号住居址遺構内出土石器遺物

2号住居址（図版第17図、写真図版第10図）

本住居址は、B地区平坦地の北西寄りに位置している。検出面は、1号住居址の検出面と同じである。

検出面に、黄橙の浮石が25%混入する微砂が不整形にひろがっていたことによって遺構の存在を確認し、精査途中で住居址と判明した。

検出面での平面形は、ほぼ円形である。規模は、検出面での南北直径616cmである。壁は、外側に傾斜して立ち上がっている。壁の高さは、北壁53cm、南壁66cm、東壁66cm、西壁62cmである。

床は、大不動浮石流凝灰岩まで掘り込まれている。床面は、極く僅か中央付近が低くなっているが、ほぼ平坦である。床面の中央付近の3.9㎡の範囲に炭化物の極細粒を含む炭粉が極めて薄くひろがっている。床面から12ケの柱穴痕を検出した。平面形は、円形及び楕円形で径15cm～26cmのものである。

埋土は、5層まで確認したが、実際は埋土のa層、b層はさらに何層かに細分されるものと考えられるが、肉眼での判別はできなかったので視認できたものによって層位区分をした。床面及び埋土と壁面の間に南部浮石をブロック状で検出した。壁にかかっている南部浮石は11ヵ所に認められ、床面から上方30cm～80cmとそれぞれ異なった高さに位置し壁を覆っている。柱穴の埋土は、住居址最下層の埋土と同じである。

出土遺物

遺物は、床面から埋土上層にかけての各層位から出土した。

床面から出土した土器（図版第18図1～16、写真図版第11図1～16）

床面から出土した土器破片点数は16点である。分布の状況は、北壁際の床面から出土した破片1点と中央から東寄りの床面から出土した2点を除き、他は床面中央付近に集中している。

（1・2）は、口唇部を有する口縁部片である。（1）は、口唇部が器表面方向に傾斜し、この部位に縦位の貝殻腹縁圧痕文を有し、口縁部は無文となっている。（2）は、口唇部に丸味をもち、口唇部に斜位の貝殻腹縁圧痕文を施している。口縁部は無文で、器表面、器内面共にミガキ調整を加えている。

（3～14）は、胴部片である。（3～5）は無文である。（6）は、短い沈線を横方向に数条施し、器表面、器内面にミガキ調整を加えている。（7～11）は、貝殻腹縁圧痕文を斜条に施文している。施文の方向は、（7～9）が右から左へ下がる斜条で、（10・11）が左から右へ下がる斜条である。（12）は、貝殻腹縁圧痕文を2cm～4cm程の長さで横条及び斜条に施文している。（13～14）は、0段の撚糸を用いた単軸絡条体圧痕文を疎に施文している。

（15・16）は、尖底部片で無文のものである。（1～16）共に、胎土に繊維及び砂粒を含ん

でいる。

床面から出土した石器（図版第20図１～第21図16、第22図24～第23図30、写真図版第13図１～16、第15図24～第16図30）

床面から出土した石器は、剥片石器16点、礫石器７点である。

（１・２）は、石鏃である。（１）は、凹基無茎鏃で、両側辺に両面細部調整を加えている。石質は白色細粒凝灰岩で、重さ0.65ｇである。（２）は、平基無茎鏃で、両側辺に片面細部調整を加えている。石質は硬質泥岩で、重さ1.4ｇである。（３）は、削器である。側辺の一辺が刃部をなし、刃部には片縁細部調整を加えている。石質は凝灰質珪質泥岩で、重さ28.85ｇである。

（４～16）は、剥片不定形石器である。（４・５）は、偏平楕円体を呈するもので、側辺が波状の刃部となっている。石質及び重さは、（４）が凝灰質珪質泥岩で8.25ｇ、（５）が凝灰質泥岩で6.35ｇである。（６・７）は、台形状を呈するもので、側辺が波状の刃部となっているが、先端部の一端が平刀状となり他方が折断している。石質及び重さは、（６）が硬質泥岩で重さ19.35ｇ、（７）が凝灰質泥岩で、7.9ｇである。（８・９）は、周辺のすべてにリタッチを加えて波状の刃部をつくっている。石質及び重さは、（８）が淡緑色極細粒凝灰岩で18.9ｇ、（９）が硬質泥岩で19.35ｇである。（10～16）は、一次加工面をそのまま刃部としているものである。石質及び重さは、（10）が凝灰質泥岩で18.3ｇ、（11）が凝灰質泥岩で26.65ｇ、（12）が凝灰質泥岩で21.8ｇ、（13）が凝灰質泥岩で18.9ｇ、（14）が凝灰質泥岩で14.15ｇ、（15）が淡緑色極細粒凝灰岩で7.3ｇ、（16）が珪質泥岩で51ｇのものである。

（24～30）は、礫石器である。（24）は、擦石兼敲石である。偏平な楕円形状の礫を用いたもので、側辺の１ケ所に擦痕を有し、長軸の両端部に打痕が認められる。（25・26）は、三角柱状の礫を用いた擦石である。（25・26）共に稜の１ケ所に擦痕を有している。（27）は、縦長の不整形な楕円礫を用いた敲石である。（28）は、偏平な楕円形状の礫を用いたもので、側辺に打痕を有している。長軸の一端が欠損している。（29）は、偏平な楕円形状の礫を用いた敲石で、全周辺に打潰痕が認められる。（30）は、台石で、やや厚みのある隅丸長方形の礫を用い、平坦な一面がやや浅く凹んでいる。

埋土下層から出土した土器（図版第16図１・２、第18図17～第19図33、写真図版第10図１・２、第11図17～第12図33）

（図版第16図１・２、写真図版第10図１・２）共に床面直上の埋土から出土した土器片から復元した尖底深鉢土器である。（図版第16図１、写真図版第10図１）は、口縁部から胴部下半にかけてのもので、口唇部に片刃平棒工具による刺突文を５㎜間隔で巡らしている。口縁部には、口唇直下から片刃平棒工具による上方からの刺突文を３段重ねて横方向に巡らし、その下

部に左方向からの刺突文を縦方向に施文している。

（図版第16図２、写真図版第10図２）は、胴中央部から尖底部にかけてのもので、胴中央部から尖底部にかけて貝殻条痕文を不規則な方向に密に施文している。

（17・18・30）は、口縁部片である。（17）の口唇部は、器表面方向に傾斜し、沈線を刻目状に巡らし、沈線間に貝殻腹縁圧痕文を施文している。（18）の口唇部も器表面方向に傾斜し、口唇部に貝殻腹縁圧痕文を縦位に５㎜間隔で巡らし、口縁部には、爪による刺突文を横方向に連続的に施文している。（30）は、口唇部が無文で、口縁部に横条の２本の平行沈線を巡らし、沈線間に貝殻腹縁圧痕文を施文している。

（19～29・31・32）は、胴部片である。（19～28・31）は、貝殻腹縁圧痕文を斜条乃至縦条に施文し、（29）は、貝殻腹縁連続波状圧痕文を縦条に施文している。（32）は、直線及び曲線的沈線を描き、その沈線の縁にかかるように貝殻腹縁圧痕文を施文している。

（33）は、尖底部片である。器表面には、縦条にミガキ調整を加えている。

（図版第16図１・２、写真図版第10図１・２、17～33）共に、胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

埋土下層から出土した石器（図版第21図17～第22図19、第23図31～33、写真図版第14図17～第15図19、第16図31～33）

（17）は、硬質泥岩を用いた石匙である。重さは、6.5gである。側辺の一辺に片縁細部調整を加え、他の一辺には両縁細部調整を加えている。

（18）は、硬質泥岩を用いた尖頭器である。側辺に両縁細部調整を加えている。重さは5.15gである。

（19）は、珪質泥岩を用いた剥片石器である。側辺に両面細部調整を加え、細長い棒状に加工している。端部の一端は平刃状で、他の端部は欠損している。石鏃乃至石錐と考えられるが欠損のため器種は不明である。

（31）は、擦石である。三角柱状の自然礫を用いたもので、稜の一ケ所に擦痕を有している。

（32）は、擦石兼凹石である。三角柱状の自然礫を用いたもので、稜の一ケ所が擦られ平坦になっている。また、礫の側面の一ケ所に浅い凹みを２ケ有している。（33）は、偏平な楕円礫を用いた擦石兼敲石である。稜の一辺に擦痕を有し、擦痕の中央付近に打潰痕がある。

埋土中層から出土した土器（図版第19図34～40、写真図版第12図30～40）

埋土中層から出土した（34～40）の土器片は、いずれも胴部片である。（34～37）は、貝殻腹縁圧痕文のみを施文し、（38）には、貝殻腹縁圧痕文と貝殻条痕文を組合せて施文している。

（39）は無文のものである。（40）は、直線的沈線と波状の沈線を描き、直線的沈線の縁にかかるように貝殻腹縁圧痕文を施文している。（34～40）の胎土には繊維及び砂粒を含んでいる。

埋土中層から出土した石器（図版第22図20～23、写真図版第15図20～23）

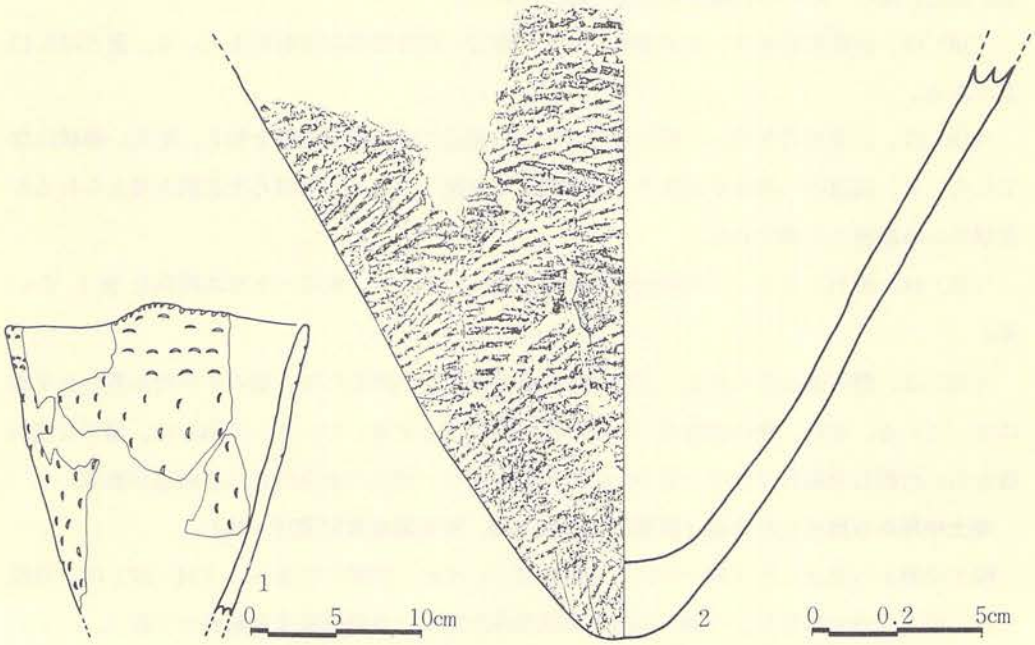
（20～22）は、剥片不定形石器である。（20）は、珪質泥岩を用いたもので、二次加工を加えておらず、側辺の一部を弧状に研磨している。重さは3.45ｇである。（21）は、チャート質粘板岩を用いたもので、側辺の一辺に片面細部調整を加え、他の一辺を折断している。重さは6.15ｇである。（22）は、輝緑凝灰岩を用いたもので、両側辺及び先端部の一方に両面細部調整を加え、他の端部は折断している。重さは1.55ｇである。

（23）は、珪質泥岩を用いた掻器である。刃部は、一次加工面をそのまま使用している部分と片面細部調整を行っている部分とがある。

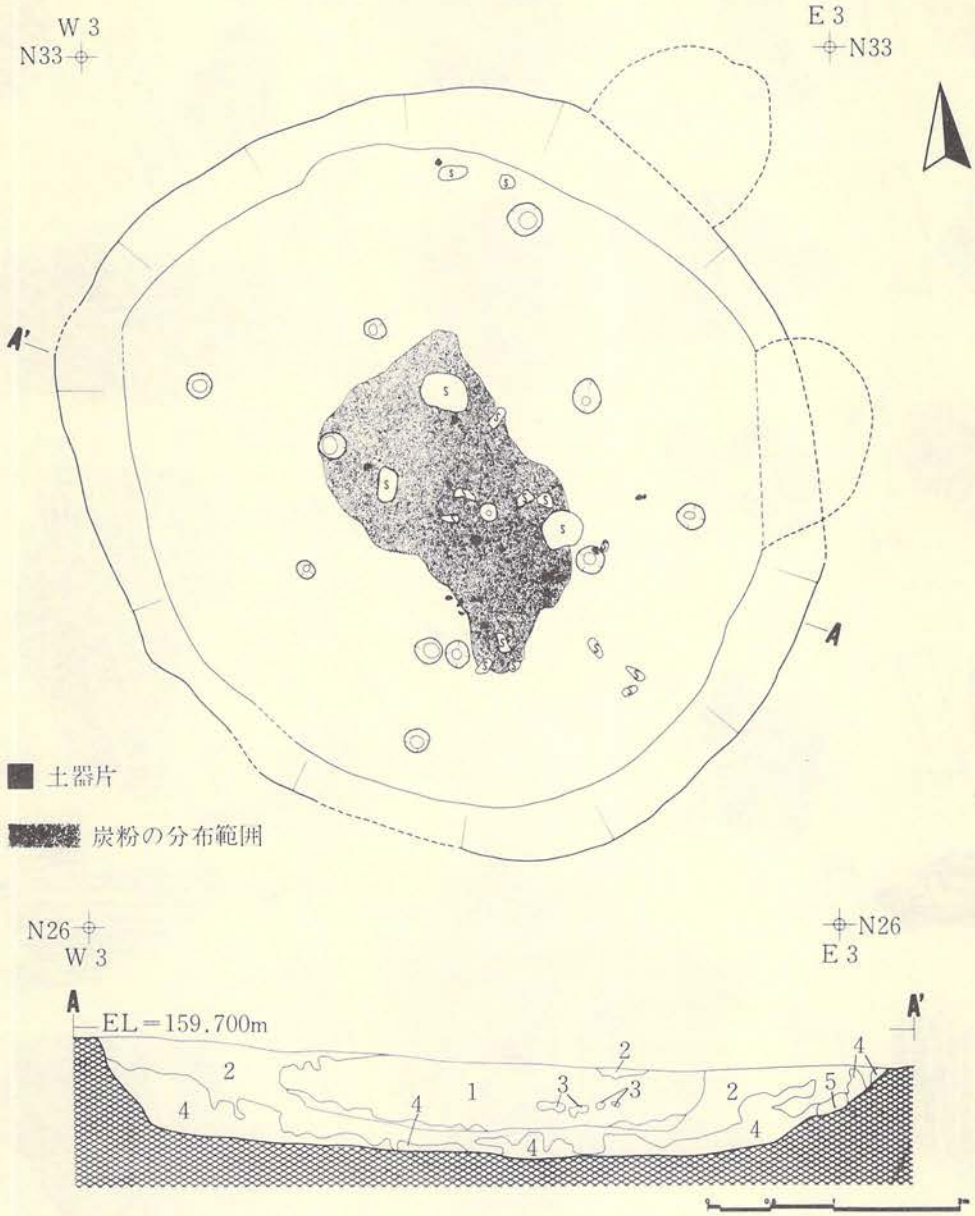
埋土上層から出土した土器（図版第19図41～45、写真図版第12図41～45）

（41）は、口縁部片である。口唇部は、丸味をもちながら器表面方向に傾斜している。口唇部には貝殻腹縁圧痕文を７㎜間隔で斜位に施し、一巡している。口縁部には貝殻条痕文と貝殻腹縁圧痕文を施文している。

（42～45）は、胴部片である。（42）は、貝殻腹縁連続波状圧痕文を縦位に施文している。（43）は、貝殻腹縁圧痕文を左右の斜条に施文している。（44）は、沈線を斜条に描いている。（45）は、貝殻表圧痕文を横条に施文している。（42～45）の胎土には繊維及び砂粒を含

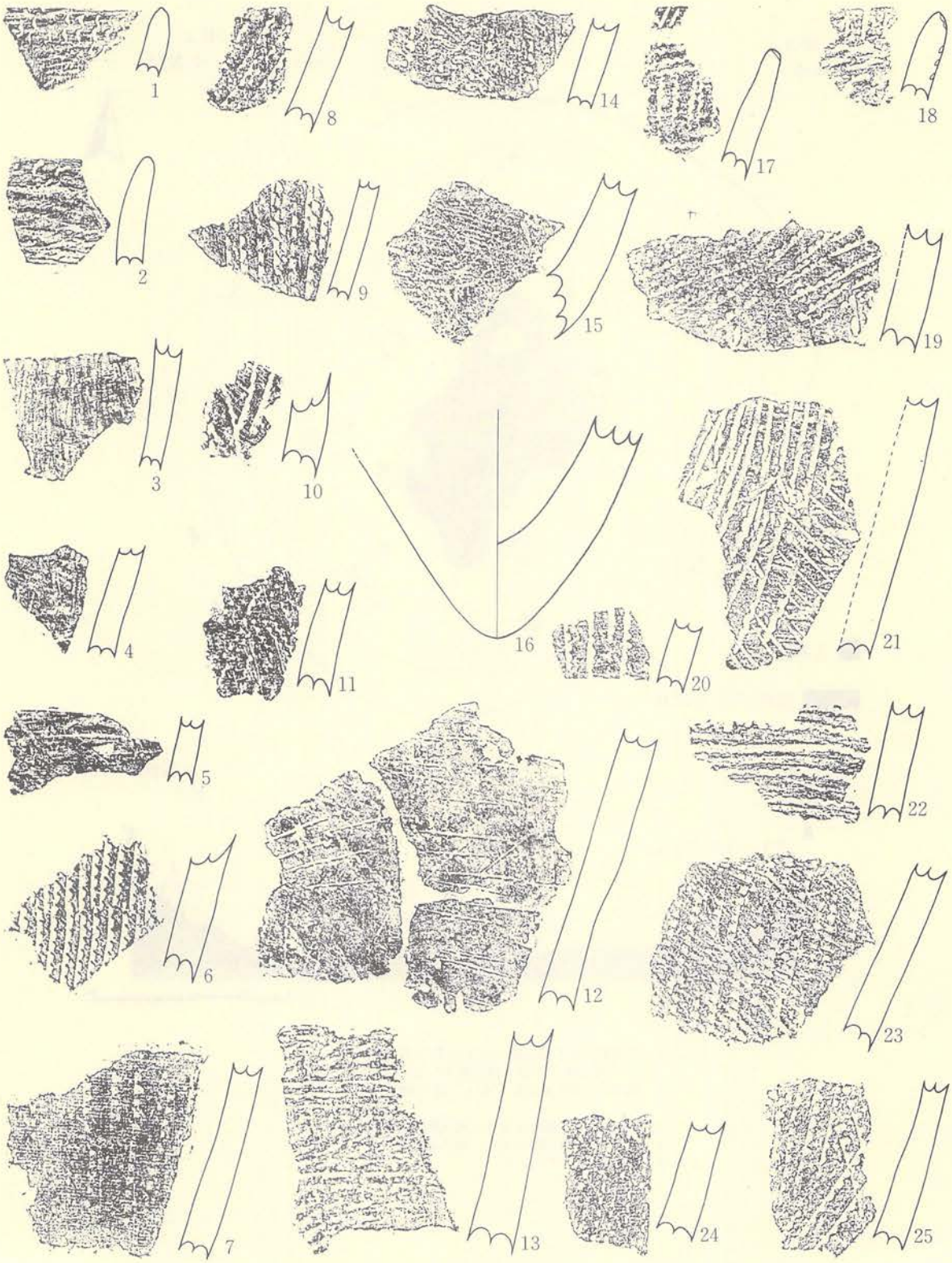


図版第16図　２号住居址遺構内出土土器遺物



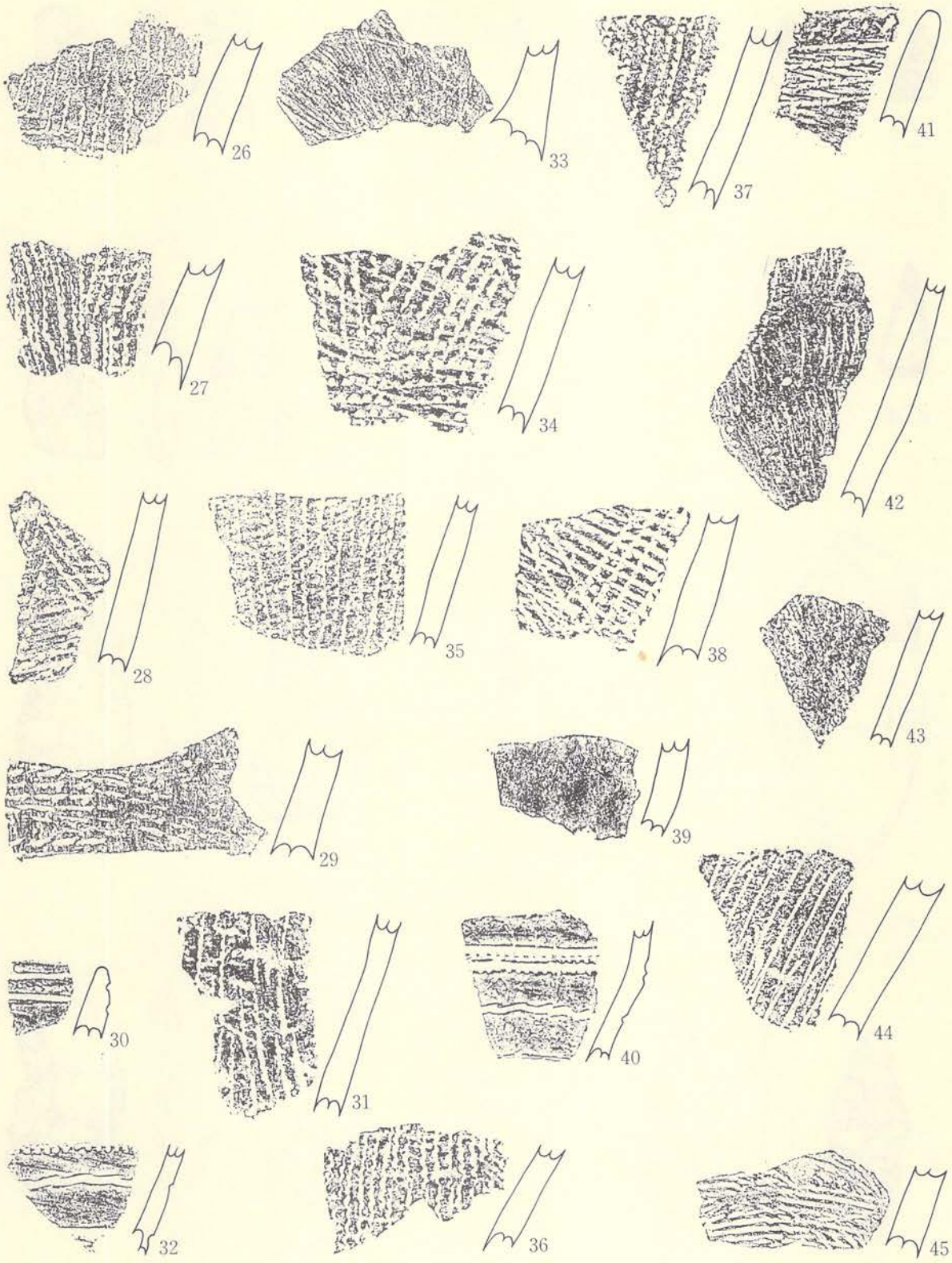
1．黒褐色(10Y R 2/2)シルトに粒径大～極小の南部浮石が30～40%混入している。
2．暗褐色(10Y R 3/3)シルト　混入物 a に同じ
3．褐色(10Y R 4/6)シルト　混入物 a に同じ
4．褐色(10Y R 4/6)シルト　混入物 a に同じ
5．南部浮石のブロック

図版第17図　2号住居址



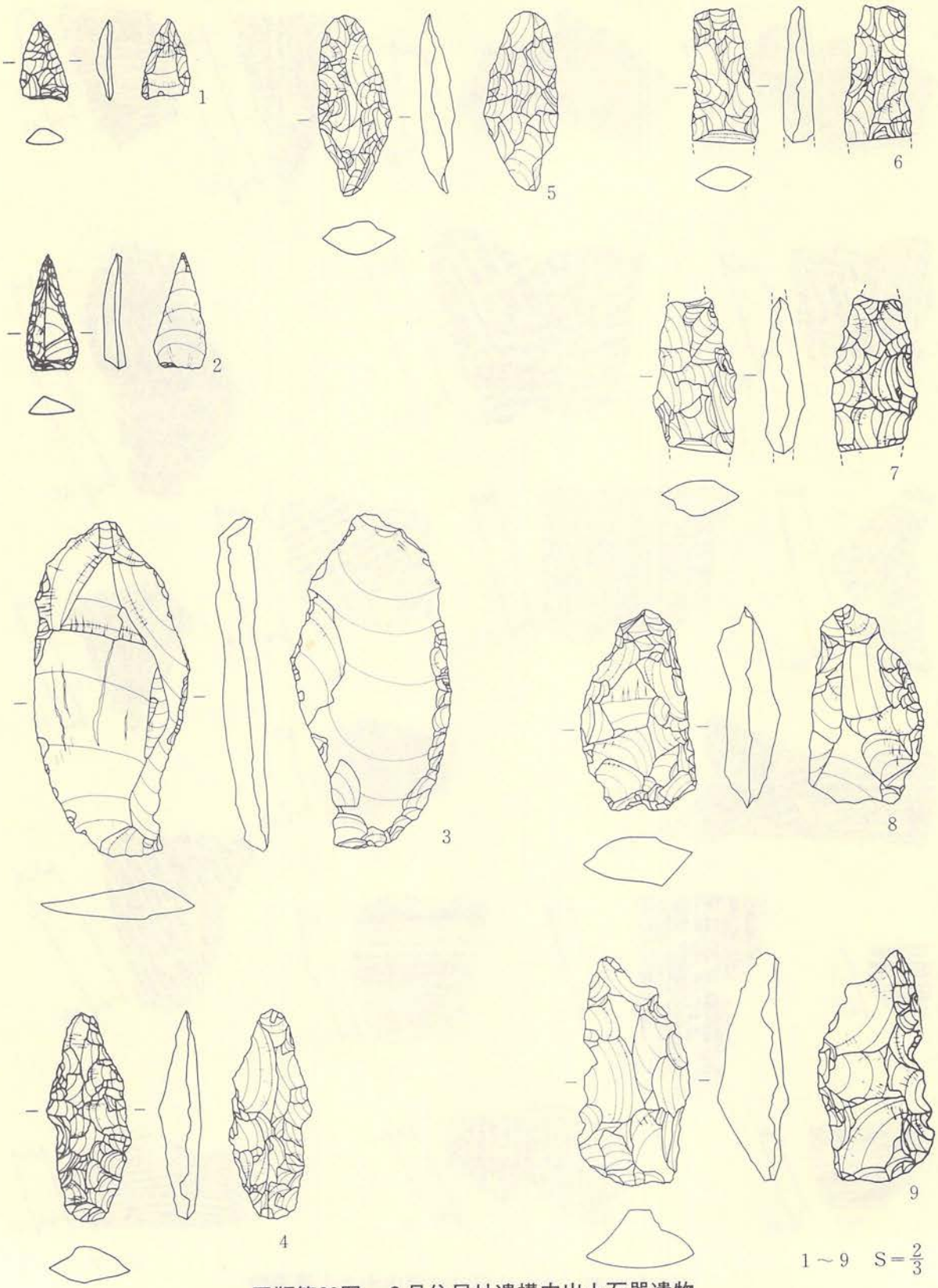
1～25　S＝$\frac{1}{2}$

図版第18図　2号住居址遺構内出土土器遺物

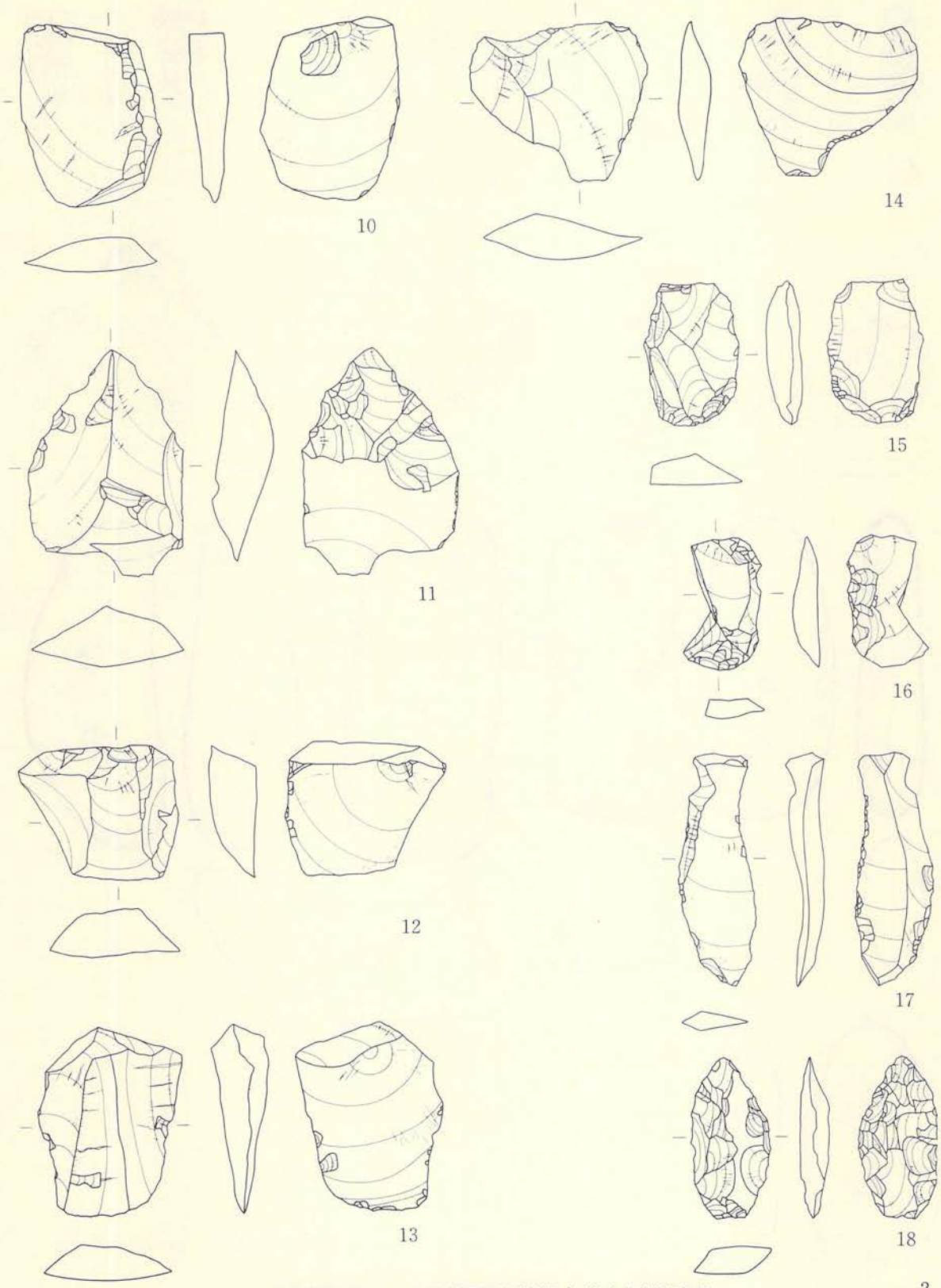


26～45　S＝$\frac{1}{2}$

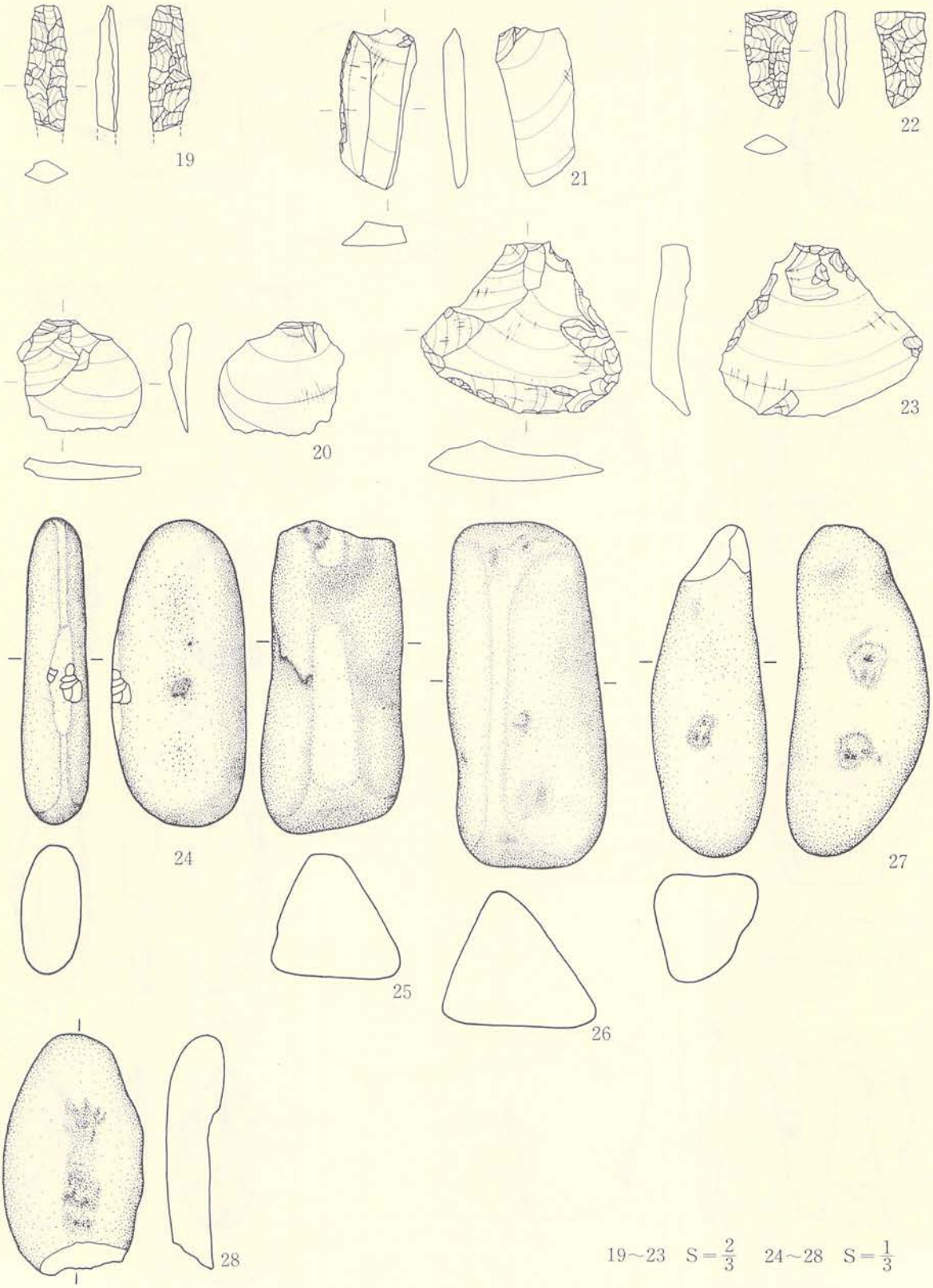
図版第19図　2号住居址遺構内出土土器遺物



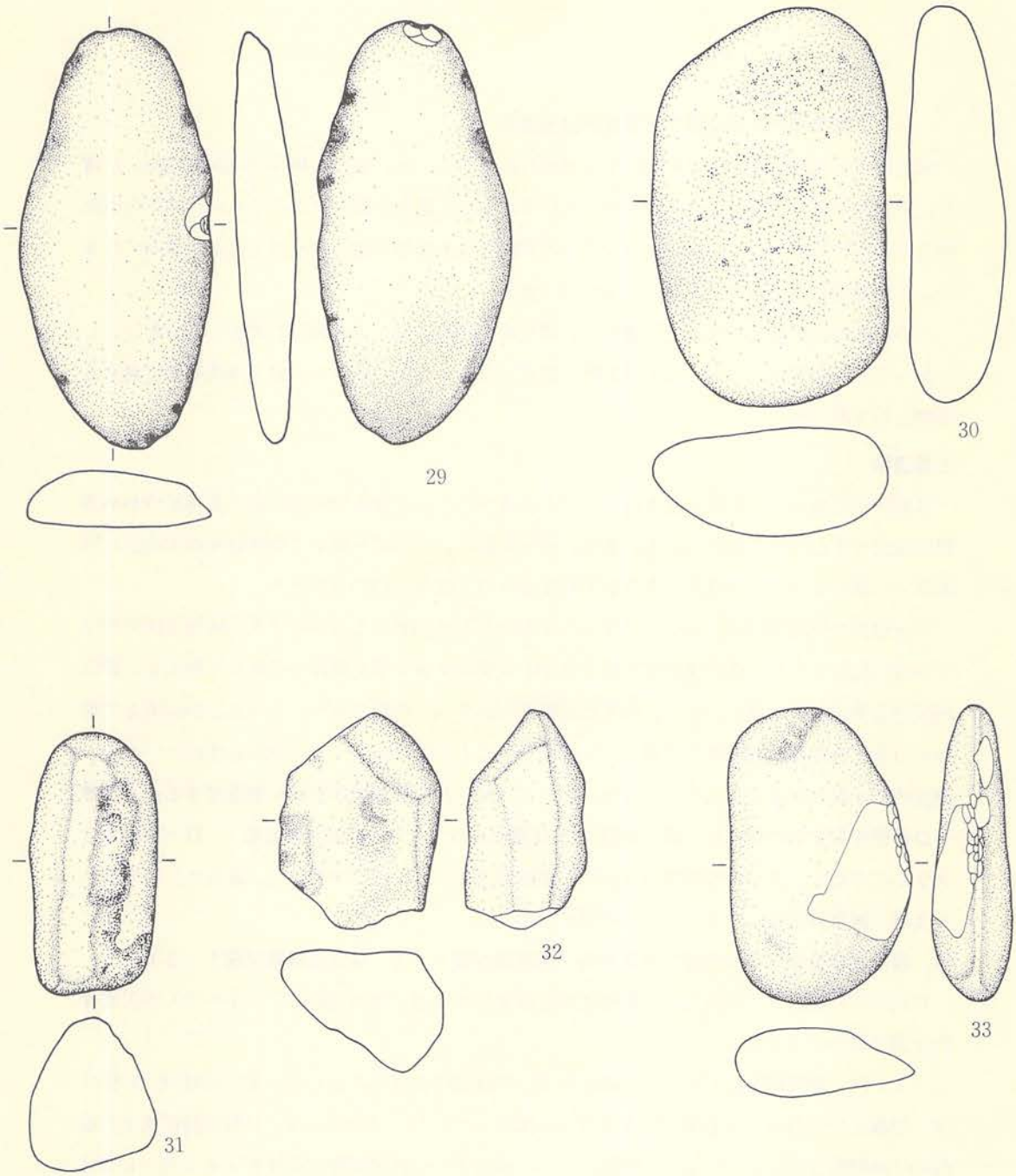
図版第20図　2号住居址遺構内出土石器遺物



図版第21図　2号住居址遺構内出土石器遺物　　10～18　S＝$\frac{2}{3}$



図版第22図　2号住居址遺構内出土石器遺物



29・30　S＝$\frac{2}{9}$　　31～33　S＝$\frac{1}{3}$

図版第23図　2号住居址遺構内出土石器遺物

（2）縄文時代早期に属する遺構外出土遺物

縄文時代早期土器遺物は、B地区平坦地から出土している。表土の層厚が10cm～20cmと薄く、その直下が八戸降下火山灰層となっているために、遺物の出土は表土から八戸降下火山灰層上面にかけて出土している。なかでも、八戸降下火山灰層上面からの出土量がきわめて多い。土器遺物の出土点数はおよそ1,420点である。

この地区からの縄文時代の土器遺物は、縄文時代早期に属する遺物しか出土していない。したがって、石器遺物についても土器遺物と混在して出土しているので、縄文時代早期に属する遺物として取り扱った。

土器遺物

B地区平坦地から出土した縄文時代早期土器遺物のうち、全体形状及び全体文様がつかめる程に復元できたのは3個体である。また、破片点数は、口唇部を有する口縁部片約150点、胴部片（口唇をもたない口縁部片を含む）約1,200点、底部片約70点である。

出土遺物の検出層位は、表土（耕作土）とその直下に位置する八戸降下火山灰層上面にかけての薄い範囲であり、貝殻文を有する土器片と刺突文を有する土器片が混在して出土し、層位的区分も明瞭に行えない。また、出土した底部片がすべて尖底であり、このことから考えて他のものも尖底深鉢土器の破片と考えられ、器形的にも明瞭に区分することがむずかしいので、便宜的に土器の部位と文様の施文方法によって、**A・器形及び全体文様が把握できる土器、B・口唇部を有する口縁部片、C・胴部片（口唇部を有しない口縁部片を含む）、D・底部片**と大まかに分類し、A～Dの類型のなかで、文様形態によって群分けをした。さらに、群のなかで文様の施文方法によっていくつかの類に分類した。

A　器形及び全体文様が把握できる土器（図版第24図1～3、写真図版第17図1～3）

口唇部から底部まで復元でき、器形及び全体文様が把握できた土器は、（1～3）の尖底深鉢土器3個体のみである。

（1）は、砲弾形を呈した尖底深鉢土器で、口縁部は大きく外反している。口縁部の形状は、平縁と考えられ、口唇部が器表面方向に傾斜している。口唇部には、貝殻腹縁圧痕文を縦位に4mm間隔で巡らしている。口縁部には、口唇直下から貝殻腹縁圧痕文を4本1組として2組を横条に巡らし、組の間に爪による上方からの刺突文を2段重ねて横方向に連続的に施文し、その下部から尖底端に向けて縦条の貝殻腹縁圧痕文を施している。器内面は、縦方向にミガキ調整を行っている。大きさは、器高35.3cm、口縁部の内径35cm、器厚1cm、尖底部の先端から器内底面までの厚さ（底部厚）1.9cmである。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

（2）は、砲弾形をした尖底深鉢土器である。口唇部には1段の撚糸を用いた単軸絡条体圧痕文を斜位に連続的に巡らしている。口唇部には、片刃平棒工具による左斜め上方からの刺突

文を横方向に2段重ねて連続的に施し、その下部から尖底部にかけて貝殻条痕文を横及び斜め方向に施文し、その上からミガキ調整を加えている。器内面は、口唇直下を除き縦方向にミガキ調整を加えている。

（3）は、砲弾形を呈する尖底深鉢土器である。口縁部の形態は、1ケ所のみが凹凸する波状形を呈する変則的な波状口縁である。口唇部は、器表面方向に傾斜し、その傾斜部には貝殻腹縁圧痕文を1㎝程の長さに縦位に施文している。口唇部直下の口縁部と胴部上半には、片刃平棒工具による刺突文を2段重ねて横方向に連続的に巡らし、口縁部の刺突文と胴部上半の刺突文との間に2本1組とする平行沈線による直線を右斜め方向と左斜め方向に交互に描き長方形の区画をし、その区画内と2本の狭い平行沈線間に貝殻表圧痕文を連続的に施文している。胴部下半の刺突文から下部は、無文帯となっている。大きさは、器高36㎝、口縁部の内径26.5㎝、器厚0.8㎝である。胎土には、繊維・砂粒及び黄色の細い浮石を混入している。

B　口唇部を有する口縁部片（図版第25図4～第30図125、写真図版第18図4～第23図125）

第1群口縁部土器片（図版第25図4～第26図44、写真図版第18図4～第19図44）

貝殻腹縁圧痕文乃至貝殻背縁圧痕文のみ施文しているものを本群とした。口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施文し、口縁部が無文のもの（4）、口唇部が無文で口縁部に貝殻背縁圧痕文を施文しているもの（5）、口唇部・口縁部に貝殻腹縁圧痕文を施文しているもの（6～38・43）、口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施し、口縁部に貝殻腹縁圧痕文と貝殻背縁圧痕文を施文しているもの（39～42・44）がある。

第1類　（図版第25図4・写真図版第18図4）

口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施文し、口縁部が無文のものを本類とした。

（4）は、口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施した後に、ミガキ調整によって施文部を潰している。器表面は、縦方向にナデ調整を行っている。口唇部は器表面方向に傾斜している。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第2類　（図版第25図5・写真図版第18図5）

口唇部が無文で、口縁部に貝殻背縁圧痕文及び貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本類とした。

（5）は、口縁部に斜位の貝殻背縁圧痕文を5段重ねて横方向に連続的に巡らし、その下部に貝殻腹縁圧痕文を縦条に施文している。

口唇部は器表面方向に傾斜し、口唇部及び口縁部にはミガキ調整を行っている。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第3類　（図版第25図6～25・第26図26～38・43、写真図版第18図6～第19図38・43）

口唇部及び口縁部に貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本類とした。

口唇部の貝殻腹縁圧痕文の施文方向は、縦位のもの（6）と斜位のもの（7～38・43）がある。いずれも2㎜～6㎜間隔で巡らしている。

口縁部の貝殻腹縁圧痕文の施文方向は、横条のもの（6～18）、縦条のもの（19・20）、斜条のもの（21～31・33～35）、横条と縦条を組合せて施文しているもの（32・37～38・43）がある。（36）の口縁部には、器表面方向から穿孔した径8㎜程の円孔がある。

口縁部の形状は、平縁のもの（6～18・20～34・36～38）と波状のもの（19・35・43）がある。平縁としたものの中には、逆「へ」字状を呈すると考えられるものもあるが、その部位を有していないので平縁に含めてある。（35）の口縁部は、波頂部下部に突起を貼付している。（20）の口唇部は、器内面方向から僅かに折り返している。（16～18・33・34）の器内の口縁部には、2㎝程の長さの貝殻腹縁圧痕文を口唇部直下から縦位に施文している。

（6～38・43）共に、胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第4類　（図版第26図39～42、第27図44、写真図版第19図39～42・44）

口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施し、口縁部に貝殻背縁圧痕文と貝殻腹縁圧痕文を組合せて施文しているものを本類とした。

（39）は、横条に貝殻腹縁圧痕文を数条巡らした下部に斜位に貝殻背縁圧痕文を数段重ねて横方向に巡らし、（44）は、口縁部の口唇直部直下に斜位に貝殻背縁圧痕文を2段重ねて横方向に連続的に巡らした下部に、貝殻腹縁圧痕文を横条に施文している。

（41）は、口縁部に横条に数条貝殻腹縁圧痕文を施し、その下部に貝殻背縁圧痕文を間隔を置きながら横方向に巡らし、その下部に再度貝殻腹縁圧痕文を横条に施文している。

（42）は、横条に巡らした貝殻腹縁圧痕文と横方向に連続的に巡らした貝殻背縁圧痕文を交互に施文している。

第2群口縁部土器片（図版第27図45、写真図版第19図45）

口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施し、口縁部に刺突文のみを施文しているものを本群とした。

（45）は、口唇部に貝殻腹縁圧痕文を巡らし、口縁部の口唇直下に爪による左斜め上方からの刺突を横方向に連続的に1段施文し、その下部からは無文帯となっている。胎土には、ガラス質の物質が混入する砂粒を含むが、繊維の混入はみられない。

第3群口縁部土器片（図版第27図46～56・62、写真図版第19図46～第20図56・62）

口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施し、口縁部に刺突文と貝殻腹縁圧痕文・貝殻背縁圧痕文を施文しているものを本群とした。

口縁部に横方向に巡る刺突文と貝殻腹縁圧痕文を施文しているもの（46～54）、横方向に巡る刺突文と縦方向の刺突列及び貝殻腹縁圧痕文を施文しているもの（62）、横方向に巡る刺突文と貝殻背縁圧痕文を施文しているもの（55）、横方向に巡る刺突文と貝殻背縁圧痕文及び貝

殻腹縁圧痕文を施文しているもの（56）がある。

刺突文には、片刃平棒工具によるもの(46～53・55・56・62)と爪によるもの（54）がある。

第1類　（図版第27図46～53、写真図版第19図46～第20図53）

口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施し、口縁部に片刃平棒工具による横方向に巡る刺突文と貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本類とした。

口唇部に施した貝殻腹縁圧痕文の方向は、斜位のもの(46・47・49～53)と縦位のもの（48）がある。

（46～50）は、口縁部に片刃平棒工具による上方ないし斜め上方からの刺突文を数段重ねて横方向に連続的に巡らし、その下部に斜条ないし縦条に貝殻腹縁圧痕文を施文している。

（51～53）は、片刃平棒工具による上方ないし斜め上方からの刺突文と横条の貝殻腹縁圧痕文を施文している（46～53）共に、胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第2類　（図版第27図62、写真図版第20図62）

口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施し、口縁部に片刃平棒工具による横方向に巡る刺突文と縦方向の刺突列及び貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本類とした。

（62）は、口唇部に貝殻腹縁圧痕文を斜位に施している。口縁部には、口唇直下に片刃平棒工具による縦位の刺突文を1段横方向に巡らし、その下部に貝殻腹縁圧痕文を横条に施文している。口縁部から胴部にかけて施文している貝殻腹縁圧痕文の上から縦位の刺突文を2列平行して縦条に施している。胎土に、繊維及び砂粒を含んでいる。

第3類　（図版第27図54、写真図版第20図54）

口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施し、口縁部に爪による刺突文と貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本類とした。

（54）は、波状を呈する口縁部片である。口唇部に貝殻腹縁圧痕文を斜位に施している。口縁部には、口唇直下に爪による刺突文を1段横方向に連続的に施し、その下部に貝殻腹縁圧痕文を横条及び斜条に施文している。胎土に、繊維及び砂粒を含んでいる。

第4類　（図版第27図55、写真図版第20図55）

口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施し、口縁部に刺突文と貝殻背縁圧痕文を施しているものを本類とした。

（55）は、口唇部に貝殻腹縁圧痕文を斜位に施している。口縁部には、片刃平棒工具による上方からの刺突文を1段横方向に巡らし、その下部に縦位の貝殻背縁圧痕文を横方向に連続的に施文し、さらに数段重ねて上方からの刺突文を巡らしている。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第5類　（図版第27図56、写真図版第20図56）

口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施し、口縁部に刺突文、貝殻背縁圧痕文及び貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本類とした。

（56）は、口唇部に貝殻腹縁圧痕文を斜位に施している。口縁部には、片刃平棒工具による刺突文を2段重ねて横方向に巡らし、その下部に斜位の貝殻背圧痕文、横条の貝殻腹縁圧痕文、斜位の貝殻背縁圧痕文、縦条の貝殻腹縁圧痕文の順に施文している。胎土に、繊維及び砂粒を含んでいる。

第4群口縁部土器片　（図版27図57～61、写真図版第20図57～61）

口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施し、口縁部に沈線文・刺突文及び貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本群とした。

口唇部に施した貝殻腹縁圧痕文の方向には、斜位のもの（57～59・61）と縦位のもの（60）がある。（57～61）共に、口縁部に数条の平行沈線を巡らし、その沈線間に爪による上方からの刺突文を横方向に連続的に施文している。この文様帯の下部に貝殻腹縁圧痕文を縦条に施文している。（57～61）共に、胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第5群口縁部土器片　（図版27図67、写真図版第20図67）

口唇部に貝殻頂圧痕文を施し、口縁部に貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本群とした。

（67）は、口唇部に貝殻頂圧痕文を連続的に巡らし、口縁部に貝殻腹縁圧痕文を横条に施文している。胎土に、繊維及び砂粒を含んでいる。

第6群口縁部土器片　（図版第27図63～66・第28図68～78、写真図版第20図63～第21図78）

口唇部に単軸絡条体圧痕文を施文しているものを本群とした。口縁部には、貝殻腹縁圧痕文を施文しているもの（63・64）、貝殻条痕文と貝殻腹縁圧痕文を施文しているもの（65・66）、刺突文のみ施文しているもの（68）、刺突文と貝殻腹縁圧痕文を施文しているもの（69～72）、刺突文と貝殻腹縁押し引き文を施文しているもの（73・74）、刺突文と貝殻表圧痕文を施文しているもの（75）、刺突文と沈線文を施文しているもの（76～78）がある。

第1類　（図版第27図63・64、写真図版第20図63・64）

口唇部に単軸絡条体圧痕文を施し、口縁部に貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本類とした。

（63）は、口唇部に0段の撚糸を用いた単軸絡条体圧痕文を斜位に施し、口縁部に貝殻腹縁圧痕文を左右の斜位に施文している。（64）は、口唇部に1段の撚糸を用いた単軸絡条体圧痕文を縦位に施し、口縁部に貝殻腹縁圧痕文を縦条に施している。（63・64）共に、胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第2類　（図版第27図65・66、写真図版第20図65・66）

口唇部に単軸絡条体圧痕文を施し、口縁部に貝殻条痕文及び貝殻腹縁圧痕文を施文している

ものを本類とした。

（65・66）共に、口唇部に1段の撚糸を用いた単軸絡条体圧痕文を施し、口縁部には、貝殻条痕文を施文した上から短い貝殻腹縁圧痕文を極めて疎らに押している。（65・66）共に、胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第3類　（図版第28図68、写真図版第20図68）

口唇部に単軸絡条体圧痕文を施し、口縁部に刺突文を施文しているものを本類とした。

（68）は、口径4㎝程の小さい深鉢形土器の口縁部片である。口唇部に1段の撚糸を用いた単軸絡条体圧痕文を施し、口縁部に爪による不規則な刺突を施している。胎土に砂粒を含むが、繊維の混入はみられない。

第4類　（図版第28図69～72、写真図版第20図69～72）

口唇部に単軸絡条体圧痕文を施し、口縁部に刺突文と貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本類とした。

（69～72）共に、口唇部に1段の撚糸を用いた単軸絡条体圧痕文を施し、口縁部には、片刃平棒工具による上方乃至左斜め上方からの刺突文を3段重ねて横方向に連続的に巡らし、その下部に貝殻腹縁圧痕文を施文している。口縁部に施文した貝殻腹縁圧痕文の文向は、横条のもの（69～71）と斜条のもの（72）がある。

（69～72）共に、胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第5類　（図版第28図73・74、写真回版第20図73・74）

口唇部に単軸絡条体圧痕文を施し、口縁部に刺突文と貝殻腹縁押し引き文を施文しているものを本類とした。

（73）は、口唇部に1段の撚糸を用いた単軸絡条体圧痕文を施している。口縁部には、片刃平棒工具による左斜め上方からの刺突文を3段重ねて横方向に連縁して巡らした下部に横位の貝殻腹縁押し引き文を施文している。

（74）は、口唇部に0段の撚糸を用いた単軸絡条体圧痕文を施している。口縁部には、（73）と同様の刺突文を巡らし、その下部に縦位の貝殻腹縁押し引き文を施文している。（73・74）共に、胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第6類　（図版第28図75、写真図版第20図75）

口唇部に単軸絡条体圧痕文を施し、口縁部に刺突文及び貝殻表圧痕を施文しているものを本類とした。

（75）は、口唇部に0段の撚糸を用いた単軸絡条体圧痕文を施している。口縁部には、爪による左斜め上方からの刺突文を4段重ねて横方向に連続的に施文し、その下部に貝殻表圧痕文を横方向に連続的に施文している。胎土に、繊維及び砂粒を含んでいる。

第７類　（図版第28図76～78、写真図版20図76、第21図77・78）

口唇部に単軸絡条体圧痕文を施し、口縁部に刺突文と沈線文を施文しているものを本類とした。刺突文には、爪によるものと片刃平棒工具によるものとがある。

第１種　（図版第28図76・77、写真図版第20図76、第21図77）

爪による刺突文を施しているものを本種とした。

（76）は、口唇部に１段の撚糸を用いた単軸絡条体圧痕文を斜位に施している。口縁部には、爪による斜め上方からの刺突文を３段重ねて横方向に密に施し、その下部に３本１組の細い平行沈線を斜条に施文している。

（77）は、口唇部に１段の撚糸を用いた単軸絡条体圧痕文を縦位に施している。口縁部には、４条の平行沈縁を横方向に巡らし、その下部に斜条の平行沈線を描いている。横方向に巡らした平行沈線間には、爪による左斜め上方からの刺突文を横方向に連続的に充填している。

（76・77）共に、胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第２種　（図版第28図78、写真図版第21図78）

平棒工具による刺突文を施しているものを本種とした。

（78）は、口唇部に１段の撚糸を用いた単軸絡条体圧痕文を縦位に施している。口縁部には、片刃平棒工具による上方からの刺突文を２段重ねて横方向に連続的に巡らし、その下部に３本１組の平行沈線を斜条に施文している。口縁部の刺突文の下部に、器表面方向から穿孔した円孔を有している。胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第７群口縁部土器片　（図版第28図81～84、写真図版第21図81～84）

口唇部に沈線文を施文しているものを本群とした。口縁部には、沈線文のみを施文しているもの（81・82）、貝殻腹縁圧痕文と刺突文を施文しているもの（73）、沈線文と丸棒状工具による刺突文を施文しているもの（84）がある。

第１類　（図版第28図81・82、写真図版第21図81・82）

口唇部・口縁部共に沈線文のみを施文しているものを本類とした。

（81）は、口唇部に縦位の沈線を巡らし、（82）は、口唇部に斜位の沈線を巡らしている。口縁部文様は、（81、82）共に、数条の平行沈線を横条に描き、その下部に斜条の平行沈線を数条１組として施文している。（81・82）共に、胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第２類　（図版第28図83、写真図版第21図83）

口唇部に沈線文を施し、口縁部に貝殻腹縁圧痕文と刺突文を施文しているものを本類とした。

（83）の口唇部に施した沈線の方向は、右斜位に施している部分と左斜位に施している部分とがある。口縁部には、口唇直下に貝殻腹縁圧痕文を３段重ねて横方向に施し、その下部に爪

による上方からの刺突文を数段重ねて施文している。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第3類　（図版第28図84、写真図版第21図84）

口唇部に沈線文を施し、口縁部に沈線文と丸棒状工具による刺突文を施文しているものを本類とした。

（84）は、口唇部に沈線文を縦位に施している。口縁部には、口唇直下に丸棒状工具による刺突文を1段横方向に連続的に施文し、その下部に数条の平行沈線を横方向に描いている。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第8群口縁部土器片　（図版第28図79・80、写真図版第21図79・80）

口唇部に爪による刻目を施し、口縁部に刺突文を施文しているものを本群とした。口縁部の刺突文には、片刃平棒工具によるものと爪によるものとがある。

第1類　（図版第28図79、写真図版第21図79）

口唇部に爪による刻目を施し、口縁部に片刃平棒工具による刺突文を施文しているものを本類とした。

（79）は、口唇部に爪による左上方からの刻目を巡らし、口縁部には、片刃平棒工具による右上方からの刺突文を2段重ねて横方向に連続的に施文している。口縁部に施した刺突文の並びは比較的雑である。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第2類　（図版第28図80、写真図版第21図80）

（80）は、波状口縁を呈する口縁部片である。波頂部に爪による刻目を不規則に施している。口縁部には、爪による刺突文を条ごとに刺突方向を、上方、横、斜め右上方、下方と変えて疎らに施している。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第9群口縁部土器片　（図版第28図85、写真図版第21図85）

口唇部に平棒工具による刻目を施し、口縁部が無文のものを本群とした。

（85）は、口唇部に片刃平棒工具による左斜め上方からの刻目を施し、口縁部は無文となっている。胎土には、砂粒を含むが繊維の混入はみられない。

第10群口縁部土器片　（図版第28図86～89、写真図版第21図86～89）

口唇部に刻目を施し、口縁部に貝殻条痕文を施文しているものを本群とした。口唇部の刻目に、片刃平棒工具を用いたもの（86～88）と貝殻腹縁を用いたもの（89）がある。

第1類　（図版第28図86～88）

口唇部に片刃平棒工具による刻目を施し、口縁部に貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本類とした。

（86～88）共に、口唇部に片刃平棒工具による右斜め上方からの刻目を施している。口縁部には、横方向に貝殻条痕文を施しているが、（86～88）は貝殻条痕の凹凸が明瞭にあらわれて

おり、（87）は、文様としての施文より調整痕としての性格の方が強い。（86～88）共に、胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第2類　（図版第28図89、写真図版第21図89）

口唇部に貝殻腹縁による刻目を施し、口縁部に貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本類とした。

口唇部に貝殻腹縁による刻目を有し、口縁部に貝殻条痕文を施文しているものを本類とした。

（89）は、口唇部に貝殻腹縁を深く押し込んだ刻目を施し、口縁部に貝殻内面の肋をあてた横・斜位の条痕文を施しているが、文様としての施文より調整痕としての性格が強い。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第11群口縁部土器片　（図版第28図90・写真図版第21図90）

口唇部に刻目を施し、口縁部に沈線と撚糸文を施文しているものを本群とした。

（90）は、口唇部に片刃平棒工具による刻目を巡らしている。口縁部の口唇直下に横位の細い沈線を極く浅く数条描き、その下部に0段の不整撚糸を浅く密に押圧している。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第12群口縁部土器片　（図版第29図91～95、写真図版第21図91～95）

口唇部に刻目を施し、口縁部に貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本群とした。口唇部の刻目には、鋸歯状を呈するもの（91・92）、平棒工具を等間隔に縦位に押圧しているもの、（94）、抉って刻目を施しているもの（93・95）がある。

第1類　（図版第29図91・92、写真図版第21図91・92）

口唇部に片刃平棒工具による鋸歯状の刻目を施し、口縁部に貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本類とした。

（91・92）は、口唇部に片刃平棒工具による斜位の刻目を施している。鋸歯状を呈している刻目の深さは一様でない。口縁部には、縦条に貝殻腹縁圧痕文を施文している。（91・92）共に胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第2類　（図版第29図94、写真図版第21図94）

口唇部に平棒工具による縦位の刻目を施し、口縁部に貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本類とした。

（94）は、口唇部に片刃平棒工具による縦位の刻目を施し、口縁部に貝殻腹縁圧痕を左右の斜条に施して綾杉状の文様を描いている。口縁部の形状は、緩い波状形を呈している。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第3類　（図版第29図93・95、写真図版第21図93・95）

口唇部に片刃平棒工具によって抉った刻目を施し、口縁部に貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本類とした。口縁部の文様は、綾杉状のもの（93）と羽状のもの（95）がある。

第１種　（図版第29図93、写真図版第21図93）

口縁部に綾杉状に貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本類とした。

（93）は、口唇部に片刃平棒工具によって抉った刻目を巡らしている。口縁部には、貝殻腹縁圧痕文を左右の斜条に施して綾杉状の文様を描いている。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第２種　（図版第29図95、写真図版第21図95）

口縁部に羽状に貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本種とした。

（95）は、口唇部に片刃平棒工具によって浅く抉った刻目を巡らしている。口縁部には、貝殻腹縁圧痕文を羽状に施している。口縁部の形状は、波状形を呈している。胎土には、他の土器片よりも多く砂粒を含んでいるが、繊維の混入はみられない。

第13群口縁部土器片　（図版第29図96、写真図版第21図96）

口唇部に平棒工具による刻目を施し、口縁部に貝殻腹縁押し引き文を施文しているものを本群とした。

（96）は、口唇部に平棒工具による斜位の刻目を巡らし、口縁部に貝殻腹縁押し引き文を縦方向に施文している。胎土には、繊維・砂粒及び明黄色の浮石を含んでいる。

第14群口縁部土器片　（図版第29図97・98、写真図版第21図97・第22図98）

口唇部に平棒工具による刻目を施し、口縁部に刺突文と貝殻腹縁押し引き文を施文しているものを本群とした。

（97）は、口唇部に平棒工具による縦位の刻目を巡らしている。口縁部には、片刃平棒工具による左斜め上方からの刺突文を横方向に連続的に巡らし、その下部に横条の貝殻腹縁圧痕文を施文している。口縁部の刺突文部分は、施文後にナデ調整を行い刺突文を潰している。口縁部には、器表面方向から穿孔した円孔を有している。

（98）は、口唇部に平棒工具による刻目を巡らしている。刻目の方向には、斜位に施している部分と縦位に施している部分とがある。口縁部には、（97）と同様に刺突文を２段重ねて施した下部に横条の貝殻腹縁圧痕文を施文している。（97・98）共に、胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第15群口縁部土器片　（図版第29図99、写真図版第22図99）

口唇部に平棒工具による刻目を施し、口縁部に刺突文と貝殻腹縁押し引き文を施文しているものを本群とした。

（99）は、口唇部に平棒工具による刻目を巡らしている。口縁部には、口縁直下から片刃平

棒工具による斜め上方及び上方からの刺突文を4段重ねて横方向に連続的に施文し、その下部に貝殻腹縁押し引き文を施文している。胎土には、ガラス質の物質を含む砂粒及び明黄色の浮石を含んでいるが繊維の混入はみられない。

第16群口縁部土器片　（図版第29図100、写真図版第22図100）

口唇部に単軸絡条体圧痕文による刻目を施し、口縁部に刺突文と貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本群とした。

（100）は、口唇部に1段の撚糸を用いた単軸絡条体を押圧して鋸歯状の刻目を施している。口縁部の口唇直下に爪による左斜め上方からの刺突を2段重ねて横方向に連続的に巡らし、その下部に横条の貝殻腹縁圧痕文を施文している。胎土には、砂粒を含んでいるが繊維の混入はみられない。

第17群口縁部土器片　（図版第29図101・写真図版第22図101）

口唇部に平棒工具による刻目を施し、口縁部に刻目、沈線及び貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本群とした。

（101）は、口唇部に平棒工具による縦位の細かい刻目を巡らしている。口縁部には、口唇部の側縁から5㎜程の長さに沈線による斜位の刻目を施し、その下部に1条の沈線を巡らしている。沈線の下部には貝殻腹縁圧痕文を横条に巡らしている。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第18群口縁部土器片　（図版第29図102、写真図版第22図102）

口唇部に平棒工具による刻目を施し、口縁部に平棒工具による刺突文、沈線文及び貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本群とした。

（102）は、口唇部に平棒工具による斜位の刻目を巡らしている。口縁部には、口唇直下から平棒工具の角を用いた刺突文を3段重ねて横方向に連続的に施し、その下部に貝殻腹縁圧痕文を横条に施文している。貝殻腹縁圧痕文の施文帯には、その上から平棒工具による2列の刺突列及び数本1組とする直線的平行沈線によって幾何学的文様を描いている。

器内面は黒色を呈し、ミガキ調整を行っている。胎土には、繊維・ガラス質の物質を含む砂粒及び明黄色の浮石を含んでいる。

第19群口縁部土器片　（図版第29図103、写真図版第22図103）

口唇部に平棒工具による刻目を有し、口縁部に竹管状工具による刺突文を施しているものを本群とした。

（103）は、口唇部に平棒工具による斜位の刻目を巡らし、口縁部には、径3㎜程の竹管状工具による刺突文を施している。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第20群口縁部土器片（図版第29図104～113・図版第30図115、写真図版第22図104～113・115）

口縁部に粘土瘤をもつ刺突文を施文しているものを本群とした。口唇部の文様は、無文のもの（104）、爪による刻目を施しているもの（105・106）、貝殻腹縁による刻目を施しているもの（107・108）、平棒工具による刻目を施しているもの（109～113・115）がある。

第1類　（図版第29図104、写真図版第22図104）

口唇部が無文で、口縁部に粘土瘤をもつ刺突文を施文しているものを本類とした。

（104）は、口縁部に片刃平棒工具による左斜め上方から押し上げた僅かの粘土瘤をもつ刺突文を3段重ねて横方向に連続的に施文している。胎土には砂粒を含むが、繊維の混入はみられない。

第2類　（図版第29図105・106、写真図版第22図105・106）

口唇部に爪による刻目を施し、口縁部に粘土瘤をもつ刺突文を施文しているものを本類とした。

（105）は、口唇部に1㎜～5㎜の不均等な間隔で爪による刻目を施している。口縁部には、片刃平棒工具によって左横方向から押し上げた粘土瘤をもつ刺突文を数段重ねて横方向に連続的に施文している。

器内面の口縁端には、片刃平棒工具による左横方向からの刺突文を1段巡らしている。

（106）は、口唇部に爪による刻目を巡らし、口縁部には、両刃平棒工具によって左横方向から押し上げて折り返した粘土瘤をもつ刺突文を3段重ねて横方向に連続的に施文している。

（105・106）共に、胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第3類　（図版第29図107・108、写真図版第22図107・108）

口唇部に貝殻腹縁による刻目を施し、口縁部に粘土瘤をもつ刺突文を施文しているものを本類とした。

（107・108）共に、口唇部に貝殻表面を口唇部方向に向けて腹縁部を押圧した刻目を施している。口縁部には、両刃平棒工具によって左横方向から押し上げて折返した粘土瘤をもつ刺突文を2段重ねて横方向に連続的に施文し、その直下に上方からの同様の刺突を1段巡らしている。（108）の口縁に施した粘土瘤をもつ刺突文の下部には、極浅い斜位の刻目を横方向に巡らしている。

（107・108）共に、器内面はミガキ調整を行い、胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第4類　（図版第29図109～113・第30図115、写真図版第22図109～113・115）

口唇部に平棒工具による刻目を施し、口縁部に粘土瘤をもつ刺突文を施文しているものを本類とした。

口唇部の刻目には、両刃平棒工具を用いて上方から刻目を施したもの（110・111）、両刃平棒工具を寝かせて左方向から刻目を施したもの（109）、右方向から刻目を施したもの（102）、

平棒工具を上方から押圧して刻目を施したもの（113・115）がある。

口縁部の刺突文は、（109～113・105）共に、両刃平棒工具によって押し上げて折返した粘土瘤をもつものであるが、その施文の方向には、左横方向からのもの（109・110・112）、左横方向と上方からのものを交互に施しているもの（111）、左斜め上方からのもの（113・115）がある。

刺突文は、2～4段重ねて施文し口縁部を巡らしている。刺突文の下部には、撚糸圧痕文を施しているもの（110）、貝殻腹縁圧痕文を縦条に施しているもの（115）がある。

第21群口縁部土器片　（図版第29図114、写真図版第22図114）

口唇部に粘土瘤をもつ刻目を施し、口縁部に沈線文を施文しているものを本群とした。

（114）は、口唇部から口縁端にかけて両刃平棒工具によって左横方向から押し上げて折返した粘土瘤をもつ刻目を施している。口縁部には、斜条及び横条の直線的沈線を施して菱形や三角形状の文様を描いている。胎土には、砂粒を含むが繊維の混入はみられない。

第22群口縁部土器片　（図版第30図116～125・写真図版第22図116～第23図125）

口縁部に直線的・曲線的沈線によって幾何学的文様を描き、沈線の縁にかかるように貝殻腹縁圧痕文を施しているもの及び沈線による区画内に貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本群とした。

口縁部の形状は、平縁なもの（116・118・122）、平縁な口縁に突起を有するもの（117・120・121）、山形波状口縁を呈するもの（119・123～125）がある。

（116・117）は、直線的な沈線を横条及び斜条に書き、沈線の縁にかかるように貝殻腹縁圧痕文を施文している。（116）の口唇部は平坦である。（117）は、口唇部に小さい突起を有し、突起の中心部と下部に丸棒状工具による刺突が施されている。

（118～125）は、直線的沈線と曲線的沈線によって幾何学的文様が描かれ、沈線の区画内や、沈線の縁にかかるように貝殻腹縁圧痕文を施文している。（124・125）の口縁部の沈線の端部に丸棒状工具による刺突文を施している部分もある。（118・119）の口唇部には貝殻腹縁による刻目を有している。（123）は、口縁部に突起を有している。

胎土には、繊維及び砂粒を含んでいるもの（116～124）と砂粒のみ含んでいるもの（125）とがある。

C　胴部片　（図版第31図126～第35図217、写真図版第23図126～第27図217）

第1群胴部土器片　（図版第31図126～第32図146、写真図版第23図126～第24図146）

貝殻腹縁圧痕文のみ施文しているものと、貝殻腹縁圧痕文と貝殻背縁圧痕文を組合せて施文しているものを本群とした。

第1類　（図版第31図126～135・第32図137～141、写真図版第23図126～第24図135・137～

141）

貝殻腹縁圧痕文のみ施文しているものを本類とした。

貝殻腹縁圧痕文の施文方向には、斜め方向ないし縦方向に施文しているもの（126～135・137～140）、横方向と斜め方向を組合せて施文しているもの（142・143）、羽状に施文しているもの（149）、横方向に施文しているもの（141）がある。

（129・138・141）の器内面には、ミガキ調整が加えられている。本類のすべての土器片の胎土に繊維及び砂粒を含んでいるが、（126～129・133・137）の胎土に含まれる砂粒には、ガラス質の物質も混入している。

第2類　（図版第32図144、写真図版第24図144）

貝殻腹縁圧痕文及び貝殻背縁圧痕文を施文しているものを本類とした。

（144）は、貝殻腹縁圧痕文を斜め方向に連続的に施した下位に数条の貝殻腹縁圧痕文を横条に施し、その間に斜位に2条1組の貝殻背縁圧痕文を間隔をおきながら横方向に巡らしている。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第3類　（図版第31図136・第32図145・146、写真図版第24図136・145・146）

貝殻腹縁連続波状圧痕文を施文しているものを本類とした。

（136）は、縦位の貝殻腹縁連続波状圧痕文を施文し、（145・146）は、横位の貝殻腹縁圧痕文を密に施文している。

第2群胴部土器片　（図版第32図147・148、写真図版第24図147・148）

貝殻腹縁押し引き文を施文しているものを本群とした。

第1類　（図版第32図148、写真図版第24図148）

貝殻腹縁押し引き文のみを施文しているものを本類とした。

（148）は、貝殻表面を器面にあてて貝殻腹縁押し引き文を施文している。胎土には繊維及び砂粒を含んでいる。

第2類　（図版第32図147、写真図版第24図147）

（147）は、横条の貝殻腹縁連続波状圧痕文と貝殻腹縁押し引き文を密に施し、その両方の施文が重複している部分も認められる。胎土には繊維及び明黄色の浮石を含んでいる。

第3群胴部土器片　（図版第32図150、写真図版第25図150）

貝殻腹縁圧痕文と貝殻頂圧痕文を施文しているものを本類とした。

（150）は、横条の貝殻腹縁圧痕文を5㎜程の間隔で施し、その下部に貝殻頂圧痕文を横方向に連続的に巡らしている。胎土には繊維・ガラス質の物質を含む砂粒及び明黄色の浮石を含んでいる。

第4群胴部土器片　（図版第33図151、写真図版第25図151）

貝殻表圧痕文を施文しているものを本群とした。

（151）は、貝殻表圧痕文を密に施文し、器内面には、貝殻表面によるミガキ調整を縦方向に加えている。胎土には繊維及び砂粒を含んでいる。

第5群胴部土器片　（図版第33図152～157、写真図版第25図152～157）

刺突文のみ施文しているものを本群とした。

第1類　（図版第33図152、写真図版第25図152）

爪による刺突文を施文しているものを本類とした。

（152）は、爪による刺突を不規則に施文している。この破片は、口縁部片（80）と同一個体の破片と考えられる。

第2類　（図版第33図153～157、写真図版第25図153～157）

平棒工具による刺突文を施文しているものを本類とした。

（153）は、破片全体に片刃平棒工具による上方からの刺突文を施文している。（154～156）は、片刃平棒工具による刺突文を数段重ねて横方向に連続的に施文している。刺突の方向は（154・157）が上方から、（155）は左斜め上方から、（156）は左横方から行っている。（154～157）共に刺突文の下部は無文帯となっている。

（153～157）共に胎土に繊維及び砂粒を含むが、（154～156）の砂粒にはガラス質の物質も混入している。

第6群胴部土器片　（図版第33図158～164、写真図版第25図158～164）

刺突文と貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本群とした。刺突文には、棒状工具によるものと、爪によるものがある。

第1類　（図版第33図158～163・170・171、写真図版25図158～163・170・171）

棒状工具による刺突文と貝殻腹縁圧痕文を施文しているものを本類とした。

（158）は、貝殻腹縁文を横条に施した下部に、片刃平棒工具による上方からの刺突を3段重ねて横方向に連続的に巡らし、その下部は無文帯となっている。（164）も（158）と同様の施文と考えられるが、刺突の方向は左斜め上方で、2段重ねて横方向に連続的に巡らしている。

（159・160～162）は、貝殻腹縁圧痕文を縦条ないし斜条・横条に施文し、その下部に片刃平棒工具による刺突文を数段重ねて横方向に連続的に巡らしている。刺突文の下部は無文帯となっている。（163）は、（159・160・161）と同様の施文を行っているが、刺突文の下部にも横条の貝殻腹縁圧痕文を施している。

（158・159・162～164・170・171）の胎土には繊維及び砂粒を含むが、（160・161）の胎土には繊維の混入はみられない。

第2類　（図版第34図168、写真図版第25図168）

爪による刺突文と貝殻腹縁連続波状文を施文しているものを本類とした。

（168）は、貝殻腹縁連続波状文を施文した下部に、爪による左斜め上方からの刺突を2段重ねて横方向に連続的に施文している。刺突文の下部は無文帯となっている。胎土には繊維及び砂粒を含んでいる。

第7群胴部土器片　（図版第33図165・166、写真図版第25図165・166）

爪による刺突文と貝殻表圧痕文を施文しているものを本群とした。

（165）は、爪による左斜め上方からの刺突文を数段重ねて横方向に連続的に施文し、その刺突文の間に貝殻表圧痕文を条痕文風に帯状に巡らしている。（166）も（165）と同様な施文を行っているが、貝殻表圧痕文の施文帯の幅が（165）よりも広い。（165・166）の胎土には繊維及び砂粒を含んでいる。

第8群胴部土器片　（図版第33図167・第34図168・169、写真図版第25図167～169）

刺突文と貝殻腹縁押し引き文を施文しているものを本群とした。刺突文には、爪によるものと平棒工具によるものとがある。

第1類　（図版第33図167・第34図168、写真図版第25図167・168）

爪による刺突文と貝殻腹縁押し引き文を施文しているものを本類とした。

（167）は、爪による上方からの刺突文を数段重ねて横方向に連続的に巡らした下部に貝殻腹縁押し引き文を施文している。（168）は、貝殻腹縁押し引き文を横条に施文した下部に爪による刺突を2段重ねて横方向に巡らし、刺突文から下部は無文帯となっている。（167・168）の胎土には繊維及び砂粒を含んでいる。

第2類　（図版第34図169、写真図版第25図169）

平棒工具による刺突文と貝殻腹縁押し引き文を施文しているものを本類とした。

（169）は、片刃平棒工具による左斜め上方からの刺突文を3段重ねて横方向に連続的に巡らし、それを狭んで刺突文の上下部に縦位の貝殻腹縁押し引き文を施文している。胎土には繊維及び砂粒を含んでいる。

第9群胴部土器片　（図版第34図172、写真図版第25図172）

貝殻腹縁圧痕文・刺突文及び沈線文を施文しているものを本群とした。

（172）は、片刃平棒工具による左斜め上方からの刺突文を数段重ねて横方向へ連続的に巡らした下部に貝殻腹縁圧痕文及び直線的沈線を斜条に施文している。器内面はミガキ調整が行われている。胎土には砂粒を含むが、繊維の混入はみられない。

第10群胴部土器片　（図版第34図173、写真図版第25図173）

貝殻表圧痕文・刺突文及び沈線文を施文しているものを本群とした。

（173）は、右斜め下方からの刺突文を２段重ねて横方向に連続的に巡らした下部に、貝殻表圧痕を施し、その上から２本１組の平行沈線を左右の斜条に描いている。胎土には、繊維・砂粒及び明黄色の浮石を含んでいる。

第11群胴部土器片　（図版第34図174・175、写真図版第26図174～175）

貝殻腹縁押し引き文、沈線文及び刺突文を施文しているものを本類とした。

（174・175）は、貝殻腹縁押し引き文を施文した上に直線的沈線を３本１組として縦条に引き、沈線上に爪による刺突を３段重ねて１組とし間隔を置きながら施している。貝殻腹縁押し引き文の施文の方向は、（174）が縦位に施文した下部に横位に施し、（175）は、ほぼ縦位に施文している。（174・175）の胎土には繊維及び砂粒を含んでいる。

第12群胴部土器片　（図版第34図176、写真図版第26図176）

沈線文のみ施文しているものを本群とした。

（176）は、ほぼ縦条に連続的に沈線を描いている。器内面にはミガキ調整を加え、胎土には繊維及び砂粒を含んでいる。

第13群胴部土器片　（図版第34図177、写真図版第26図177）

沈線文と貝殻背縁圧痕文を施文しているものを本群とした。

（177）は、３本１組の直線的沈線を斜条及び横条に施し、幾何学的な文様を描き、沈線と沈線との間には、貝殻背縁圧痕文を密に施文している。胎土には繊維及び砂粒を含んでいる。

第14群胴部土器片　（図版第34図178、写真図版第26図178）

沈線文と刺突文を施文しているものを本群とした。

（178）は、斜条の沈線を３㎜～４㎜間隔で施し、その下部に２条の沈線を横条に引き、その沈線間に爪による上方からの刺突文を横方向に連続的に巡らしている。胎土には繊維及び砂粒を含んでいる。

第15群胴部土器片　（図版第34図179～189、写真図版第26図179～189）

貝殻条痕文のみ施文しているものを本群とした。

（179・180・185・188）は斜条に、（181・183・186・187・189）は横条に、（183）は斜条・横条・縦条のものを重複して貝殻条痕文を施文している。（182・186・188）の器内面には、ミガキ調整を加えている。（179～189）のすべての胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第16群胴部土器片　（図版第35図190・191、写真図版第26図190・191）

単軸絡条体圧痕文を施文しているものを本群とした。

（190）は、１段の撚糸を用いた単軸絡条体圧痕文を斜条に施し、（191）は、１段の撚糸を用いた単軸絡条体圧痕文を２本１組として左右の斜条に１㎝程の間隔で施文している。（190）の胎土には繊維及び砂粒を含むが、（191）の胎土には繊維の混入はみられない。

第17群胴部土器片　（図版第35図192・193、写真図版第26図192、193）

粘土瘤をもつ刺突文を施文しているものを本群とした。

（192・193）共に、両刃平棒工具による、左横方向からの刺突を行い、刺突文の右側に折り返している。刺突文は数段重ねて連続的に巡らしている。（192・193）の胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第18群胴部土器片　（図版第35図194～217、写真図版第26図194～第27図217）

直線的・曲線的沈線によって幾何学的文様を描き、沈線の縁にかかるように貝殻腹縁圧痕文を施文しているもの、沈線による区画内に貝殻腹縁圧痕文を施文しているもの及び沈線文のみ施しているものを本群とした。

（194）は、曲線及び直線的沈線を描き、沈線による区画内に貝殻腹縁圧痕文を施している。

（197～201・203～209・211～216）は、直線的沈線と波状的沈線によって幾何学的文様を描き、直線的沈線には沈線の縁にかかるように貝殻腹縁圧痕文を施している。（211・214）の波状形の沈線の起点と終点には、丸棒状工具による刺突を施している。（216・217）の破片には小さい突起が認められ、小突起の頂点に丸棒状工具による刺突を施している。

D　底部片　（図版第36図218～244、写真図版第28図218～第29図244）

第1群底部片　（図版第36図218～226、写真図版28図218～226）

無文の尖底土器片を本群とした。尖底部が砲弾状を呈しているものと、尖底部がやや丸味を呈しているものとがある。

第1類　（図版第36図218～224・226、写真図版第28図218～224・226）

無文で尖底部が砲弾状を呈しているものを本類とした。

（218～224・226）は、尖底部の尖端から器内底面までの厚さ（底部厚）が2.5cm～3cmである。器表面は、縦位乃至斜位方向にミガキ調整が行われている。（218～224・226）共に、胎土に繊維及び砂粒を含み、（223）にはガラス質の物質も混入している。

第2類　（図版第36図225、写真図版第28図225）

無文で尖底部がやや丸味を呈しているものを本類とした。

（225）は、底部の厚さが8mmと1類の底部片と比較して薄く、尖底部のひらく角度も大きい。胎土には、砂粒を含んでいるが、繊維の混入はみられない。

第2群底部片　（図版第36図227～239、写真図版第28図227～第29図239）

貝殻腹縁圧痕文ないし貝殻腹縁連続波状圧痕文を施文しているものを本群とした。

第1類　（図版第36図228～230・232～238、写真図版第28図228～230・232～238）

貝殻腹縁圧痕文のみを施文しているものを本類とした。

（228～230・232）は、貝殻腹縁圧痕文を尖底部のほぼ頂点まで縦条ないしほぼ縦条に施文

している。(228) の底部上半には数ケの円孔がみられる。(233～235) は、貝殻腹縁圧痕文を斜条に施文している。(236) は、底部上半まで貝殻腹縁圧痕文を斜条ないし縦条に施文し、底部下半は無文となっている。(237) は、貝殻腹縁圧痕文を横条に尖底部まで施文している。(238) は、底部上半に貝殻腹縁圧痕文を横条に3本施文し、その上部には、縦条と斜条を組み合せた貝殻腹縁圧痕文を施し、下部には縦条の貝殻腹縁圧痕文を施文している。(218～238) 共に、胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第2類　(図版第38図239、写真図版第29図239)

貝殻腹縁圧痕文を縦条に施し、その下部に貝殻背縁圧痕文を施文しているものを本類とした。

(239) は、底部上半に貝殻腹縁圧痕文を縦条に施文し、下部に斜め方向に貝殻背縁圧痕文を施している。底部の形状は不明であるが、底部上半でやや窄まる器形を呈しており、尖底部がやや丸味を呈するものと考えられる。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第3類　(図版第36図227・第27図231、写真図版第28図227・第29図231)

貝殻腹縁連続波状圧痕文を施文しているものを本類とした。

(227・231) は、尖底部の頂点まで貝殻腹縁連続波状圧痕文を縦方向に施文している。胎土には、繊維及び砂粒を含んでいる。

第3群底部片　(図版第38図243・244、写真図版第29図243・244)

貝殻条痕文を施文しているものを本類とした。

(243・244) 共に、ほぼ横条に貝殻条痕文を密に施文し、(244) の器内面には縦方向にミガキ調整を加えている。(243・244) 共に、胎土に繊維及び砂粒を含んでいる。

第4群底部片　(図版第38図240・242、写真図版第29図240・242)

刺突文を施文しているものを本群とした。本群には、底部上半が無文のものと、貝殻押し引き文を施文しているものがある。

第1類　(図版第38図242、写真図版第29図242)

底部上半が無文で、下半に刺突文を施文しているものを本類とした。

(242) は、器表面にミガキ調整を加えた後に、尖底部の直上部に片刃平棒工具による左斜め上方からの刺突を3段重ねて横方向に連続的に巡らしている。器内面には、底面まで縦方向にミガキ調整を加えている。胎土には、繊維・砂粒及び明黄色の浮石を含んでいる。

第2類　(図版第38図240、写真図版第29図240)

底部上半に貝殻押し引き文を施文し、下半部に刺突文を巡らしているものを本類とした。

(240) は、底部上半まで縦方向に貝殻押し引き文を施し、尖底部直上に片刃平棒工具による左斜め上方からの刺突文を4段重ねて横方向に連続的に巡らしている。

石器遺物

石鏃　（図版第39図１～４、写真図版第30図１～４）

（１～３）は、凹基無茎鏃である。（１）は、流紋岩質極細粒凝灰岩を用いた重さ1.4ｇのものである。尖端部の片側辺の一部に両縁細部調整を行い、その部分以外は片縁細部調整を行っている。（２）は、チャートを用いた0.74ｇのもので、（３）は、流紋岩質極細粒凝灰岩を用いた1.35ｇのものである。（２・３）共に両面細部調整を行っている。

（４）は、凸基有茎鏃で、細砂質凝灰岩を用いた重さ1.65ｇのものである。尖端部から基部まで両面細部調整を行っている。

石錐　（図版第39図５、写真図版第30図５）

凝灰質泥岩を用いた重さ2.67ｇのものである。断面形は菱形を呈し、先端部が欠損しているが細身棒状のものである。両面細部調整を行っている。

石銛　（図版第39図６、写真図版第30図６）

凝灰質泥岩を用いた重さ13.7ｇのものである。両面細部調整を行い、側辺が波状形を呈している。

石匙　（図版第39図７、写真図版第30図７）

縦形石匙で、凝灰質泥岩を用いたものである。およそ半分が欠損している。刃部は、片縁細部調整を加えている。重さは、2.86ｇである。

掻器　（図版第39図８、写真図版第30図８）

硬質泥岩を用いた重さ 37.65ｇ のものである。形状は長楕円形で全周に急角度の片面細部調整による刃部を有している。

箆状石器　（図版第39図９～第40図11、写真図版第30図９～第31図11）

（９）は、硬質泥岩を用いた重さ45.9ｇのものである。側辺及び刃部に片縁細部調整を加えている。（10）は、硬質泥岩を用いた重さ33.4ｇのもので、縦長の台形状を呈している。（９）と同様に片縁細部調整を行っている。（11）は、珪質泥岩を用いた重さ21.1ｇのもので、縦長の台形状を呈している。刃部の片面に二次調整剥離を有し、他の面に一次剥離面を残している。

不定形な剥片石器（図版第40図12～第41図21、写真図版第31図12～第32図21）

（12・13）は、偏平楕円体を呈し側辺が波状の刃部となっている。（12）は、白色細粒凝灰岩を用いた 9.2 ｇのもので、（13）は、凝灰質珪質泥岩を用いた重さ 10.21 ｇのものである。

（14～17）は、一次加工面をそのまま刃部としている剥片である。（14）は硬質泥岩を用いた重さ14.52ｇのもので、（15）は珪質泥岩を用いた重さ26.75ｇのものである。（16）は、細砂質凝灰岩を用いた重さ46.3ｇのもので、側辺に２㎝程の長さに片縁細部調整を行っている。

（17）は、硬質泥岩を用いたもので重さ53.35gである。

（18～21）は、両縁調整によって波状の刃部を半円状につくり、一端は一次剥離面を残しているもの（18・19）と折断しているもの（20・21）とがある。

石質と重さは、（18）凝灰質珪質泥岩、11.39g、（19）硬質泥岩、17.6g、（20）珪質泥岩、5.35g、（21）凝灰質珪質泥岩、6.2gである。

石斧　（図版第41図22、写真図版第33図22）

表・裏面及び側辺を敲打によって調整し、刃部と頭部を磨いている。刃部には潰痕が認められる。

磨石　（図版第41図23～25、写真図版第33図23～25）

（23～25）共に偏平な円礫を用いたもので、いずれも平坦面と側辺に磨痕を有している。

擦石　（図版第41図26～第42図36、写真図版第33図26～36）

三角柱状の礫を用いたもの（26～32）と楕円礫を用いたもの（33～36）がある。三角柱状の礫を用いたものには、稜の1ケ所ないし2ケ所に擦痕を有している。（26・27）の礫の擦痕を有しない稜には潰痕が認められ、擦石と敲石の両用に使用している。

凹石　（図版第42図37～第43図40、写真図版第33図37～40）

円礫及び偏平な楕円礫を用い、出土したものすべてが表裏面の両方に凹みを有している。凹みの数は不定で、表・裏面に各1ケの凹みを有するもの（37）、各2ケずつ有するもの（38）一方の面に3ケ、他の面に1ケ有するもの（39）、表・裏面共に連続的に凹み、浅い溝状になっているもの（40）などがある。

（40）は、他の凹石と比較して平偏で長く、側辺に敲打痕を有し、凹石と敲石の両方に使用している。

敲石　（図版第43図41～第44図45、写真図版第34図41～45）

（41・42）は、偏平な円礫を用いている。（41）は、表裏面及び周辺の稜に潰痕を有している。また、稜の一部には、幅5㎜程の擦痕を有し、敲石と擦石の両方に使用している。

（43～45）は、棒状の礫を用いたもので、（43・44）は、礫の両端に潰痕をもつもので、（45）は一方の端部に潰痕をもち、他の一端は欠損している。

台石　（図版第43図46、写真図版第34図46）

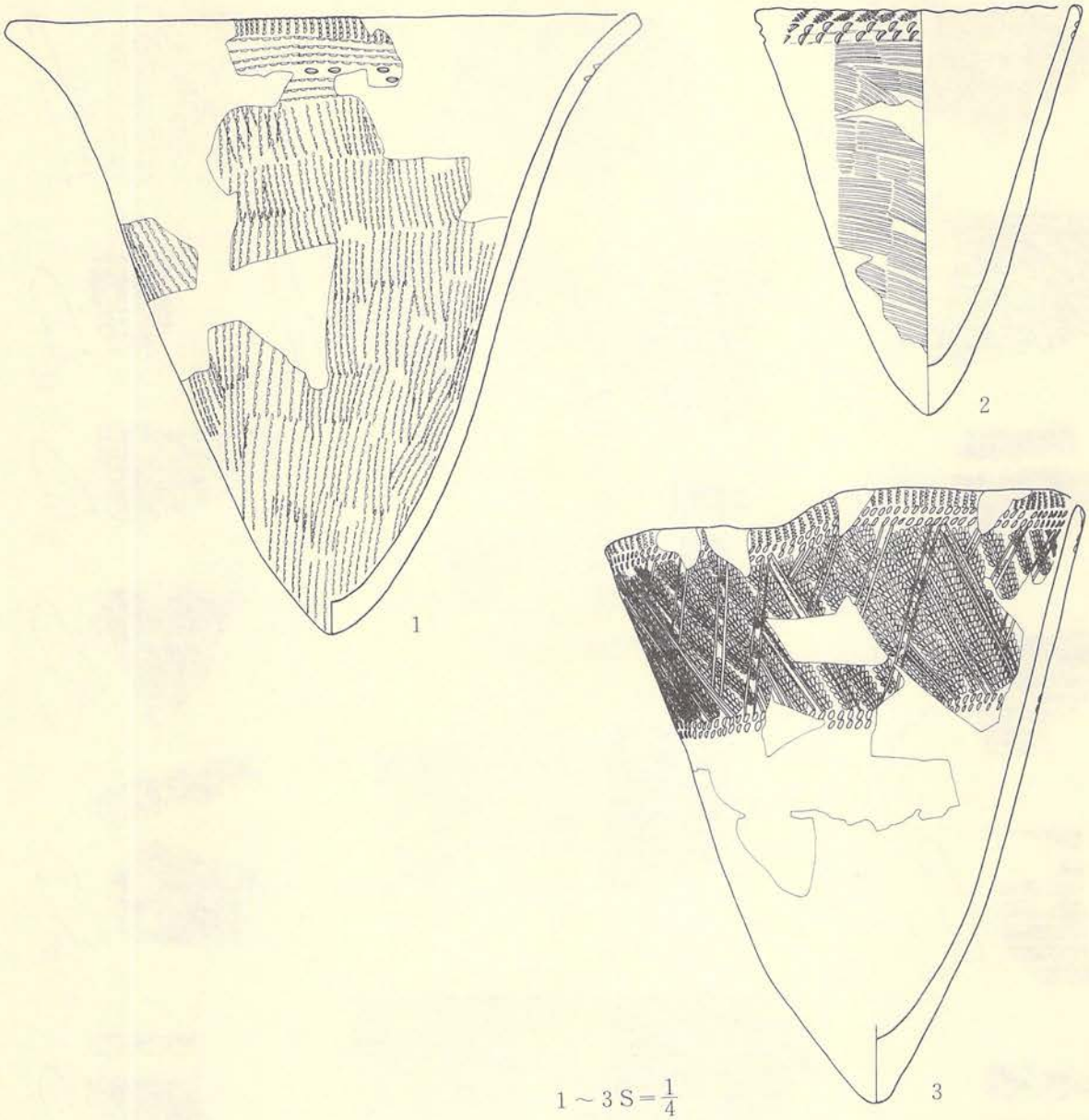
偏平な自然礫を用いたもので、平坦面の一面が凹んでいる。

石錘　（図版第44図47、写真図版第34図47）

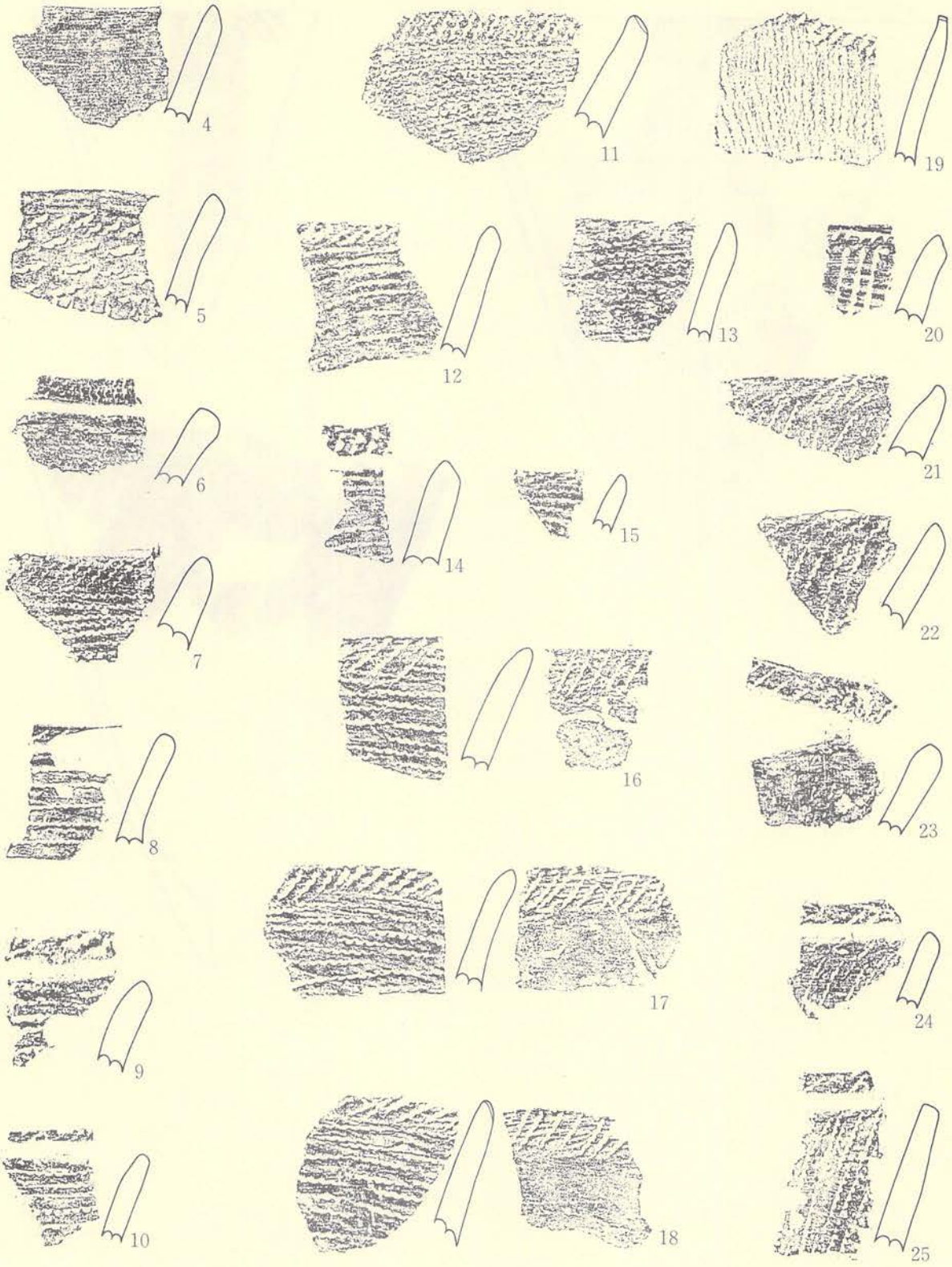
やや厚みのある偏平な円礫を用いた、切目石錘である。

石弾　（図版第44図48～51、写真図版第34図48～51）

球状ないしは卵形の小型の自然礫である。敲打痕や擦痕及び磨痕等は認められない。



図版第24図　遺構外出土　縄文時代早期土器遺物

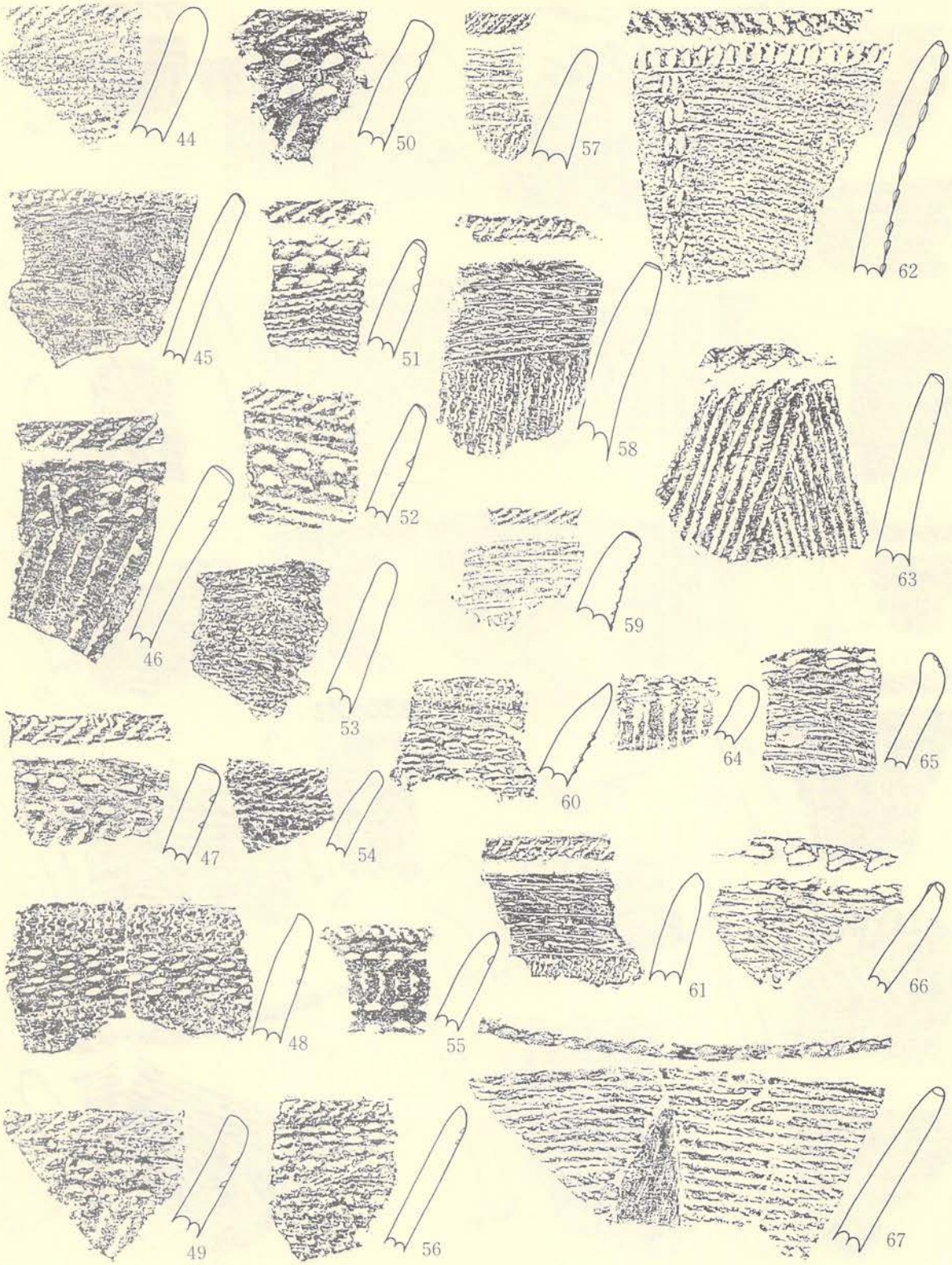


4～25　S＝$\frac{1}{2}$

図版第25図　遺構外出土　縄文時代早期土器遺物

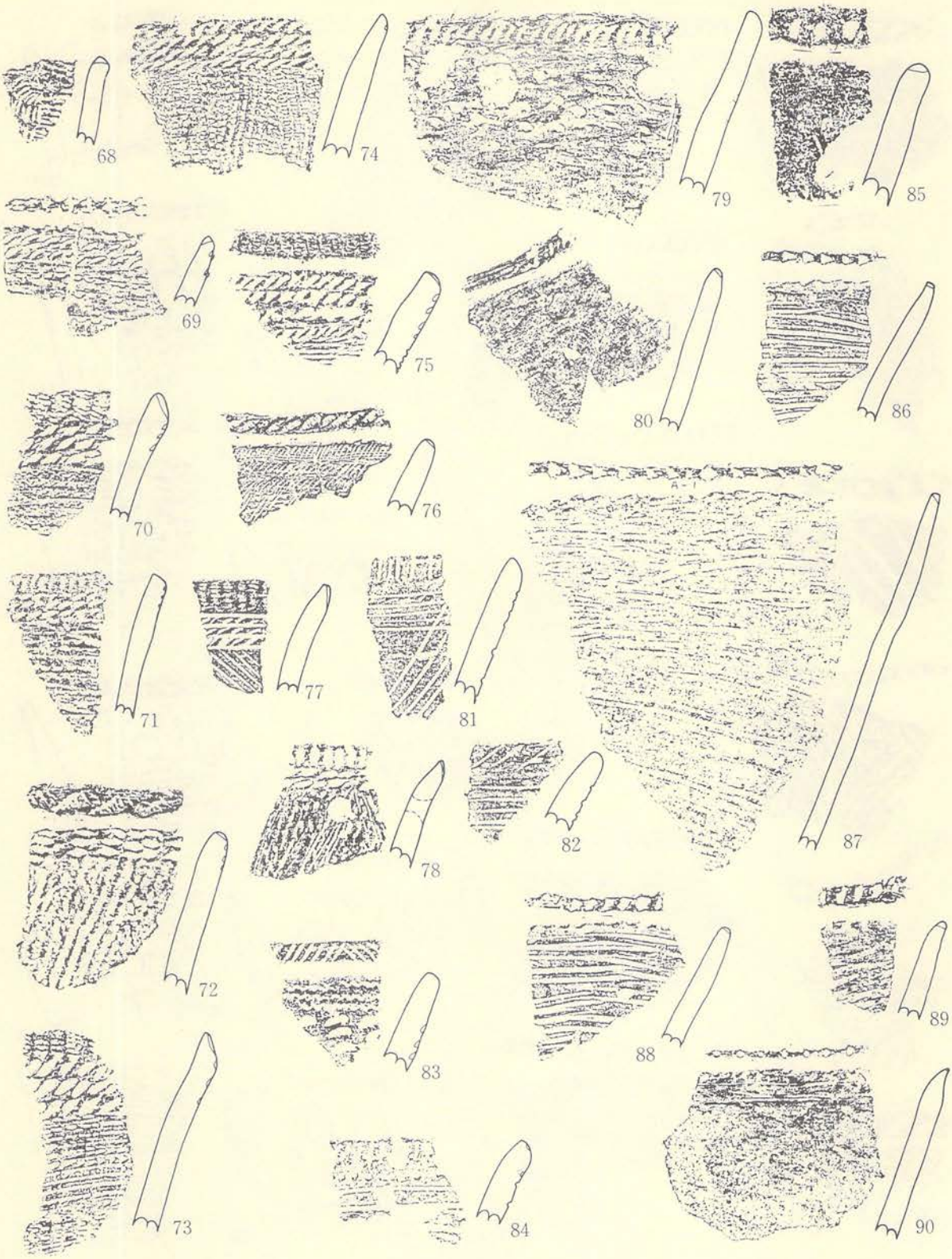
26～43　S＝$\frac{1}{2}$

図版第26図　遺構外出土　縄文時代早期土器遺物



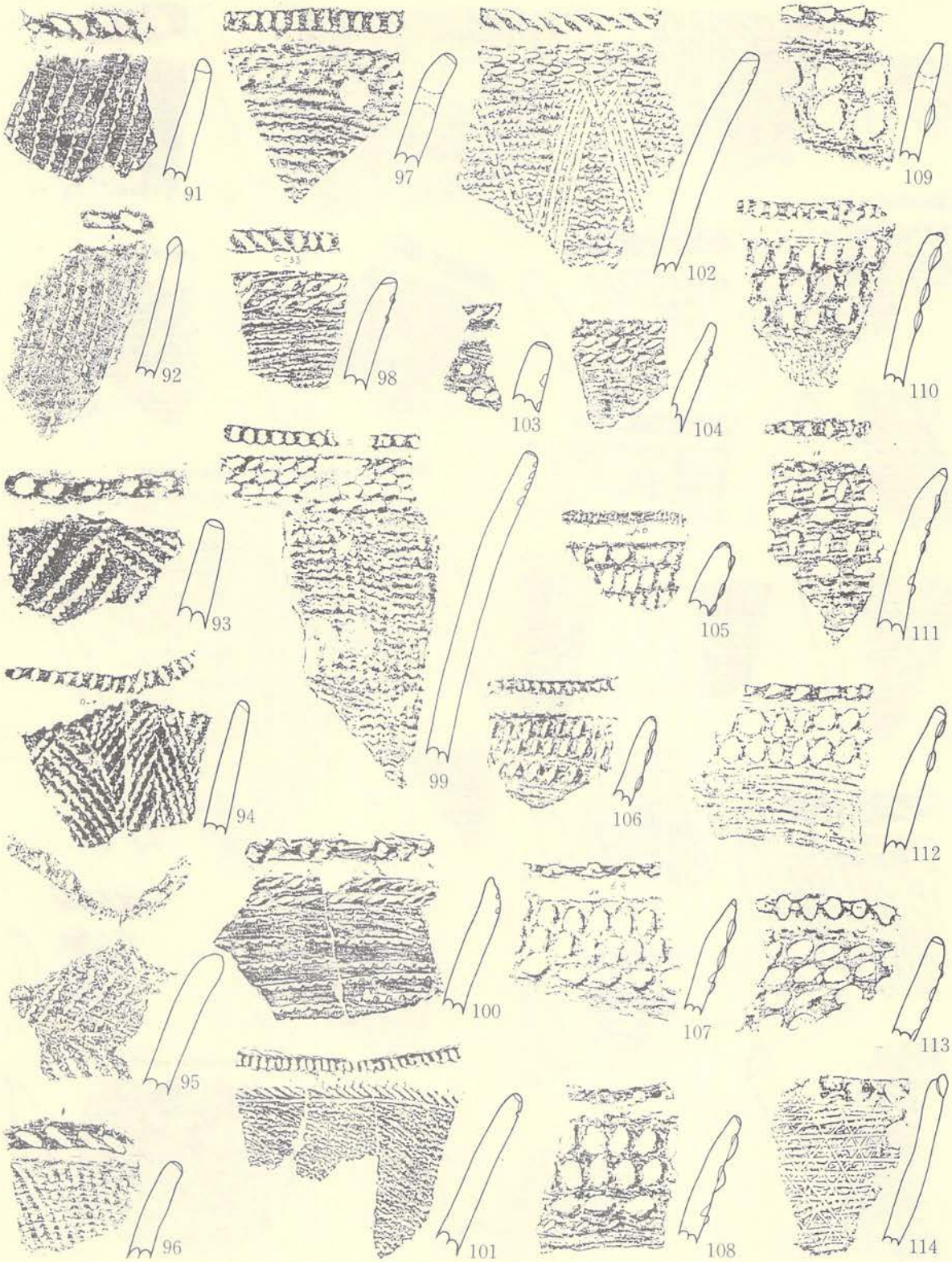
44～67　S＝$\frac{1}{2}$

図版第27図　遺構外出土　縄文時代早期土器遺物



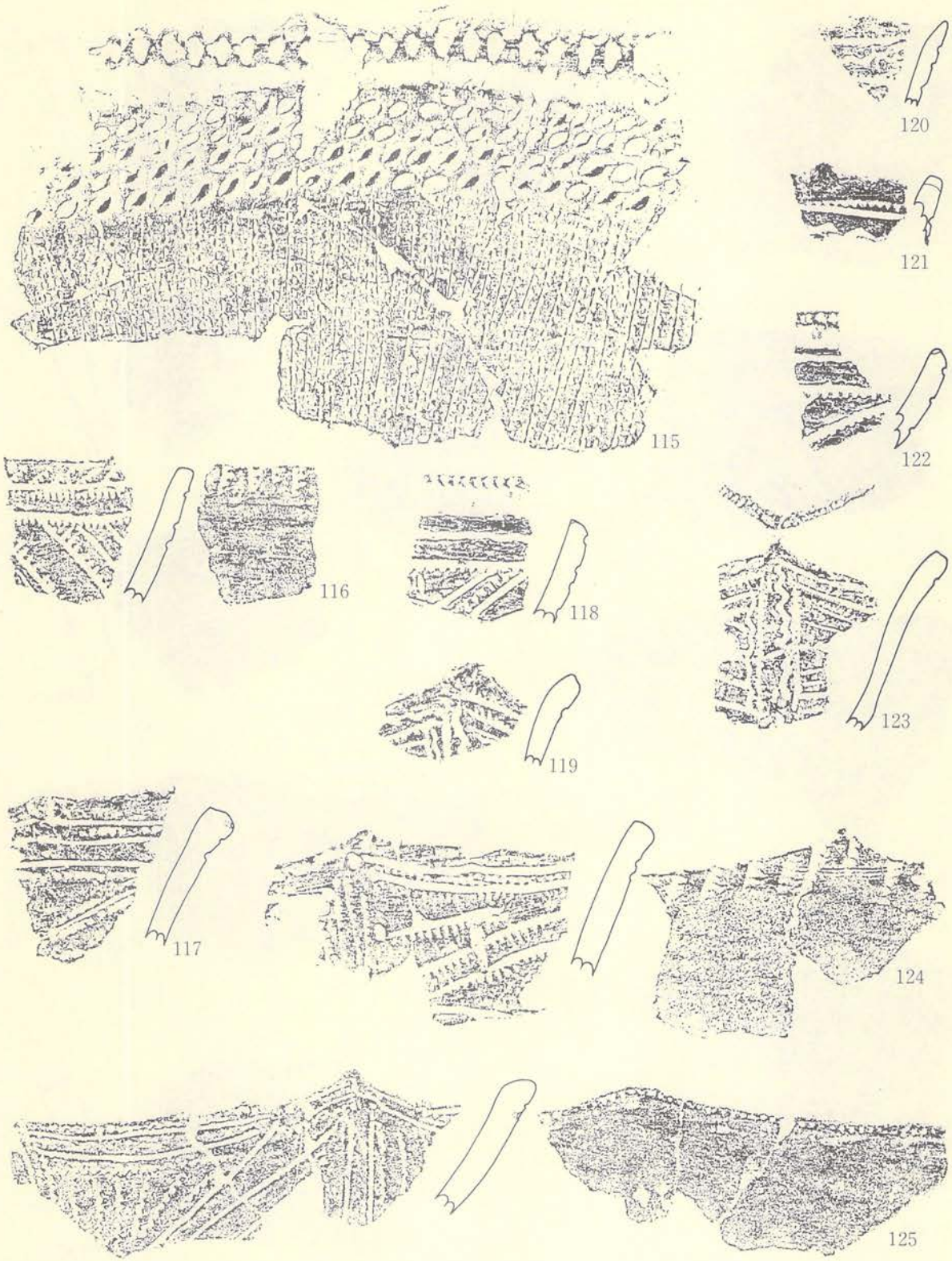
68～90　S＝$\frac{1}{2}$

図版第28図　遺構外出土　縄文時代早期土器遺物



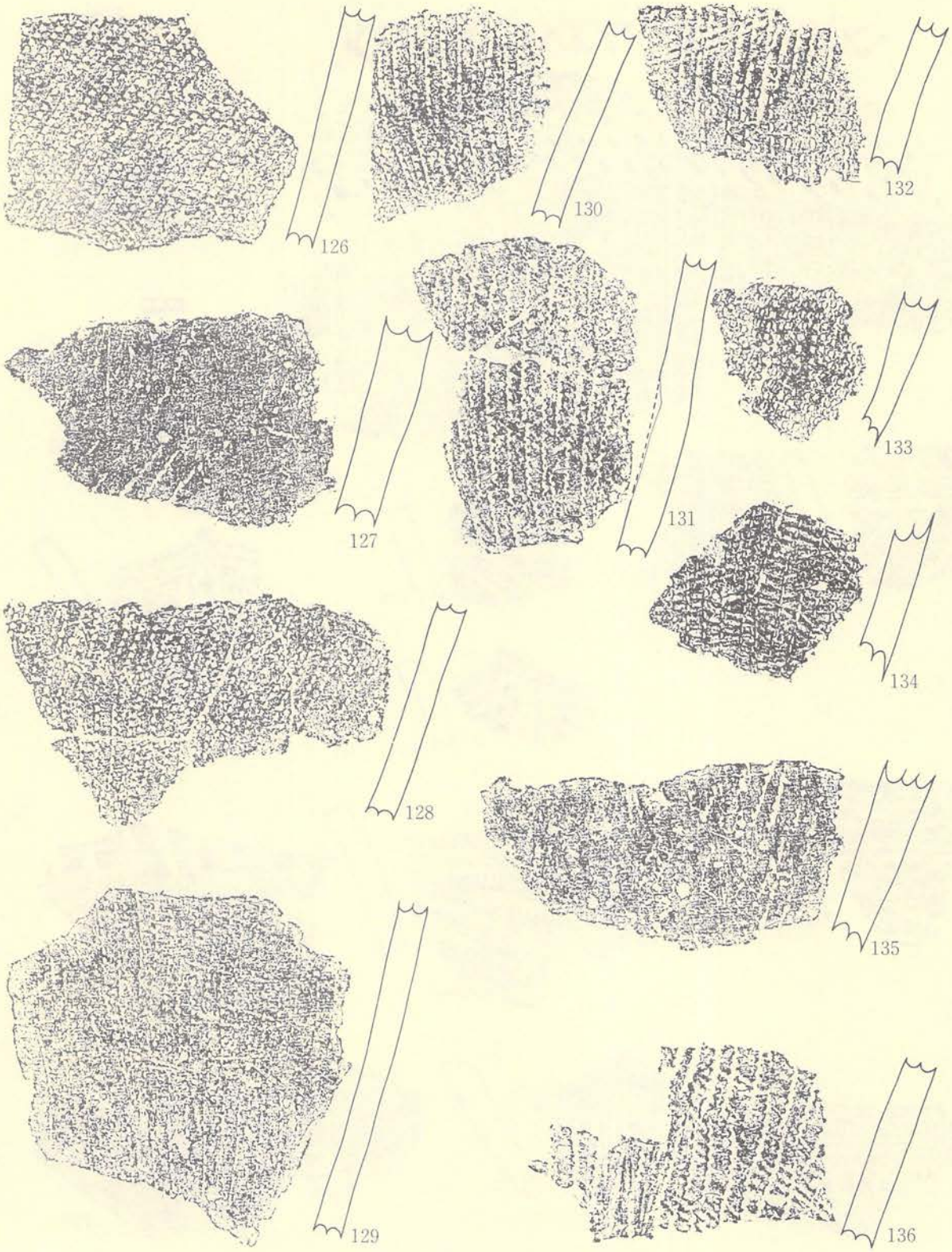
91～114　S＝$\frac{1}{2}$

図版第29図　遺構外出土　縄文時代早期土器遺物



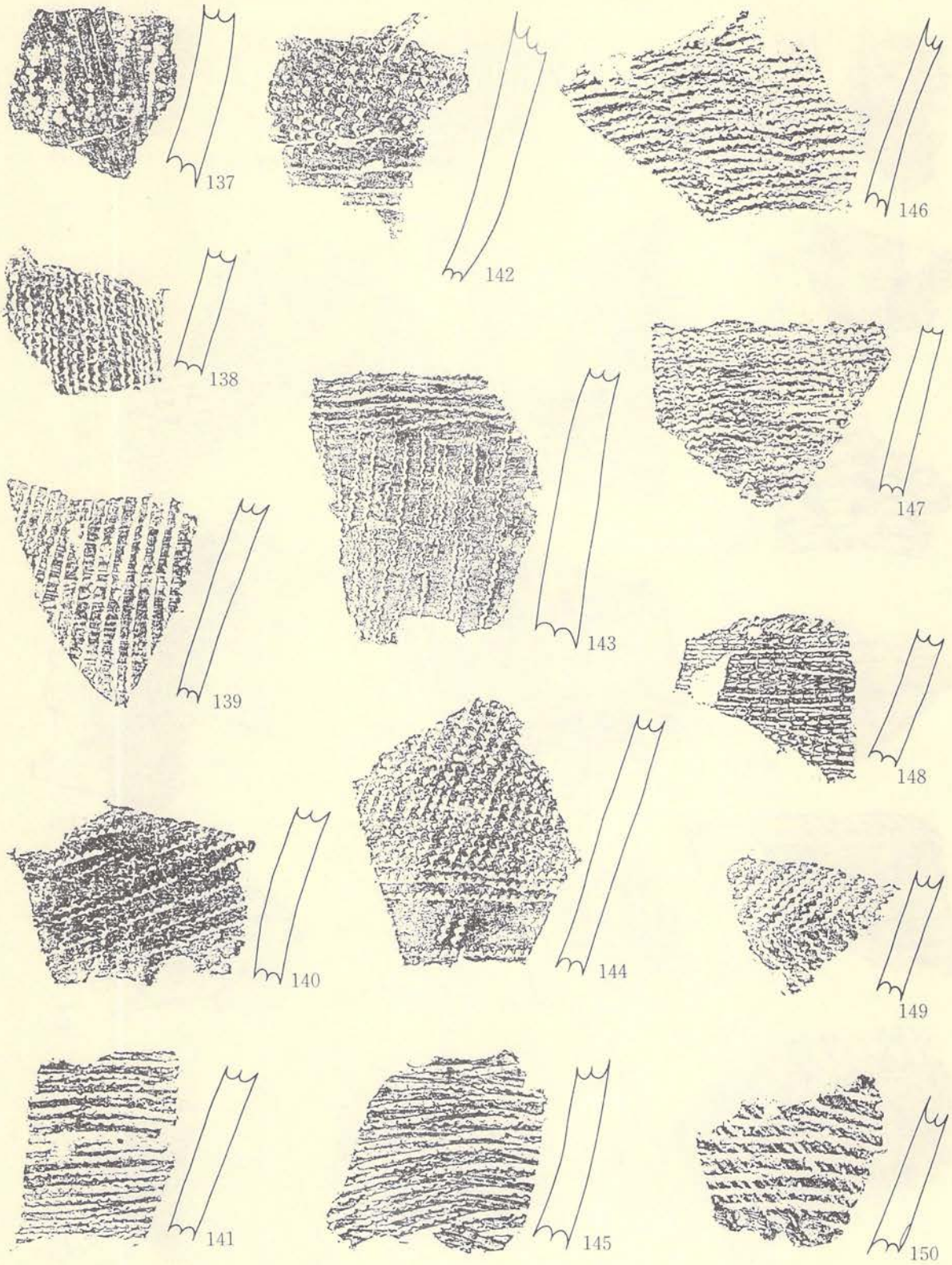
115～125　S＝$\frac{1}{2}$

図版第30図　遺構外出土　縄文時代早期土器遺物



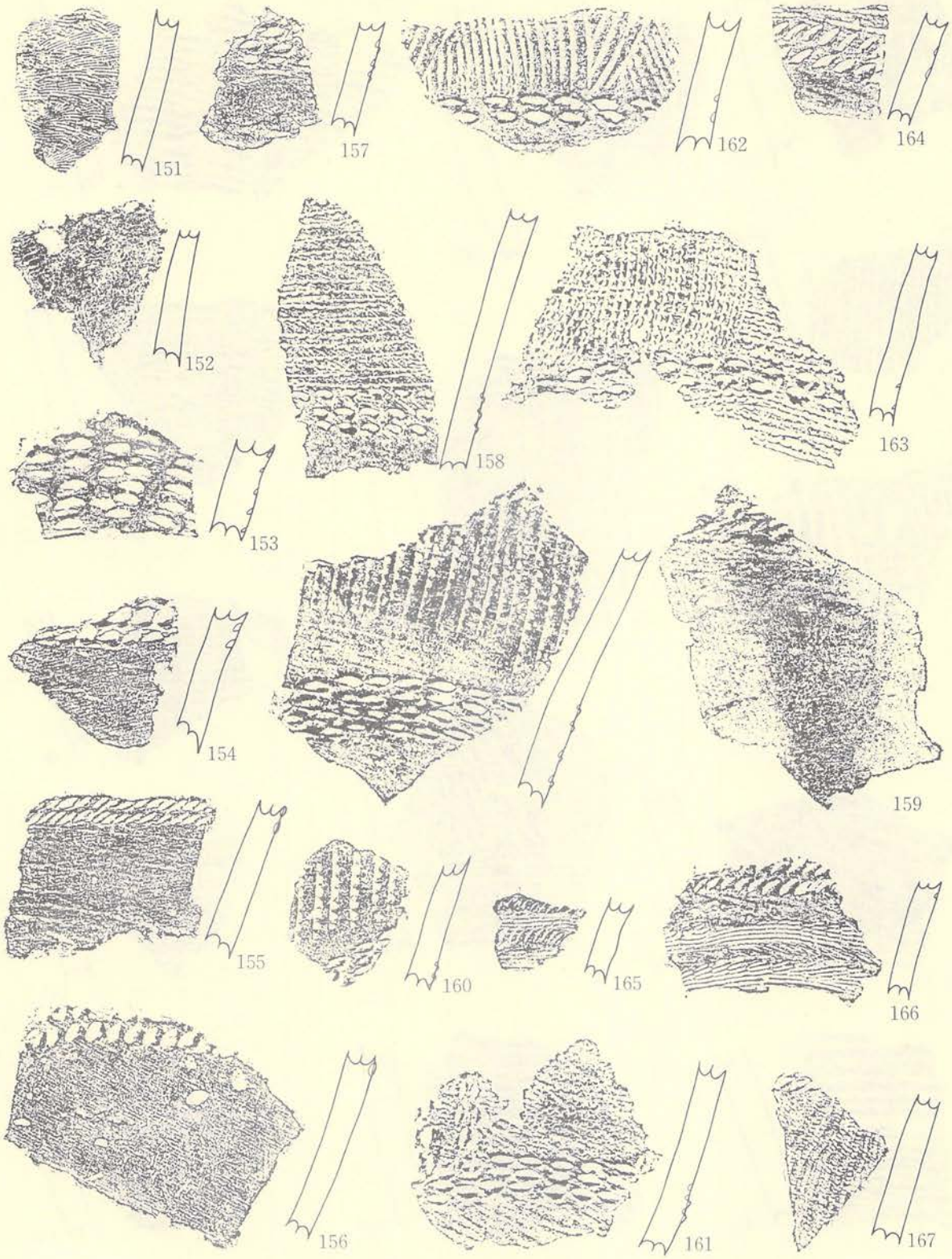
126～136　S＝$\frac{1}{2}$

図版第31図　遺構外出土　縄文時代早期土器遺物



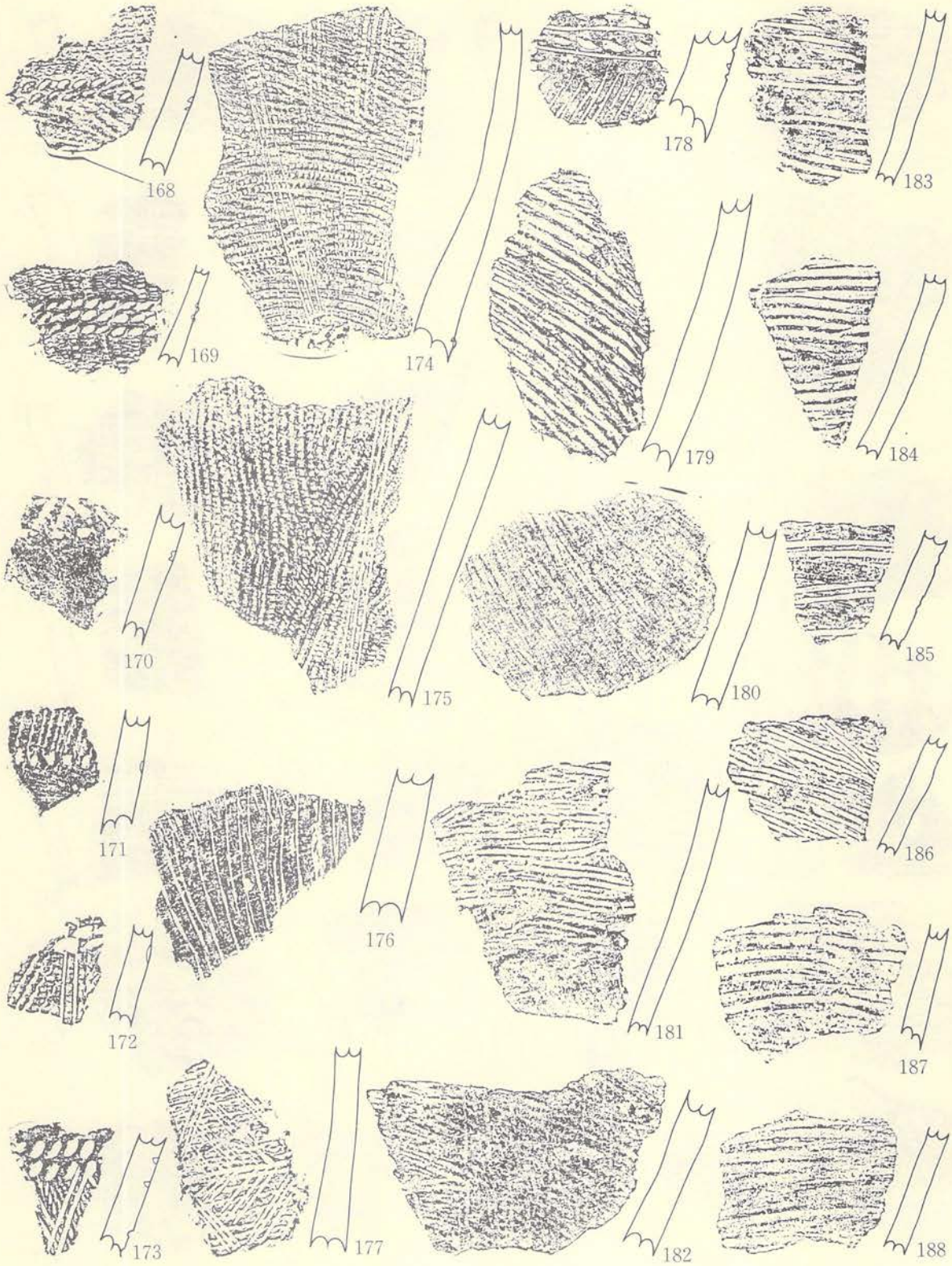
137～150　S＝$\frac{1}{2}$

図版第32図　遺構外出土　縄文時代早期土器遺物



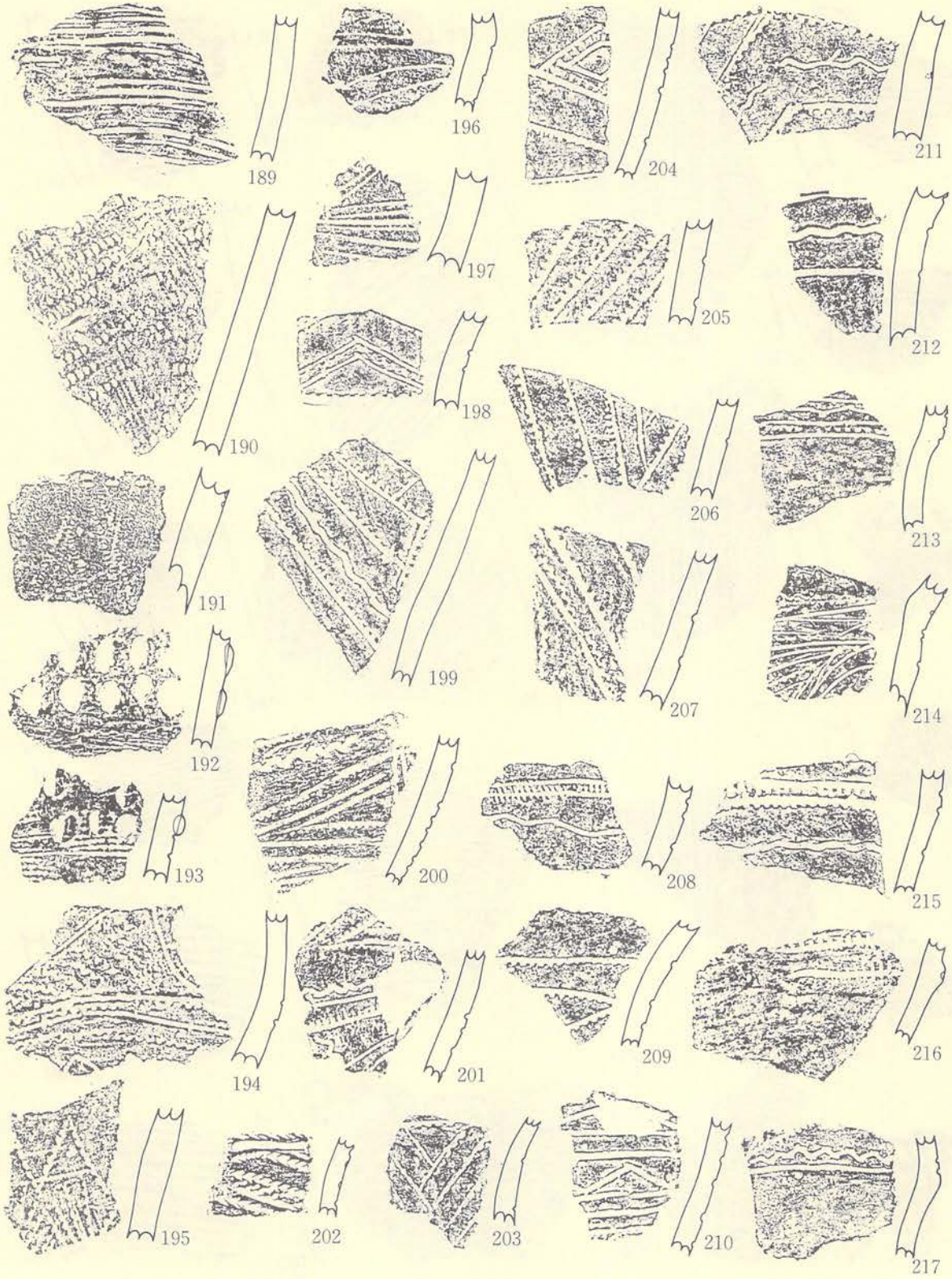
151～167　S＝$\frac{1}{2}$

図版第33図　遺構外出土　縄文時代早期土器遺物



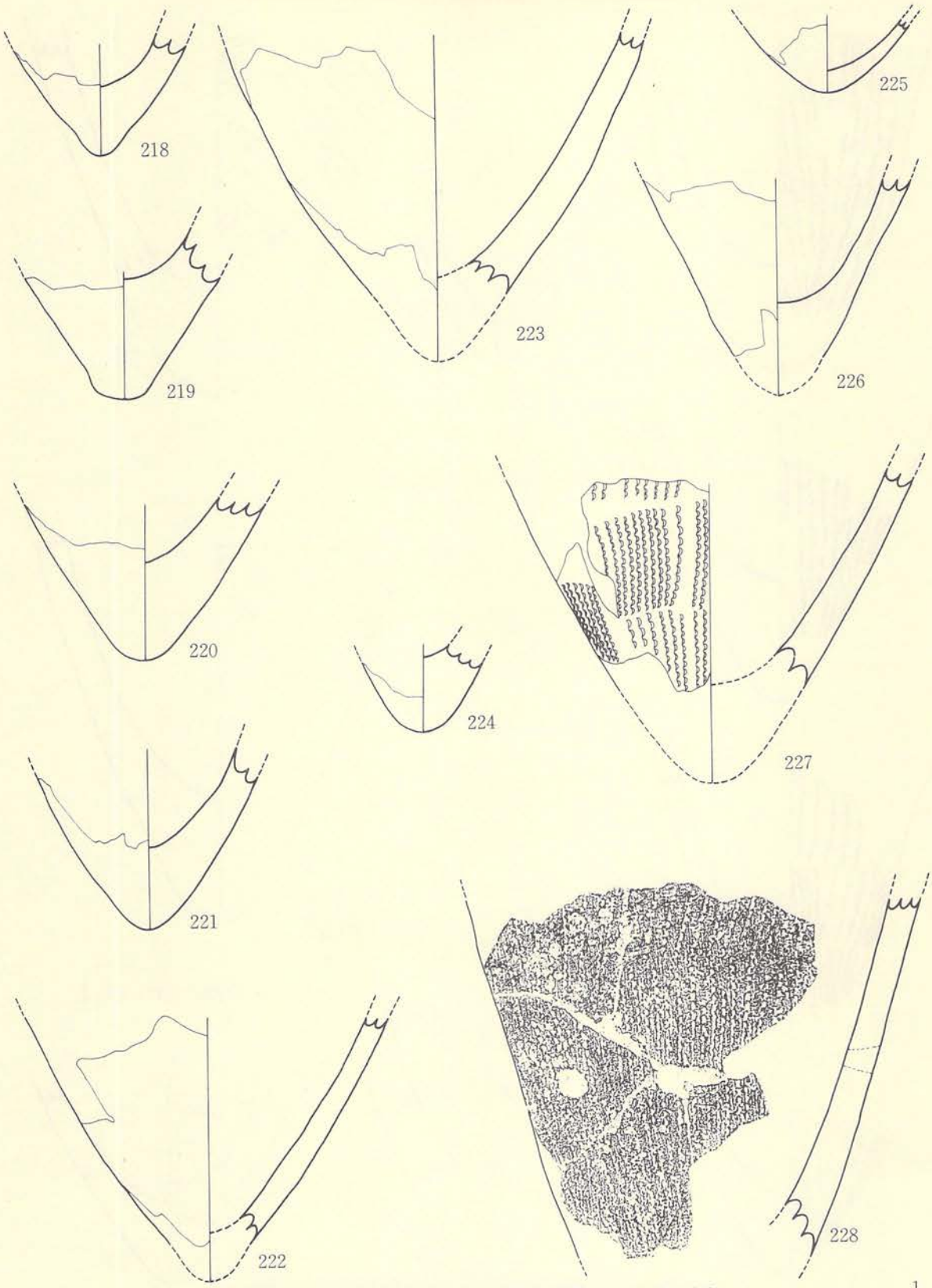
168～188　S＝$\frac{1}{2}$

図版第34図　遺構外出土　縄文時代早期土器遺物

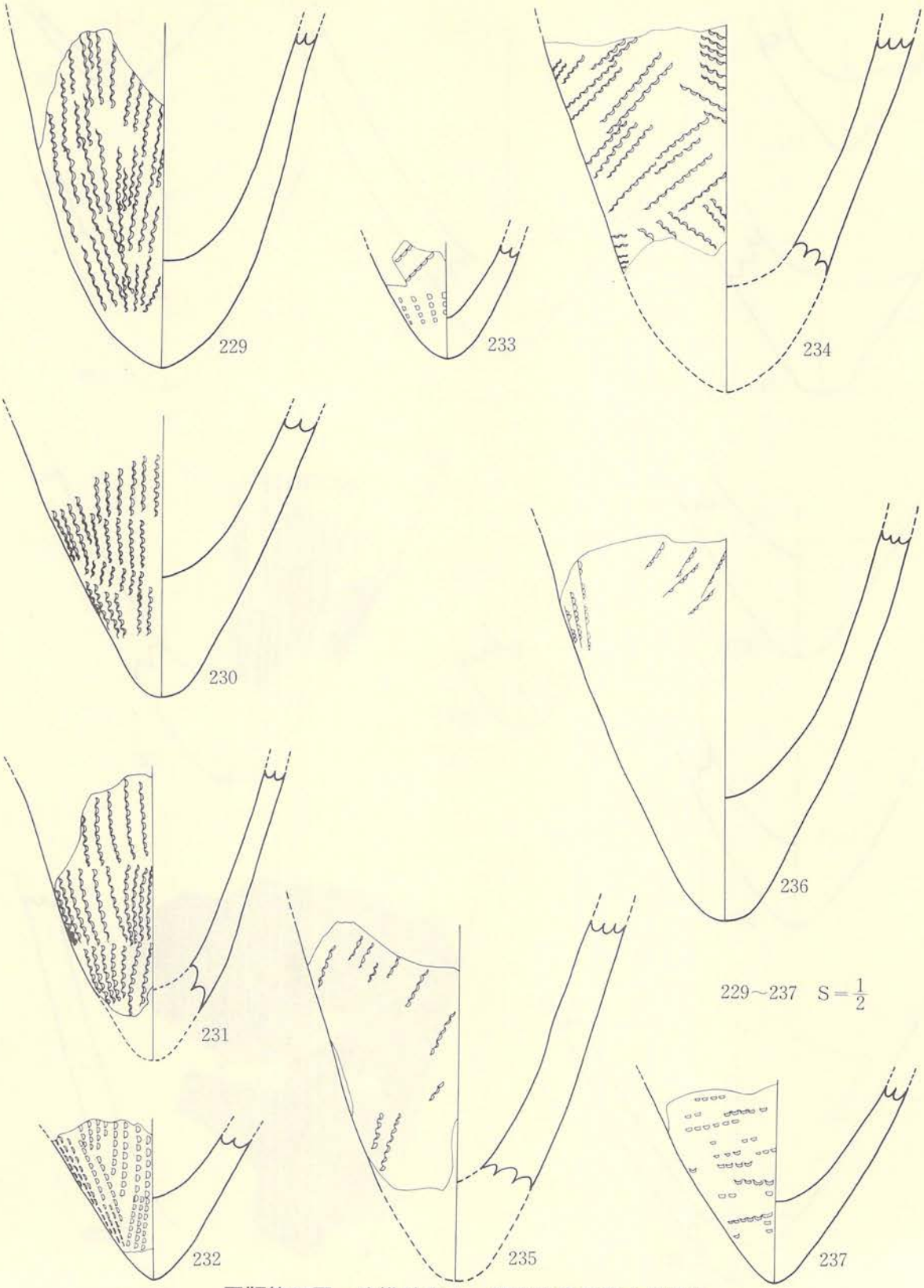


189～217　S＝$\frac{1}{2}$

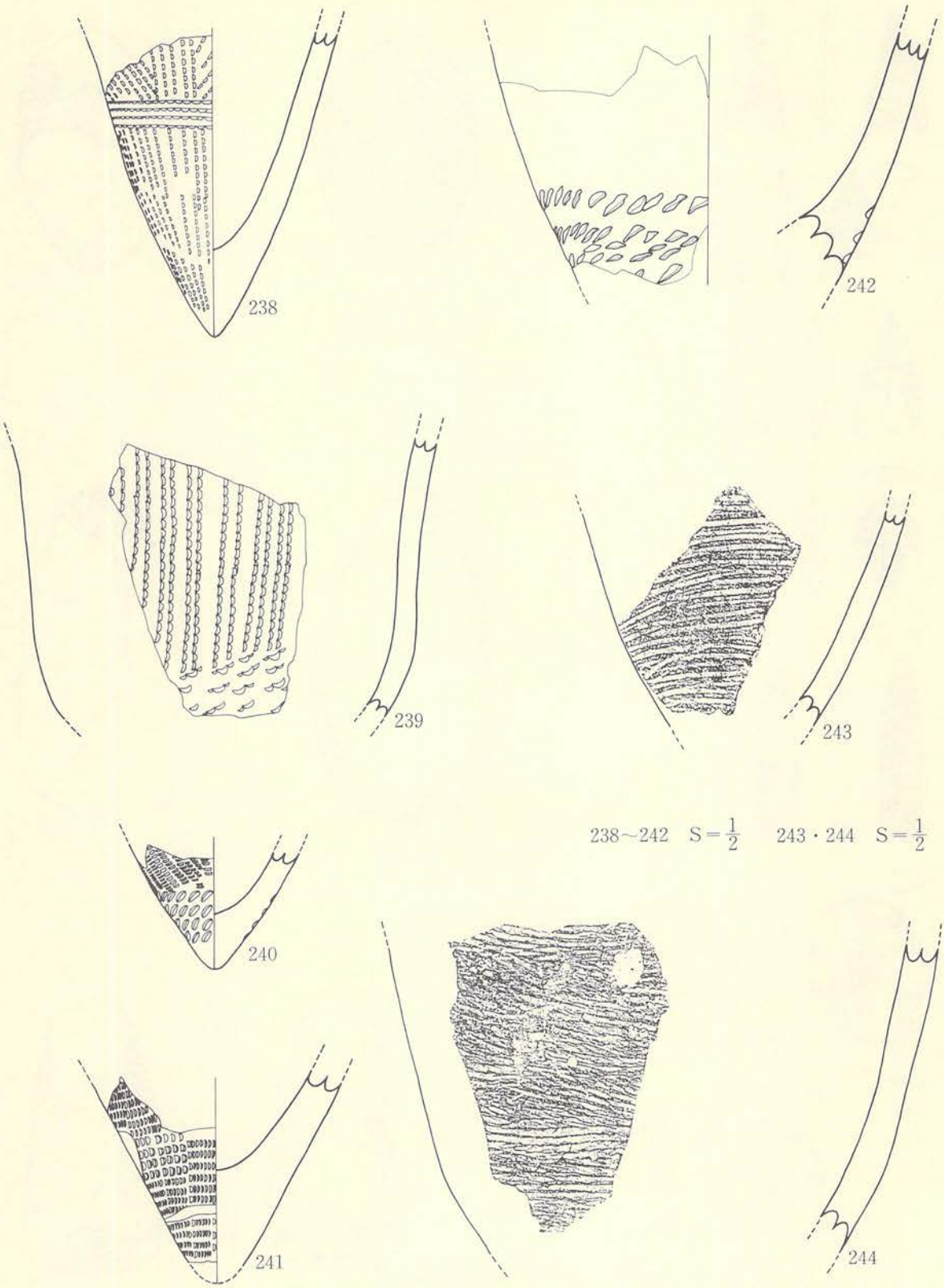
図版第35図　遺構外出土　縄文時代早期土器遺物



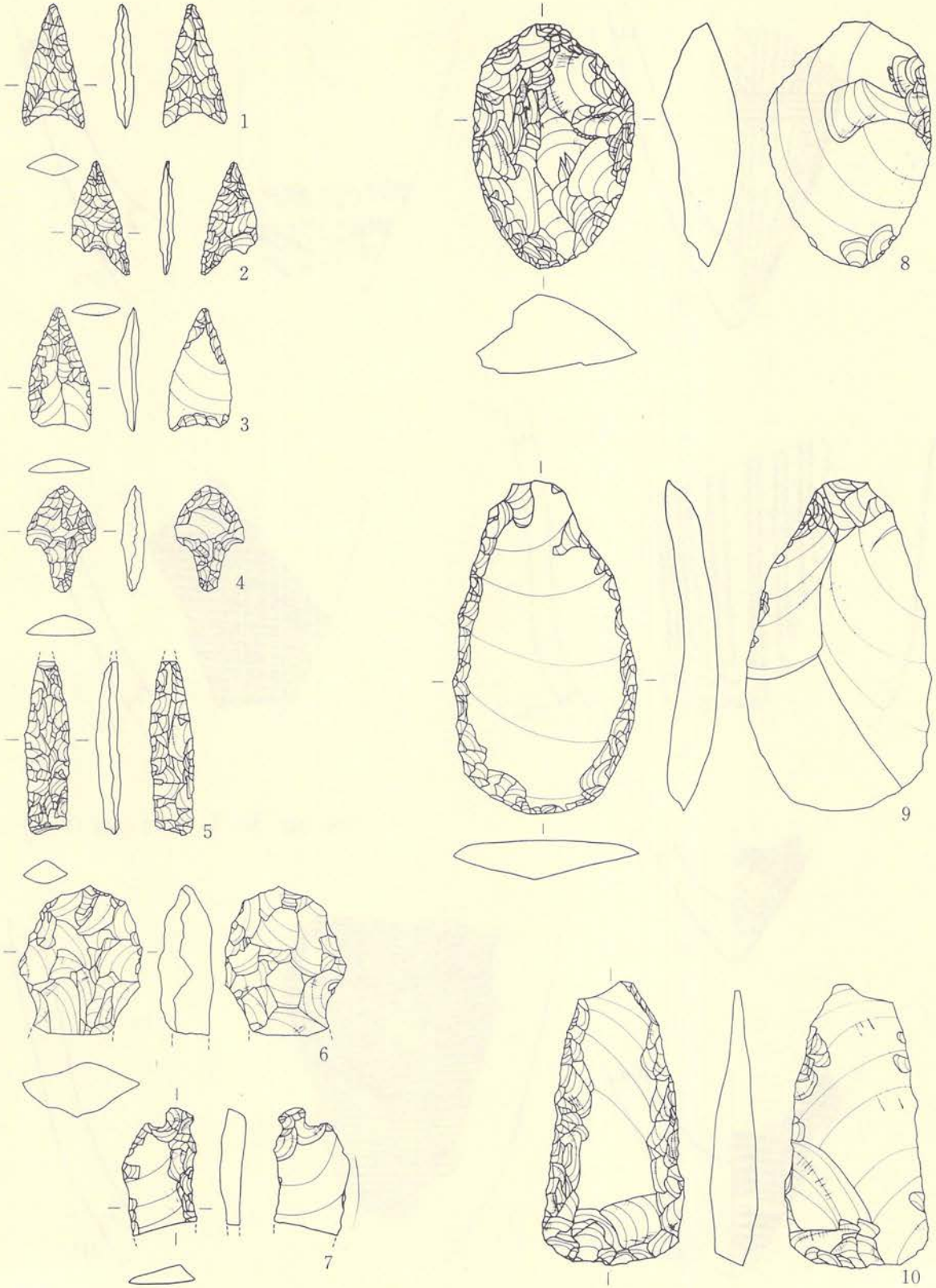
図版第36図　遺構外出土　縄文時代早期土器遺物　218～228　S＝$\frac{1}{2}$



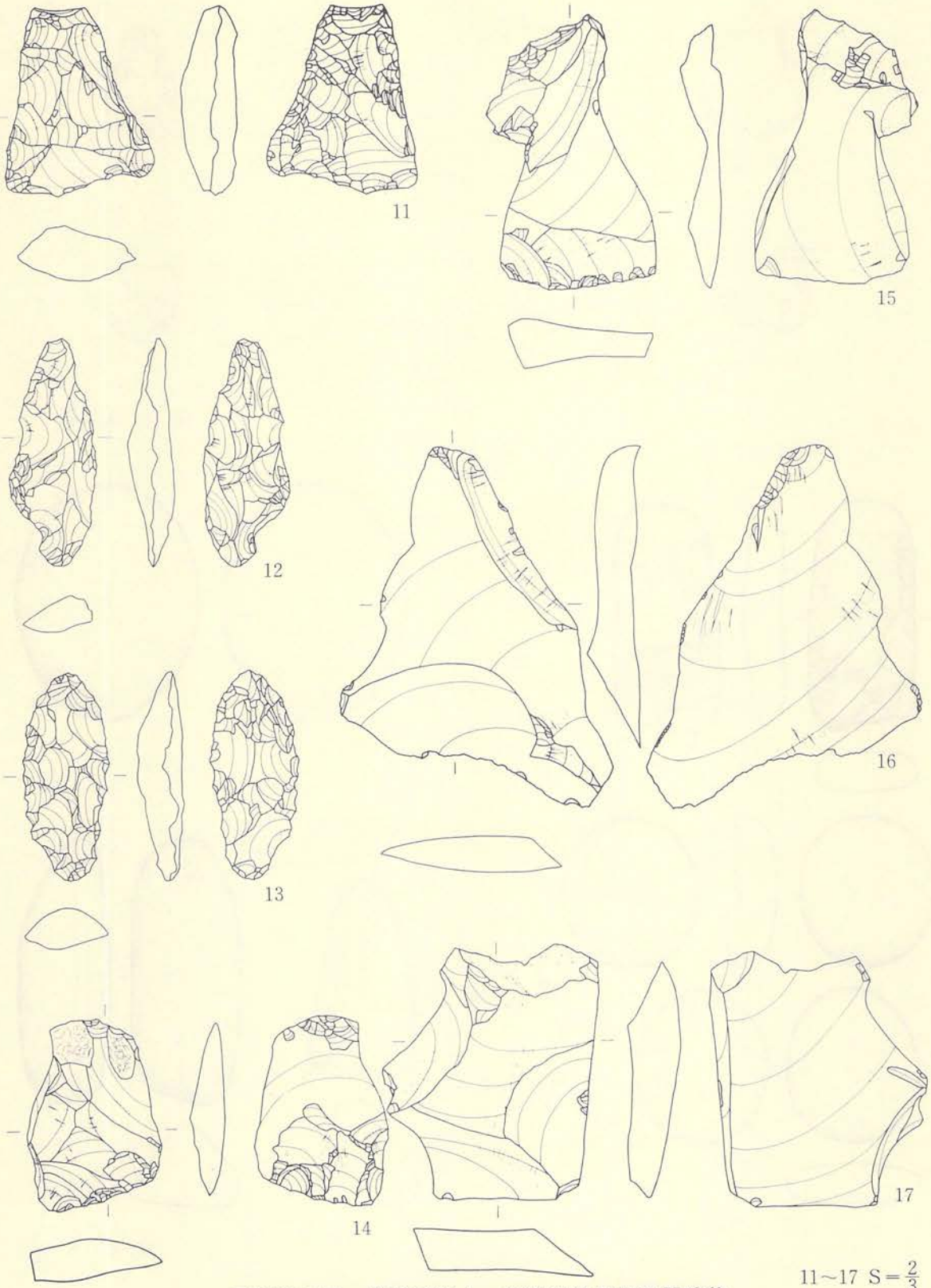
図版第37図　遺構外出土　縄文時代早期土器遺物



図版第38図　遺構外出土　縄文時代早期土器遺物

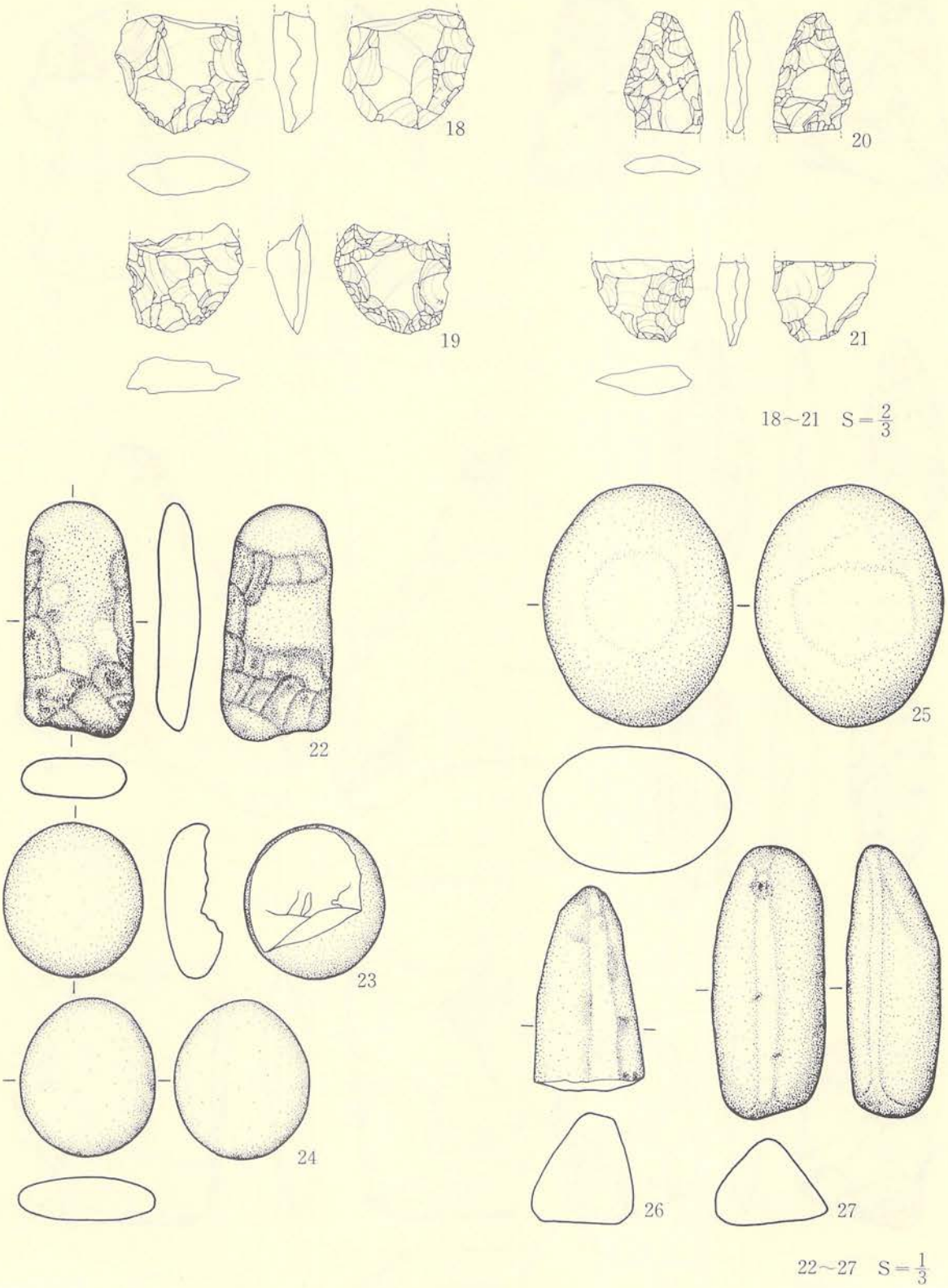


図版第39図　遺構外出土　縄文時代早期石器遺物　　1～10　S＝$\frac{2}{3}$

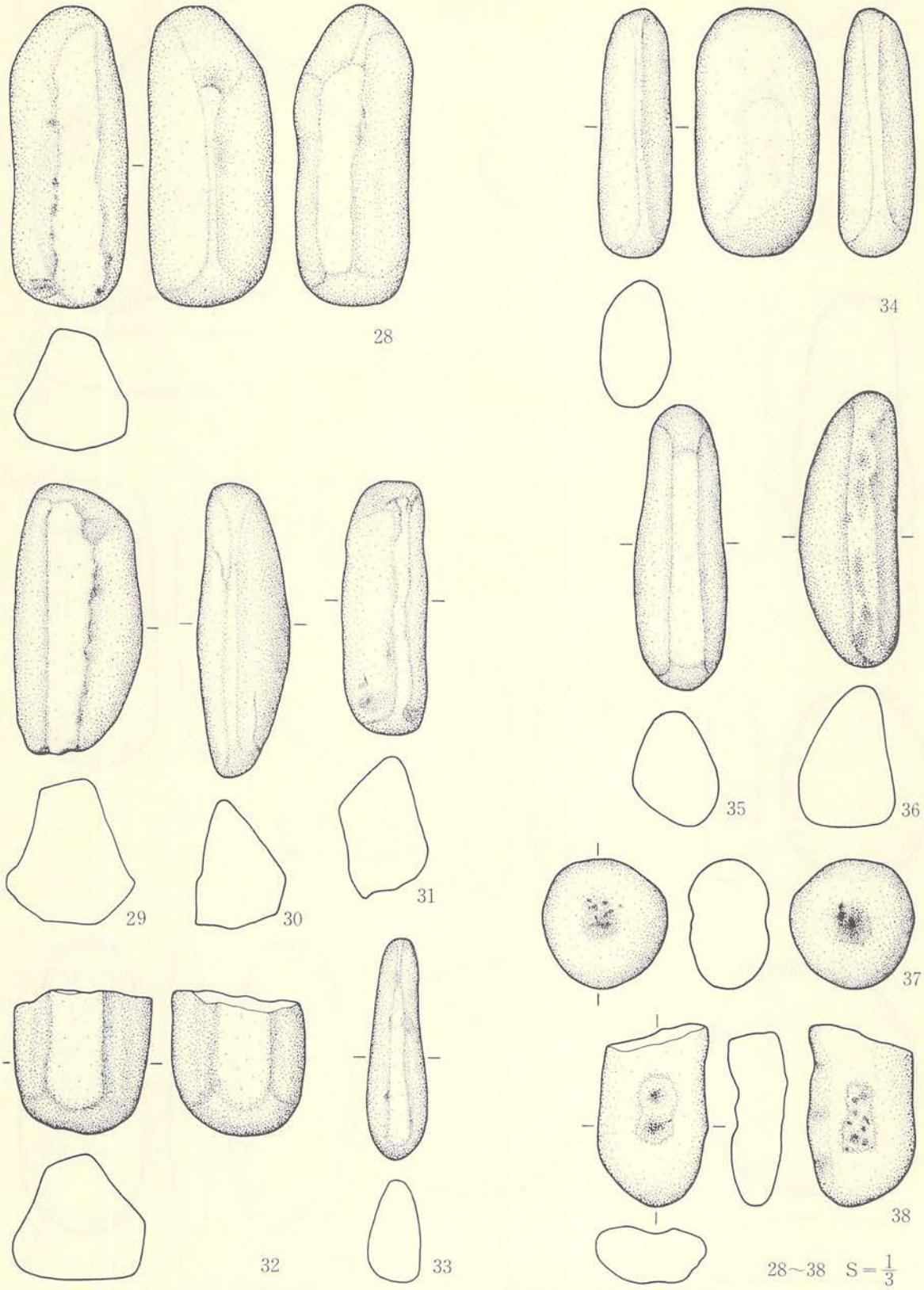


11～17 S＝$\frac{2}{3}$

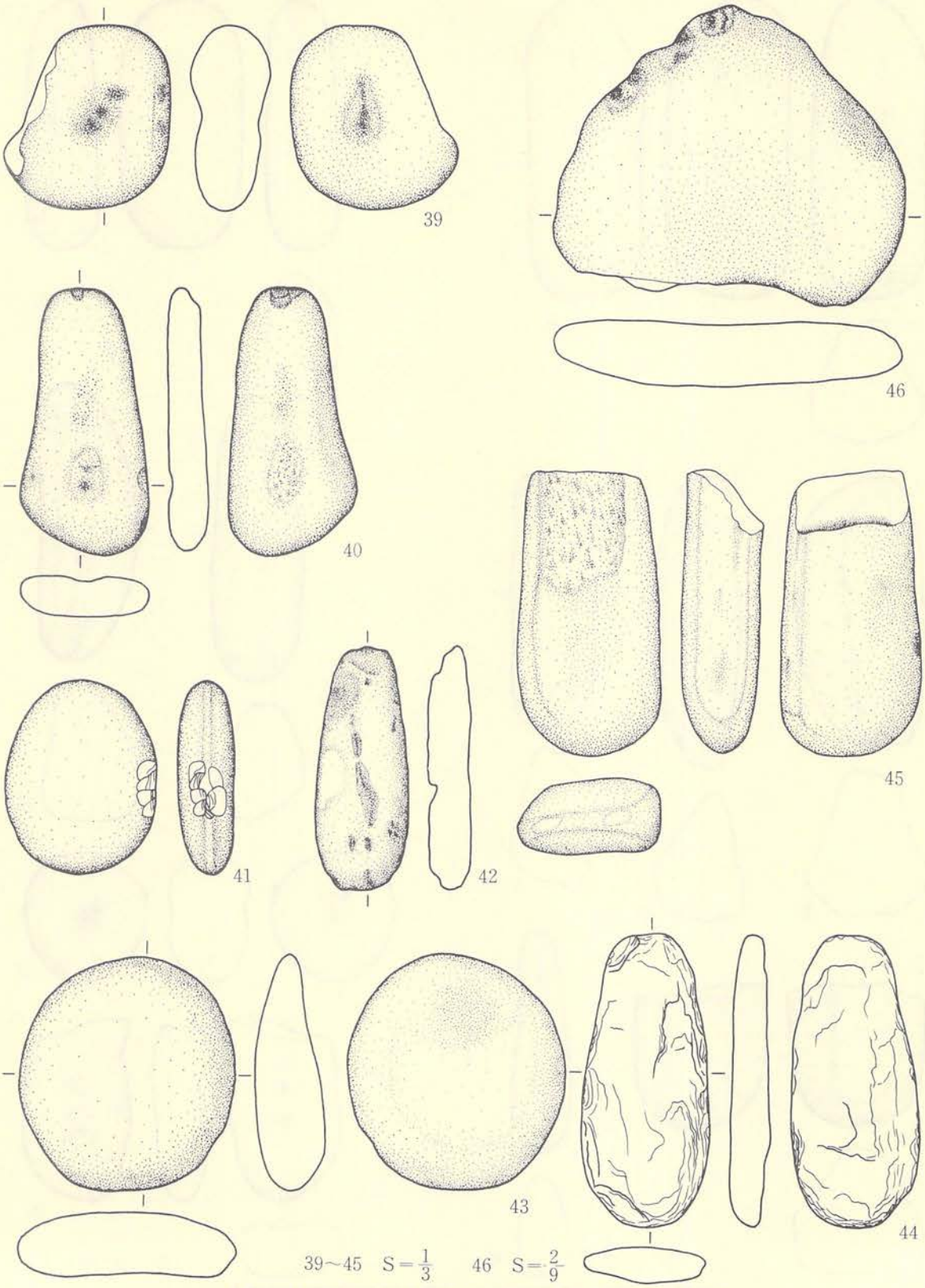
図版第40図　遺構外出土　縄文時代早期石器遺物



図版第41図　遺構外出土　縄文時代早期石器遺物

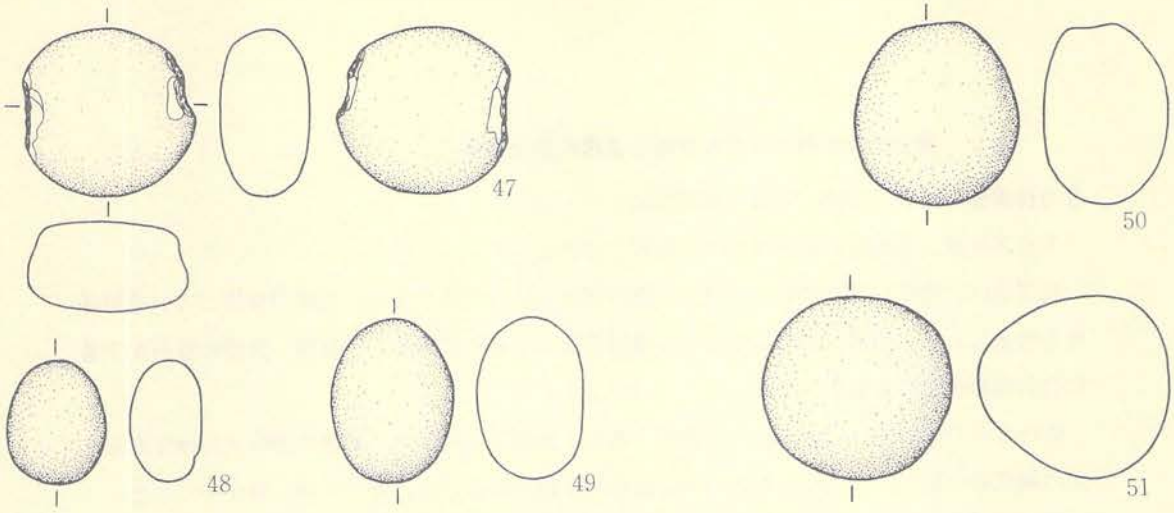


図版第42図　遺構外出土　縄文時代早期石器遺物



39～45　S＝$\frac{1}{3}$　　46　S＝$\frac{2}{9}$

図版第43図　遺構外出土　縄文時代早期石器遺物



47～51　S＝$\frac{1}{3}$

図版第44図　遺構外出土　縄文時代早期石器遺物

（3） 縄文時代中期に属する遺構と遺構内出土遺物

3号住居址（図版第45図、写真図版第35図）

本住居址は、B地区の南西緩斜面に位置している。

住居址は、撹乱を受けており、埋土の堆積層位がはっきりしない。遺構が重複している可能性も考えられる。遺構を確認した面は、現地表面下1mに位置する浅黄橙～黄橙の浮石を多量に含む暗褐色土の上面である。

炉は6ケの礫を用いた土器埋設石囲炉である。形状は楕円形で、規模は35cm×30cmである。炉の構成礫の最大のものは、長さ20cm、幅8cm、最小のものは、長さ7cm、幅5cmである。

炉には土器が埋設してあったが風化が激しく復元することができなかった。焼土は炉内に形成され、最大厚3cmである。

出土遺物　（図版第46図1～7、写真図版第36図1～7）

埋土から所謂、円筒上層d式及び大木8a式に相当する土器を検出した。（1）は、円筒形の深鉢土器で、底部が欠損している。口縁部には、山形把手を有し、山形の頂部が浅く凹んでいる。口唇部は肥厚し、把手部分が外反している。口縁の端部には、無文の隆線を小波状形に貼付している。

山形の把手には、2本の隆線を横条に施し、その下部にボタン状の突起を有している。地文には、LRの単節斜条文を施している。

（2）は、円筒形の深鉢土器で、口縁部が欠損している。口縁部から胴部にかけての文様は、横位の隆線と隆線による楕円文で構成し、懸垂する隆線によって文様を4単位に区画している。隆線による区画内には、平棒工具による連続的刺突文を充填している。隆線による文様区画帯から下半には、RLの単節斜条文を施している。

（3）は、円筒形の深鉢土器で、底部が欠損している。口縁部には、4個の山形突起を有している。口唇部は肥厚し、口唇直下1.5cmの位置に1条の隆線を巡らしている。肥厚した口唇部と隆線の間にx状の隆線を充填している。

口縁部から胴部にかけての文様は、胴部上半に2本の隆線を巡らし、口縁部のx状の隆線直下から懸垂する隆線を施し文様を4単位に区画している。区画内には、向きあう2つの弧状の隆線と隆線による2ケの円文を施している。胴部下半には、小波状形の1条の隆線を懸垂している。

（4）は、キャリパー形を呈する小形深鉢土器である。胴部が張り出し、口縁部直下で窄む。口縁部はやや張り出しながら内彎している。口縁部の張り出し部分に1条の隆線を巡らし、これと口唇部との間に波状形に隆線を貼付している。隆線のへりには、沈線を施している。胴部には、LRの単節縄文を、斜め、横、縦方向に不規則に転がしている。

（5）は、胴部が脹らむ深鉢で、底部を欠損している。口唇部は外反し、肥厚している。口唇部の外反部に1条の隆線を小波状形に巡らしている。

口縁部には、口唇直下2㎝の位置にやや太い隆線を巡らし、隆線上に平棒工具による刻目を7㎜間隔で施文している。

口唇部の肥厚部と口縁部の刻目を有する隆線間にx状の隆線を2ヶ充塡し、2単位に区画している。刻目を有する隆線から下部には、LRの単節斜条文を施し、その上からナデ調整を行っている。

（6）は、円筒形の深鉢土器で、口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部には、山形把手を有している。口縁部は外反し、把手部にボタン状の突起を有している。ボタン状の突起の下部から隆線による懸垂文と横条の隆線文によって文様を構成している。

（7）は、円筒形の深鉢土器の口縁部片である。口縁部は平縁で、3ヶ1対の小突起を有し、中央部をのぞく両端の突起は太い隆線となり口縁部までのびている。口唇部は折り返しとなり、この部分に2本の小波状形の隆線を組合せて貼付し、菱形を構成している。

口縁部の文様は、横位の平行な隆線と、弧状の隆線を組合せて文様を構成している。

（4） 縄文時代中期に属する遺構外出土遺物

本遺跡から出土した縄文時代中期に属する土器遺物は、円筒上層式に相当するものである。これらの土器遺物を円筒上層式の各土器形式にあてはめて、第1群～第3群に分類した。

第1群土器 （図版第47図1～3、写真図版第37図1～3）

円筒上層C式に相当するものを本群とした。

（1・2）は、深鉢土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部に山形把手を有している。（1）は、口縁部の把手下部に垂下する隆線で文様帯を区画し、区画内に横条及び弧状の隆線を貼付している。隆線間には篦状工具による刺突文を施文している。口縁部文様帯から下部には、RLの単節斜条文を施している。（2）は、口縁部に隆線を数条平行させて横条に巡らし、隆線間に刺突文を横方向に連続的に施文し文様帯を構成している。（3）は、口縁部文様帯の破片で、直線と曲線の隆線を貼付し、隆線間に刺突文を施している。

第2群土器 （図版第47図4、写真図版第37図4）

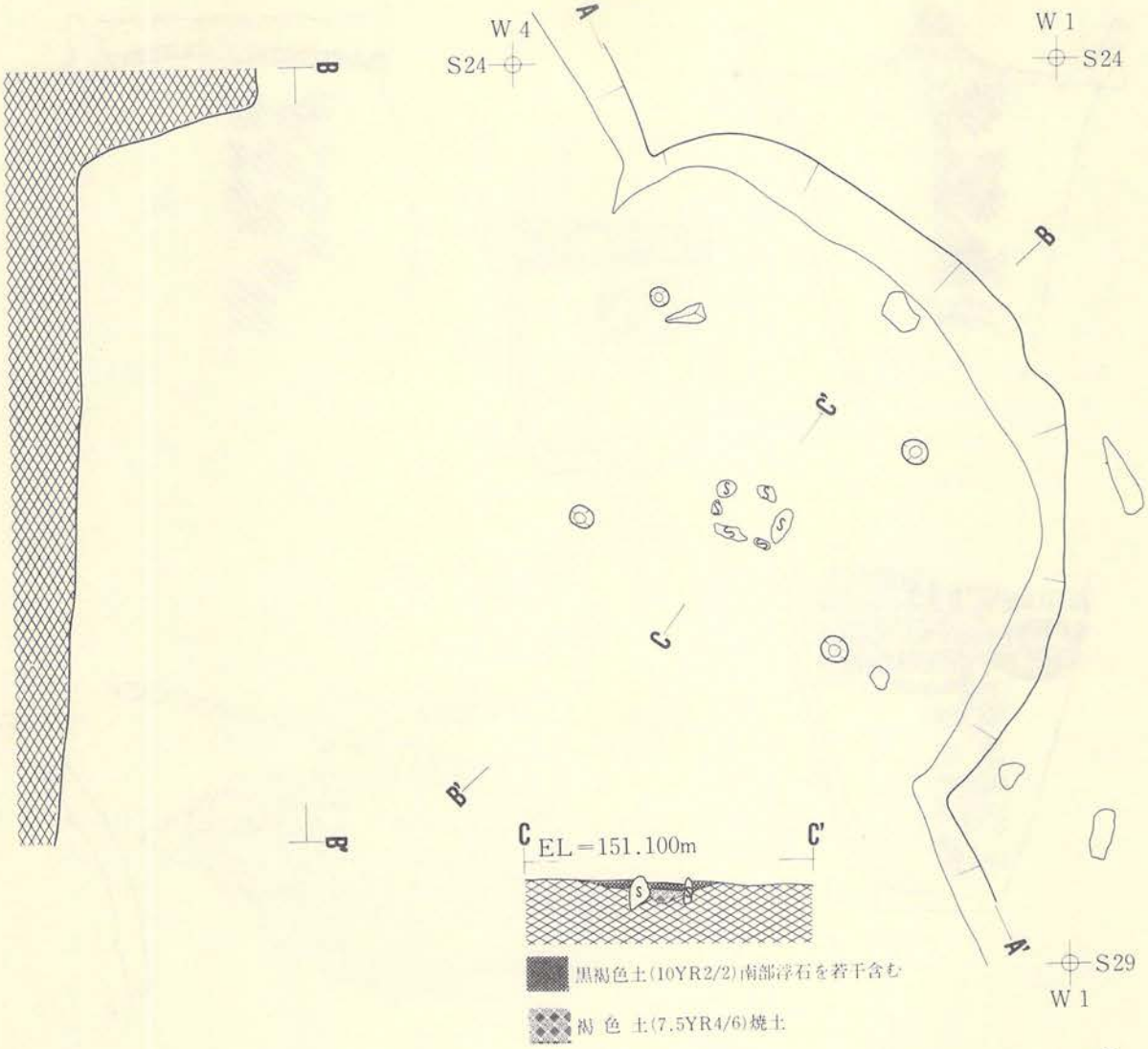
円筒上層d式に相当するものを本群とした。

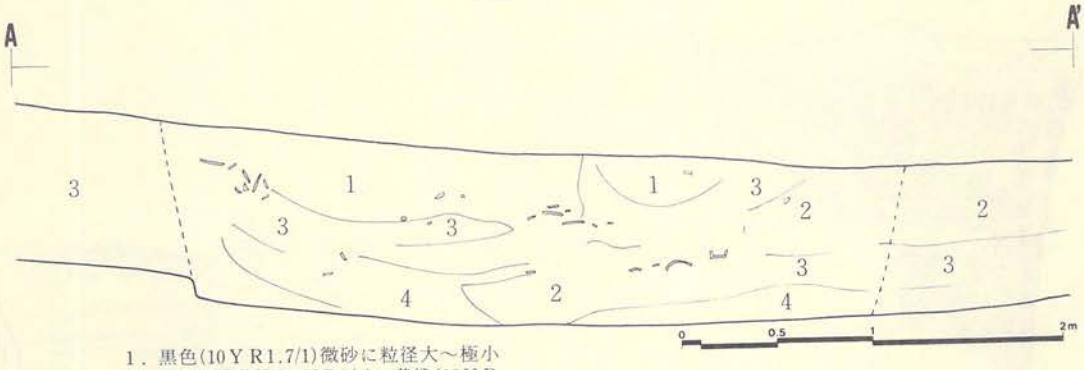
（4）は、深鉢土器の口縁部片で、山形把手を有している。口縁部には、弧状及び横方向に平行する直線的隆線を貼付し、隆線上に縄文を施している。口縁部の把手下部にはボタン状突起を有している。

第3群土器 （図版第47図5～8、写真図版第37図5～8）

円筒上層e式に相当するものを本群とした。

（5～8）共に口縁部片で、口唇部に刻目を巡らし口縁部に沈線文を施しているが、（7・8）の口縁部には沈線の他に把手部に隆線を施している。





1．黒色(10Y R1.7/1)微砂に粒径大～極小までの浅黄橙(10Y R8/4)～黄橙(10Y R 8/8)の浮石を多量に混入している。(混入量25～30%)

2．黒色(10Y R1.7/1)微砂に極小粒状の浅黄橙の浮石を多量に含んでいる。(1と近似しているが浮石の大きいものがほとんどない)炭化物粒を若干含んでいる。

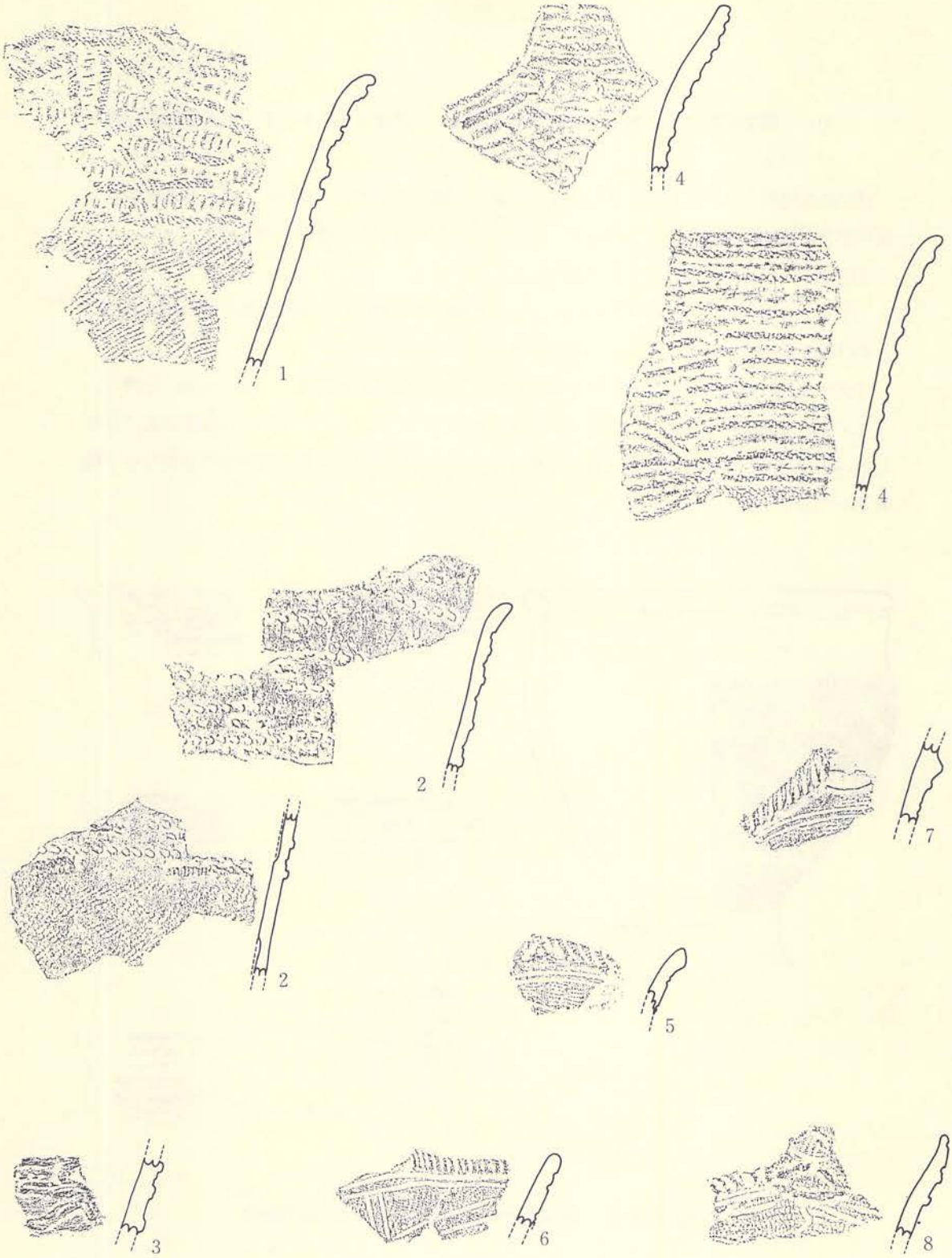
3．黒色(10Y R2/1)微砂(混入物は1に同じ)炭化物粒を若干含んでいる。

4．黒色(10Y R2/1)～黒褐色(10Y R2/2)微砂(混入物は1に同じであるが、混入量が約40%と多い、)炭化粒を若干含んでいる。

図版第45図　3号住居址

1～7　S＝$\frac{1}{4}$

図版第46図　3号住居址遺構内出土遺物



1～8　S＝$\frac{1}{4}$

図版第47図　縄文時代中期遺構外出土土器遺物

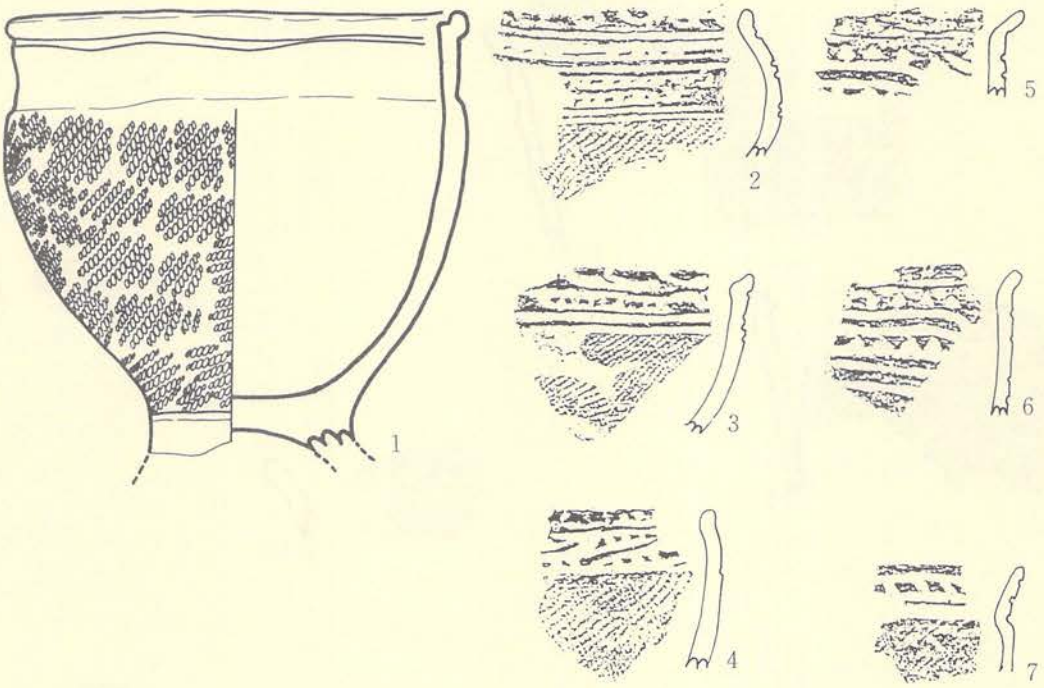
（4） 縄文時代晩期に属する遺構外出土遺物 （図版第48図1～7、写真図版第38図1～7）

縄文時代晩期に属する台付深鉢1点及び土器片十数点が出土した。出土地は、B地区南側の緩斜面及び西側段丘崖縁辺付近である。出土面は、表土及び中振浮石の再堆積層である。

土器は、いずれも大洞B—C式に相当するものである。

（1）は、台付深鉢で、口縁部に幅1.5㎝程の磨消帯を巡らし、胴部にはLRの縄文を転がしている。器内面の口唇部には、1条の沈線を巡らしている。

（2～6）の口縁部には羊歯状文を施文している。口縁部の形状は、（2）が強く内彎し、（3・4）は直立ぎみである。（5・6）は口唇部が強く外反し、（7）は口縁部が緩く外反している。（7）の口縁部には3条の沈線を巡らし、上段2条の沈線間に斜めの沈線を描き隆帯部を区画している。



1～7 S＝$\frac{1}{2}$

図版第48図 縄文時代晩期遺構外出土土器遺物

（6） 弥生時代に属する遺構と遺構内出土遺物

4号住居址 （図版第49図、写真図版第39図）

本遺構は、B地区南西斜面の西側に位置している。検出面に、堆積土の色調と比較して極く僅か色調が異る黒色土が不整形にひろがっており、精査の結果、焼土と石囲炉を検出した。精査中は、埋土と堆積土の判別が全くつかず、炉を検出して住居址の存在を確認した。このため、形状及び規模については、不明である。

炉は、4ケの礫を用いて設けられている。構成礫は、2ケずつ対状に位置し、その内側から南側にかけて焼土を形成している。炉の構成礫の最大のものは長さ20㎝、幅8㎝、最小のものは長さ42㎝、巾7㎝である。

出土遺物

炉の埋土から出土した土器遺物（図版第50図1・2、写真図版第40図1・2）

（1）は、小型の壺の口縁部から胴部上半にかけての破片である。胴部が脹らみ、口縁部が僅かに外反する。口唇部は薄く、頸部に浅く細い不整の沈線を1条巡らしている。胴部は無文である。（2）は、底部片である。Lrの縄文を押圧している。

床面から出土した土器遺物 （図版第50図3、写真図版第40図3）

（3）は、壺形土器の胴部から底部にかけてのものである。器表面は無文でミガキ調整を加えている。器厚は5㎜で、焼成は良好である。

埋土から出土した土器遺物 （図版第50図4～14、写真図版第40図4～14）

（4）は、蓋形土器である。直形5㎝程の円形のもので、蓋の上面に沈線を同心円状に描いている。（5・6）は、壺形土器の胴部片である。器表面にLrの縄文を転がしている。（5・6）共に器表面に煤が付着している。（7・8）は、壺形土器の口縁部片である。無文で薄手のものである。器表面にミガキ調整を加えている。（9～13）は、高坏土器の同一個体片である。口縁部から胴部にかけて3条1組の平行沈線を数段巡らし、胴部には変形工字文を描いている。また、沈線間には撚糸圧痕を施し、その上からミガキ調整を加えている。器内面にもミガキ調整を加え、口唇部直下に1条の沈線を巡らしている。（14）は、高坏土器の脚部片である。3本1組の沈線を脚部の上部・中部・下部に1組ずつ巡らし、中・下段の沈線間に3本1組の沈線を大きい波状形に施している。（9～13）と（14）は、同一個体片であると考えられ、共に器表面に朱塗を施している。

埋土から出土した石器 （図版第50図15、写真図版第40図15）

（15）は、粘板岩を用いた円盤状石製品である。周辺に打撃調整を加えて、直径3.5㎝の円形に加工している。重さは9.75㌘である。

5号住居址　（図版第51図、写真図版第41図）

本住居址は、B地区南西斜面のほぼ中央に位置している。検出面は、中掫浮石層の下部に位置する粒径大～極小までの明黄褐色（10Y R7/6～6/6）の浮石が30％混入する黒色微砂の堆積層上面である。

検出面に不整形な黒色土のわずかばかりのひろがりが認められ、精査の結果、石囲炉を検出した。

平面形は、楕円形である。規模は、長軸で250㎝、短軸で210㎝である。壁は、外傾斜して立ち上がる。現高は、北側の壁25㎝、南側の壁15㎝、東側の壁17㎝、西側の壁17㎝である。

床面は、ほぼ平坦である。柱穴は、平面形状が円形および楕円形で、直径15㎝～18㎝のものを4ヶ検出した。

炉は、床の中央より僅かに北に寄った位置に、5個の礫を用いて設けられている。形状は、円形で、直径25㎝である。構成礫の最大のものは長さ17㎝、幅14㎝、最小のものは長さ8㎝、幅3㎝のものである。焼土は曖昧で、炉内に存在する黒褐色土に混存する程度である。炉の北西20㎝～50㎝にかけて木炭塊を検出した。

埋土は、明黄褐色の浮石を30％含む黒色土の単層である。重複する遺構は156号ピットで、本遺構が156号ピットの東半分を切っている。新旧関係は、本遺構が新しい。

6号住居址　（図版第52図、写真図版第42図）

本住居址は、B地区南西斜面のほぼ中央に位置している。本遺構を検出した地点の土層は、黒褐色土に中掫浮石がブロックで混入する面と黒色土の面とに二分される。遺構は、この二つの面の境界に位置し、中掫浮石の載っている面に黒色シルトの弧状のひろがりを認めたことによって遺構の存在を確認した。

遺構は、この確認面よりも上層から掘り込まれたと考えられるが、掘り込み面と埋土との区別がつかず、確認できたのは、住居址の東側の壁の一部と炉のみである。

炉は、床面のほぼ中央と考えられる位置に5ヶの亜円礫及び角礫を用いて設けている。構成礫の最大のものは、長さ42㎝、幅12㎝、最小のものは、長さ10㎝、幅4㎝である。どの構成礫も床面から15㎝程埋め込んでいる。炉の焼土は、レンズ状に垂れ下がっており、最大厚13㎝である。焼土の色調は、黄橙（7.5Y R8/8～7.5Y R6/8）を呈している。焼土の土質は、床面と同じ細粒の浮石を多量に含む砂質土である。炉の東半分にあたる部分に土器を埋設している。

床面から径13㎝～32㎝の4個の小穴を検出した。このうちの3ヶは埋土からみて柱穴と考えられるが、残りの1ヶは不明である。

出土遺物　（図版第52図、写真図版第42図）

炉に壺形土器を埋設していた。口縁は5単位の波状口縁で、口縁部が僅かに外傾している。口唇直下の口縁部に口唇と平行する沈線を1条巡らしている。口縁の器表面及び内面共にミガキ調整が行われている。頸部には3条の平行沈線を巡らし、胴部には Lr の単節斜縄を横及び縦に転がしている。

（7） 弥生時代に属する遺構外土器遺物 （図版第53図1～第54図26、写真図版第43図1～第44図26）

弥生時代に属する土器遺物は、弥生時代の住居址を検出したB地区の南側緩斜面から出土した。検出した土器遺物の多くは縄文のみを施した胴部破片であるが、縄文以外の文様を施した土器片や口縁部等の破片も含まれているので、これらのものを器種毎に**A**～**E**に分類した。

A 鉢形土器 （図版第53図1・2、写真図版第43図1・2）

（1）は、口縁部から底部にかけての破片で、口縁部に0段の撚糸文を施し、その下部は磨消となっている。（2）は、口縁部片で、口唇部及び口縁部にRLの縄文を施している。

B 壺形土器 （図版第53図3～6、写真図版第43図3～6）

（3・4）は、口縁部片である。（3）は、口唇部が肥厚し口縁部に幅3㎝程の磨消帯がある。頸部には1条の浅い沈線を施している。

（4）は、口縁部を磨き、頸部に数条の沈線を施している。口縁部は極めて薄手で、朱を塗っている。

（5・6）は、肩部の破片である。（5）は、肩部に3条1組の沈線を巡らし、この沈線と頸部の間に3条1組の波状形の沈線を巡らしている。

（6）は、頸部から肩部にかけての間に数条の平行沈線を巡らし、下段には波状の沈線を巡らしている。平行沈線間には縄文を転がしその上から縦の沈線を5㎜～7㎜の間隔で施している部分と磨消帯となっている部分とを交互にくり返している。最下段の波状形の沈線の下部には、縄文を転がし、その上からナデ調整を加えている。磨消部分はていねいにミガキ調整を行っている。

C 甕形土器（図版第53図7～11、写真図版第43図7～11）

（7～10）は口縁部片で、（11）は口縁部から胴部にかけての破片である。（7・8）は、平縁の甕形土器の口縁部片で、口縁部が外傾している。口縁部にはミガキ調整を加え、頸部に2～3条の沈線を巡らしている。（8）の胴部にはLRの縄文を斜めに転がしている。

（9・10）は、山形波状を呈する甕形土器の口縁部片で、口縁部が外傾している。口縁部にはミガキ調整を加え、口唇部直下に口唇部と平行に1条の沈線を巡らしている。頸部には数条の沈線を巡らし、（10）の胴部にはLRの縄文を転がしている。

（11）は、口縁部にミガキ調整を加え、胴部にLRの斜行縄文を施している。器表面及び器

内面の口唇部に煤が付着している。

D　坏形土器　（図版第54図12～20、写真図版第44図12～20）

（12～15）は口縁部片で、（16）は胴部片である。（12）は、波状形の口縁を有し、器表面の口縁部に口唇部と平行する沈線を１条巡らしている。さらにその下部には、２条の沈線と１条の沈線を巡らし、この沈線間に０段の縄文を施している。器内面には、口唇部に平行する沈線を１条施し、その下部に２条の平行沈線を巡らしている。器表面、器内面共に極めて丁寧なミガキ調整を加えている。

（13）は、小波状形の口縁を有し、器表面の口縁部の上半と下半に数条の平行沈線を巡らし、その間に変形工字文を描いている。口唇部には１条の沈線を巡らし、波頂部の器内面に縦形の刻目を入れ、その直下に１条の沈線を巡らしている。器表面、器内面共にミガキ調整を加えているが、器表面のミガキの方が丁寧である。

（14）は、口縁部に３条１組の平行沈線を数段施し、器内面の口唇部直下に１条の沈線を巡らしている。器表面、器内面共にミガキ調整を行っている。

（15）は、器表面の口縁部上半に２条、下半に数条の平行沈線を巡らし、その間に変形工字文を描いている。口縁部は直立ぎみに立ち上がり、口唇部の器内面部分に１条の沈線を巡らし、ている。

（16）は、胴部片で、変形工字文を描き、その下部に３条１組の平行沈線を巡らしている。変形工字文の区画内と平行沈線の下部にＬＲの縄文を転がしている。器表面、器内面共にミガキ調整を加えている。

（17～20）は、脚部である。（17）は、脚部上半に２条１組、下半に３条１組の平行沈線を巡らし、その間に３条１組の波状形の沈線を描いている。

（18）は、脚部上端に幅１㎝程の縄文を転がし、その下部に２条１組と３条１組の平行沈線を２段施し、その下部に波状形の沈線を描いている。

（19）は、脚上半に数条の沈線と裾部に３条の沈線を巡らし、その間に３条１組の沈線を波状形に描いている。

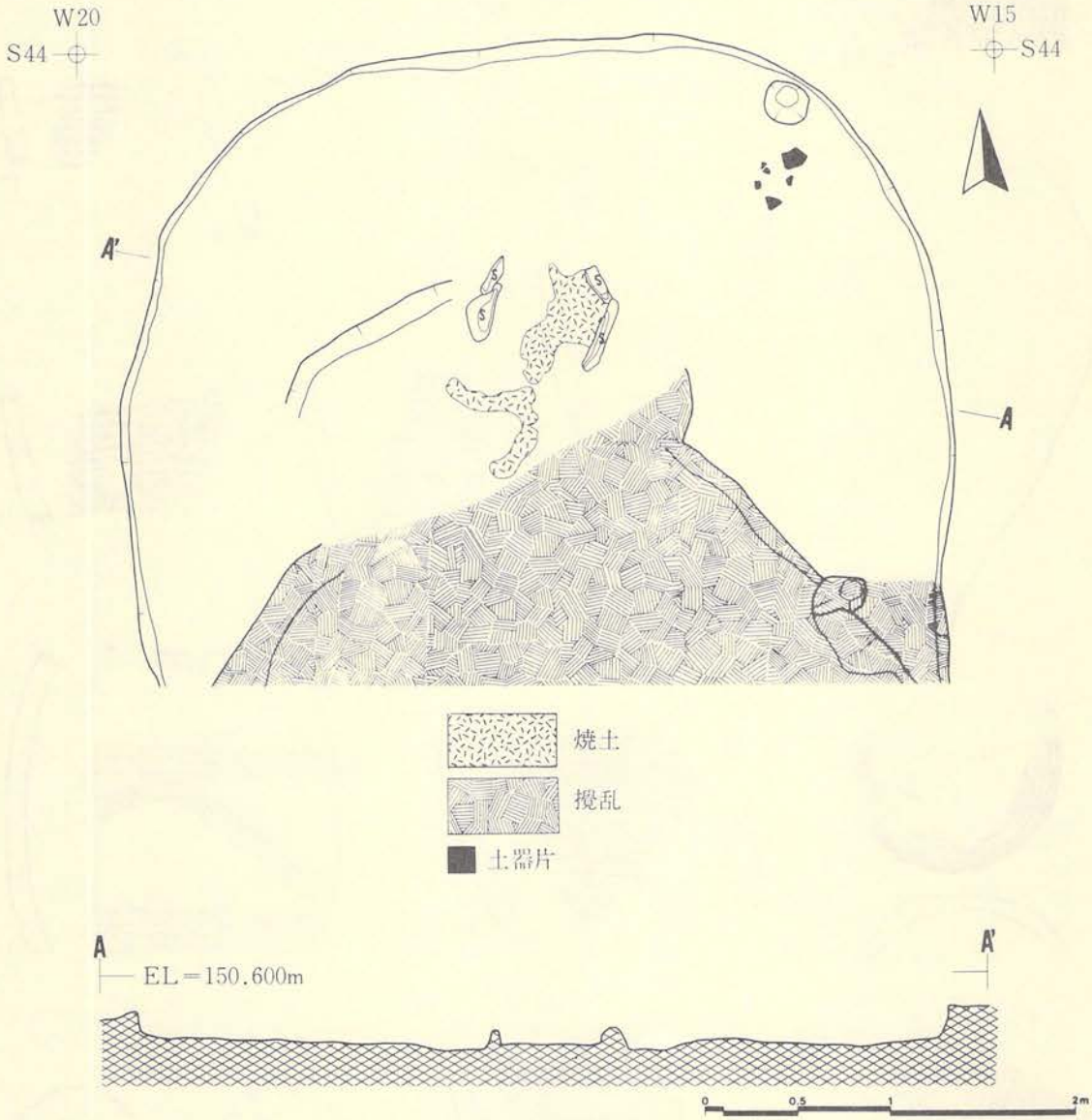
（20）は、坏部下半から脚部にかけての破片である。坏部に細い沈線を描き部分的にＲＬの縄文を施している。脚部には２条の平行沈線を巡らし、沈線を狭んで上下に細い波形の沈線を描いている。

E　器種が認定できない土器片　（図版第54図21～26、写真図版第44図21～26）

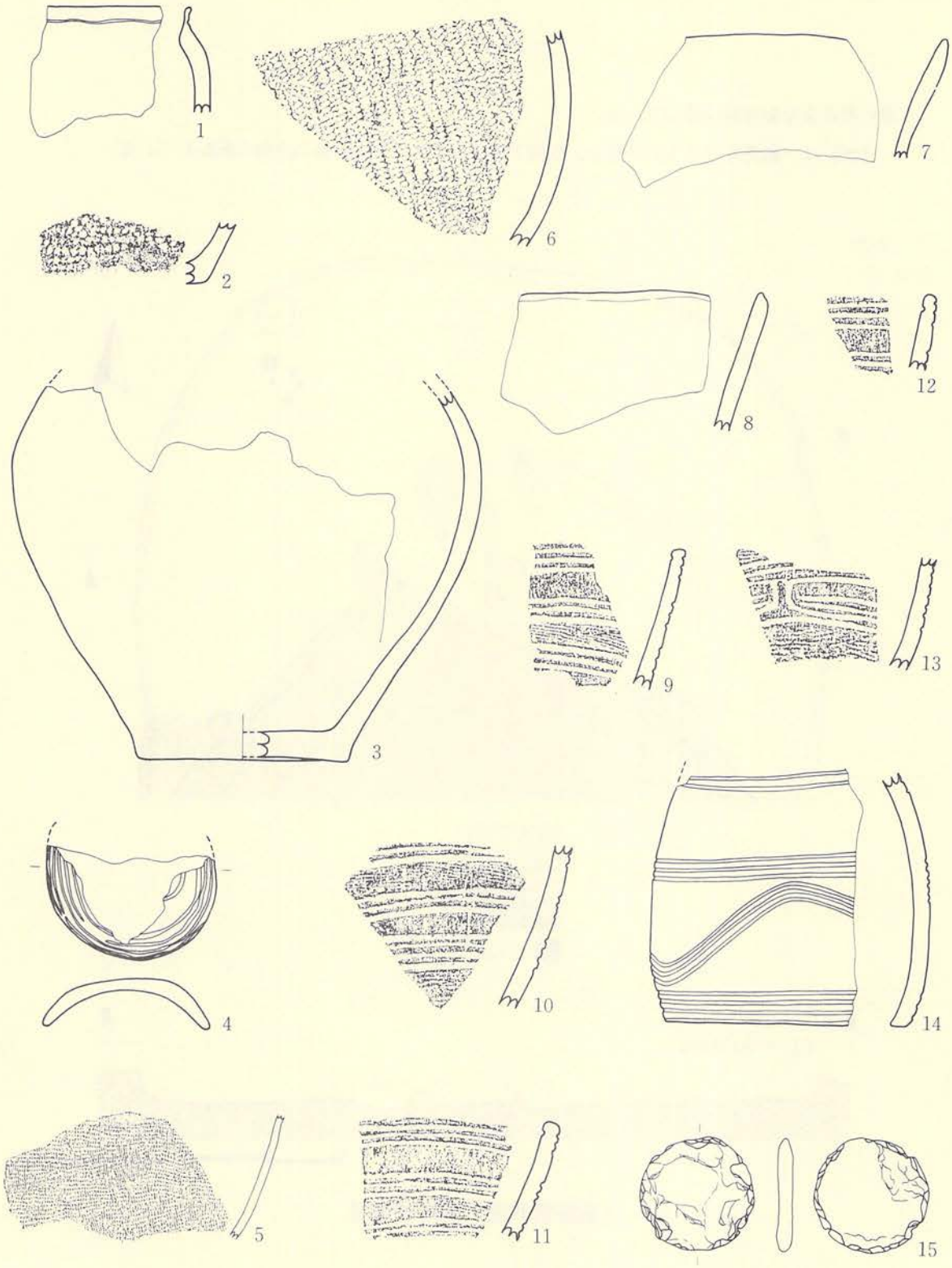
（21）は、数条の沈線を巡らした下部に１段の撚糸文を施した朱塗のものである。（22～23）は、細い棒状工具による刺突を横方向に連続的に施したもので、刺突後に器面を引き摺り次の刺突へと連続してくり返している。（24）は、１段の撚糸文を羽状に施し、（25）は、１

段の撚糸文を縦方向に施している。

(26) は、底部片である。平底で、胴部下半までＬＲの縄文を斜め方向に転がしている。

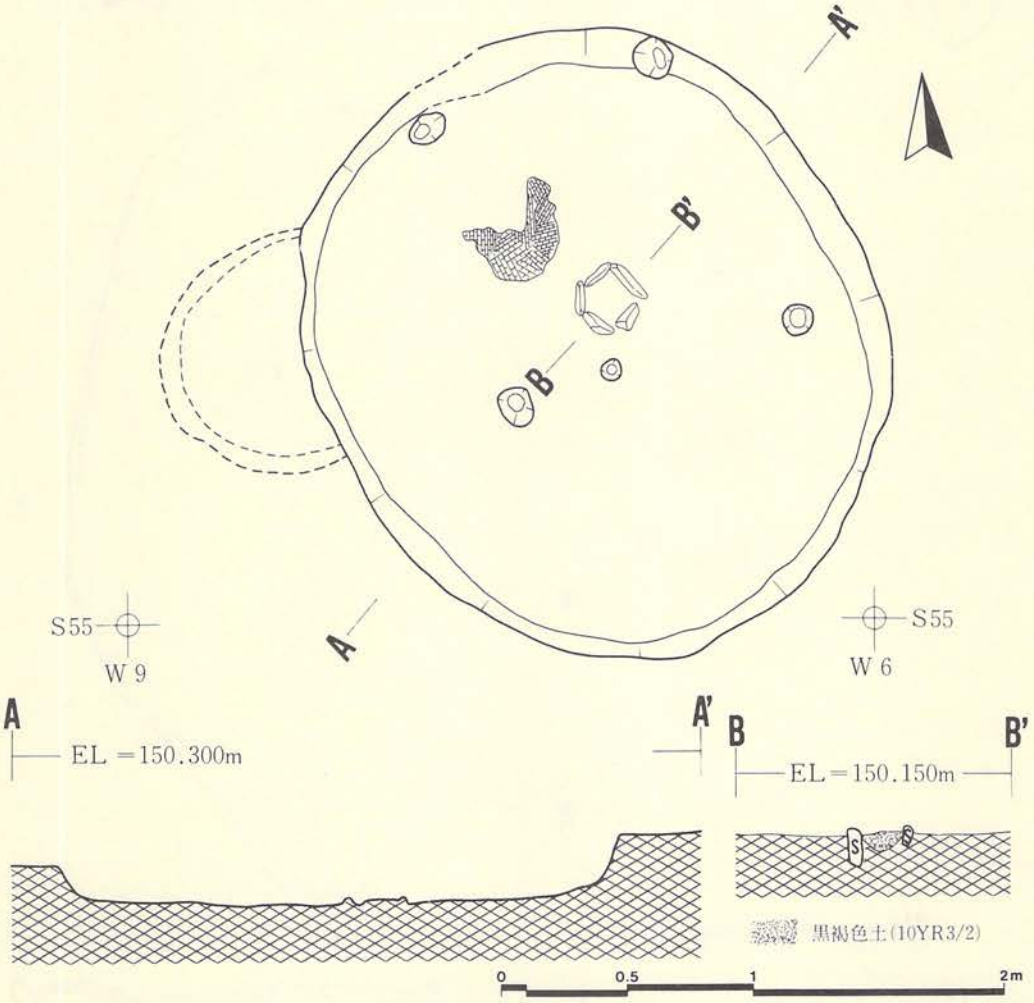


図版第49図　４号住居址

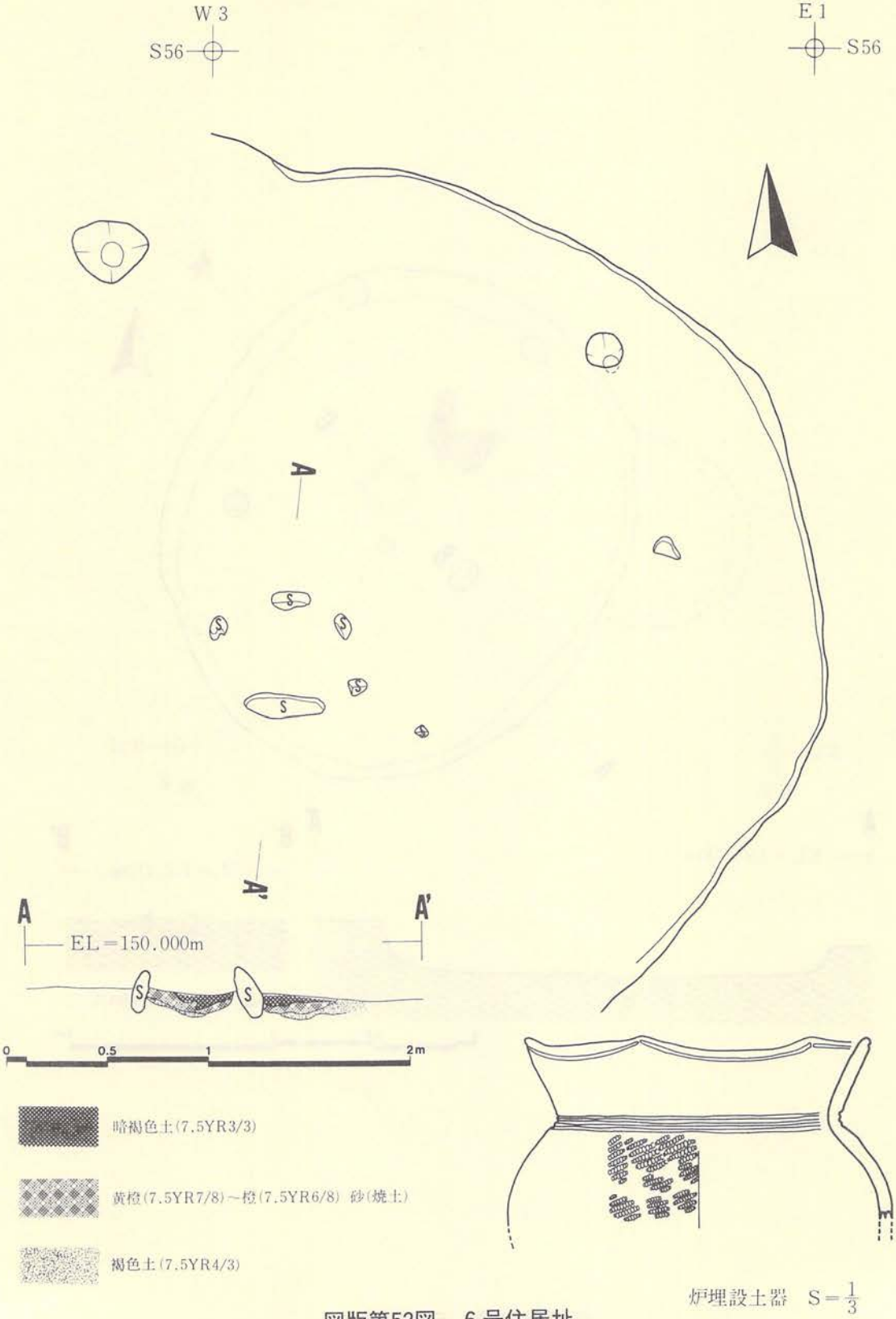


1～4・6～15　S＝$\frac{1}{2}$　5　S＝$\frac{1}{4}$

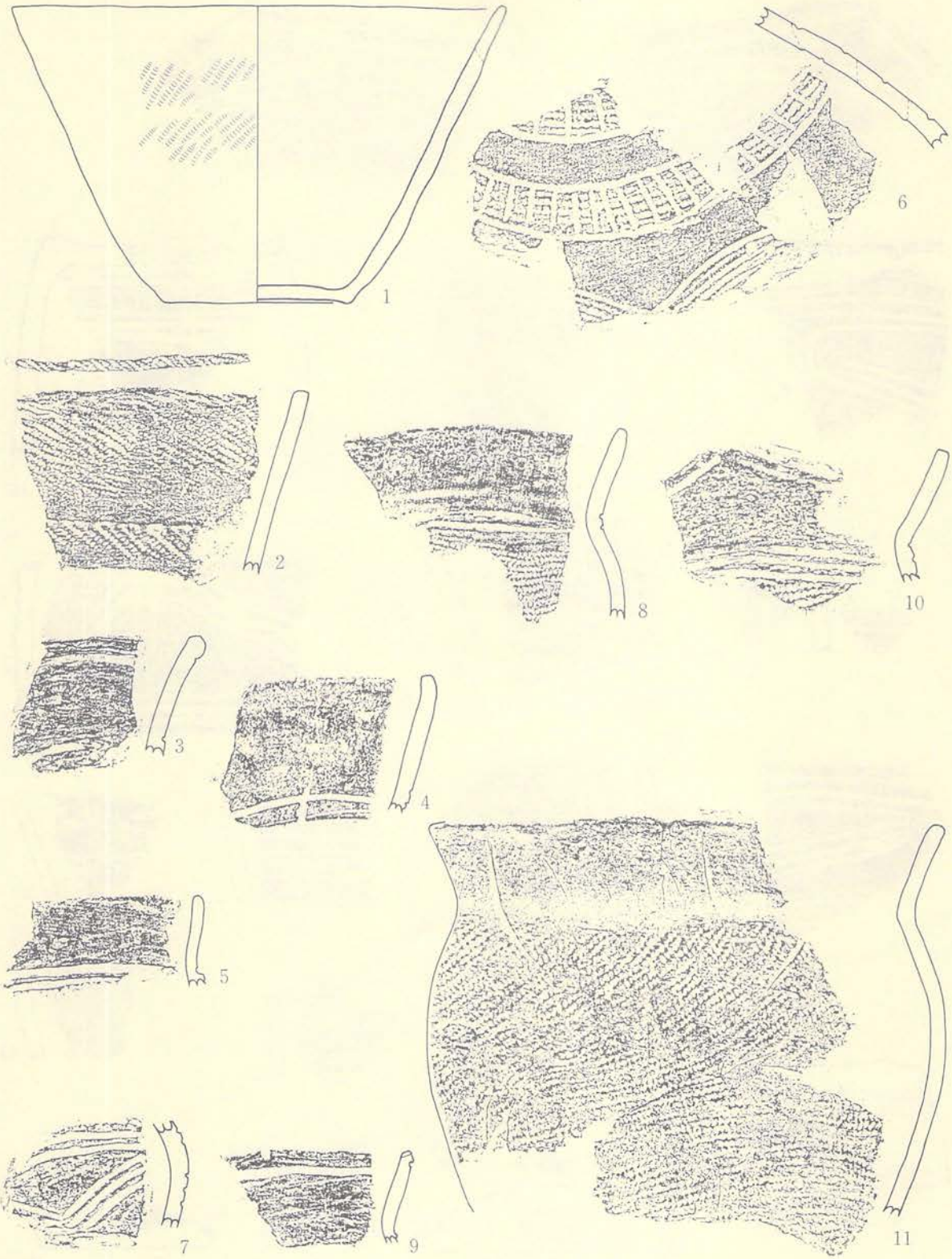
図版第50図　4号住居址遺構内出土土器・石器遺物



図版第51図　5号住居址

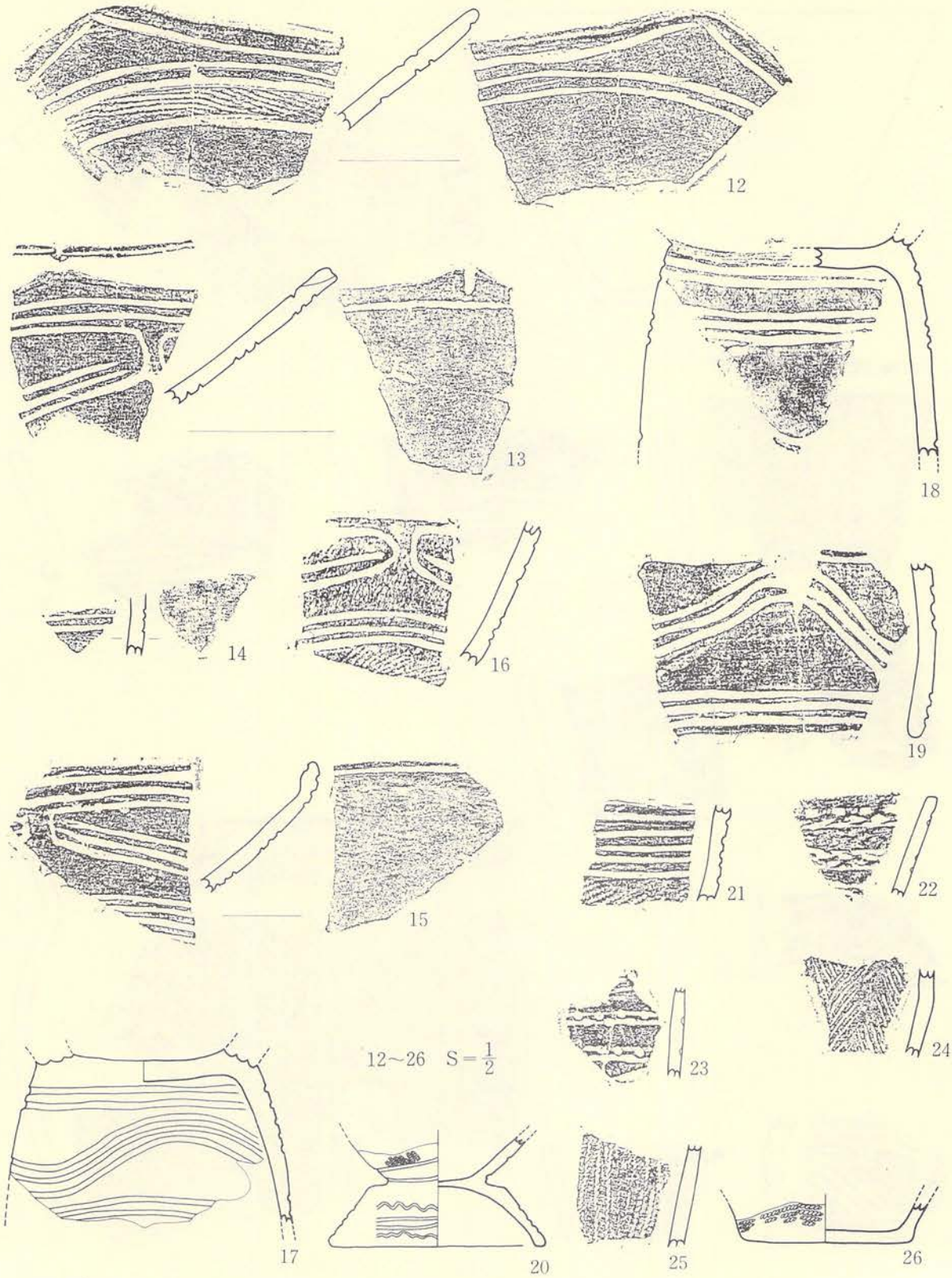


図版第52図　6号住居址



1～11　S＝$\frac{1}{2}$

図版第53図　弥生時代遺構外出土土器遺物



図版第54図　弥生時代遺構外出土土器遺物

（8） 縄文時代中期～弥生時代に属すると考えられる遺構外石器遺物

本項で取り扱ったのは、縄文時代中期及び弥生時代に属する竪穴住居址を検出した地区から出土した遺構外出土の石器遺物である。この地区から、縄文時代中期、縄文時代晩期、弥生時代に属する土器遺物が出土しており、これらのいずれかの時期に属する石器類であると考えられるが、それぞれの石器の所属する時期を明確にできないのでここでは一括して取り扱った。

石鏃 （図版第55図１～６、写真図版第45図１～６）

凹基無茎鏃２点（１・２）、平基無茎鏃１点（３）、凸基有茎鏃３点（４～６）が出土した。（１）は、流紋岩質極細粒凝灰岩を用いたものである。基部の抉入がやや深い。尖端部は欠損している。重さは2.0ｇである。（２）は、黒燿石を用いたもので、重さ2.4ｇである。基部の抉入は浅い。

（３）は、流紋岩質極細粒凝灰岩を用いたもので、重さ1.35ｇである。細身のもので尖端部が欠損している。（４）は、凝灰質泥岩を用いたもので、重さ4.29ｇである。（５）は、流紋岩質極細粒凝灰岩を用いたもので、重さ1.3ｇと小型のものである。尖端部が欠損している。

（６）は、硬質泥岩を用いた細身のものである。上半分に両面細部調整を加えているが、下半分の両縁は、調整後に剥離している。重さは2.45ｇである。

石錐 （図版第55図７、写真図版第45図７）

菱形をした偏平なもので、硬質泥岩を用いている。重さは1.1ｇである。

箆状石器 （図版第55図８・９、写真図版第45図８・９）

（８）は、凝灰質泥岩を用いた重さ28.4ｇのものである。表面に両面細部調整を行い、裏面の側辺に両縁細部調整を加えている。（９）は、凝灰質泥岩を用いた縦長のものであるが上半部が欠損している。重さは5.5ｇである。

掻器 （図版第56図12・13、写真図版第46図12・13）

（12）は、凝灰質珪質泥岩を用いたもので、表面の全周に片縁細部調整を加えている。重さは4,575ｇである。（13）は、粘板岩を用いたもので、両面調整を行っている。重さは6.5ｇである。

不定形な剝片石器 （図版第56図14～17、写真図版第46図14～第47図17）

（14）は、重さ6.45ｇのもので、側辺に両縁細部調整を、刃部に片縁細部調整を加えている。（15）は、輝緑凝灰岩を用いた重さ3.6ｇのものである。（16）は、チャートを用いた重さ4.45ｇのものである。刃部には両縁調整を加えている。（17）は、チャートを用いた重さ5.2ｇのものである。

円盤状石製品 （図版第57図18～21、写真図版第47図18～21）

（18～21）共に、表裏面及び周辺に打撃調整を加えて偏平な円盤状を形づくっている。

（18）は輝緑凝灰岩を、（19～21）は粘板岩を用いている。直径と重さはそれぞれ（19）が3.2㎝、16.6㌘、（20）が4㎝、21.6㌘、（21）が4.5㎝、26.05㌘である。

円孔を有する偏平な礫器　（図版第57図22、写真図版第47図22）

偏平な自然円礫のほぼ中央部に貫通孔を有しているが、これ以外に加工痕や使用痕は認められない。石質は粘板岩で、重さ91㌘である。

環状石斧　（図版第57図23、写真図版第47図23）

表面は自然磨面を多く残し、裏面には打撃調整を加えて偏平な円盤型を形づくっている。中央部には直径2㎝程の貫通孔を有し、周縁に打潰痕が認められる。石質は粘板岩で、重さ8.3㌘である。

石斧　（図版第55図10・第58図24～第59図32、写真図版第45図10・第48図24～32）

（10）は、凝灰質泥岩を用いたもので、両面細部調整を加えている。下半部は欠損している。（24～32）は、礫を用いた石斧である。（24）は擦切石斧で全面を研磨しているが、表裏面の側辺寄りに1条ずつ計2条の擦切溝が残っている。刃部は欠損しているが、裏面の稜及び刃部の欠損部に多くの打痕が認められ、欠損後に敲石として使用している。（25・26）は、定角式磨製石斧である。（25）の刃部は両刃で、（26）の下半部は欠損している。（27～29）は、磨製石斧である。（27・28）共に刃部は両刃であるが、上半分は欠損している。（29）は下半部が欠損しており、欠損後に敲石として使用している。（30）は、全面に敲打調整を加えている。（31）は、長さ22㎝と大型の打製石斧である。下半部の側辺を大きく剥離して刃部を形成している。刃部には打潰痕が認められる。（32）は周辺に剥離調整を加えたもので、上半部が欠損している。

凹石　（図版第60図33～37、写真図版第48図33～37）

（33～37）は、偏平な円礫を用いたものである。（33）は表裏面に各1ケの凹みを有し、（34）は表面が自然面で、裏面が半裁された剥離面となっている。（35）は、表面に直径4.5㎝程の大きい凹みを1ケ有し、周辺及び裏面に打潰痕が認められる。（36・37）は、楕円体の自然礫を用いたもので、表裏面に数ケの連続した凹みを有し、（36）の側辺には打潰痕が認められる。

磨石　（図版第59図38～第60図41、写真図版第48図38～第49図41）

（38～41）共に楕円球状の自然礫を用いたもので、（39）は表面に磨痕を有し、（38・40・41）は両面に磨痕を有している。

擦石　（図版第60図42、写真図版第49図42）

（42）は、全面に敲打調整を加えて棒状とし、2面に擦痕を有している。

敲石　（図版60図43・48・49、写真図版第49図43・48・49）

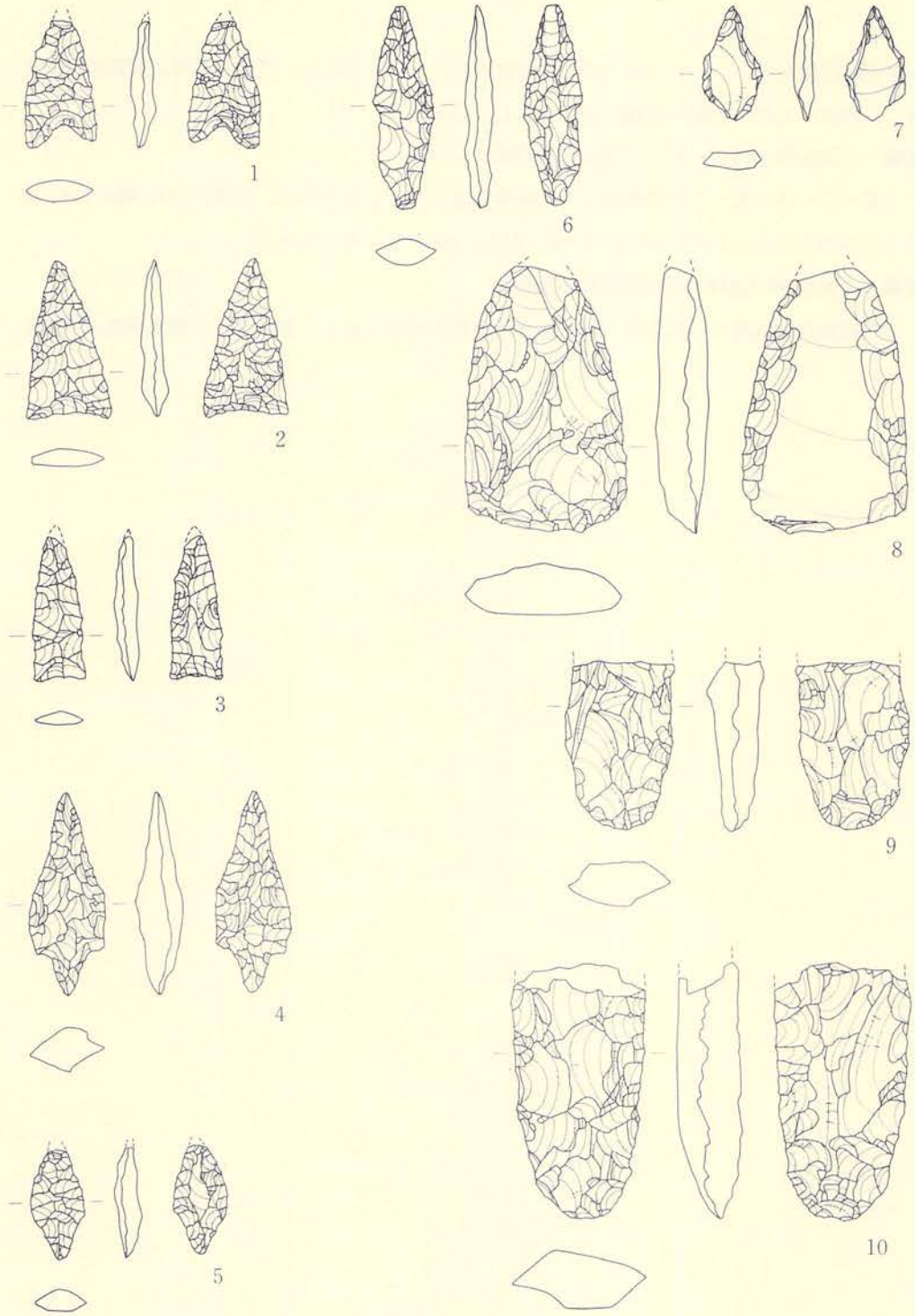
偏平な円礫を用いたもの（48・49）と棒状のもの（43）がある。円礫のものは周辺に打痕を有し、棒状のものは長軸の両端に打痕を有している。

石錘　（図版第60図45～47、写真図版第49図45～47）

（45～47）共に偏平な自然礫を用いた切目石錘である。大きさは、長さ7.5cm、幅4.5cm、厚さ1.5cmのものから長さ5cm、幅3.1cm、厚さ1.2cmのものまでがある。

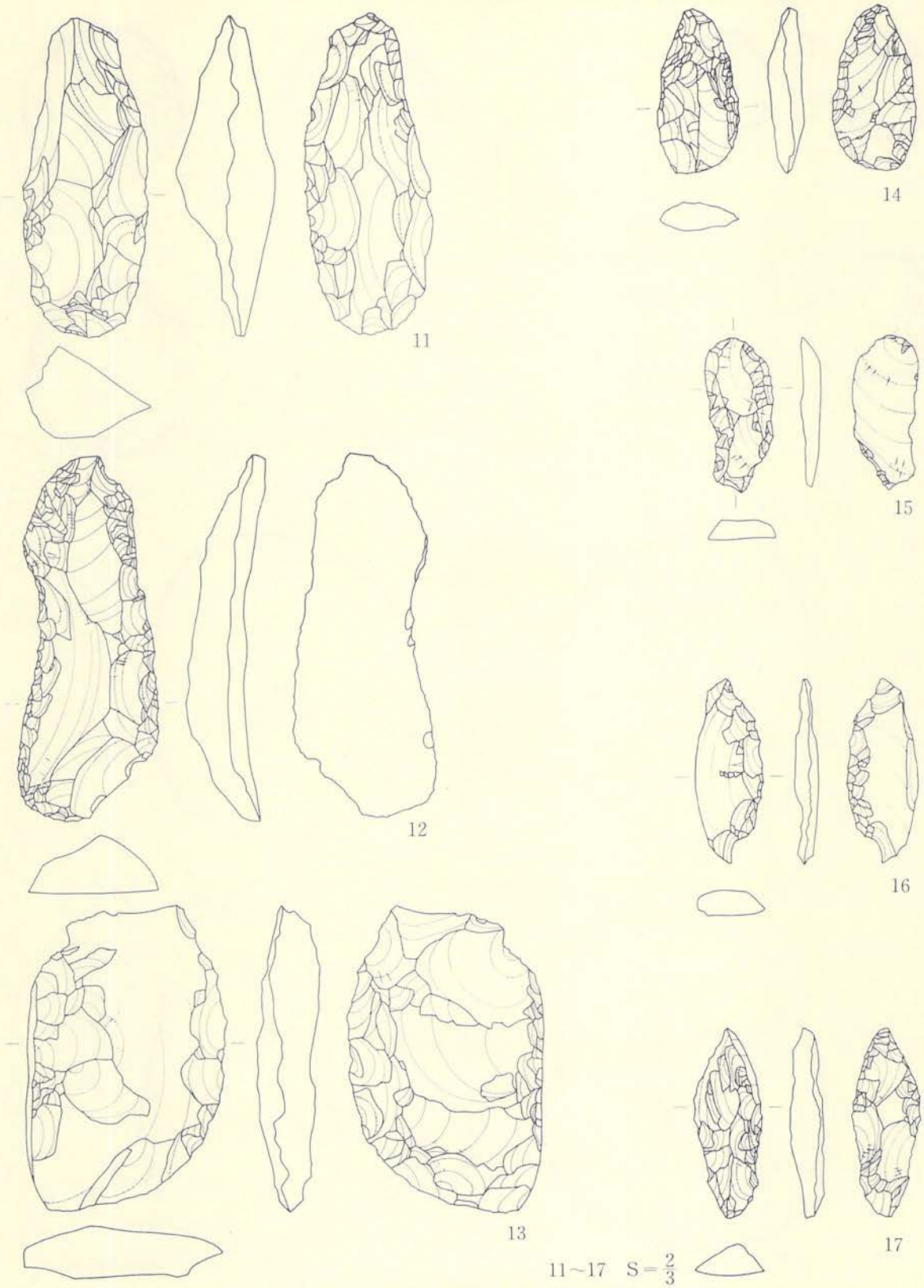
石棒　（図版第60図48、写真図版第49図48）

六角柱状の自然礫で、長さ41.4cm、幅8.4cm程のものである。加工痕及び使用痕等は認められない。



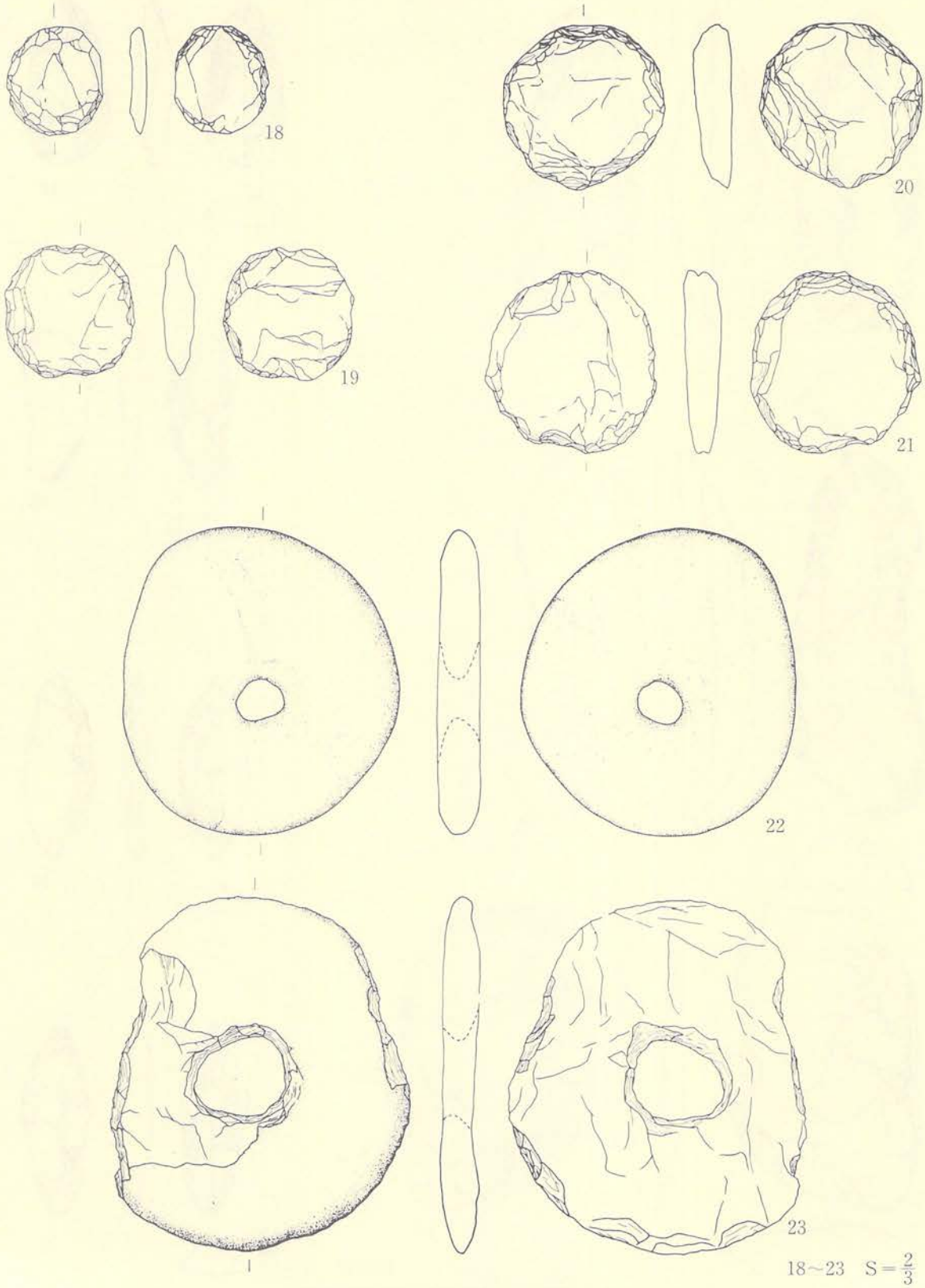
1～10　S＝$\frac{2}{3}$

図版第55図　遺構外出土石器遺物

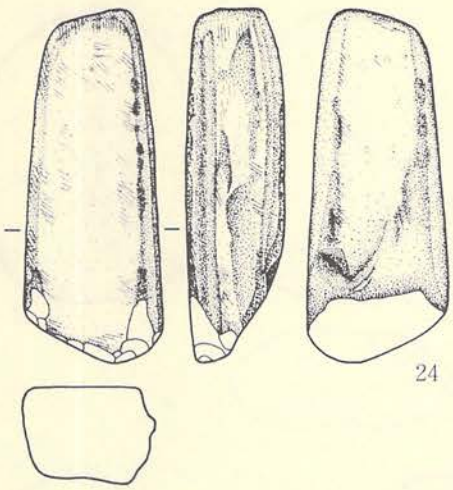


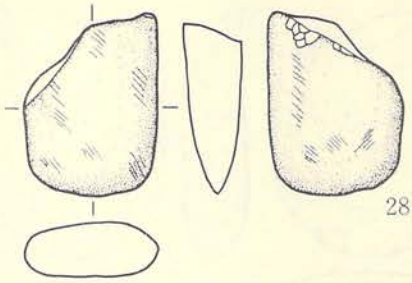
11～17　S＝$\frac{2}{3}$

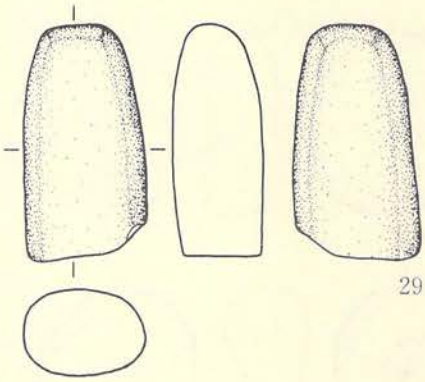
図版第56図　遺構外出土石器遺物

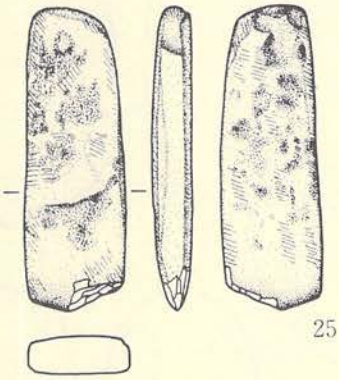


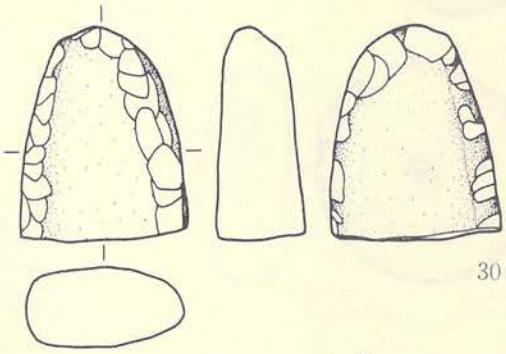
図版第57図　遺構外出土石器遺物



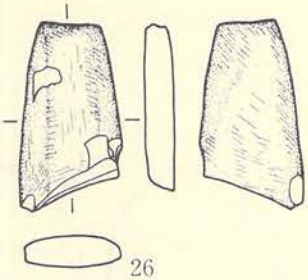


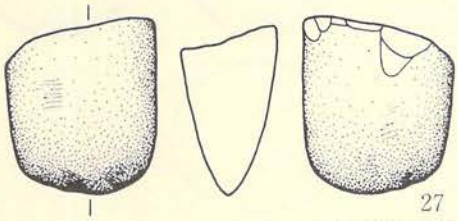


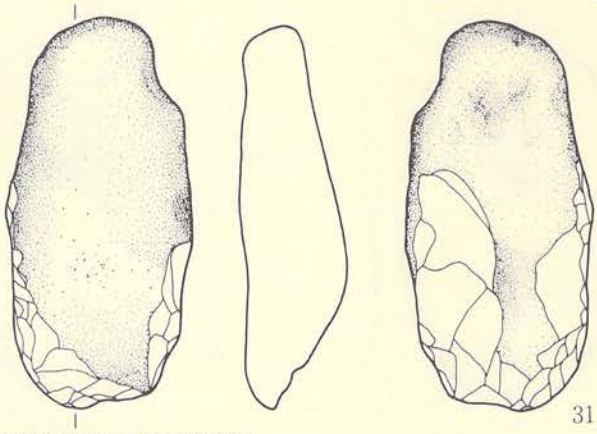




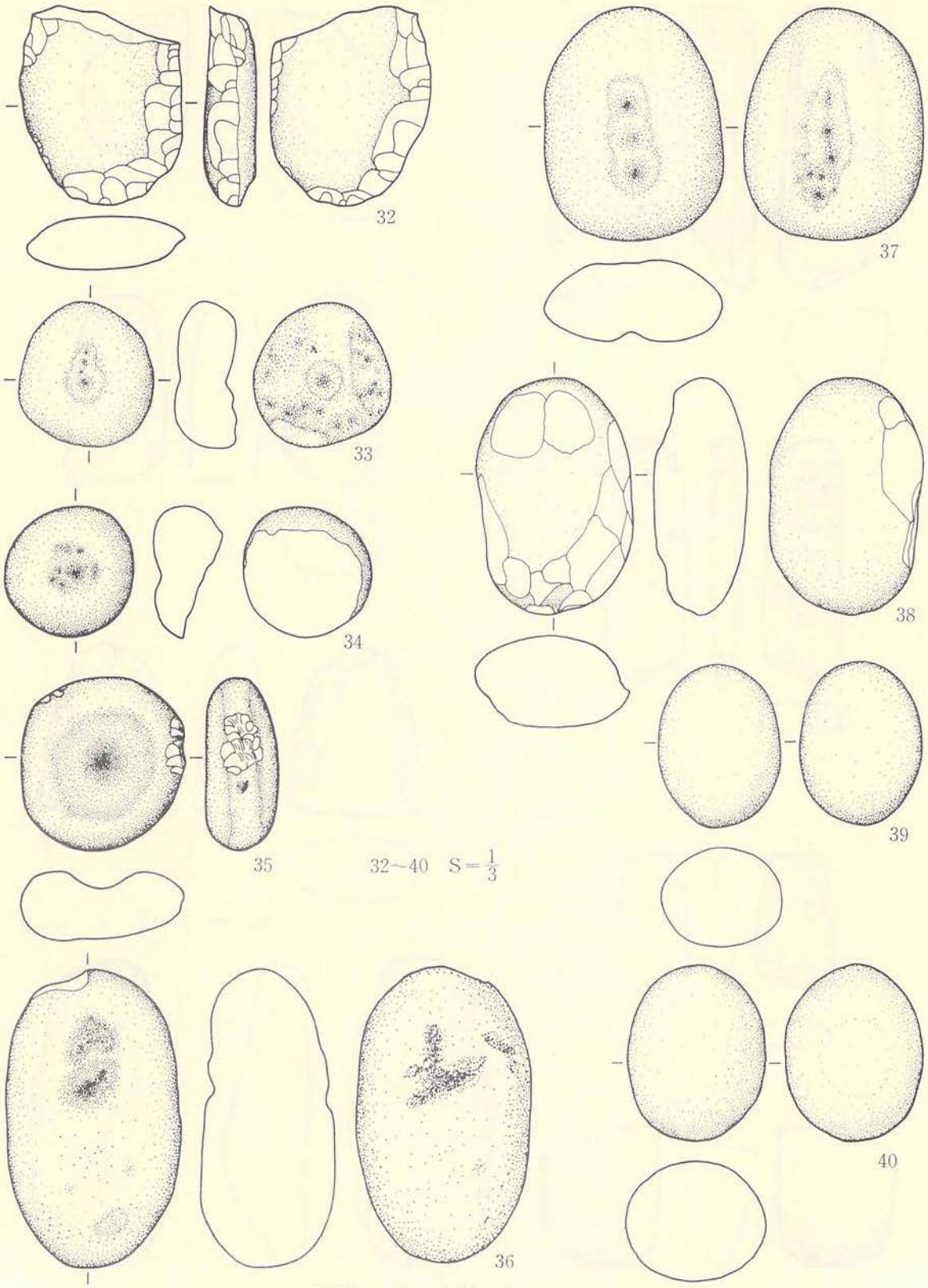
24～30　S＝$\frac{1}{3}$　31　S＝$\frac{2}{9}$



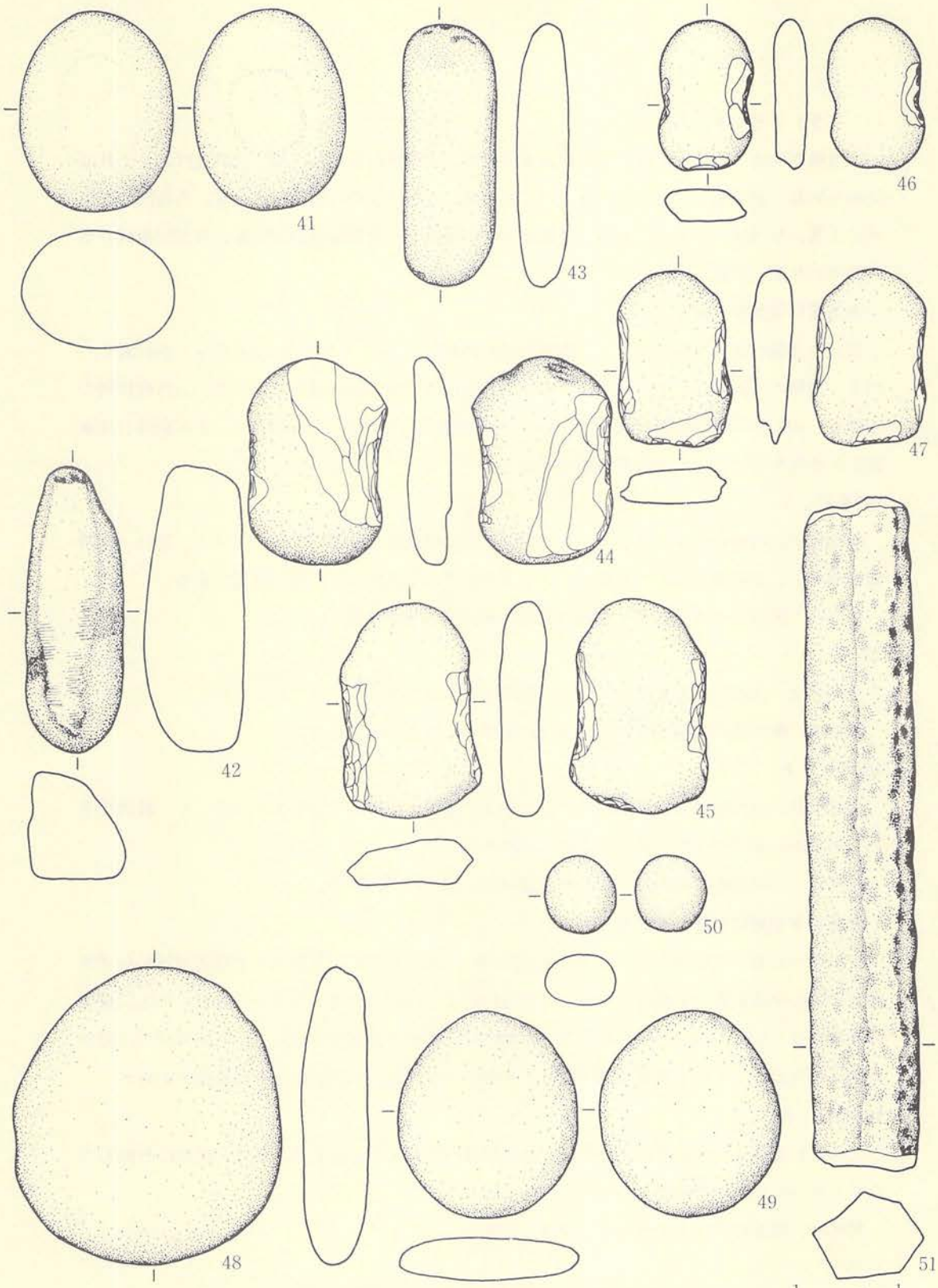




図版第58図　遺構外出土石器遺物



図版第59図　遺構外出土石器遺物



図版第60図　遺構外出土石器遺物　41～50 S＝$\frac{1}{3}$　51 S＝$\frac{1}{6}$

（9） ピット

本遺構で検出したピットは、第一次調査によってA地区から３基、第二次調査はよってB地区から55基、計58基である。その分布のしかたは、A地区東側の埋積谷に２基、A地区の平坦地に１基、B地区の平坦地に８基、B地区の平坦地西側の南西緩斜面に38基、B地区南側の南西斜面に９基が位置している。

A地区に位置するピット

東側の北側谷底に101号ピット、南側谷壁に102号ピット、平坦地に103号ピットが位置している。遺構の検出面は、101号が、中掫浮石と八戸降下火山灰が混入しあっている再堆積層の上面で、102号が中掫浮石と黒色土が混入しあう堆積層上面である。103号は、大不動浮石流凝灰岩が撹乱を受けている堆積層上面である。

101号ピット

全体形が逆円錐台形状を呈しているが、開口部の平面形が不整円になっている。壁は、南西側が垂直に、北東側が僅かに外傾して立ち上がっている。底面は、浅い丸底である。

規模は、開口部の直径75㎝、底面の直径42㎝、深さ53㎝である。

102号ピット

全体形は、ほぼ円筒形を呈している。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径110㎝、底面の直径85㎝、深さ50㎝である。

103号ピット

全体形は、逆円錐台形状を呈している。壁は、全体が外傾して立ち上がっている。底面は平坦であるが、北東の壁際底面に小さい凹がある。

規模は、開口部の直径90㎝、底面の直径54㎝、深さ70㎝である。

B地区平坦地に位置しているピット

平坦地の北東に位置する崖の縁辺付近に104号～106号ピット、平坦地の北縁辺付近から平坦地と西側の南西傾斜する緩斜面の傾斜変換線付近に107号～111号ピットが位置している。遺構の検出面は、104号・105号が、現地表面下40㎝に位置する黒褐色を呈している中掫浮石に明黄褐色が15％混入している再堆積層上面で、106号～111号は、八戸火山灰上層上面である。

104号ピット

ピットの西側が撹乱を受けているが、全体形は円筒形と考えられる。壁は、僅かに外傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

規模は、底面の直径107㎝、深さ53㎝である。

105号ピット

全体形は、ほぼ円筒形を呈している。開口部径よりも底面径の方が若干大きいため、壁は極く僅か内傾して立ち上がっている。

規模は、開口部の直径108㎝、底面の直径120㎝、深さ53㎝である。

ピットの埋土に直径35㎝程の穴が掘り込まれているが、この穴は耕作土から掘り込まれているものである。

106号ピット

平面形は、円形に近い楕円形である。壁は、外傾して立ち上がっている。底面は、同心円状に一段低く深り掘まれ段差がある。

規模は、開口部246㎝×210㎝、同心円状の下段の底面110㎝×90㎝である。

107号ピット

全体形は、逆円錐台形状を呈している。壁は、僅かに外傾して立ち上がっている。底面は、極く浅い丸底である。

規模は、開口部の直径175㎝、底面の直径93㎝、深さ80㎝である。

108号ピット

全体形は、円筒形を呈している。壁は、垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径150㎝、底面の直径142㎝、深さ50㎝である。

109号ピット

全体形は、ほぼフラスコ状を呈しているが、開口部の平面形が楕円形になっている。壁は、全周の3/4が内傾し、残りが外傾して立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部180㎝×135㎝、底面の直径152㎝、深さ70㎝である。

110号ピット

全体形は、ほぼ円筒形を呈している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、丸底である。

規模は、開口部の直径110㎝、深さ32㎝である。

111号ピット

全体形は、円筒形を呈している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径126㎝、深さ20㎝である。

B地区の平坦地西側からのびる南西緩斜面に位置しているピット

この南西に向く緩斜面には、112号～149号ピットが位置している。この斜面は、大不動浮石流凝灰岩が露出しており、遺構の検出面は、112号～149号のすべてが、大不動浮石流凝灰岩が撹乱を受けている面である。この地区の遺構の分布範囲は、およそ1,500㎡で、ピットの分布密度が高い。

112号ピット

全体形は、フラスコ状を呈しているが、開口部・底面の平面形は共に楕円形である。壁は、内傾して立ち上がっているが、南側の立ち上がりは垂直に近くなっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部148㎝×138㎝、底面176㎝×152㎝、深さ63㎝である。

113号ピット

全体形状は、円筒形である。壁は、垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径147㎝、深さ32㎝である。

114号ピット

平面形は、開口・底面共に歪円形である。規模は、開口部の直径110㎝、深さ14㎝である。

115号ピット

全体形状は、円筒形である。壁は、垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径132㎝、深さ34㎝である。

116号ピット

全体形状は、フラスコ状を呈しているが、開口部の平面形がほぼ円形、底面の平面形が不整楕円形となっている。壁は、うねりながら内傾して立ち上がっているが、北側の壁だけほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径150.5㎝、底面187㎝×150.7㎝、深さ70㎝である。

117号ピット

円筒形を呈しているピットである。平面形は開口部が円形であるが、底面は北側が僅かに脹らむ不整円形である。壁は、僅かに内傾し立ち上がっている部分と外傾して立ち上がっている部分がある。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径130㎝、底面140㎝×127㎝、深さ48㎝である。

118号ピット

ほぼ円筒形を呈しているピットである。平面形は、開口部・底面共に僅かに歪む不整円形である。壁は、僅かに外傾して立ち上がっているが、南西の壁のみ内傾している。底面は、浅い丸底である。

規模は、開口部の直径130㎝、底面の直径㎝、深さ40㎝である。

119号ピット

円筒形を呈しているピットである。平面形は、開口部が円形、底面が円形に近い楕円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径110㎝、底面100㎝×87㎝、深さ43である。

120号ピット

円筒形を呈しているピットである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径106㎝、底面の直径95㎝である。

121号ピット

平面形は、開口部・底面共に北西が張り出す不整楕円形である。壁は、垂直に立ち上がっている。底面は、地形の傾斜方向に下がっている。

規模は、開口部195㎝×155㎝、底面180㎝×140㎝である。深さは、23㎝と極めて浅い。

122号ピット

ほぼ円筒形を呈しているピットである。壁は、凹凸して立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径170㎝、底面の直径170㎝、深さ82㎝である。

123号ピット

ほぼ円筒形を呈しているピットであるが、平面形は、開口部が円形で、底面が東側が僅かに脹らむ不整円形である。壁は、全周のおよそ東半分が内傾し、西半分が僅かに外傾して立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径188㎝、底面の直径185㎝、深さ55㎝である。

124号ピット

フラスコ状を呈しているピットである。壁は、極く僅かに内彎して立ち上がっている。底面は平坦であるが、壁の立ち上がり部分が丸味をおびている。

規模は、開口部の直径140㎝、底面の直径146㎝、深さ55㎝である。

125号ピット

フラスコ状を呈しているピットである。平面形は、開口部が円形で、底面が円形に近い楕円形である。壁は、内彎して立ち上がっている部分と外傾して立ち上がっている部分とがある。底面は平坦であるが、壁の立ち上がり部分が丸味をおびている。

規模は、開口部の直径145㎝、底面160㎝×145㎝、深さ60㎝である。

126号ピット

フラスコ状を呈しているピットである。壁は全体的に内傾して立ち上がっているが、南東側の壁だけ垂直に立ち上がっている。底面は、極めて浅い丸底である。

規模は、開口部の直径150㎝、底面の直径170㎝、深さ60㎝である。

ピットの埋土断面図のａは、耕作による掘り込みである。

127号ピット

フラスコ状を呈しているピットである。平面形は、開口部が不整円形で、底面は不整楕円形である。壁は全周のおよそ2/3が内傾し、残りがほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径175㎝、底面198㎝×183㎝、深さ76㎝である。

128号ピット

円筒形を呈しているピットである。平面形は、僅かに歪む不整円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径144㎝、底面の直径141㎝、深さ36㎝である。

129号ピット

フラスコ状を呈しているピットである。平面形は、開口部・底部共に円周が凹凸している不整円形である。壁は全体的に内傾して立ち上がっているが、西側の壁だけ垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径130㎝、底面の直径115㎝、深さ70㎝である。

130号ピット

フラスコ状を呈しているピットである。壁は内傾して立ち上がっているが、その傾きは東側が大きく、西側では垂直に立ち上がっている。底面は緩く起伏している。

規模は、開口部の直径140㎝、底面の直径160㎝、深さ80㎝である。

131号ピット

フラスコ状を呈しているピットである。壁は内傾して立ち上がっているが、壁下半の傾きの方が大きくなっている。底面は、丸底で極めて浅い。

規模は、開口部の直径140㎝、底面の直径175㎝、深さ76㎝である。

132号ピット

フラスコ状を呈しているピットである。壁は下半が強く内彎し、上半で外傾している。底面は、ほぼ平坦である。

規模は、開口部の直径174㎝、底面の直径140㎝、深さ85㎝である。

133号ピット

平面形は、開口部・底面共に楕円形である。壁は、外傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

規模は、開口部200㎝×175㎝、底面173㎝×152㎝、深さ85㎝である。

134号ピット

フラスコ状を呈しているピットである。平面形は、開口部・底面共に楕円形である。壁は全周の2/3が内傾し、南東側の1/3の壁が外傾して立ち上がっている。底面は、緩く起伏している。

規模は、開口部160㎝×132㎝、底面162㎝×146㎝、深さ70㎝である。

135号ピット

フラスコ状を呈しているピットである。平面形は開口部が僅かに歪む不整円形で、底面は不整楕円形である。壁は、全周の1/2強が内傾し、残りの部分が極く僅か外傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

規模は、開口部の直径116㎝、形面148㎝×125㎝、深さ87㎝である。

136号ピット

ほぼ円筒形を呈しているピットである。平面形は、開口部・底面共に僅かに歪む不整円形である。壁は、全体的に僅かに外傾して立ち上がっているが、北東側の壁の一部が僅かに内傾している。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径96㎝、底面の直径115㎝、深さ73㎝である。

137号ピット

ほぼ円筒形を呈しているピットである。平面形は、開口部・底面共に僅かに歪むがほぼ円形である。壁は、全体的に垂直ぎみに立ち上がっているが、東側の壁から南側の壁にかけて僅かに内傾斜して立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径150㎝、底面の直径143㎝である。

138号ピット

本遺構の南側半分が275号陥し穴状遺構によって切られているが、全体形状がほぼ円筒形を呈するものと考えられる。残存している遺構の北側半分の壁は、ほぼ僅かに外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。

規模は、残存部から開口部の直径140㎝、底面の直径115㎝と推定される。

139号ピット

本遺構の西側の一部が275号陥し穴状遺構によって切られているが、全体形状はほぼ円筒形を呈するものと考えられる。壁は、全体的にほぼ垂直ぎみに立ち上がっている。底面は平坦である。

規模は、開口部の直径143㎝、底面の直径138㎝である。

140号ピット

フラスコ状を呈しているピットである。壁は、全周の1/2が僅かに内傾し、残りが垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径156㎝、低面の直径169㎝、深さ118㎝である。

141号ピット

フラスコ状を呈しているピットである。平面形は、開口部・底面共に不整円形である。壁は南側の壁の一部が垂直に立ち上がる他は、壁の下半が内傾し、上半で垂直ないしはやや外傾して立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径165㎝、底面の直径175㎝、深さ110㎝である。

142号ピット

フラスコ状を呈しているピットである。平面形は、開口部・底面共に円形である。壁は、底面から内傾して立ち上がった後に、開口部近くで開いている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径145㎝、底面の直径152㎝、深さ90㎝である。

143号ピット

ほぼ円筒形を呈しているピットである。平面形は、開口部・底面共に円形である。壁は、全周の北側半分が僅かに内傾し、残りの南側半分が僅かに外傾して立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径168㎝、底面の直径160㎝、深さ77㎝である。

144号ピット・145号ピット

144号・145号の2基共に円筒形を呈しているピットである。144号の平面形は、開口部がほぼ円形で、底面が不整楕円形である。壁は、僅かに外傾して立ち上がっている。底面は、平坦である。

145号の平面形は、開口部・底面共に円形である。壁は、僅かに外傾して立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、144号の開口部の直径185㎝、底面127㎝×105㎝、深さ120㎝で、145号の開口部の直径155㎝、底面の直径105㎝、深さ105㎝である。

144号と145号は重複しており、145号が144号の南端を切って遺構を築いている。

146号ピット

遺構の西側半分弱が調査区外にのびており、完掘りはできなかったが、円筒形を呈するピットと考えられる。平面形は、検出部分で開口部・底面共に半円であり、全体形は円形と推定される。壁は、垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径157㎝、底面の直径154㎝、深さ 110 ㎝である。

147号ピット

円筒形を呈しているピットである。平面形は、開口部・底面共に円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部165㎝、底面150㎝、深さ102㎝である。

148号ピット

円筒形を呈しているピットである。平面形は、開口部が円形で、底面が楕円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径190㎝、底面170㎝×152㎝、深さ112㎝である。

149号ピット

平面形は、開口部・底面共に不整円形である。壁は、外傾して立ち上がっている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径248㎝、底面の直径150㎝、深さ75㎝である。

B地区南側の南西斜面に位置しているピット

この南西斜面には、黒色土や中掫浮石火山灰が比較的厚く堆積しており、この区域から 150 号～158 号ピットを検出した。検出面は、中掫浮石がブロックで堆積する上層に位置している黒色土の上面である。

150号ピット

平面形は、ほぼ円形である。壁は、僅かに外傾して立ち上がっている。底面は、同心円状に一段深く掘り込まれており段差がある。

規模は、開口部の直径145㎝、底面直の径75㎝、深さ140㎝である。

153号ピット

平面形が円形で、丸底のピットである。極めて浅く、底面の丸底の立ち上がりが開口部まで続いている。

規模は、開口部の直径86㎝、深さ21㎝である。

154号ピット

ほぼ円筒形を呈しているピットである。平面形は、開口部・底面共に不整楕円形である。壁は、垂直に立ち上がっている部分と下半が垂直に立ち上がり開口部近くで開く部分とがある。底面は、平坦である。

規模は、開口部135㎝×116㎝、底面80㎝×70㎝、深さ86㎝である。

155号ピット

平面形が開口部・底面共に楕円形を呈しているピットである。壁は、外傾して立ち上がって

いる。底面は、ほぼ平坦である。

規模は、開口部270cm×222cm、底面205cm×143cm、深さ73cmである。

156号ピット

ほぼ円筒形を呈しているピットである。平面形は、開口部が不整楕円形、底部が不整円形である。壁は、僅かに外傾して立ち上がっている。底面は、丸底である。

規模は、開口部100cm×84cm、底面の直径68cm、深さ27cmである。

157号ピット

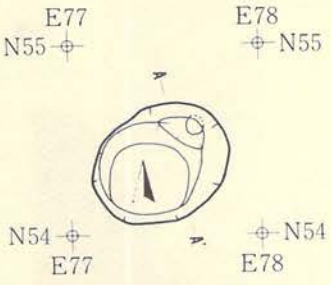
ほぼ円筒形を呈しているピットである。平面形は、開口部・底面共に不整円形である。壁は、全周の1/2が僅かに内傾し、残りが僅かに外傾して立ち上がっている。底面は緩く凹凸している。

規模は、開口部の直径95cm、底面の直径85cm、深さ45cmである。

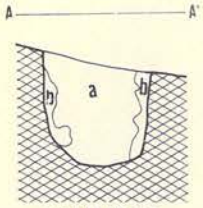
158号ピット

円筒形を呈しているピットである。平面形は、開口部・底面共に円形である。壁は、垂直に立ち上っている。底面は、平坦である。

規模は、開口部の直径80cm、底面の直径70cm、深さ18cmである。



101号平面

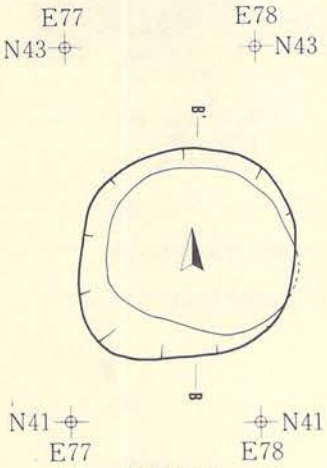


101号断面

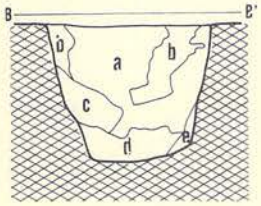
101号注記

a．褐色(10YR4/6)シルト。粒径大の明黄褐色の浮石を5％混入している

b．暗褐色(10YR3/4)微砂。粒径大の明黄褐色の浮石を20％混入している。



102号平面



102号注記

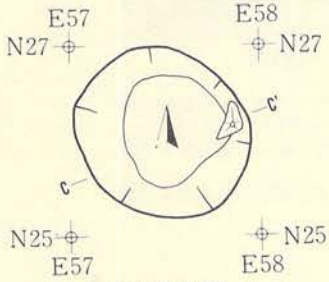
a．黒色(10YR2/1)微砂。粒径大の明黄褐色の浮石を均一に含む。。

b．黒色(10YR2/2)性状・混入物はaに同じ。

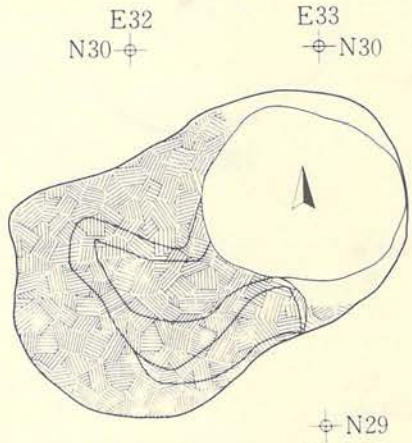
c．黒褐色(10YR2/3)微砂。粒径極小～小の明黄褐色の浮石を含む。

d．黒褐色(10YR2/2～2/3)微砂。混入物cに同じ。

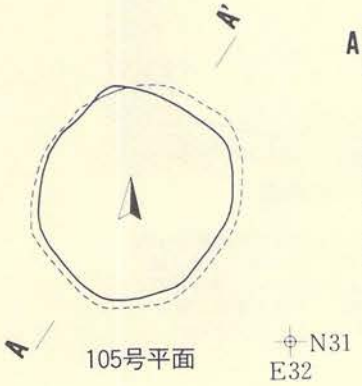
e．褐色(10YR3/3)微砂。混入物cに同じ。



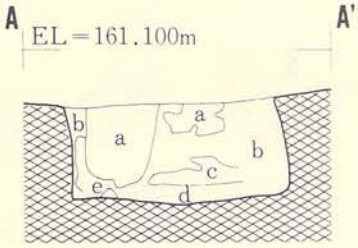
103号平面



104号平面



105号平面



105号断面

105号注記

a．黒色(10YR2/1)微砂に極小粒状の火山灰が多量に混入している。

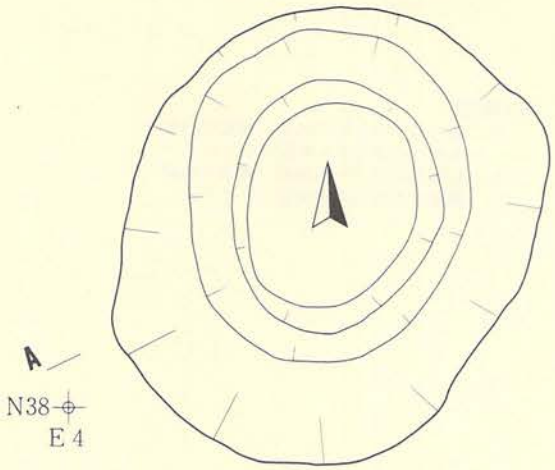
b．黒褐色(10YR2/2)微砂

c．黒褐色(7.5YR2/2)微砂　混入物aに同じ

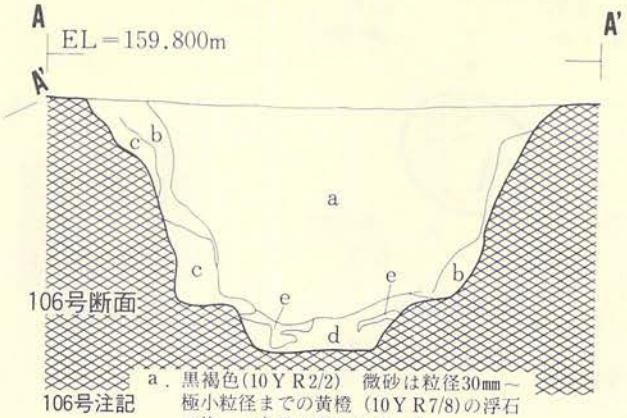
d．黒色(7.5YR2/1)微砂　混入物aに同じ

e．黄褐色(10YR5/8)シルト(大不動の撹乱土)

図版第61図　ピット、平・断面図



106号平面



106号断面

106号注記

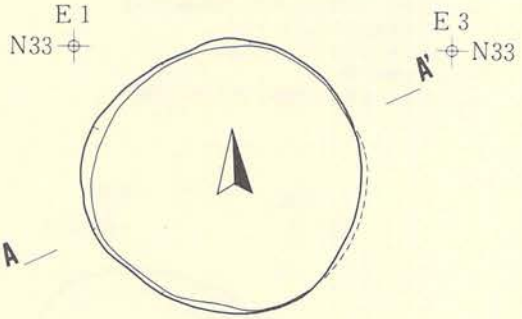
a．黒褐色(10Y R2/2)　微砂は粒径30㎜～極小粒径までの黄橙（10Y R7/8)の浮石が均一に多量に含まれている

b．褐色(10Y R4/4～4/6)微砂に10㎜～極小までの明黄褐色(10Y R7/6)の浮石が上層に15%含まれ中、下層にはその量が少ない。

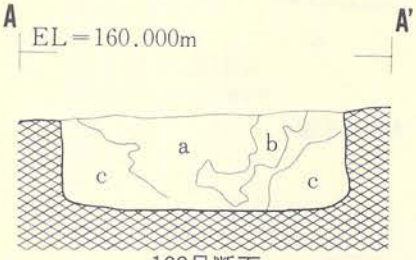
c．黄褐色(10Y R5/3)シルト(八戸か大不動の撹乱土)

d．黒褐色(10Y R2/2)微砂。性状、含有物、色調ともにaに同じ。

e．黄色(2.5Y 8/6)～明黄褐色(2.5Y 7/6)シルト(大不動のシラス)



108号平面



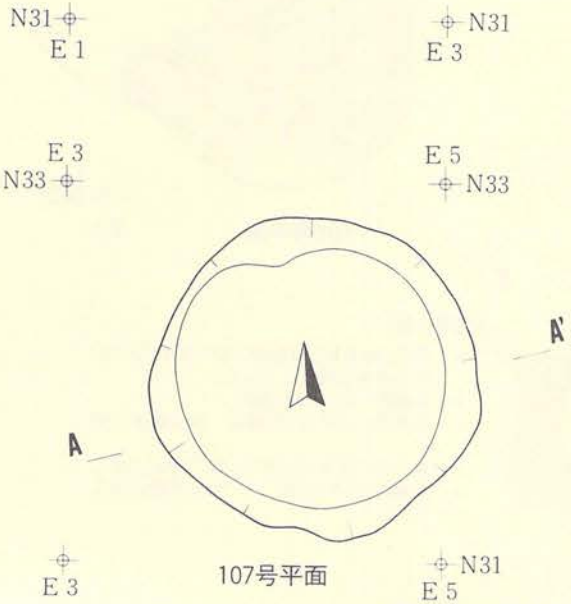
108号断面

108号注記

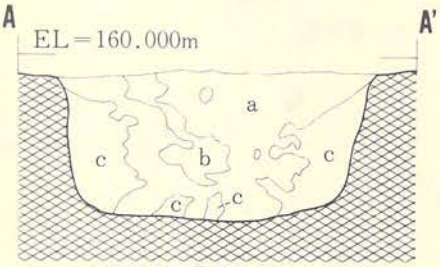
a．黒色(10Y R1.7/1～10Y R2/1)微砂に極小粒状の火山灰が多量に混入している。

b．黒褐色(10Y R2/3)微砂　混入物aに同じ

c．黒褐色(10Y R3/2)微砂　混入物aに同じ



107号平面



107号断面

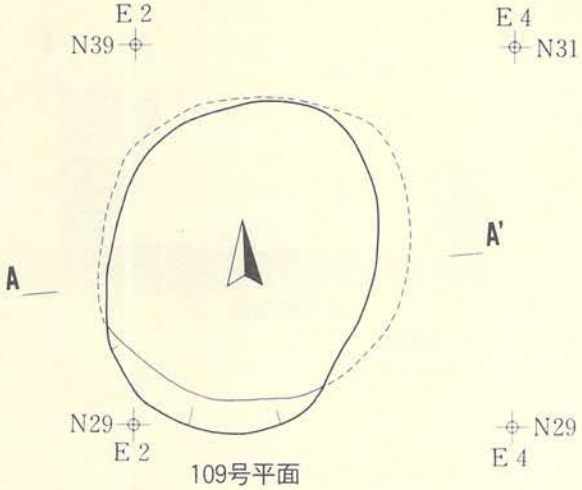
107号注記

a．黒褐色(10Y R4/4)微砂に明黄褐色(10Y R6/6)の極小粒状の火山灰を多量に混入

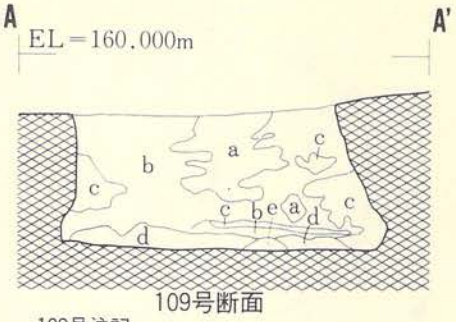
b．暗褐色(10Y R3/4)シルトに極小粒状の明黄褐色、黄橙の火山灰を多量に混入

c．褐色(10Y R4/6)シルト(八戸火山灰)

図版第62図　ピット、平・断面図



109号平面



109号断面

109号注記

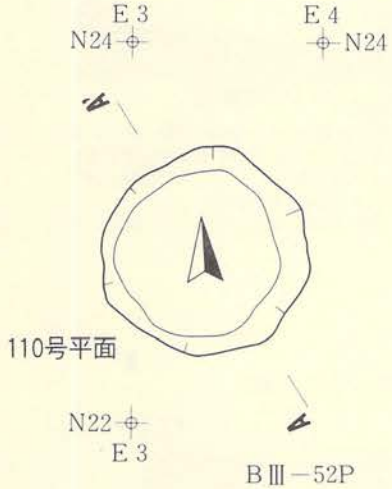
a．褐色(10Y R4/4)シルトに明黄褐色(10Y R 6 /6)の極小粒状の浮石を多量に混入

b．黒褐色(10Y R2/2)シルトに黄橙、明黄褐色の極小粒状の浮石を多量に混入している。

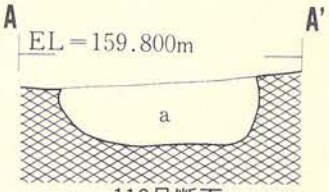
c．暗褐色(10Y R3/3)シルト(混入物bに同じ)

d．暗褐色(10Y R3/4)シルト(混入物bに同じ)

e．黒褐色(10Y R3/2)シルトと、明黄褐色(10Y R6/6)シルトの混合したシルト



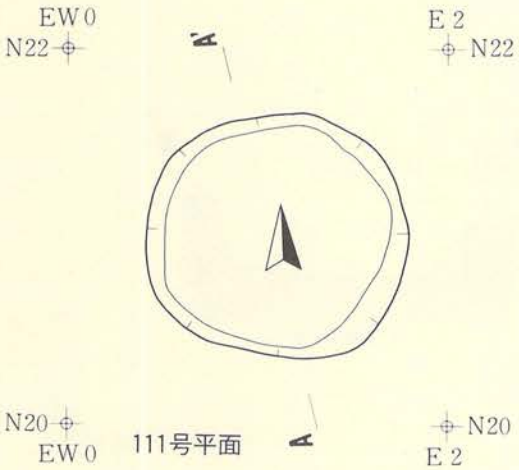
110号平面



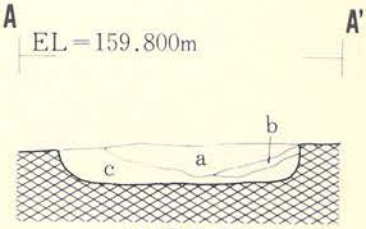
110号断面

110号注記

a．10Y R2/2黒褐色土



111号平面



111号断面

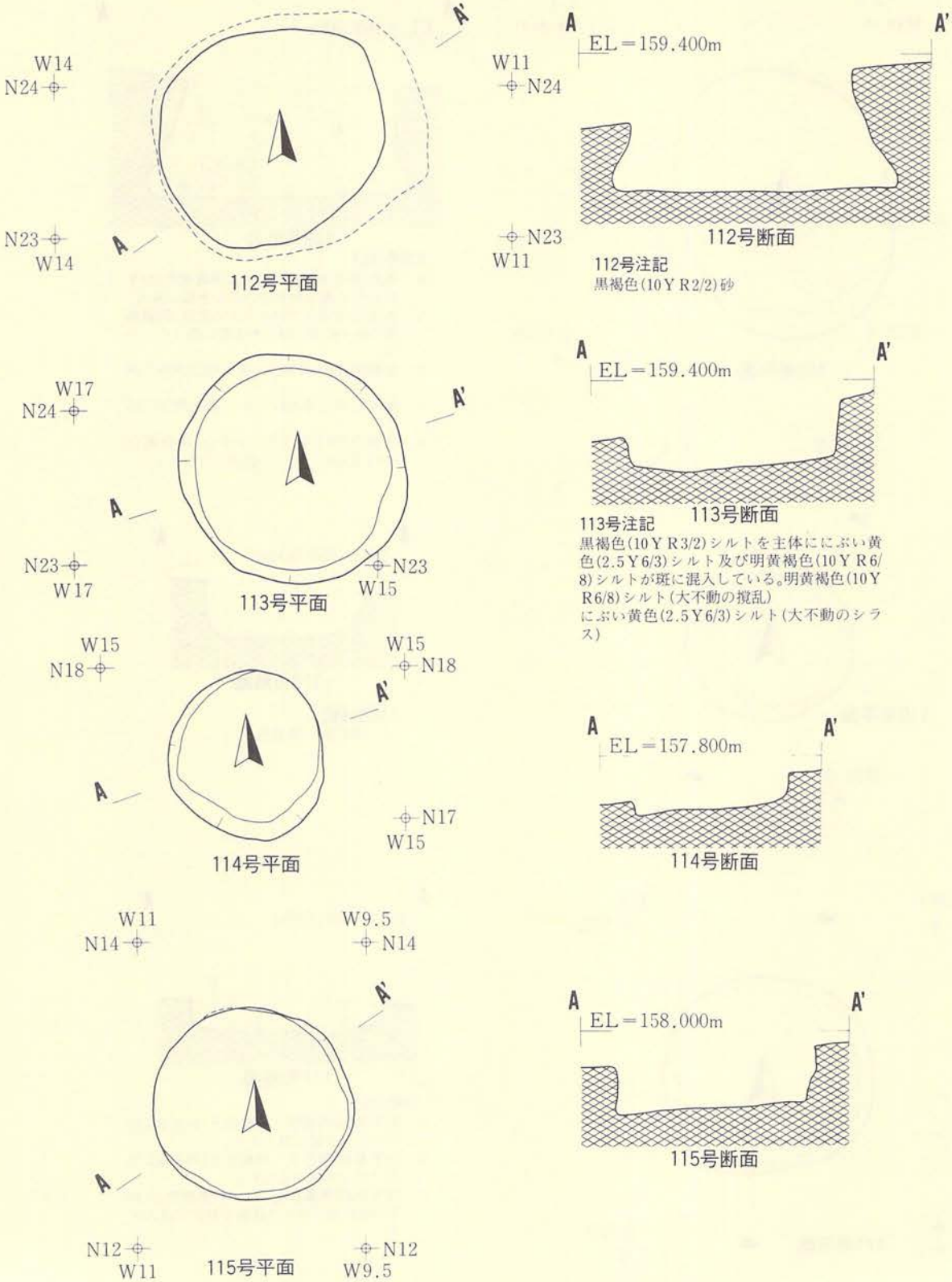
111号注記

a．10Y R2/3黒褐色土　褐色土(10Y R4/6)がブロック状に混入する。

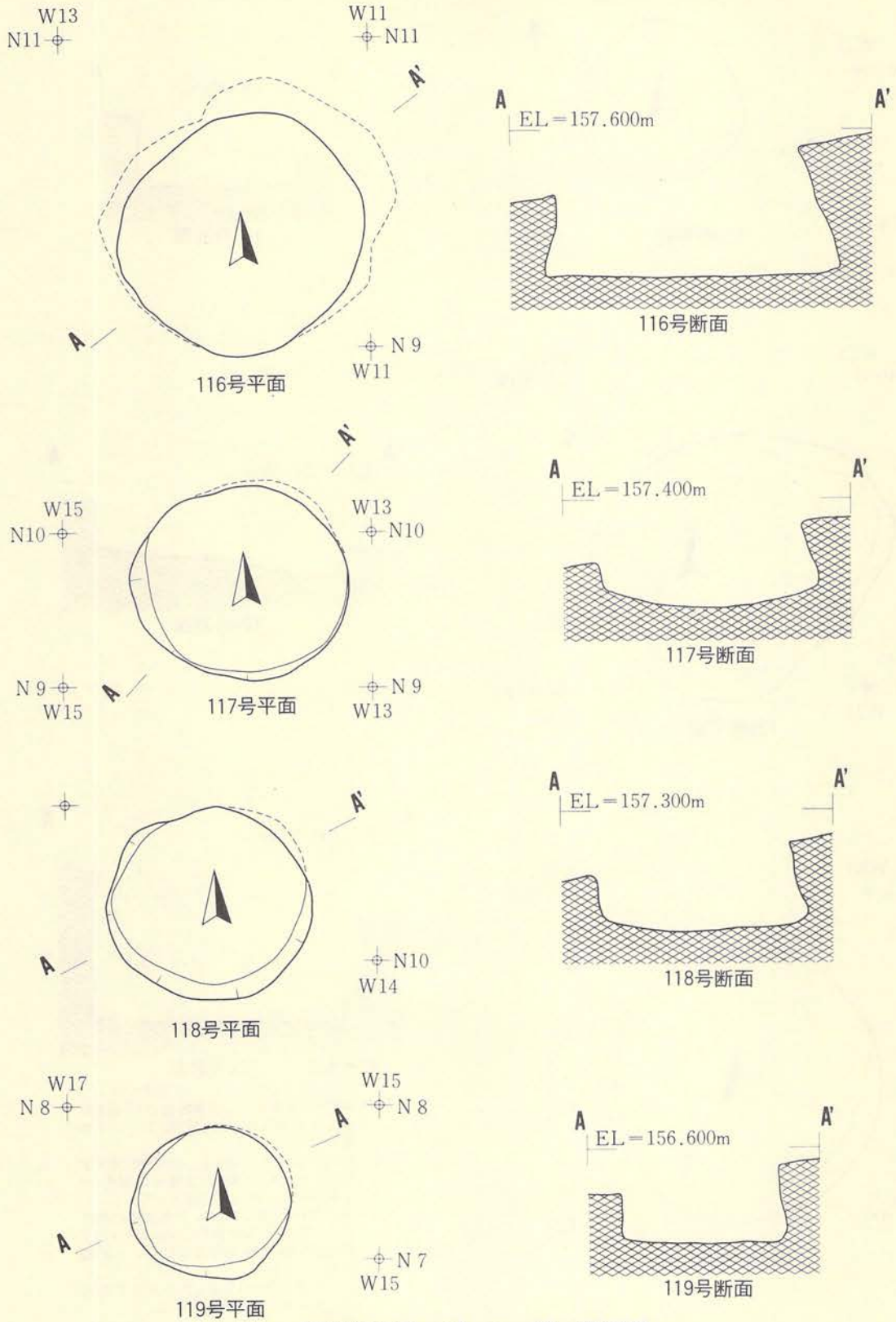
b．10Y R4/6褐色土　黒褐色土(10Y R2/3)がブロック状に混入する。

c．10Y R3/2黒褐色土　にぶい黄橙色土(10Y R6/4)がブロック状及び斜状に混入する。

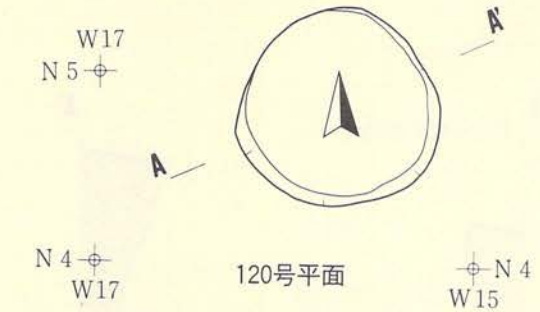
図版第63図　ピット、平・断面図



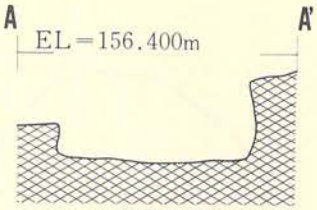
図版第64図　ピット、平・断面図



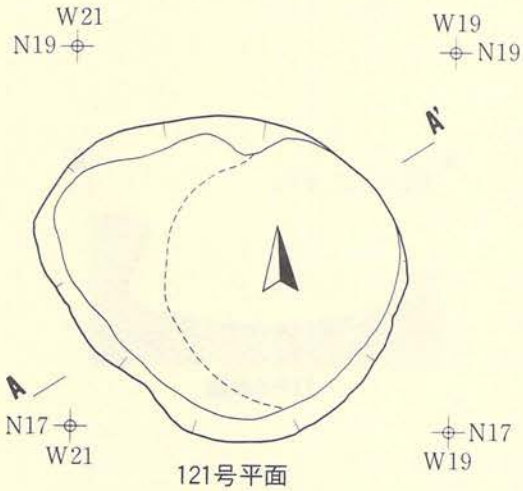
図版第65図　ピット、平・断面図



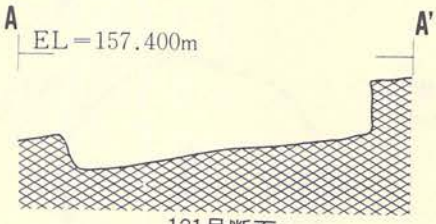
120号平面



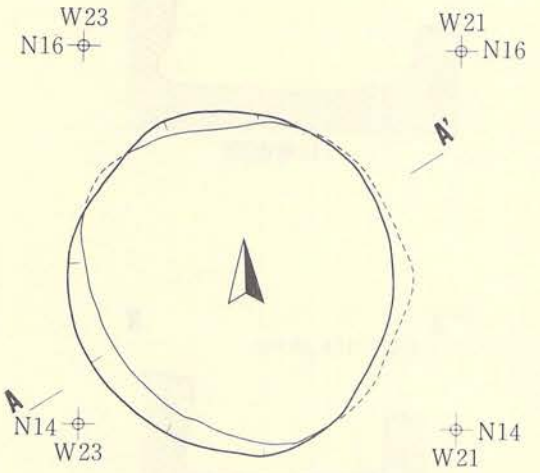
120号断面



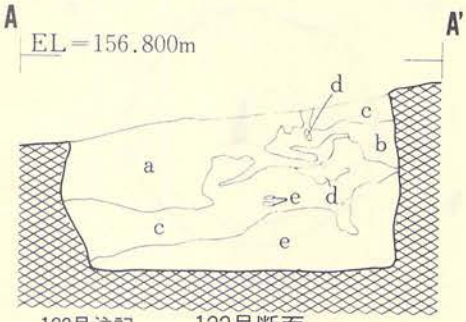
121号平面



121号断面



122号平面



122号注記　　122号断面

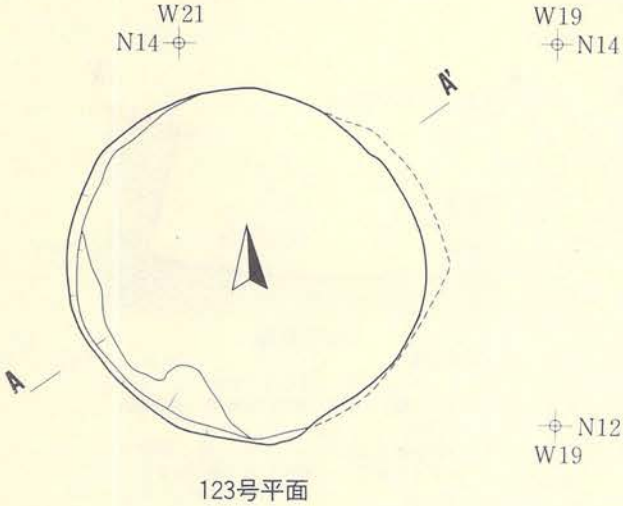
a．褐色(10Y R 4/4)シルトを主体ににぶい黄橙(10Y R 6/4)の明黄褐色(10Y R 6/6)シルト及び黒褐色(10Y R 2/3)シルトが斑に混入している。

b．にぶい黄橙(10Y R 6/4)～明黄褐(10Y R 6/6)シルト(大不動)を主体に黒褐色(10Y R 2/3)シルトが斑に混入している。

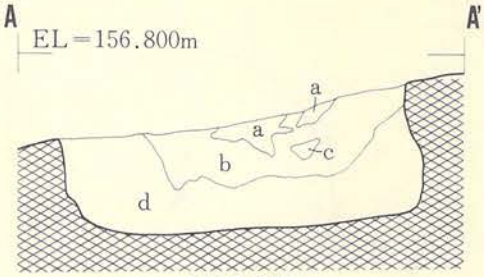
c．黒褐色(10Y R 2/3)シルトを主体に褐色(10Y R 4/4)シルト及びにぶい黄橙(10Y R 6/4)～明黄褐(10Y R 6/6)シルトが斑に混入している

d．にぶい黄褐色(10Y R 4/3)シルトであるが上方がやや褐色化している。

図版第66図　ピット、平・断面図



123号平面



123号断面

123号注記

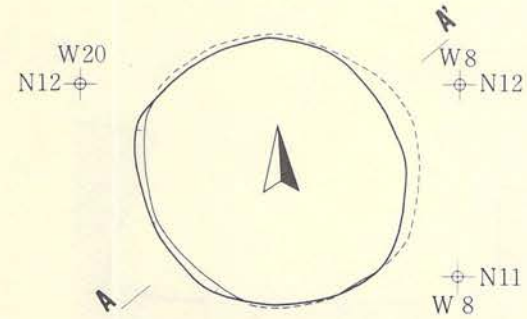
a．黒色(10Y R2/1)シルト、黒褐色(10Y R 2/3)シルト、黄橙(10Y R 6/4)～明黄橙(10Y R6/6)シルト

b．黒褐色(10Y R2/3)シルトを主体に黒色(10Y R3/1)シルト、黄橙～明黄橙シルトが斑に混入している。

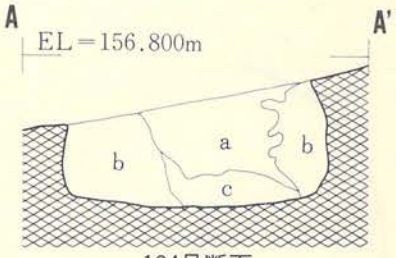
c．暗褐色(10Y R3/4)シルト(大不動の撹乱土)

d．にぶい黄褐色(10Y R4/3)シルト

※a～dは大不動



124号平面



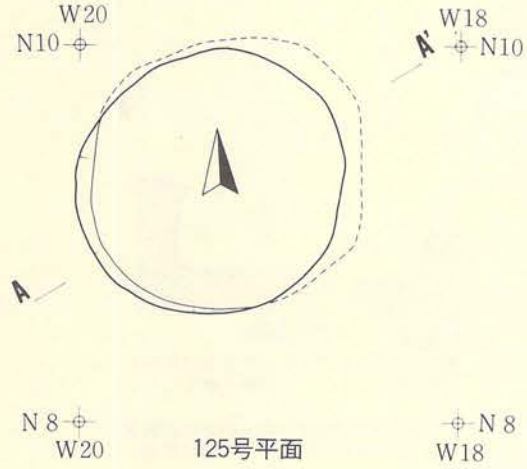
124号断面

124号注記

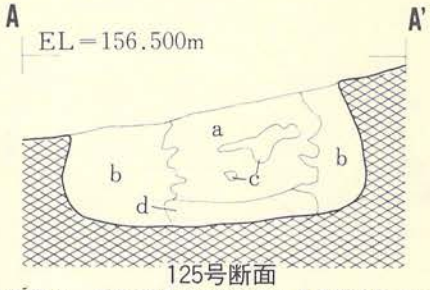
a．褐色(10Y R4/4)シルトを主体ににぶい黄橙(10Y R6/4)～明褐色(10Y R6/6)及び黒褐色(10Y R2/6)シルトが斑に混入している。

b．明黄褐色(10Y R6/3)シルト(大不動の撹乱土)

c．にぶい黄褐色(10Y R4/4)シルト(大不動)



125号平面



125号断面

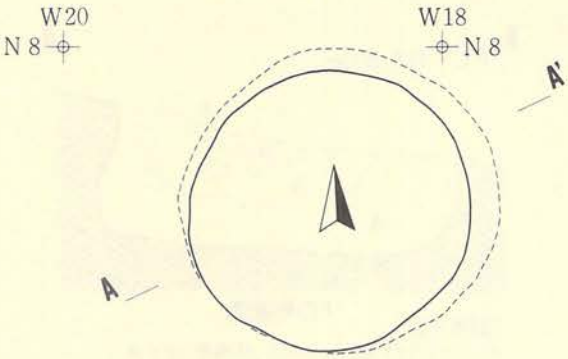
125号注記 a．褐色(10Y R4/4)シルトを主体ににぶい黄橙(10Y R6/4)～明褐色(10Y R6/6)シルト及び黒褐(10Y R2/2)シルトが斑に混入している。

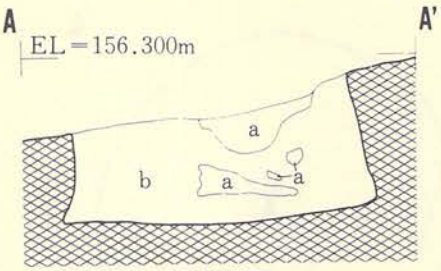
b．明黄褐色(10Y R6/3)シルトは不動の撹乱土)を主体にぶい黄褐色(10Y R6/4)シルト(大不動)が斑に混入している。

c．にぶい黄色(2.5Y 6/2)に褐色(10Y R4/4)シルトがにじんでいる。

d．にぶい黄褐色(10Y R4/3)シルト(大不動)

図版第67図　ピット、平・断面図





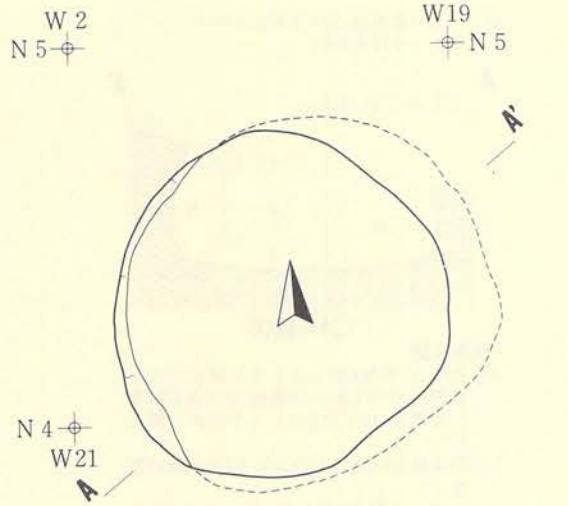
126号断面

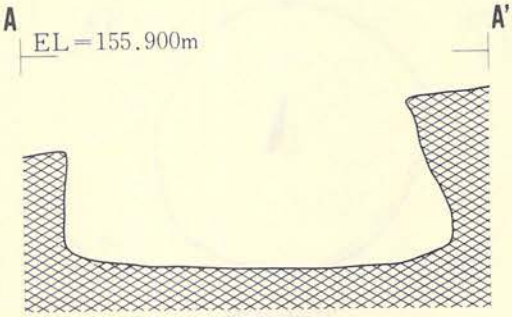
126号平面

126号注記

a．にぶい黄褐色(25Y6/2)シルト(大不動)を主体に黄色、黒褐色シルトが斑に混入している。

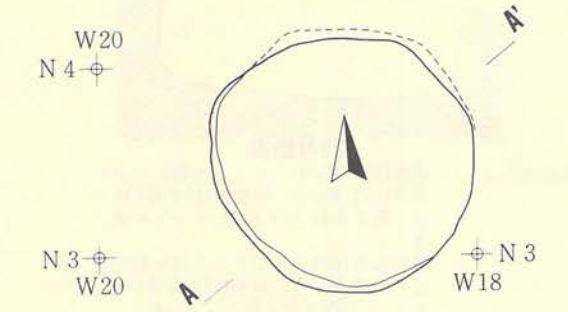
b．褐色(10YR4/4)シルトを主体に黒褐色(10YR3/2)シルト及び黄褐色(10YR6/4)シルト　にぶい黄色(2.5Y6/3)シルトが混入している。

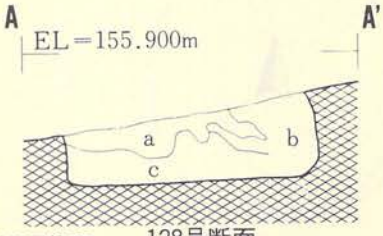




127号断面

127号平面





128号断面

128号平面

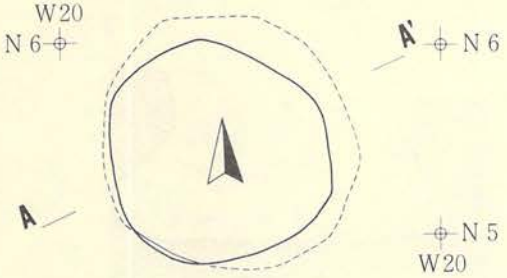
128号注記

a．褐色(10YR4/4)シルトを主体ににぶい黄色(25Y6/3)シルトが斑に混入している。

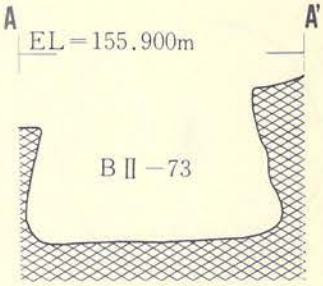
b．暗褐色(10YR3/4)シルトを主体に明黄褐色(10YR6/8)シルト(大不動)が斑に混入している。

c．明黄褐色(10YR6/8)シルト(大不動)

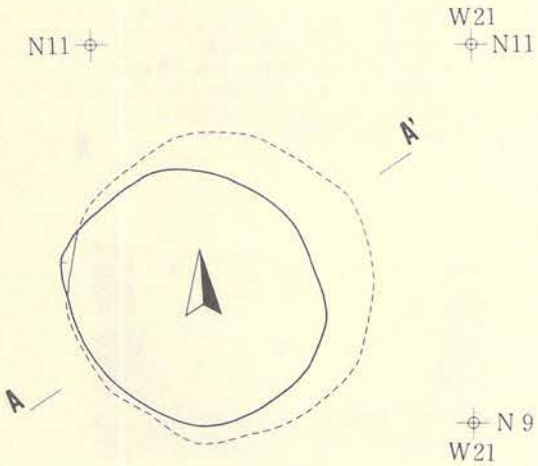
図版第68図　ピット、平・断面図



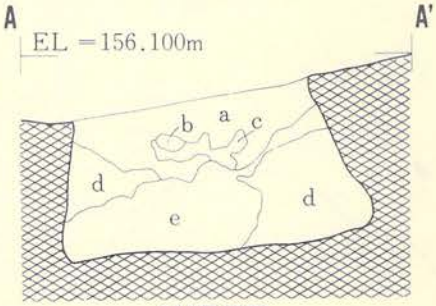
129号平面



129号断面



130号平面



130号断面

103号注記

a．黒褐色(10Y R2/3)シルトを主体に黒色(10Y R2/1)シルト及び黄橙(10Y R6/4)～明黄橙(10Y R6/6)シルトが斑に混入している。

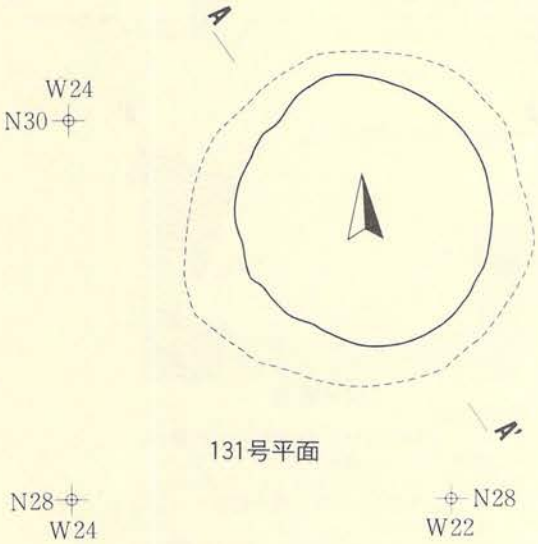
b．黄褐色(10Y R5/6)シルトを主体に暗褐色(10Y R4/4)シルトが斑に混入している。

c．暗褐色(10Y R3/3)シルトを主体にぶい黄褐色(10Y 4/3)シルトが斑に混入

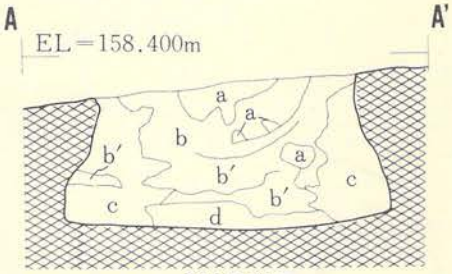
d．褐色(10Y R4/6)シルト(大不動)

e．にぶい黄褐色(10Y R4/3)シルト

※a～dは大不動



131号平面



131号断面

131号注記

a．にぶい黄褐色(10Y R5/4)シルト(大不動のシラス)

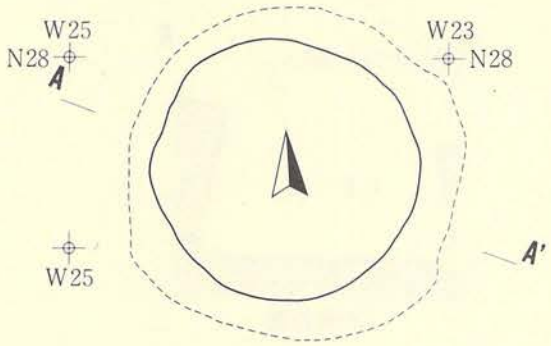
b．黒褐色(10Y R2/3)中掘まじり微砂を主体に褐色(10Y R4/4)の微砂が斑に混入している。

b′．bと性状、土色ともにほとんど同じである。

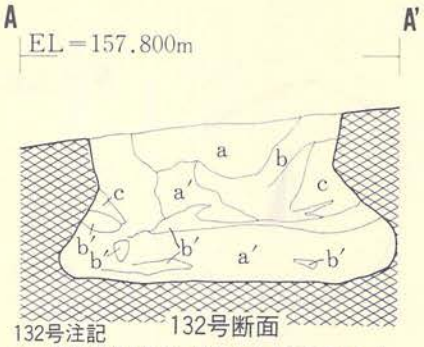
c．黄褐色(10Y R5/8)シルト(大不動の撹乱土)

d．にぶい黄橙(10Y R2/3)シルト(大不動のシラス)と暗褐色(10Y R3/4)及び黒褐色(10Y R2/3)微砂の混合土

図版第69図　ピット、平・断面図



132号平面



132号断面

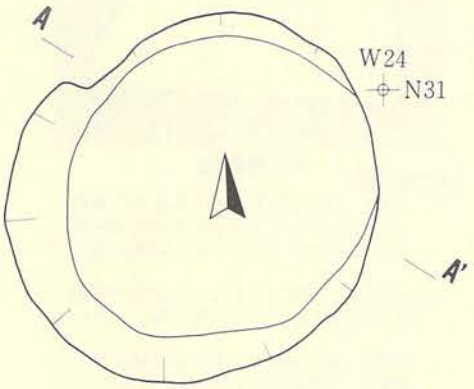
132号注記

a．黄褐色(10Y R5/6)シルト(大不動)を主体に同質の暗褐色(10Y R3/3)が斑に混入

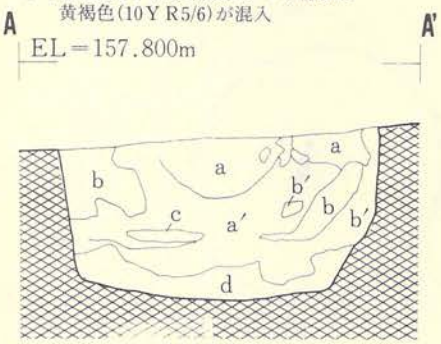
a'．黄褐色(10Y R5/6)シルトを主体に僅かに暗褐色(10Y R3/3)が斑に混入

b．暗褐色(10Y R3/3)微砂を主体に黄褐色(10Y R5/6)シルトが斑に混入している。

b'．褐色(10Y R2/2)微砂がごく僅かに黄褐色(10Y R5/6)が混入



133号平面



133号断面

133号注記

a．黒褐色(10Y R2/3)中堀まじり微砂を主体に褐色(10Y R4/4)の微砂が斑に混入している。粒径大～極小までの黄橙(10Y R7/8)の浮石が10%混入

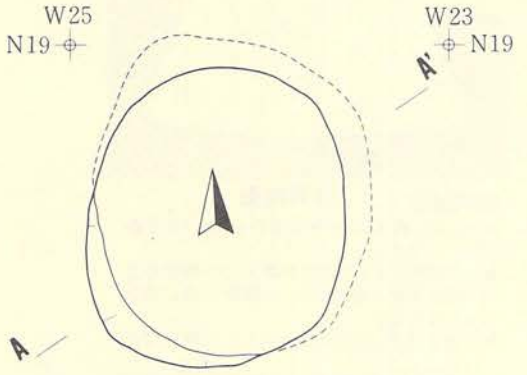
a'．黒褐色(10Y R2/2)を主体に褐色(10Y R4/6)が斑に混入する性状はaに同じ

b．暗褐色(10Y R3/3)を主体に褐色(10Y R4/6)が斑に混入している。性状はaに同じものに大不動の撹乱土が混入している。

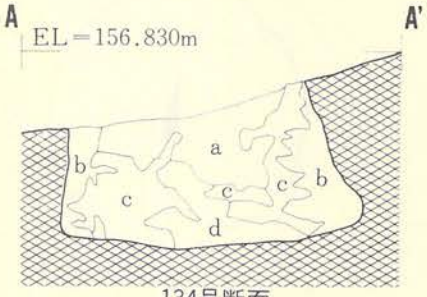
b'．黄褐色(10Y R5/8)シルトに黄橙(10Y R8/8)の粒径大～極小までの浮石が10%混入している。

c．黒褐色(10Y R2/2)砂まじり微砂(かたくしまっている)

d．褐色(10Y R4/6)シルトと黒褐色(10Y R2/3)シルトが斑に混入している。



134号平面



134号断面

134号注記

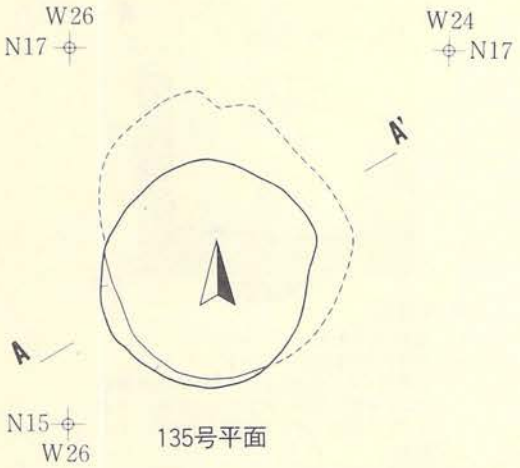
a．にぶい黄褐色(10Y R4/3)シルトに極小粒状の火山灰が多量に混入している。

b．黄褐色(10Y R5/8)シルト(八戸火山灰)

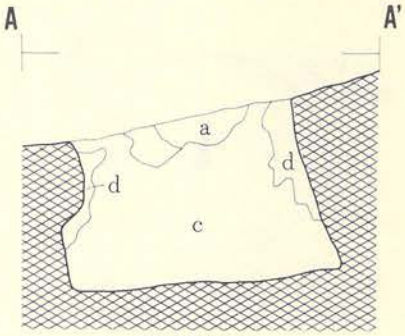
c．黒色(10Y R2/1)微砂に極少粒状の火山灰が多量に混入している。

d．暗褐色(10Y R3/4)シルトに極小粒状の火山灰が多量に混入している。

図版第70図　ピット、平・断面図



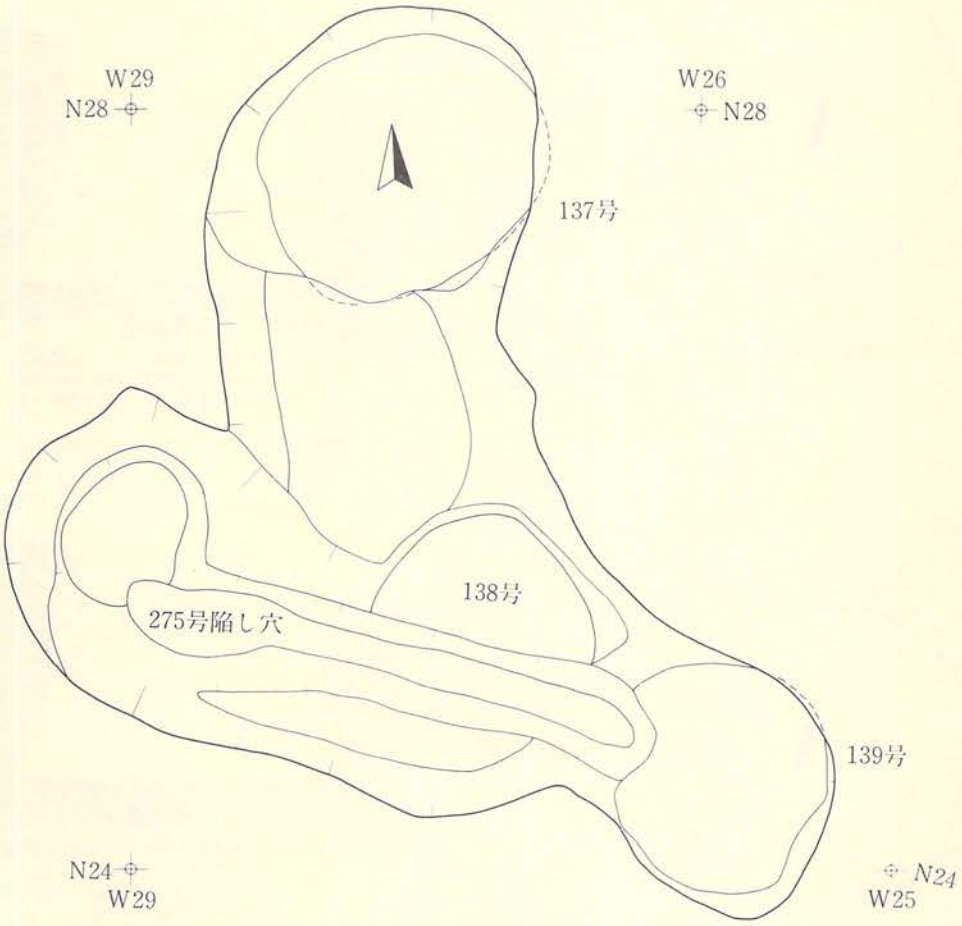
135号平面



135号断面

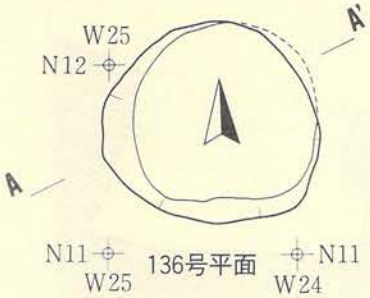
135号注記

a．褐色(10Y R4/4)シルト
b．黄褐色(10Y R5/8)シルト
c．暗褐色(10Y R3/3)微砂を主体に、黒褐色(10Y R2/2)微砂(両方に中撹がやや混入)及び褐色(10Y R4/4～4/6)シルトが混入
d．黄褐色(10Y R5/8)シルト(大不動)

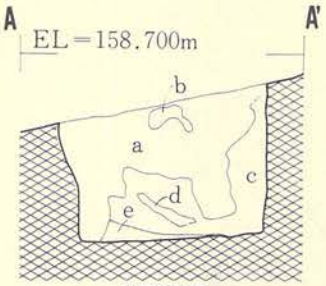


137号・138号・139号平面

図版第71図　ピット、平・断面



136号平面



136断面

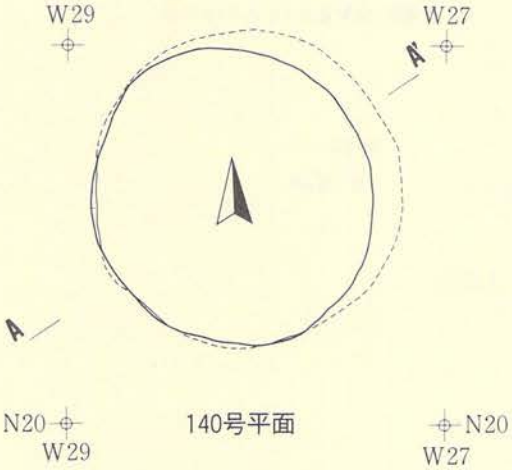
136号注記

a．褐色(10Y R4/4)シルト

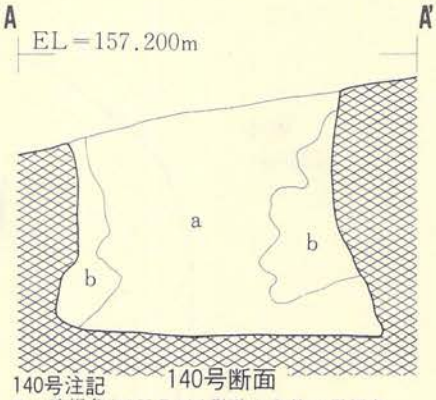
b．黄褐色(10Y R5/8)シルト

c．暗褐色(10Y R3/3)微砂を主体に黒褐色(10Y R2/2)微砂(両方に中撹がやや混入)及び褐色(10Y R4/4～4/6)シルトが混入。

d．黄褐色(10Y R5/8)シルト(大不動)



140号平面

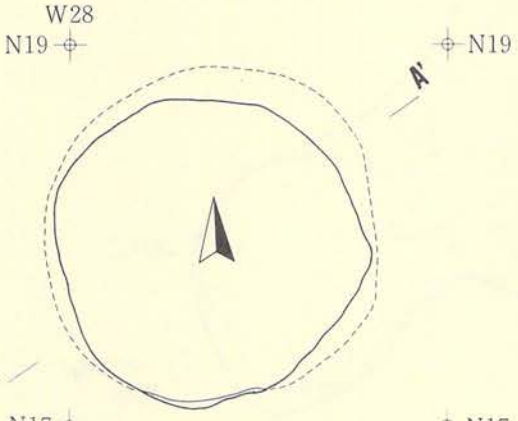


140号断面

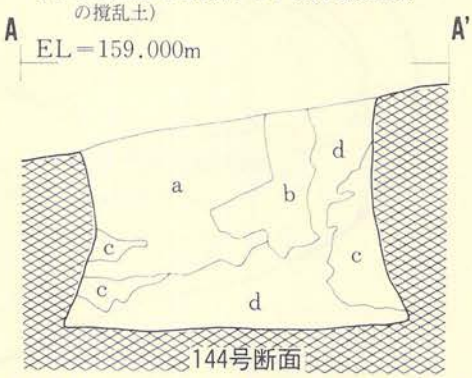
140号注記

a．暗褐色(10Y R3/3)微砂を主体に黒褐色(10Y R2/2)微砂及び褐色(10Y R4/4～4/6)シルトが斑に混入している。(中撹まじり)

b．黄褐色(10Y R5/8)シルト(大不動火山灰の撹乱土)



141号平面



144号断面

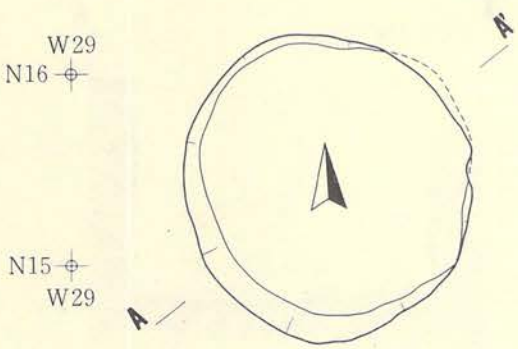
141号注記　a．10Y R2/3黒褐色土　南部浮石混在　褐色土がブロック状に混入する。

b．10Y R4/6褐色土黒褐色土(10Y R2/3)がブロック状に混入する。

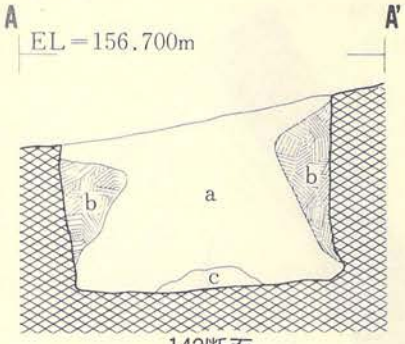
c．10Y R5/6明褐色土　やわらかく、パミスを混入する。

d．10Y R4/4褐色土　砂質性があり、パミス(径約2㎜～3㎜を混入する。

図版第72図　ピット、平・断面図



142号平面

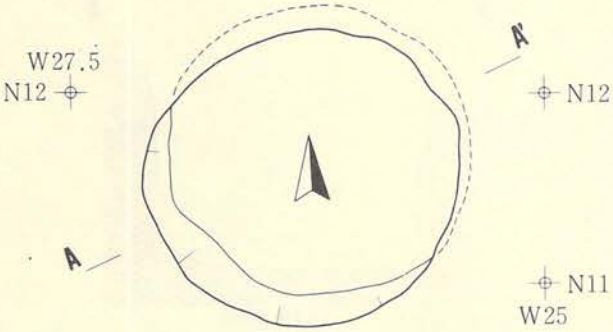


142断面

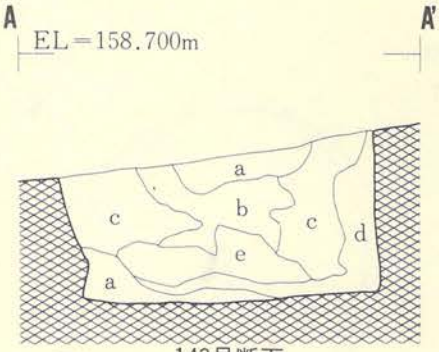
142号注記

a．褐色(10Y R4/4)シルトを主体に褐色(10Y R4/6)シルト及び、黒色(10Y R2/1)微砂(中瓶まじり)が斑に混入している。

c．にぶい黄橙(10Y R6/4)シルト(大不動)(bは掘り過ぎ)



143号平面



143号断面

143号注記

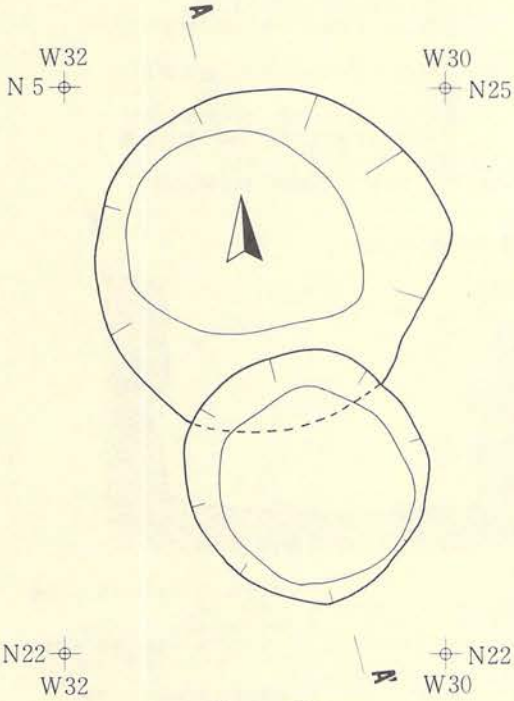
a．暗褐色(11Y R3/4)微砂を主体に褐色(10Y R4/6)シルト及び暗褐色(10Y R3/3)微砂が斑に混入している。

b．暗褐色(10Y R3/4)微砂と褐色(10Y R4/6)シルトが大きい斑に混入しあっている。

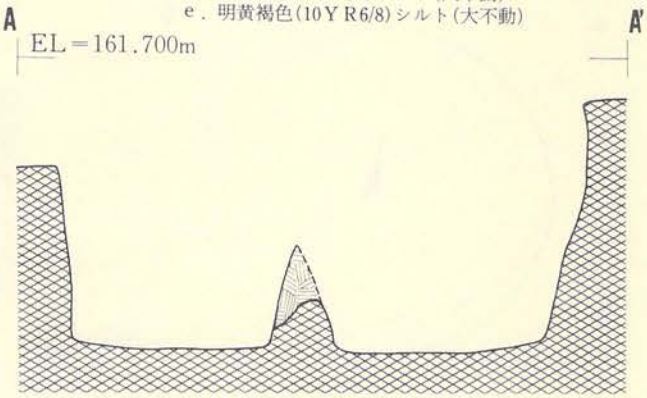
c．暗褐色(10Y R3/4)微砂を主体にし黒褐色(10Y R2/3)及び褐色(10Y R4/6)シルトが斑に混入している。

d．黄褐色(10Y R4/6)シルト(大不動)

e．明黄褐色(10Y R6/8)シルト(大不動)

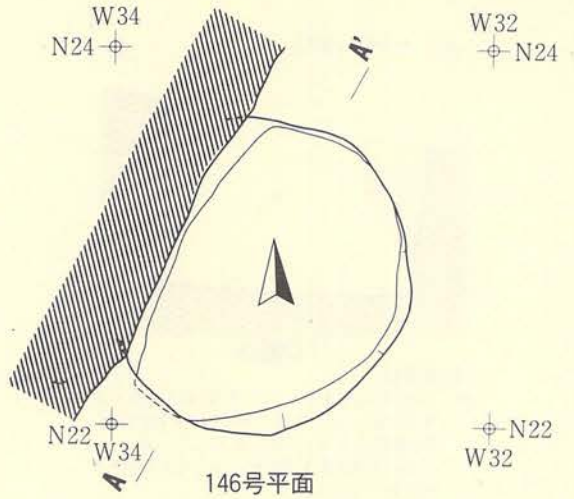


144号・145号平面

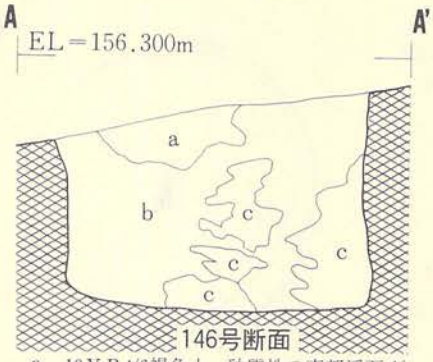


144号・145号断面

図版第73図　ピット、平・断面図

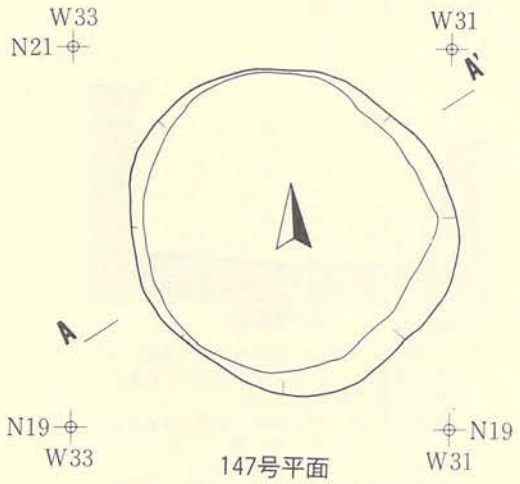


146号平面

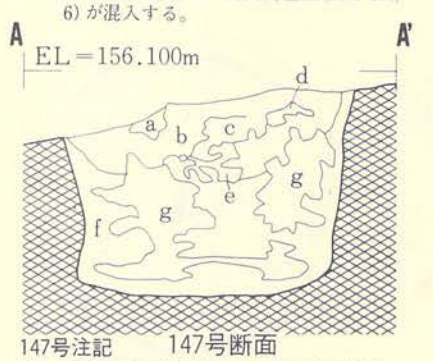


146号断面

a．10YR4/6褐色土　砂質性の南部浮石が混入する。
b．10YR2/2黒褐色土　やわらかく、南部浮石が混入する。
c．10YR4/4褐色土　明黄褐色土(10YR6/6)が混入する。

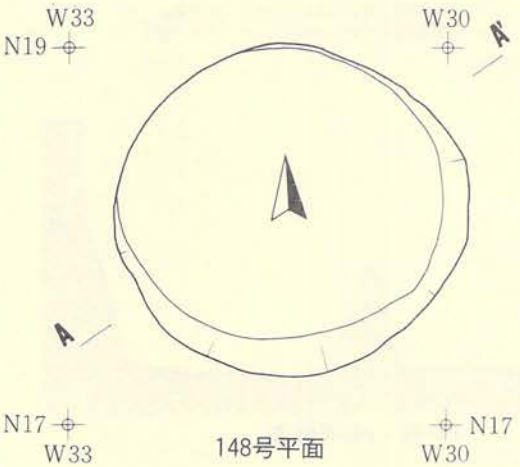


147号平面

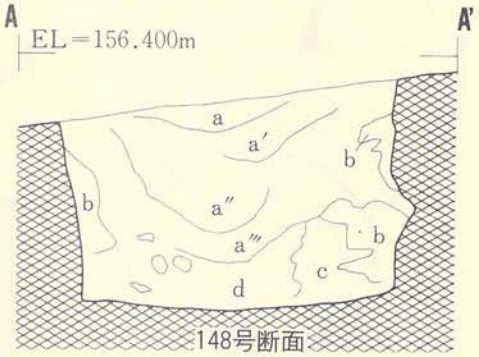


147号注記　　147号断面

a．黄褐色(10YR5/8)シルト(八戸火山灰)
b．暗褐色(10YR3/3)微砂に極小粒状の火山灰が多量に混入している。
c．褐色(10YR4/4)シルト　混入物bに同じ
d．黒褐色(10YR2/3)シルト　混入物bに同じ
e．黒色(7.5YR2/1)微砂　混入物bに同じ
f．黒褐色(10YR3/2)微砂に極小粒状の黄橙(10YR8/6)の浮石を含む。
g．黒色(7.5YR2/1)微砂　混入物fに同じ



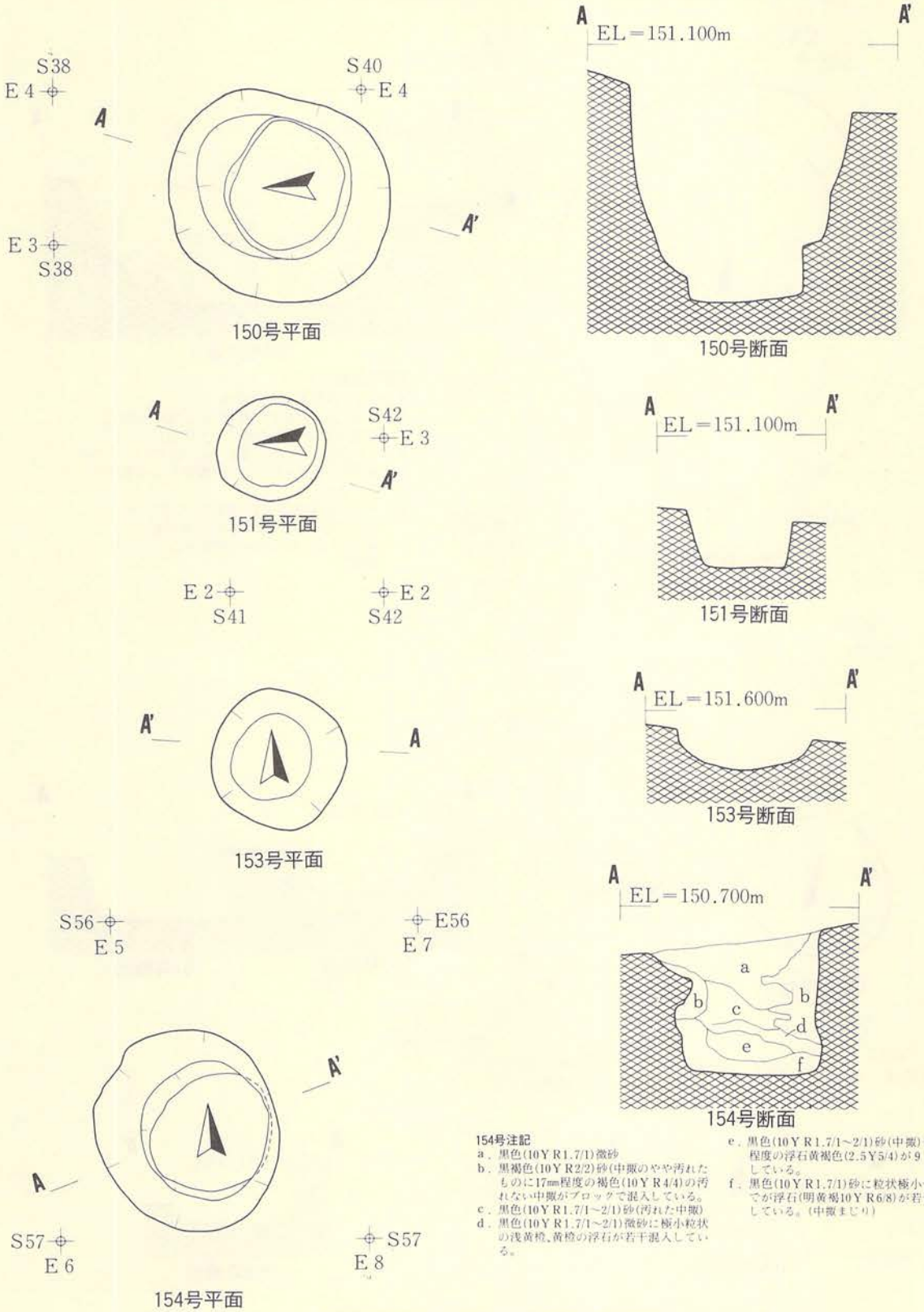
148号平面



148号断面

148号注記
a．暗褐色(10YR3/4)微砂を主体に黒褐(10YR2/3)微砂が斑に混入している。
a′．黄褐色(10YR5/8)シルトを主体にaが斑に混入している。
a″．暗褐色(10YR3/4)微砂を主体に黄褐色(10YR5/8)シルトが斑に混入している。
a‴．黒褐色(10YR2/2)微砂を主体にa′が斑に混入している。
b．黄褐色(10YR5/8)シルト(大不動)
c．黒褐色(10YR2/2)微砂と褐色(10YR4/6)シルトが大きい斑に混入しあっている。
d．暗褐色(10YR3/4)シルト(大不動)

図版第74図　ピット、平・断面図



154号注記

a．黒色(10Y R1.7/1)微砂

b．黒褐色(10Y R2/2)砂(中撒のやや汚れたものに17㎜程度の褐色(10Y R4/4)の汚れない中撒がブロックで混入している。

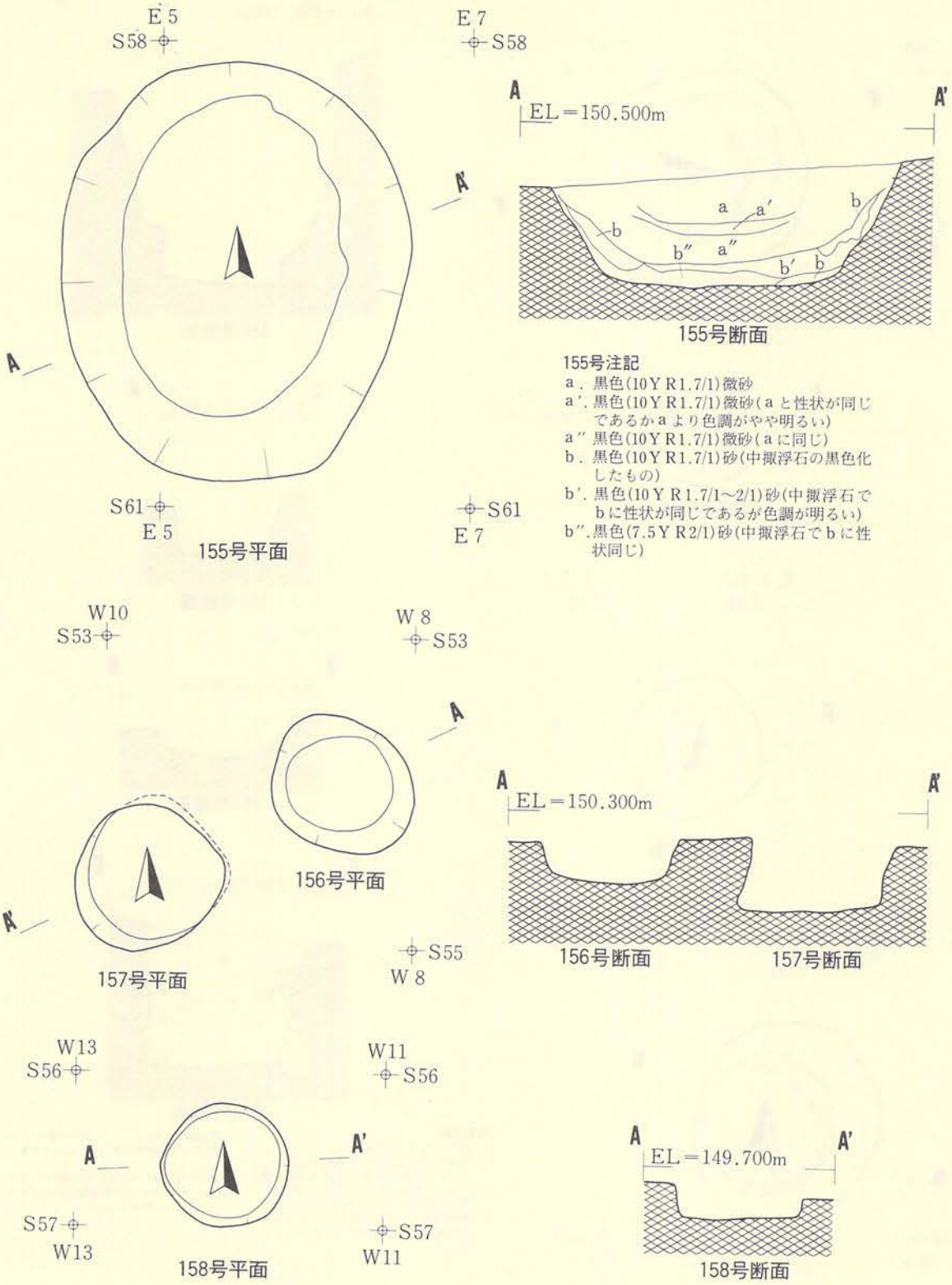
c．黒色(10Y R1.7/1～2/1)砂(汚れた中撒)

d．黒色(10Y R1.7/1～2/1)微砂に極小粒状の浅黄橙、黄橙の浮石が若干混入している。

e．黒色(10Y R1.7/1～2/1)砂(中撒)に3㎝程度の浮石黄褐色(2.5Y5/4)が9ケ混入している。

f．黒色(10Y R1.7/1)砂に粒状極小～大までが浮石(明黄褐10Y R6/8)が若干混入している。(中撒まじり)

図版第75図　ピット、平・断面図



図版第76図　ピット、平・断面図

(10)　陥し穴状遺構

本遺跡で検出した陥し穴状遺構は、第一次調査によってA地区から54基、第二次調査によってB地区から21基、計75基である。その分布のしかたは、A地区では、東側の埋積谷に18基、平坦地に23基、西側埋積谷に13基が位置し、B地区では、平坦地に20基、平坦地から南西にのびる緩斜面に1基が位置している。

A地区東側埋積谷に位置する陥し穴状遺構

北側谷壁の谷底近くに2基、谷底に3基、南側谷壁の壁上方から中位にかけて3基、谷頭付近の谷壁に10基位置している。

北側谷壁位置している2基は、201号・202号遺構で、これらの遺構の検出面は、中掫浮石と八戸降下火山灰が混入しあっている再堆積層の上面である。遺構の長軸の向きは、201号が谷底を向き、202号が谷筋と平行している。

谷底に位置している3基は、203号～205号遺構で、203号・205号の検出面は、南部浮石が薄いブロックで散在する南部浮石相当面で、204号は中掫浮石層上面である。遺構の長軸の向きは、3基共に谷筋に平行している。

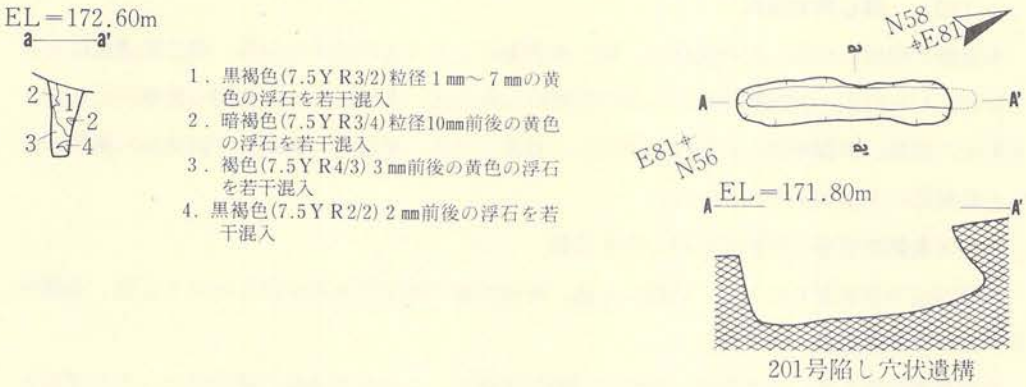
南側谷壁に位置している3基は、206号～208号遺構で、206号の検出面は、中掫浮石層直下の黒色土の堆積層上面で、207号・208号の検出面は、現地表面下20cmに位置する大不動浮石流凝灰岩が撹乱を受けている堆積層上面である。206号・207号の長軸の向きは、谷筋に平行し、208号のそれは、谷底を向いている。

谷頭付近の谷壁に位置している10基は、209号～218号遺構である。このうち210号216号は、長軸を最大傾斜方向に向けて2m～3m間隔で並列している。検出面は、209号が現地表面下20cmの黒色堆積層上面で、210～218号が黒褐色と褐色を呈している中掫浮石が斑に混入しあっている再堆積層上面である。長軸の向きは、209号がほぼ傾斜方向を向き、217号・218号は、最大傾斜方向に直交している。

201号　陥し穴状遺構

A地区東谷の北側谷壁に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸の北端の壁は底部で掘り込まれ内に傾斜し、南端の壁は外に傾斜して立ち上がっている。底面は地形の傾斜方向に平行して緩く起伏しながら南へ下がっている。長軸の向きは、N22.5°Eである。

規模は、開口部173cm×29cm、底面185cm×16cmである。深さは中央部で60cmである。



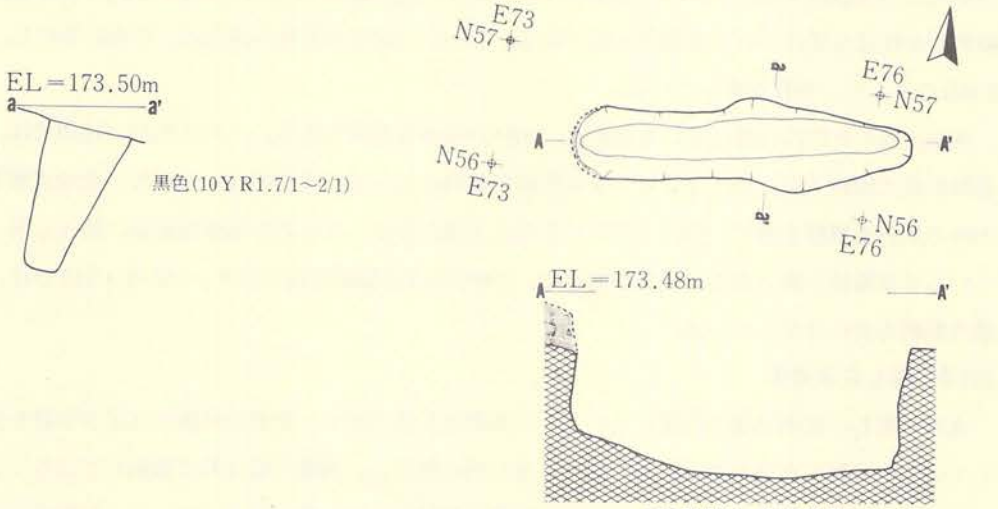
201号陥し穴状遺構

図版第77図

202号　陥し穴状遺構

A地区東谷の北側谷壁に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸の両端の壁は、垂直ぎみに立ち上がっている。底面は中央部が僅かに凹んでいる。長軸の向きはN81.5°Eである。

規模は、開口部275㎝×66㎝、底面255㎝×30㎝である。深さは中央部で116㎝である。



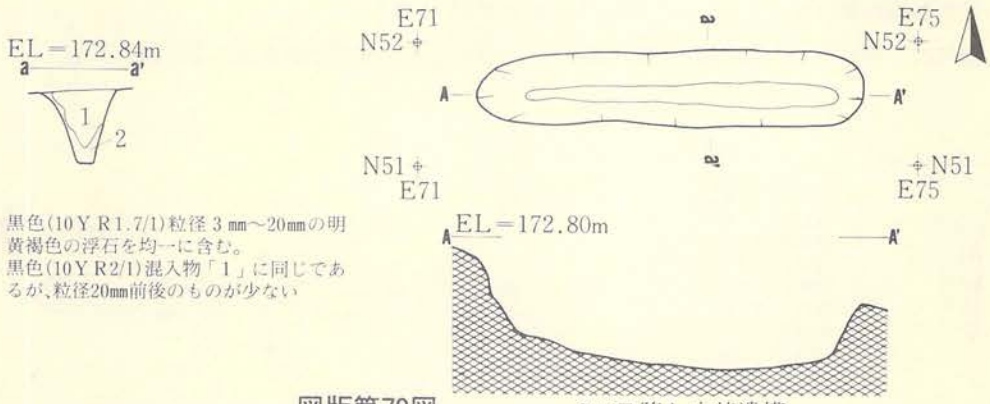
202号陥し穴状遺構

図版第78図

203号　陥し穴状遺構

A地区東谷の谷底に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸の両端の壁は、外に傾斜して立ち上がっている。底面は中央部が僅かに凹んでいる。長軸の向きは、N・Eである。

規模は、開口部310cm×60cm、底面250cm×17cmである。深さは中央部で70cmである。



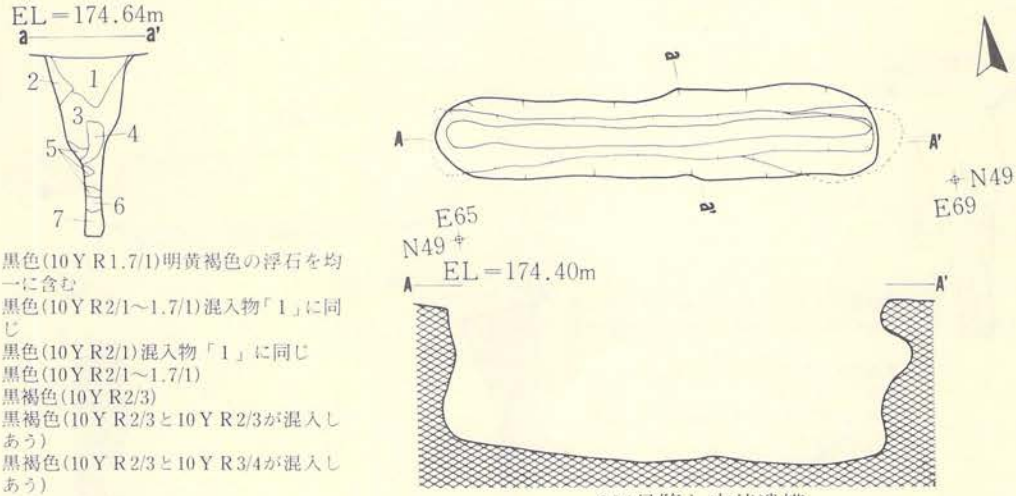
1．黒色(10Y R1.7/1)粒径3㎜～20㎜の明黄褐色の浮石を均一に含む。
2．黒色(10Y R2/1)混入物「1」に同じであるが、粒径20㎜前後のものが少ない

図版第79図　203号陥し穴状遺構

204号　陥し穴状遺構

A地区東谷の谷底に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸西端の壁の下半は内に傾斜し、上半は外に傾斜している。東端の壁は凹凸して立ち上がっている。底面は中央部が僅かに高くなっている。長軸の向きは、N83°W である。

規模は、開口部355cm×70cm、底面339cm×15cmである。深さは中央部で138 cmである。



1．黒色(10Y R1.7/1)明黄褐色の浮石を均一に含む
2．黒色(10Y R2/1～1.7/1)混入物「1」に同じ
3．黒色(10Y R2/1)混入物「1」に同じ
4．黒色(10Y R2/1～1.7/1)
5．黒褐色(10Y R2/3)
6．黒褐色(10Y R2/3と10Y R2/3が混入しあう)
7．黒褐色(10Y R2/3と10Y R3/4が混入しあう)

204号陥し穴状遺構

図版第80図

205号　陥し穴状遺構

A地区東谷の谷底に位置している。平面形は細長い溝状で、長軸の東端から1/3部分の短軸の幅が極端に狭ばまっている。長軸の方向は、N63°Wである。

規模は、開口部387㎝×26㎝、底面394㎝×7㎝である。深さは中央部で102㎝である。

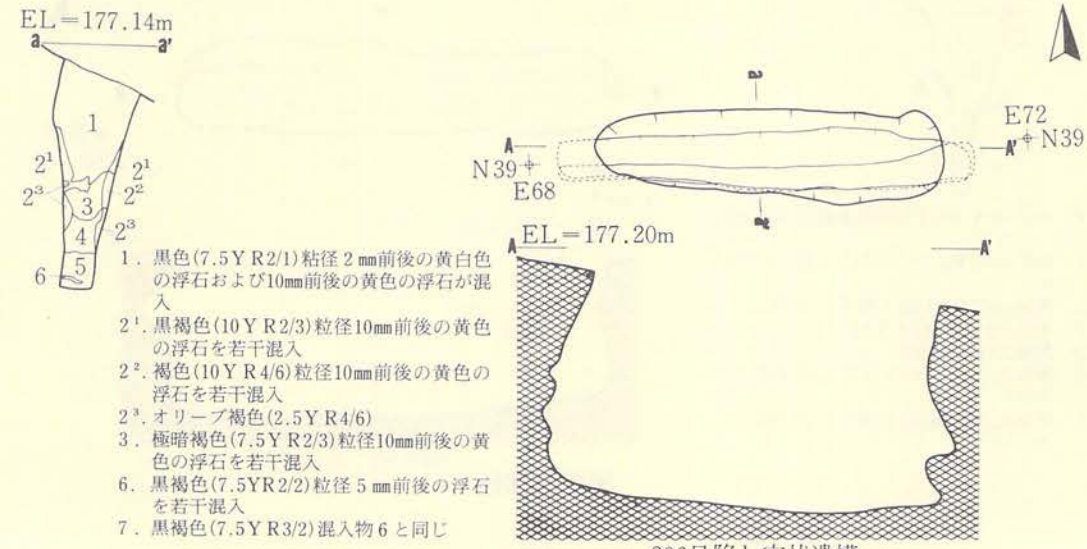
205号陥し穴状遺構

図版第81図

206号　陥し穴状遺構

A地区東谷の南側谷壁に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸の両端の壁は、凹凸しながら内に傾斜して立ち上がっている。底面は中央付近が僅かに下がっている。長軸の方向は、N87°Wである。

規模は、開口部269㎝×70㎝、底面334㎝×18㎝である。深さは中央部で175㎝である。



206号陥し穴状遺構

図版第82図

207号・208号　陥し穴状遺構

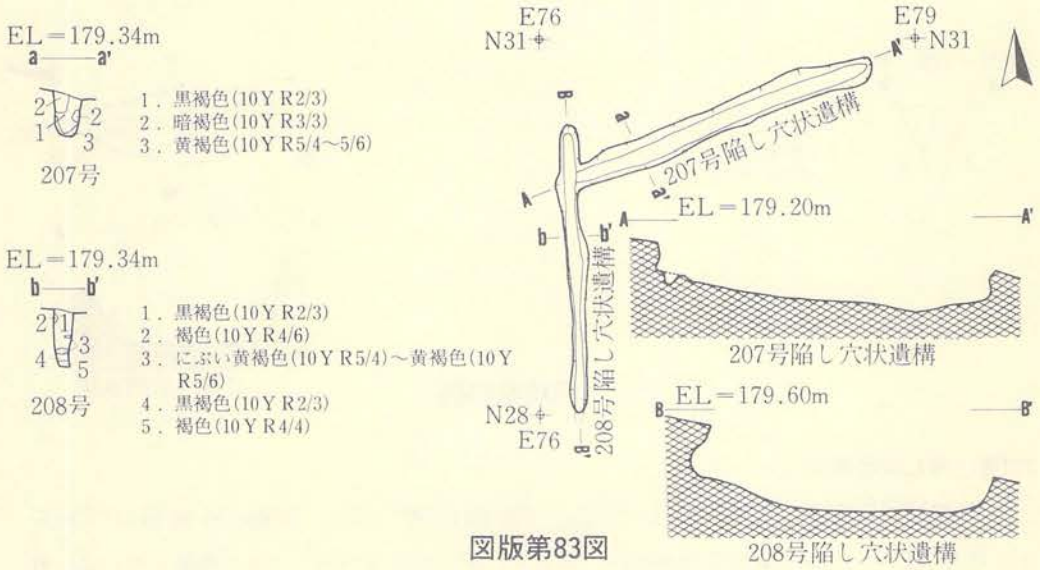
A地区東谷の南側谷壁最上部の平坦に近い北緩斜面と東谷との境界をなす土手下に位置している。

207号・208号の平面形は、共に細長い溝状で、短軸の断面形は「U」字状を呈している。107号の長軸両端の壁は底部付近が掘り込まれている。底面は北東方向へ下がっている。長軸の向きは、N68°Eである。

108号の長軸北端の壁は内に傾斜し、南端の壁は外に傾斜して立ち上がっている。底面は、中央部が僅かに凹みながら地形の傾斜方向へ下がっている。長軸の向きは、N2.5°Eである。

規模は、207号が開口部271cm×21cm、底面270cm×12cm中央部の深さ35cmで、208号が開口部250cm×18cm、底面230cm×10cm、中央部の深さ50cmである。

207号と208号は重複しており、208号の北端付近を、207号の南西端が切り込んで遺構を築いている。

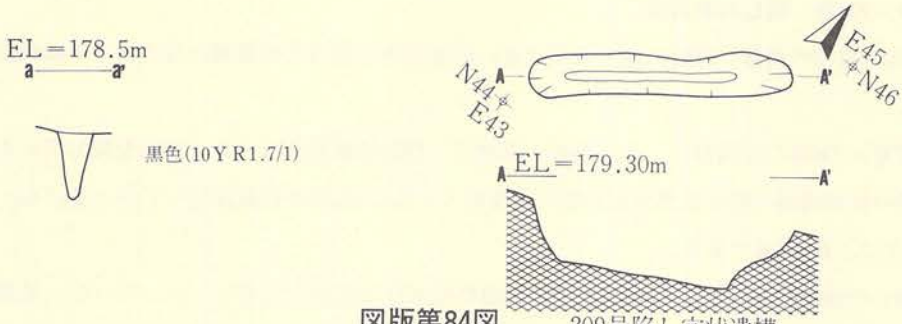


図版第83図

209号　陥し穴状遺構

A地区東谷の中央に張り出した小さい尾根の東斜面（東谷の谷頭上部）に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は「V」字状を呈している。長軸両端の壁は外に傾斜して立ち上がっている。底面は、地形の傾斜方向へ下がっている。長軸の向きは、N51.5°Eである。

規模は、開口部212cm×30cm、底面140cm×7cmである。深さは、中央部で50cmである。

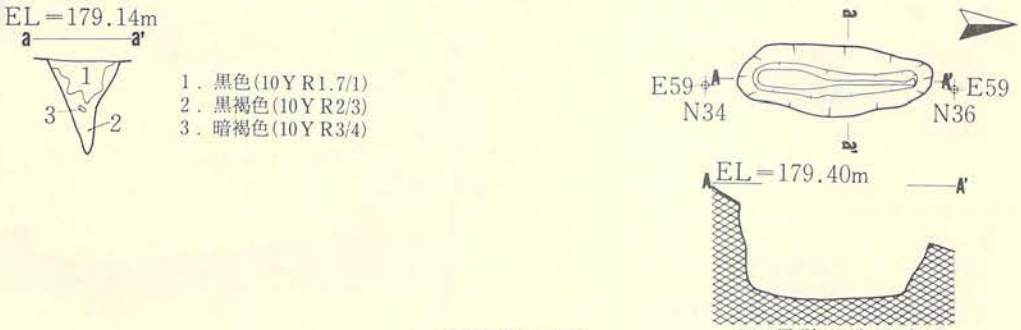


図版第84図　209号陥し穴状遺構

210号　陥し穴状遺構

A地区の北緩斜面から東谷に移る傾斜変換線付近に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は「V」字形を呈している。長軸両端の壁は、外に傾斜して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦であある。長軸の向きは、N・Sである。

規模は、開口部155cm×57cm、底面126cm×4cmである。深さは、中央部で63cmである。



図版第85図　210号陥し穴状遺構

211号　陥し穴状遺構

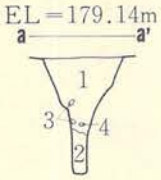
210号陥し穴状遺構の西隣に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸南端の壁は内に傾斜し、北端の壁は凹凸して外に傾斜している。底面は、中央付近が凹凸している。長軸の向きは、N7°Eである。

規模は、開口部187cm×63cm、底面179×13cmである。深さは、中央部で104cmである。

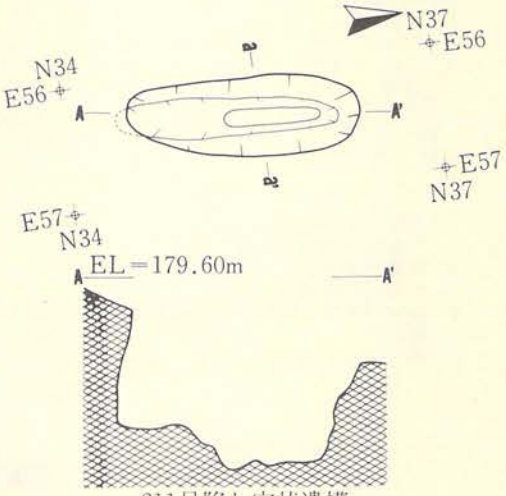
212号　陥し穴状遺構

211号陥し穴状遺構の西隣に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は「V」字状を呈している。長軸北端の壁は外に傾斜し、南端の壁は凹凸しながら外に傾斜して立ち上がっている。底面は、中央部が僅かに凹んでいる。長軸の向きは、N1.5°Eである。

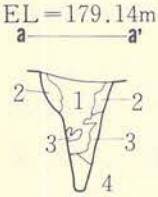
規模は、開口部183cm×58cm、底面136cm×11cmである。深さは、中央部で75cmである。



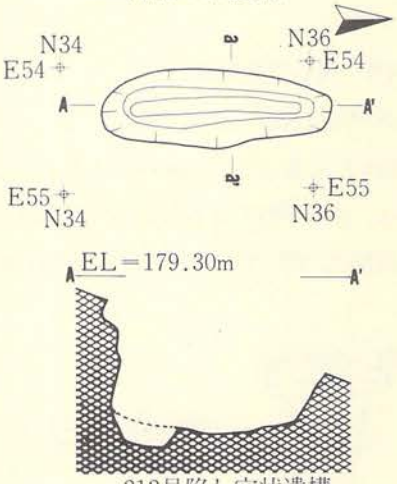
211号注記
1．黒色(10Y R1.7/1)黒褐色土がブロックで混入
2．褐色土(10Y R6/4)
3．黒褐色土(10Y R2/3)粘性があるシルト質
4．褐色土(10Y R4/6)暗褐色土(10Y R3/4)が斑に混入



211号陥し穴状遺構



212号注記
1．黒色(10Y R1.7/1)弱粘性シルト質
2．黒色(10Y R2/1)
3．暗褐色(10Y R3/4)明黄褐色の浮石を多量に含む。
4．褐色(7.5Y R4/4)粘性あり。



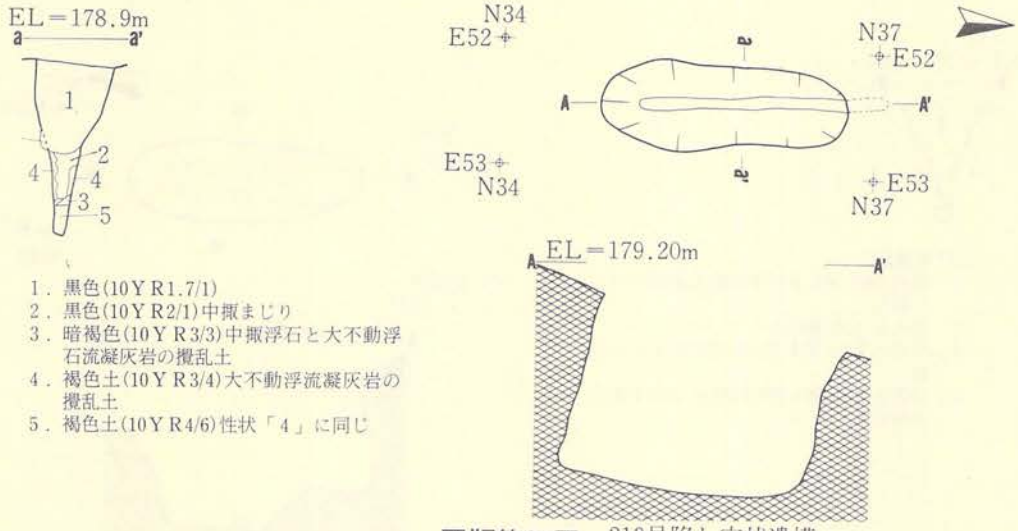
212号陥し穴状遺構

図版第86図

213号　陥し穴状遺構

212号陥し穴状遺構の西隣に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸北端の壁は外に傾斜し、南端の壁は内に傾斜して立ち上がっている。底面は、中央が僅かに低くなっている。長軸の向きは、N3°Wである。

規模は、開口部200cm×60cm、底面199cm×8cmである。深さは、中央部で140cmである。

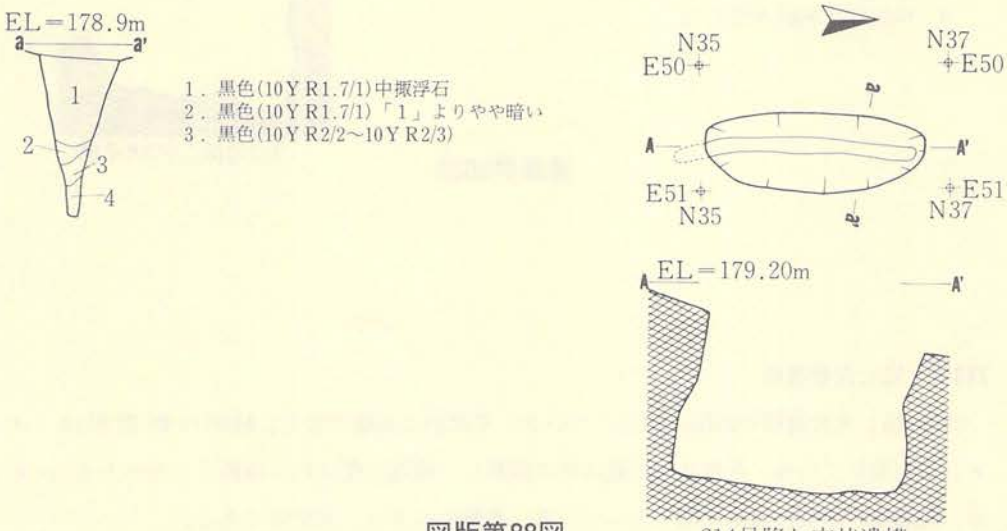


図版第87図　213号陥し穴状遺構

214号　陥し穴状遺構

213号陥し穴状遺構の西隣に位置している。平面形は楕円形で、短軸の断面形は「V」字状を呈している。長軸両端の壁は下半で内に傾斜し、上半で外に傾斜して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。長軸の向きは、N1°Eである。

規模は、開口部176cm×65cm、底面194cm×12cmである。深さは、中央部で137 cmである。

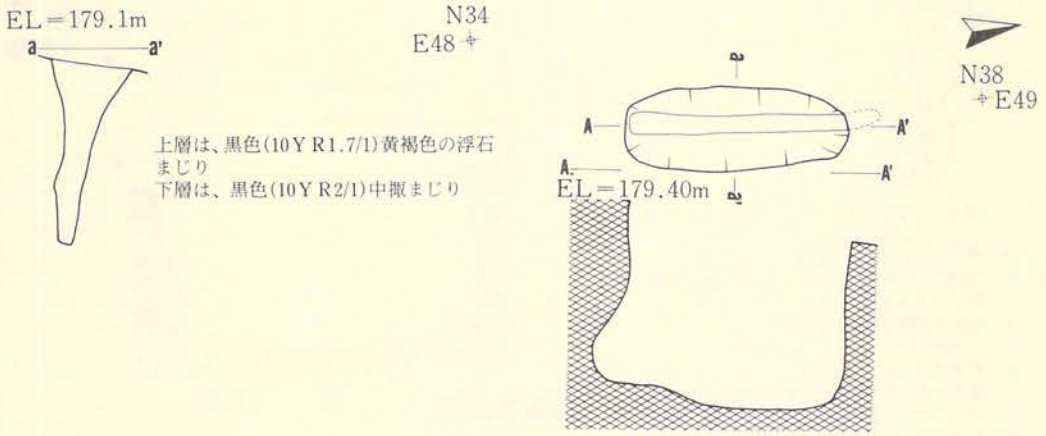


図版第88図　214号陥し穴状遺構

215号　陥し穴状遺構

214号陥し穴状遺構の西隣に位置している。平面形は楕円形で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸北端の壁はほぼ垂直で、南端の壁は下半が内傾し、上半が外傾して立ち上がっている。底面は、南側よりも北側が一段低くなっている。長軸の向きは、N7.5°Eである。

規模は、開口部178cm×65cm、底面200cm×14cmである。深さは、中央部で150cmである。



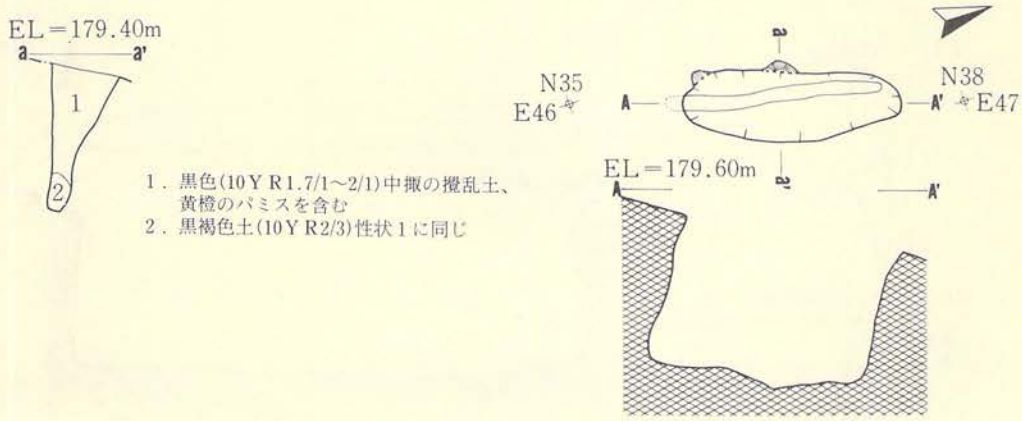
215号陥し穴状遺構

図版第89図

216号　陥し穴状遺構

215号陥し穴状遺構の西隣に位置している。平面形は楕円形で、短軸の断面形は「V」字状を呈している。長軸北端の壁は外傾し、南端の壁は凹凸しながら内傾して立ち上がっている。底面は、北半分が凹凸している。長軸の傾きは、N7.5°Eである。

規模は、開口部で176cm×64cm、底面174cm×11cmである。深さは、中央部で120cmである。



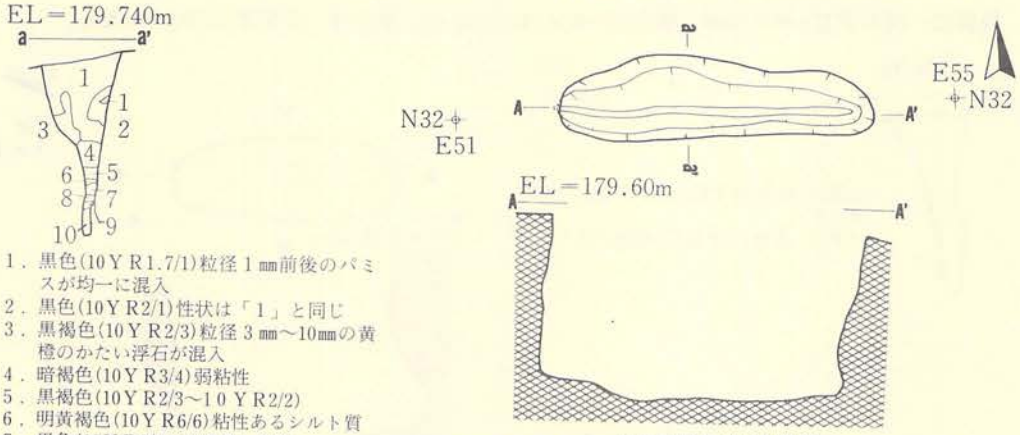
216号陥し穴状遺構

図版第90図

217号　陥し穴状遺構

A地区の北緩斜面から東谷に移る傾斜変換線付近に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸両端の壁は、凹凸しながらほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、緩く起伏している。長軸の傾きは、N86°Eである。

規模は、開口部252cm×65cm、底面230cm×5cmである。深さは、中央部で140cmである。



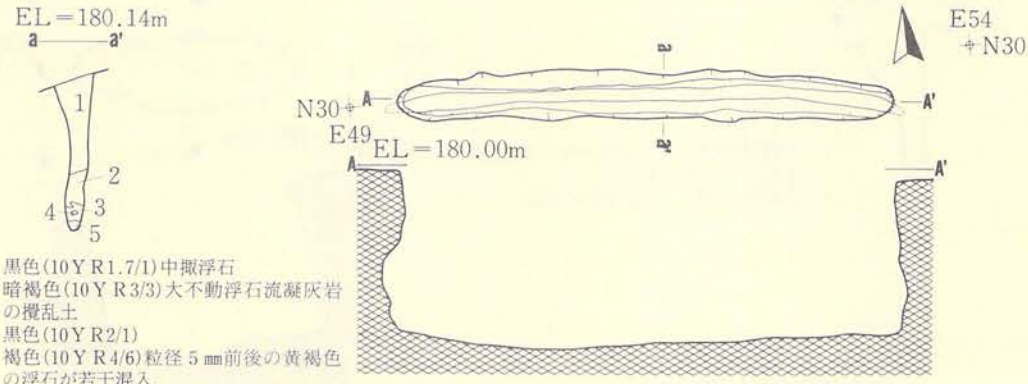
1．黒色(10YR1.7/1)粒径1mm前後のパミスが均一に混入
2．黒色(10YR2/1)性状は「1」と同じ
3．黒褐色(10YR2/3)粒径3mm～10mmの黄橙のかたい浮石が混入
4．暗褐色(10YR3/4)弱粘性
5．黒褐色(10YR2/3～10YR2/2)
6．明黄褐色(10YR6/6)粘性あるシルト質
7．黒色(10YR2/1～10YR1.7/1)
8．黒色(10YR2/2)
9．明黄褐色(10YR7/6)強粘性シルト質
10．明黄褐色(10YR6/6)～黄褐色(10YR5/6)強粘性シルト

図版第91図　217号陥し穴状遺構

218号　陥し穴状遺構

217号陥し穴状遺構の南隣に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は「U」字状を呈している。長軸両端の壁は、凹凸しながらほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。長軸の傾きは、N84°Eである。

規模は、開口部400cm×35cm、底面406cm×10cmである。深さは、中央部で135cmである。



1．黒色(10YR1.7/1)中撰浮石
2．暗褐色(10YR3/3)大不動浮石流凝灰岩の攪乱土
3．黒色(10YR2/1)
4．褐色(10YR4/6)粒径5mm前後の黄褐色の浮石が若干混入
5．黄褐色(10YR5/8)粒径5mm～10mmの浮石が若干混入

218号陥し穴状遺構

図版第92図

A地区平坦地に位置する陥し穴状遺構

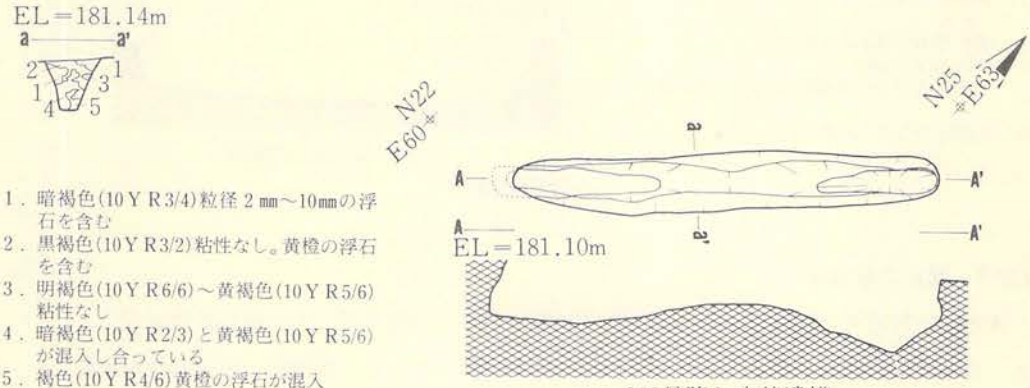
平坦地の東側1/3の地域には、遺構が存在せず、中央付近から西側にかけて219号～232号の23基が位置している。

平坦地の耕作土は、層厚15cm～20cmで、耕作土直下は、平坦地の全面積の西側1/3が八戸降下火山灰層で、残りが大不動浮石流凝灰岩の撹乱を受けた再堆層となっている。遺構の検出面は、219号～230号が大不動浮石流凝灰岩の撹乱を受けた再堆層の上面で、231号・232号が八戸降下火山灰層上面である。遺構の長軸の向きは種々である。

219号　陥し穴状遺構

A地区平坦地に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸南西端の壁は内傾し、北東端は垂直に立ち上がっている。底面は、両端が掘り込まれ、中央が高くなっている。長軸の傾きは、N49°Eである。

規模は、開口部341cm×45cm、底面346cm×17cmである。深さは、中央部で38cmである。



1．暗褐色(10YR3/4)粒径2mm～10mmの浮石を含む
2．黒褐色(10YR3/2)粘性なし。黄橙の浮石を含む
3．明褐色(10YR6/6)～黄褐色(10YR5/6)粘性なし
4．暗褐色(10YR2/3)と黄褐色(10YR5/6)が混入し合っている
5．褐色(10YR4/6)黄橙の浮石が混入

219号陥し穴状遺構

図版第93図

220号　陥し穴状遺構

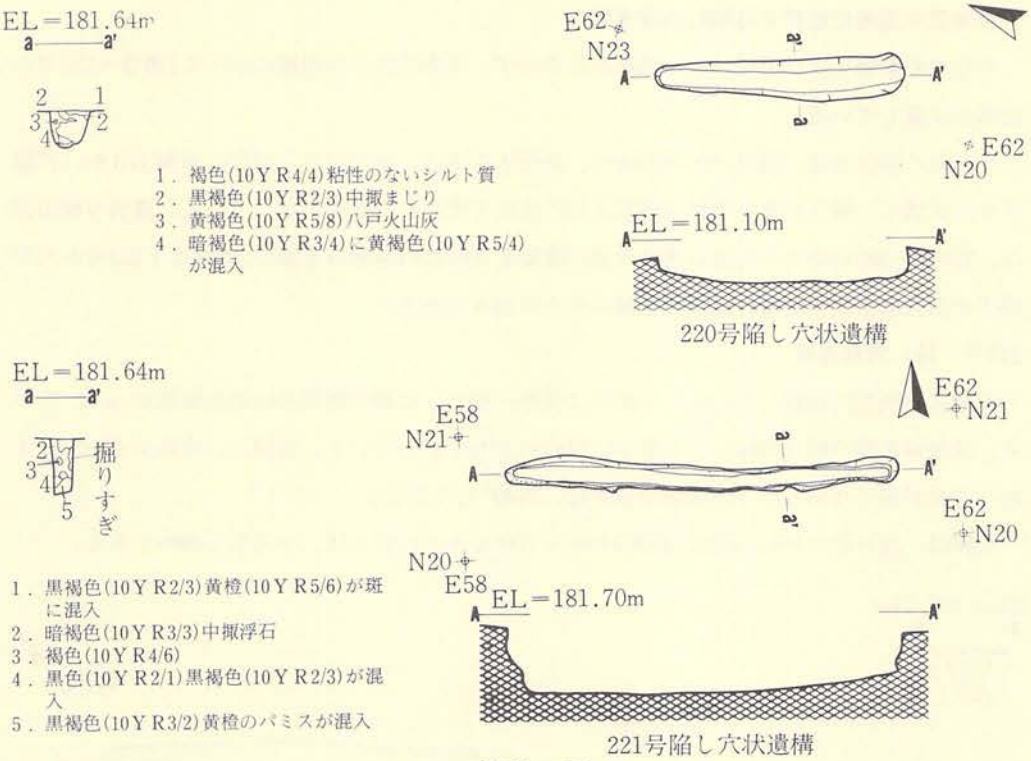
A地区平坦地に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は「U」字状を呈している。長軸両端の壁 は垂直に立ち上っている。底面は、ほぼ平坦である。長軸の向きは、N21°Wである。

規模は、開口部200cm×32cm、底面175cm×15cmである。深さは、中央部で25cmである。

221号　陥し穴状遺構

A地区平坦地に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は長方形を呈している。長軸両端の壁は凹凸しながら外傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。長軸の傾きは、N87.5°Eである。

規模は、開口部317cm×17cm、底面302cm×10cmである。深さは、中央部で50cmである。

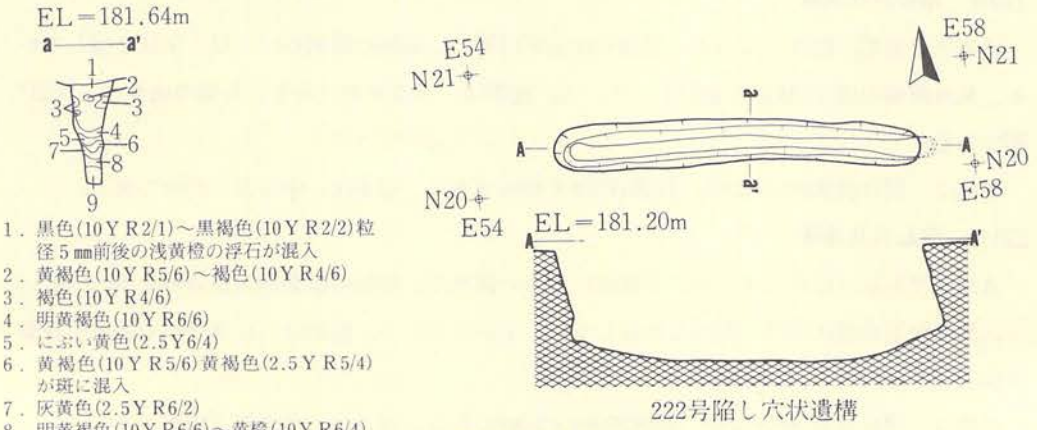


図版第94図

222号　陥し穴状遺構

A地区平坦地に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸東端の壁は内傾し、西端は外傾して立ち上がっている。底面は、中央が僅かに低くなっている。長軸の傾きは、N85°Wである。

規模は、開口部297cm×34cm、底面283cm×10cmである。深さは、中央部で90cmである。

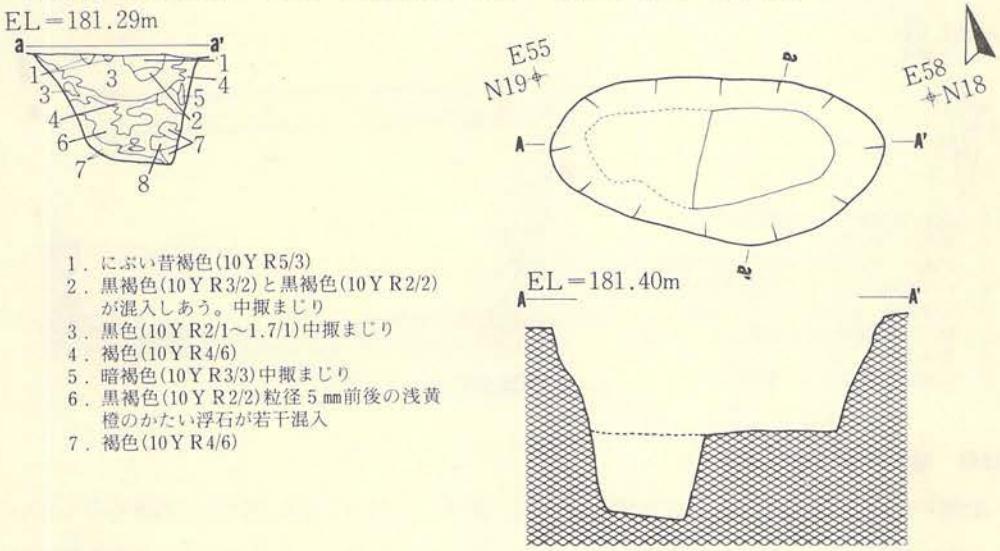


図版第95図

223号　陥し穴状遺構

A地区平坦地に位置している。平面形は楕円形で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸両端の壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。長軸の傾きは、N74.5°Wである。

規模は、開口部266㎝×130㎝、底面200㎝×77㎝である。深さは、中央部で89㎝である。



1．にぶい昔褐色(10Y R5/3)
2．黒褐色(10Y R3/2)と黒褐色(10Y R2/2)が混入しあう。中振まじり
3．黒色(10Y R2/1～1.7/1)中振まじり
4．褐色(10Y R4/6)
5．暗褐色(10Y R3/3)中振まじり
6．黒褐色(10Y R2/2)粒径5㎜前後の浅黄橙のかたい浮石が若干混入
7．褐色(10Y R4/6)

223号陥し穴状遺構

図版第96図

224号　陥し穴状遺構

A地区平坦地に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は「U」字状を呈している。長軸西端の壁は底部付近で掘り込まれ、東端の壁は垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。長軸の傾きは、N13°Wである。

規模は、開口部208㎝×26㎝、底面197㎝×12㎝である。深さは、中央部で38㎝である。

1．暗褐色(7.5Y R3/4)
2．褐色(7.5Y R4/3)
3．褐色(7.5Y R4/6)
4．褐色(7.5Y R4/4)
5．明褐色(7.5Y R5/6)
6．明褐色(7.5Y R5/8)
7．暗褐色(7.5Y R3/3)
8．明褐色(7.5Y R5/8)
9．にぶい黄褐色(10Y R5/4)
10．にぶい黄褐色(10Y R5/3)

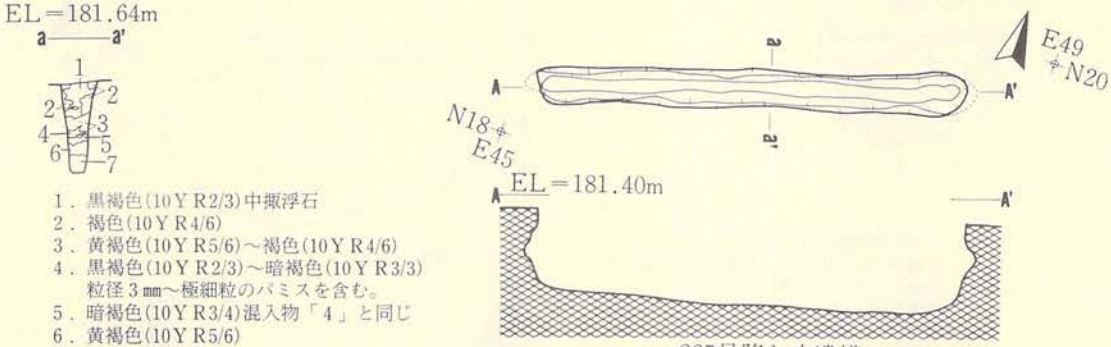
224号陥し穴状遺構

図版第97図

225号　陥し穴状遺構

A地区平坦地に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸両端の壁は内傾し立ち上がっているが、両壁の中間部が若干掘り込まれている。底面は、平坦である。長軸の向きは、N71°Eである。

規模は、開口部345cm×29cm、底面350cm×8cmである。深さは、中央部で70cmである。



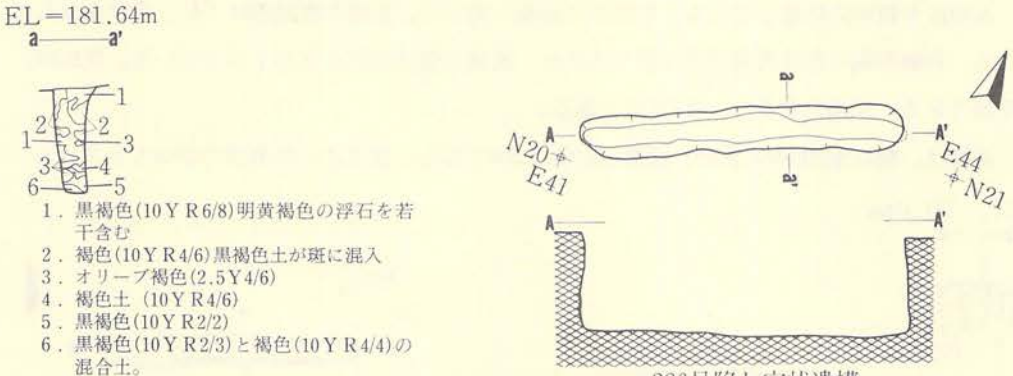
225号陥し穴遺構

図版第98図

226号　陥し穴状遺構

A地区平坦地に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸両端の壁は、僅かに内傾して立ち上がっている。底面は、平坦である。長軸の傾きはN68°Eである。

規模は、開口部259cm×33cm、底面260cm×15cmである。深さは、中央部で82cmである。



226号陥し穴状遺構

図版第99図

227号・228号　陥し穴状遺構

A地区平坦地に位置している。227号・228号の平面形は、共に細長い溝状で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。

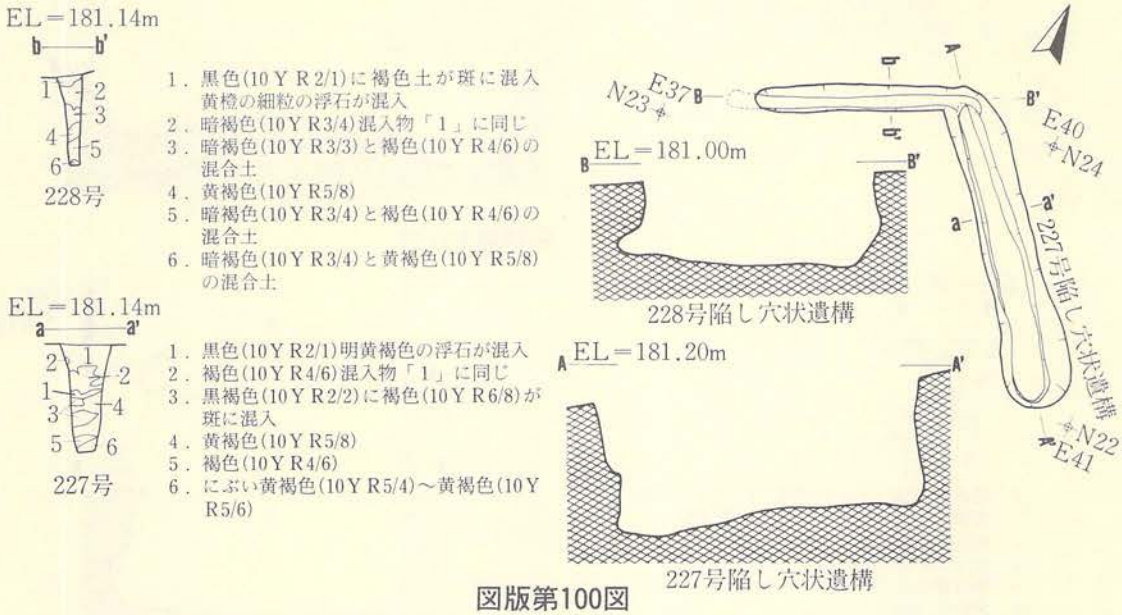
227号の長軸南西端の底部付近が掘り込まれ、北東端の壁は下半が外傾し、上半が内傾して

立ち上がっている。底面は凹凸している。長軸の向きは、N36.5°Eである。

228号の長軸両端の壁は、下半が内傾し、上半が外傾して立ち上がっている。底面は、両端が掘り込まれている。長軸の向きは、N66°Eである。

規模は、227号が開口部264cm×41cm、底面245cm×20cm、中央部の深さ95cm、228号が開口部186cm×21cm、底面200cm×9cm、中央部の深さ70cmである。

227号と228号は重複しており、228号の北端を、227号の北東端が切り込んで遺構を築いている。



図版第100図

229号　陥し穴状遺構

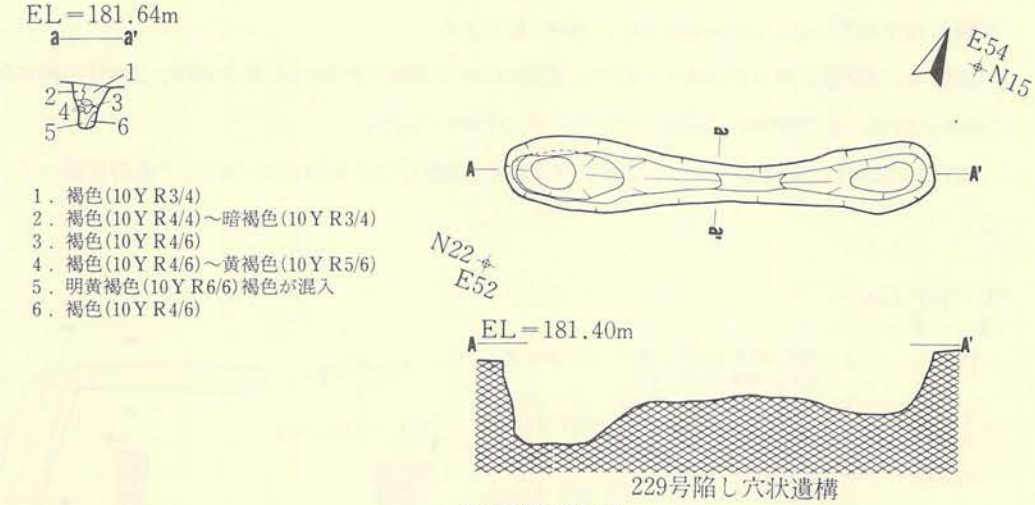
A地区の平坦地に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸両端の壁は、外傾して立ち上がっている。底面の両端が掘り込まれているが、南西端の掘り込みの方が深くなっている。長軸の向きは、N68°Eである。

規模は、開口部342cm×30cm、底面332cm×13cmである。深さは、中央部で32cmである。

230号　陥し穴状遺構

A地区の平坦地に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は「V」字状を呈している。長軸東端の壁は凹凸しながら内傾し、西端の壁は外傾して立ち上がっている。底面は、平坦である。長軸の向きは、N80.5°Eである。

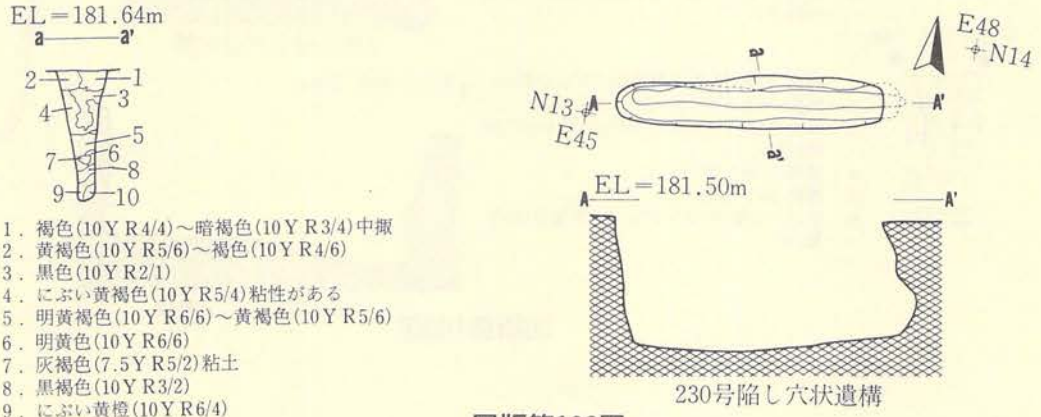
規模は、開口部213cm×42cm、底面122cm×10cmである。深さは、中央部で103cmである。



1．褐色(10Y R3/4)
2．褐色(10Y R4/4)～暗褐色(10Y R3/4)
3．褐色(10Y R4/6)
4．褐色(10Y R4/6)～黄褐色(10Y R5/6)
5．明黄褐色(10Y R6/6)褐色が混入
6．褐色(10Y R4/6)

229号陥し穴状遺構

図版第101図



1．褐色(10Y R4/4)～暗褐色(10Y R3/4)中擬
2．黄褐色(10Y R5/6)～褐色(10Y R4/6)
3．黒色(10Y R2/1)
4．にぶい黄褐色(10Y R5/4)粘性がある
5．明黄褐色(10Y R6/6)～黄褐色(10Y R5/6)
6．明黄色(10Y R6/6)
7．灰褐色(7.5Y R5/2)粘土
8．黒褐色(10Y R3/2)
9．にぶい黄橙(10Y R6/4)
10．黒褐色(10Y R2/2)

230号陥し穴状遺構

図版第102図

231号　陥し穴状遺構

A地区平坦地に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸東端の壁は外傾し、西端の壁は下半が外傾し、上半が内傾して立ち上がっている。底面は、西半分が平坦で、東半分は凹凸し、西側よりも高くなっている。長軸の向きは、N85.5°Eである。

規模は、開口部290cm×40cm、底面255cm×18cmである。深さは、中央部で67cmである。

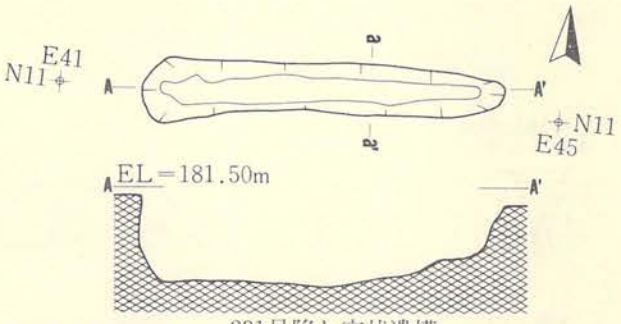
232号　陥し穴状遺構

A地区平坦地に位置している。平面形は楕円形で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸西端の壁は、下半が内傾し、上半が外傾して立ち上がっている。底面は、平坦である。長

軸の向きは、N65°Eである。

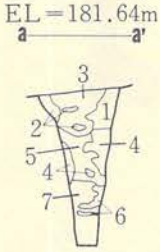
規模は、開口部の短軸65㎝、底面134㎝×18㎝である。深さは、中央部で130㎝である。

1．黒褐色(10Y R2/2)黒色土(10Y R2/1)が斑に混入
2．黄褐色(10Y R5/8)
3．明黄褐色(10Y R6/8)～黄褐色(10Y R5/8)

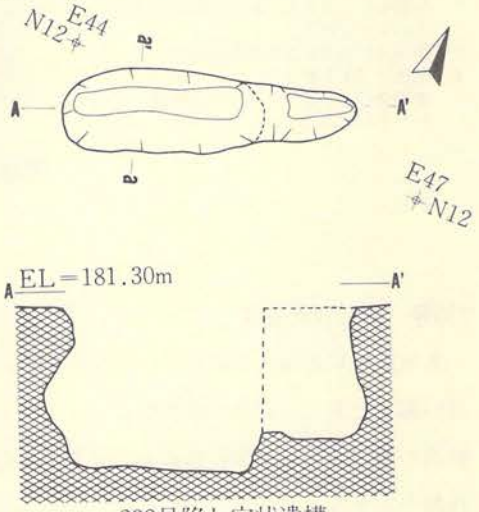


231号陥し穴状遺構

図版第103図



1．暗褐色(10Y R3/4)粒径7㎜前後の黄色の浮石をわずかに混入
2．黒褐色(7.5Y R2/2)粒径1㎜前後の浮石を若干混入
3．黒褐色(10Y R2/2)粒径2㎜～5㎜の黄色の浮石が若干混入
4．褐色(10Y R4/6)粒径7㎜前後の黄色の浮石を若干混入
5．暗褐色(7.5Y R3/4)
6．褐色(7.5Y R4/6)
7．暗褐色(10Y R3/4)粒径5㎜前後の黄色の浮石を若干混入



232号陥し穴状遺構

図版第104図

233号・234号陥し穴状遺構

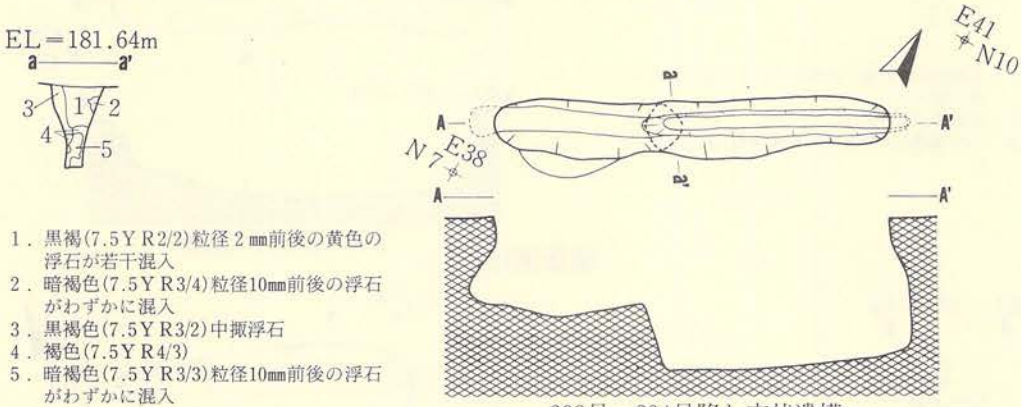
A地区平坦部に位置している。233号・234号の平面形は、共に長楕円形である。233号の短軸の断面形は「ロート」状を呈している。

233号の長軸北東端の壁は、下半が垂直に立ち上がり、上半で僅かに内傾している。南西端の壁は、外傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。長軸の向きは、N59.5°Eである。

234号の長軸南西端の壁は、下半が内傾し、上半が外傾して立ち上がっている。底面は、起伏している。長軸の向きは、N62.5°Eである。

規模は、233号が開口部の短軸45㎝、底面が207㎝×９㎝、中央部の深さ140㎝、134号が開口部の短軸45㎝、底面の短軸17㎝、中央部の深さ80㎝である。

233号と234号は重複しており、234号の北東端を233号の南西端が切り込んで遺構を築いている。



1．黒褐(7.5Y R2/2)粒径２㎜前後の黄色の浮石が若干混入
2．暗褐色(7.5Y R3/4)粒径10㎜前後の浮石がわずかに混入
3．黒褐色(7.5Y R3/2)中撥浮石
4．褐色(7.5Y R4/3)
5．暗褐色(7.5Y R3/3)粒径10㎜前後の浮石がわずかに混入

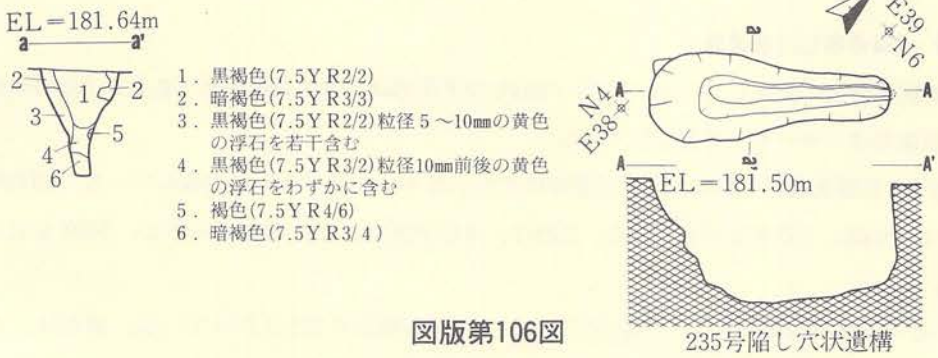
233号・234号陥し穴状遺構

図版第105図

235号　陥し穴状遺構

A地区の平坦地に位置している。平面形は、開口部が長軸の南西端が膨む溝状で、底面が細長い溝状である。短軸の断面形は、「ロート」状を呈している。長軸北東端の壁は内傾し、南西端の壁は凹凸しながら外傾して立ち上がっている。底面は、中央が僅かに低くなっている。長軸の向きは、N42°Eである。

規模は、開口部190㎝×55㎝、底面97㎝×９㎝である。深さは、中央部で95㎝である。



1．黒褐色(7.5Y R2/2)
2．暗褐色(7.5Y R3/3)
3．黒褐色(7.5Y R2/2)粒径５～10㎜の黄色の浮石を若干含む
4．黒褐色(7.5Y R3/2)粒径10㎜前後の黄色の浮石をわずかに含む
5．褐色(7.5Y R4/6)
6．暗褐色(7.5Y R3/４)

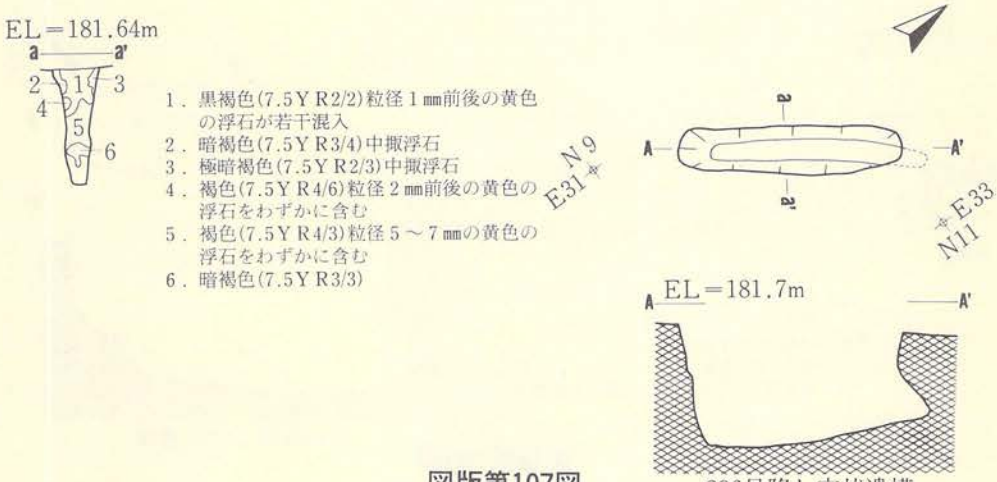
235号陥し穴状遺構

図版第106図

236号　陥し穴状遺構

A地区の平坦地に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸北東の壁は、下半が内傾し、上半が外傾している。南西の壁は、外傾して立ち上がっている。底面は、南西方向へ下っている。長軸の向きは、N36°Eである。

規模は、開口部180cm×40cm、底面173cm×16cmである。深さは、中央部で90cmである。



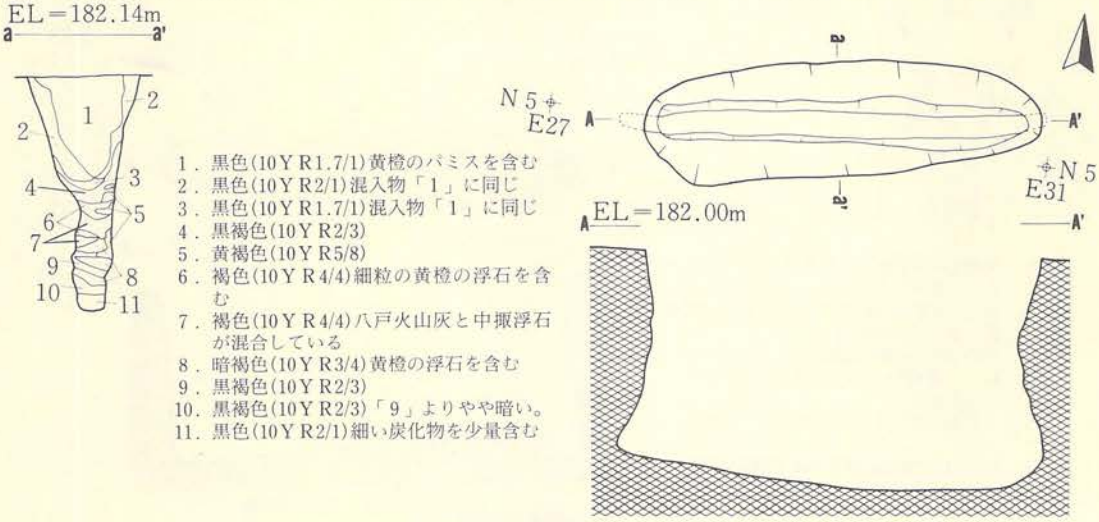
1．黒褐色(7.5YR2/2)粒径1mm前後の黄色の浮石が若干混入
2．暗褐色(7.5YR3/4)中撹浮石
3．極暗褐色(7.5YR2/3)中撹浮石
4．褐色(7.5YR4/6)粒径2mm前後の黄色の浮石をわずかに含む
5．褐色(7.5YR4/3)粒径5～7mmの黄色の浮石をわずかに含む
6．暗褐色(7.5YR3/3)

図版第107図　236号陥し穴状遺構

237号　陥し穴状遺構

A地区の平坦地に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸両端の壁は、下半が内傾し、上半が外傾して立ち上がっている。底面は、東へ下がっている。長軸の向きは、N83°Eである。

規模は、開口部316cm×90cm、底面341cm×20cmである。深さは、中央部で187cmである。



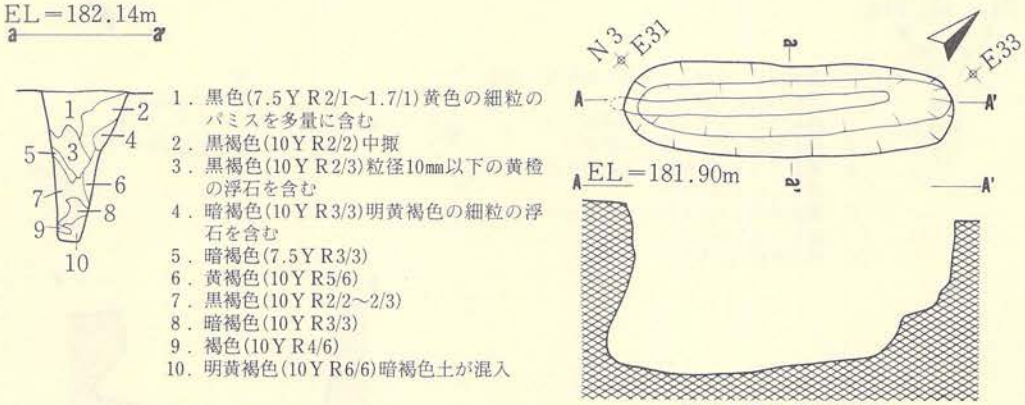
1．黒色(10YR1.7/1)黄橙のパミスを含む
2．黒色(10YR2/1)混入物「1」に同じ
3．黒色(10YR1.7/1)混入物「1」に同じ
4．黒褐色(10YR2/3)
5．黄褐色(10YR5/8)
6．褐色(10YR4/4)細粒の黄橙の浮石を含む
7．褐色(10YR4/4)八戸火山灰と中撹浮石が混合している
8．暗褐色(10YR3/4)黄橙の浮石を含む
9．黒褐色(10YR2/3)
10．黒褐色(10YR2/3)「9」よりやや暗い。
11．黒色(10YR2/1)細い炭化物を少量含む

図版第108図　237号陥し穴状遺構

238号　陥し穴状遺構

A地区平坦地に位置している。平面形は楕円形で、短軸の断面形は逆台形状である。長軸の北東端の壁は、凹凸しながら外傾し、南西端の壁は、下半が内傾し、上半が僅かに外傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。長軸の向きは、N43°Eである。

規模は、開口部263cm×73cm、底面224cm×14cmである。深さは、中央部で123cmである。



1．黒色(7.5Y R2/1～1.7/1)黄色の細粒のパミスを多量に含む
2．黒褐色(10Y R2/2)中撥
3．黒褐色(10Y R2/3)粒径10mm以下の黄橙の浮石を含む
4．暗褐色(10Y R3/3)明黄褐色の細粒の浮石を含む
5．暗褐色(7.5Y R3/3)
6．黄褐色(10Y R5/6)
7．黒褐色(10Y R2/2～2/3)
8．暗褐色(10Y R3/3)
9．褐色(10Y R4/6)
10．明黄褐色(10Y R6/6)暗褐色土が混入

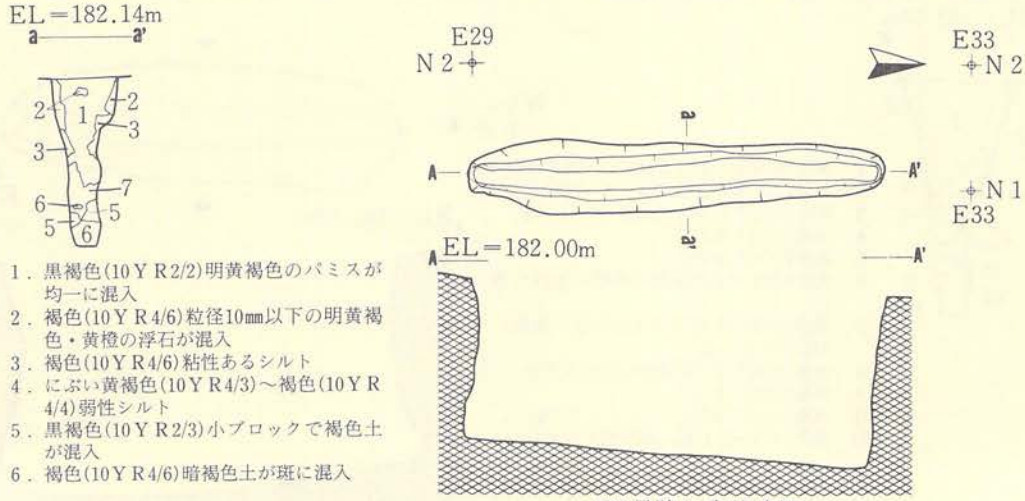
238号陥し穴状遺構

図版第109図

239号　陥し穴状遺構

A地区の平坦地に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸両端の壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。長軸の向きは、N43°Eである。

規模は、開口部334cm×53cm、底面330cm×17cmである。深さは、中央部で130cmである。



1．黒褐色(10Y R2/2)明黄褐色のパミスが均一に混入
2．褐色(10Y R4/6)粒径10mm以下の明黄褐色・黄橙の浮石が混入
3．褐色(10Y R4/6)粘性あるシルト
4．にぶい黄褐色(10Y R4/3)～褐色(10Y R4/4)弱性シルト
5．黒褐色(10Y R2/3)小ブロックで褐色土が混入
6．褐色(10Y R4/6)暗褐色土が斑に混入

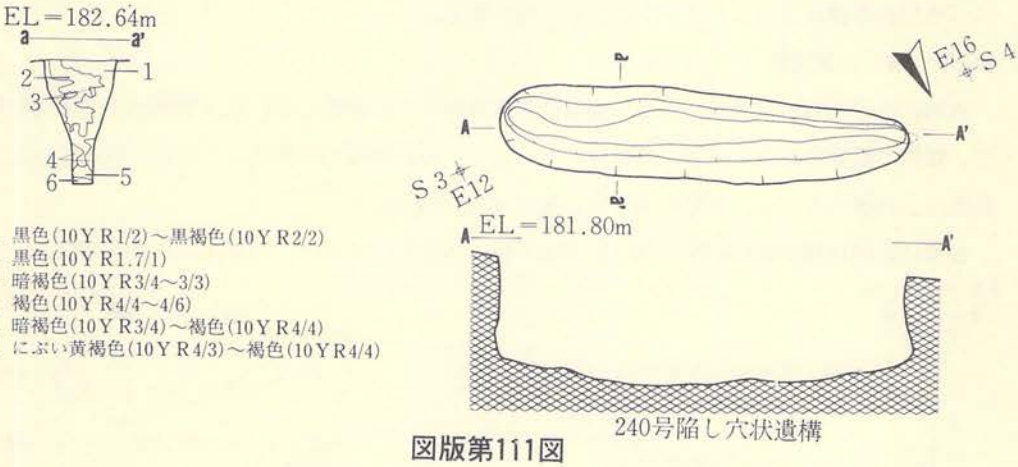
239号陥し穴状遺構

図版第110図

240号　陥し穴状遺構

A地区の平坦地西側に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸西端の壁は、下半が僅かに内傾し、上半は僅かに外傾して立ち上がっている。底面は、緩く起伏している。長軸の向きは、N64°Eである。

規模は、開口部327cm×70cm、底面327cm×20cmである。深さは、中央部で93cmである。



1．黒色(10YR1/2)～黒褐色(10YR2/2)
2．黒色(10YR1.7/1)
3．暗褐色(10YR3/4～3/3)
4．褐色(10YR4/4～4/6)
5．暗褐色(10YR3/4)～褐色(10YR4/4)
6．にぶい黄褐色(10YR4/3)～褐色(10YR4/4)

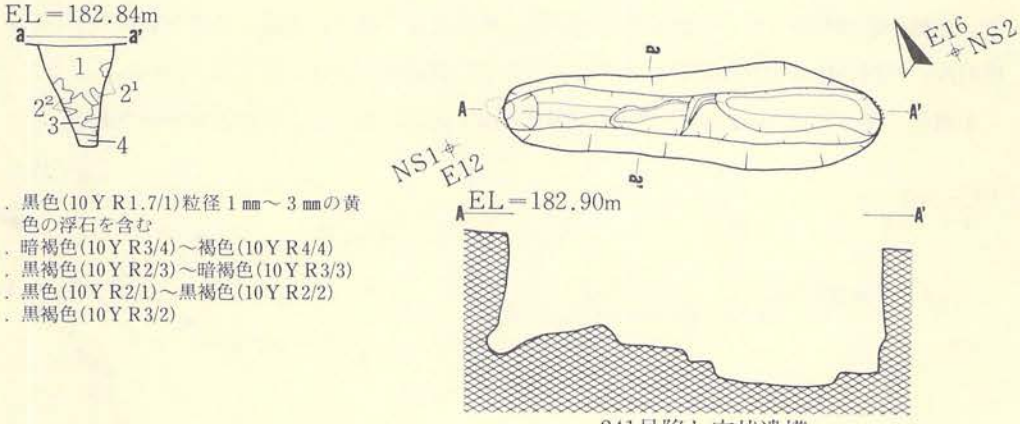
240号陥し穴状遺構

図版第111図

241号　陥し穴状遺構

240号陥し穴状遺構の北隣りに位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸南東の壁は垂直に立ち上がり、北西の壁は内傾して立ち上がっている。底面は、凹凸している。長軸の向きは、N65.5°Eである。

規模は、開口部302cm×65cm、底面310cm×32cmである。深さは、中央部で95cmである。



1．黒色(10YR1.7/1)粒径1mm～3mmの黄色の浮石を含む
2．暗褐色(10YR3/4)～褐色(10YR4/4)
3．黒褐色(10YR2/3)～暗褐色(10YR3/3)
4．黒色(10YR2/1)～黒褐色(10YR2/2)
5．黒褐色(10YR3/2)

241号陥し穴状遺構

図版第112図

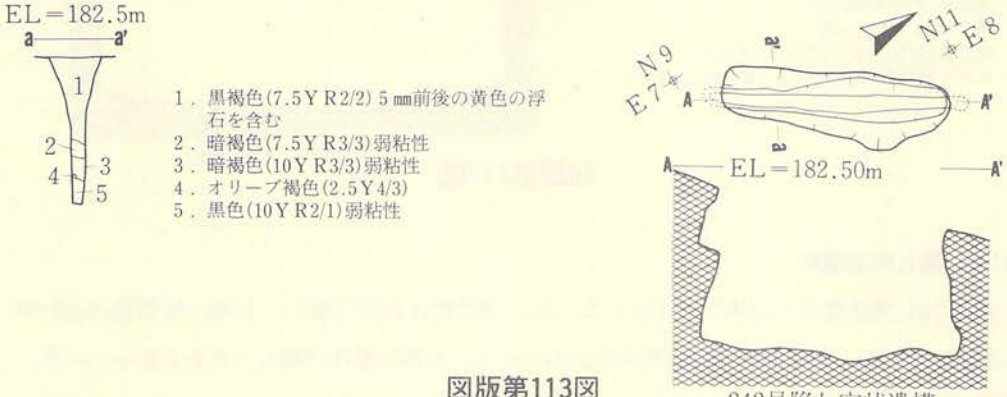
A地区西側谷壁に位置する陥し穴状遺構

谷頭付近の谷壁に3基、谷底に10基が位置している。谷頭付近の谷壁に位置している3基は、242号～244号で、谷底に位置している10基は、245号～254号である。245号～254号の長軸の向きは、谷筋に直交し1m～5m間隔に並列している。遺構の検出面は、242号～244号が中掫浮石火山灰と八戸降下火山灰が混入しあっている再堆積の上面で、245号～254号が中掫浮石に黄色細粒の浮石が混入している堆積層上面である。

242号　陥し穴状遺構

A地区の平坦地から西谷の谷頭に移る傾斜変換線付近に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸両端の壁は内傾して立ち上がっている。底面は、起伏している。長軸の向きは、N33.5°Eである。

規模は、開口部184cm×50cm、底面195cm×14cmである。深さは、中央部で115cmである。



図版第113図　242号陥し穴状遺構

243号　陥し穴状遺構

A地区の平坦地から西谷の谷頭に移る傾斜変換線付近に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は「V」字状を呈している。長軸両端の壁は、外傾して立ち上がっている。底面は、地形の傾斜方向に平行して下がっている。長軸の向きは、N11°Eである。

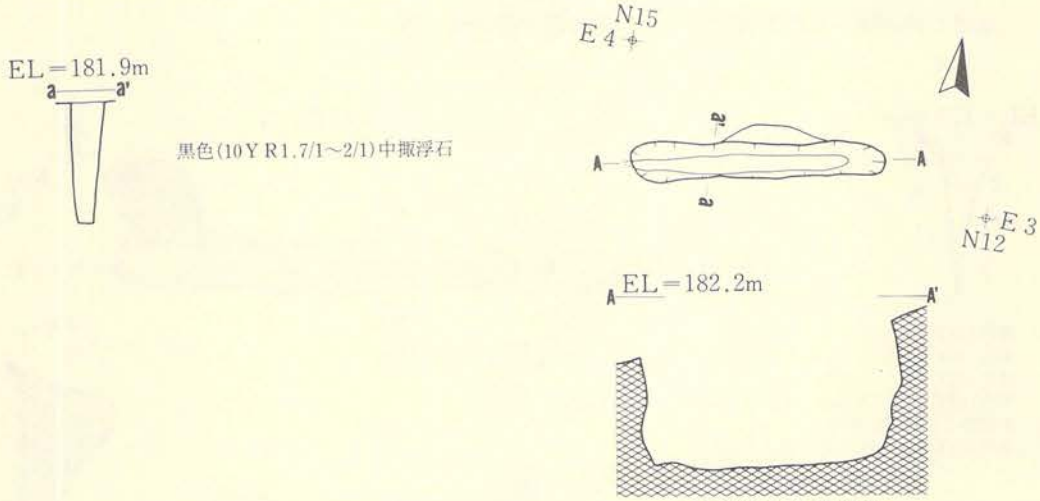
規模は、開口部182cm×30cm、底面164cm×9cmである。深さは、中央部で35cmである。

図版第114図　243号陥し穴状遺構

244号　陥し穴状遺構

143号の西隣りに位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸両端の壁は、やや内彎して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。長軸の向きは、N7.5°Wである。

規模は、開口部203cm×27cm、底面180cm×14cmである。深さは、中央部で100cmである。



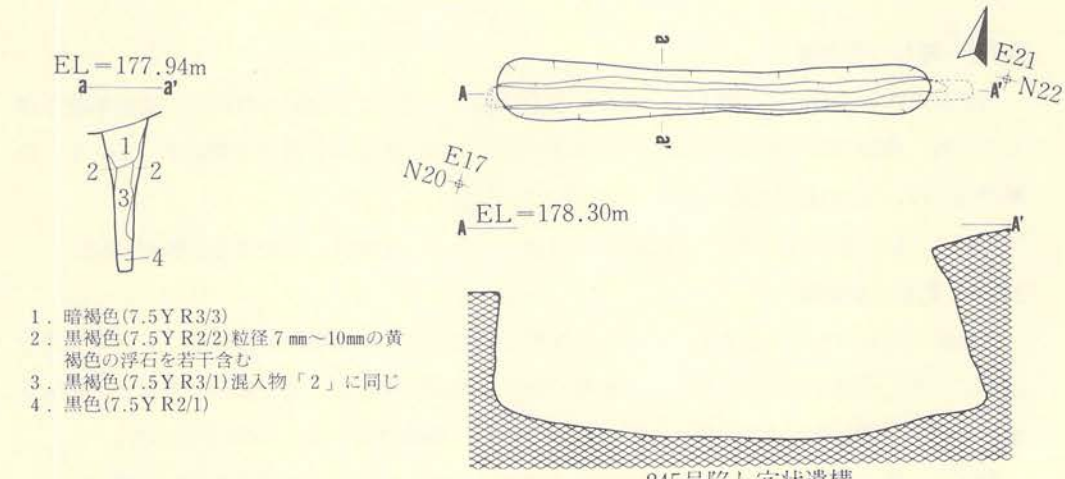
244号陥し穴状遺構

図版第115図

245号　陥し穴状遺構

A地区の西谷の谷頭付近の谷底に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸両端の壁は、内傾して立ち上がっている。底面は、中央が僅かに低くなっている。長軸の向きは、N74°Eである。

規模は、開口部345cm×33cm、底面315cm×12cmである。深さは、中央部で135cmである。



245号陥し穴状遺構

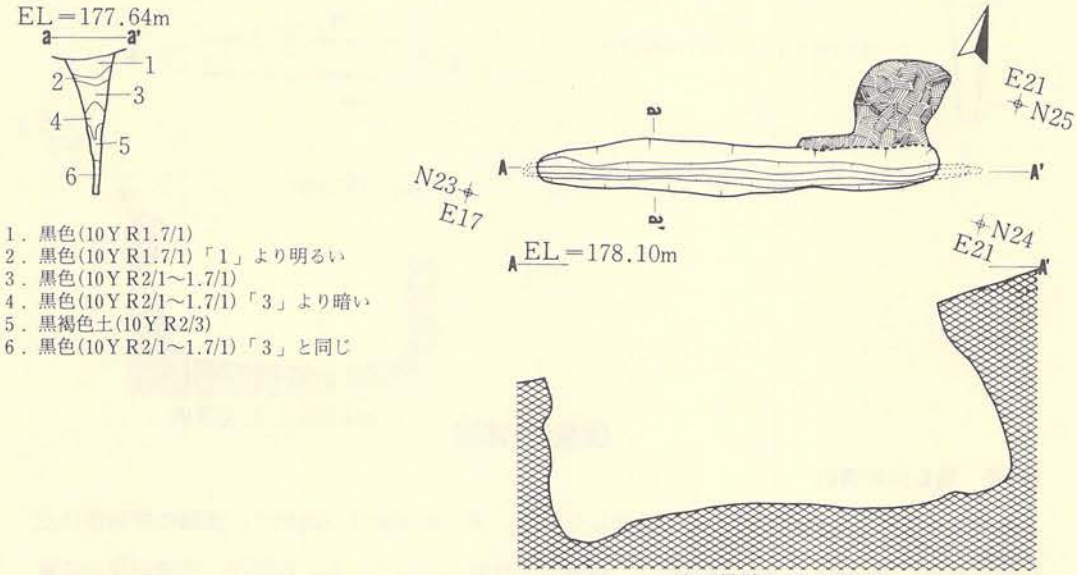
図版第116図

246号　陥し穴状遺構

A地区の西谷の谷底に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は「V」字形を呈している。長軸両端の壁は、内傾して立ち上がっている。底面は、両端が掘り込まれ、中央が僅かに高くなっている。長軸の向きは、N73°Eである。

規模は、開口部320cm×40cm、底面365cm×5cmである。深さは、中央部で135cmである。

遺構の北東端が風倒木痕によって一部撹乱を受けている。



246号陥し穴状遺構

図版第117図

247号　陥し穴状遺構

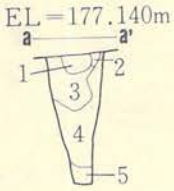
A地区の西谷の谷底に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸両端の壁は、内傾して立ち上がっている。底面は、東の方向に下っている。長軸の向きは、N74°Eである。

規模は、開口部331cm×47cm、底面397cm×18cmである。深さは、中央部で119cmである。

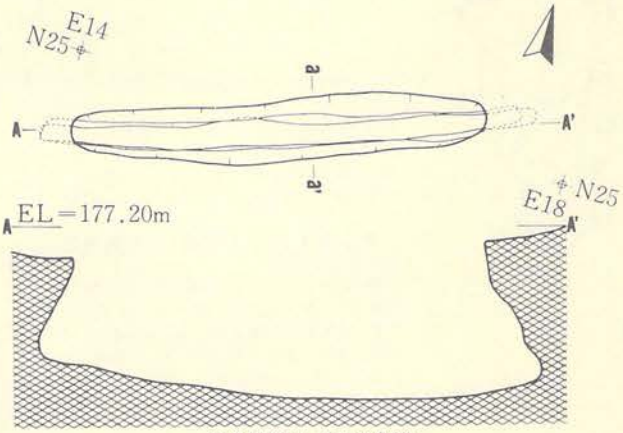
248号　陥し穴状遺構

A地区の西谷の谷底に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸東端の壁は内傾し、西端の壁は下半が内彎し、上半で僅かに外傾して立ち上がっている。底面は、中央が僅かに低くなっている。長軸の向きは、N63°Eである。

規模は、開口部338cm×70cm、底面375cm×20cmである。深さは、中央部で150cmである。

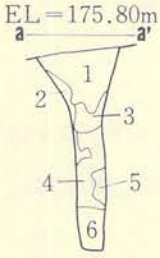


1．黒色(7.5Y R2/1)黄褐色の浮石を若干含む
2．暗褐(10Y R3/3)
3．極暗褐色(7.5Y R2/3)明黄色～黄褐色の浮石を若干
4．黒褐色(7.5Y R3/1)黄褐色の浮石を若干含む
5．黒褐色(7.5Y R2/2)混入物「4」に同じ

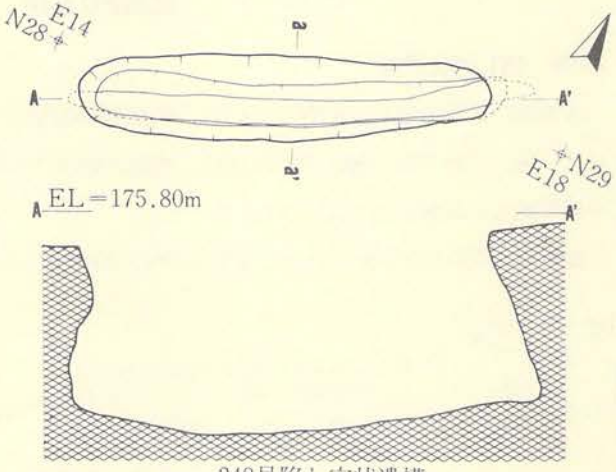


247号陥し穴状遺構

図版第118図



1．黒色(7.5Y R2/1)粒径2㎜前後の明黄色の浮石を若干含む
2．黒褐色(7.5Y R2/2)混入物「1」に同じ
3．黒褐色(7.5Y R3/1)混入物「1」に同じ
4．黒色(7.5Y R2/1)粒径7㎜前後の黄褐色の浮石を含む
5．暗褐色(7.5Y R3/3)混入物「4」に同じ
6．黒色(7.5Y R1.7/1)混入物「4」に同じ



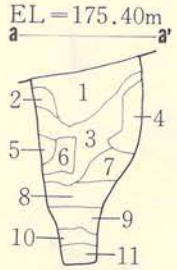
248号陥し穴状遺構

図版第119図

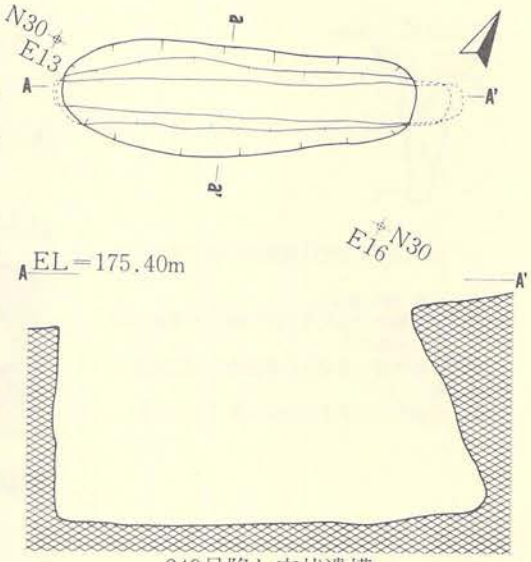
249号　陥し穴状遺構

A地区の西谷の谷底に位置している。平面形は楕円形で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸東端の壁は内傾し、西端の壁は垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。長軸の向きは、N61.5°Eである。

規模は、開口部284㎝×85㎝、底面328㎝×29㎝である。深さは、中央部で166㎝である。



1．黒色(10Y R1.7/1)明黄褐色・黄橙の浮石を混入
2．黒色(10Y R1.7/1)「1」より明るい。混入物「1」に同じ
3．黒色(10Y R2/1)混入物「1」に同じ
4．黒色(10Y R2/1～1.7/1)混入物「1」に同じ
5．黒褐色(10Y R2/3)中撹まじり明黄褐色の浮石が若干混入
6．黒色(10Y R1.7/1)混入物「5」に同じ
7．黒褐色(10Y R2/2)混入物「6」に同じ
8．黒色(10Y R2/1)混入物「6」に同じ
9．黒褐色(10Y R2/3)混入物「6」に同じであるが「6」より大きい。埋土は、かたくしまっている。
10．黒褐色(10Y R2/2)混入物「9」と同じ。埋土は、軟弱である
11．黒褐色(10Y R2/2)「10」より暗い混入物「9」と同じ



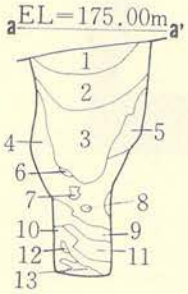
249号陥し穴状遺構

図版第120図

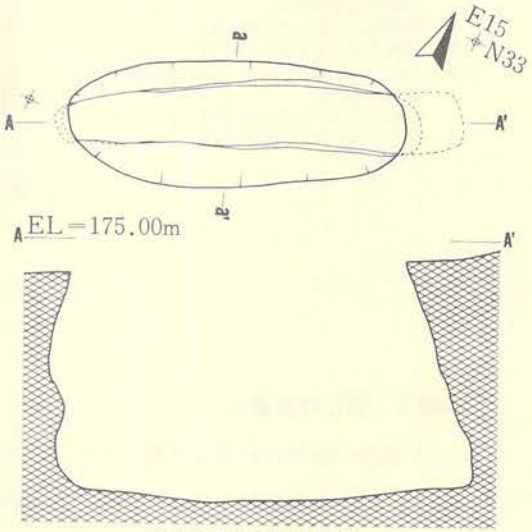
250号　陥し穴状遺構

A地区の西谷の谷底に位置している。平面形は楕円形で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸東端の壁は内に傾斜し、西端の壁は緩く凹凸して立ち上がっている。底面は、平坦である。長軸の向きは、N64°Eである。

規模は、開口部269cm×100cm、底面328cm×46cmである。深さは、中央部で187cmである。



1．黒色土(10Y R1.7/1)粒径20mm～極細粒までの明黄褐色・黄橙の浮石が均一に混入
2．黒色土(10Y R1.7/1)混入物「1」と同じであるが、やや「1」より明るい
3．黒色土(10Y R2/1～1.7/1)混入物「1」と同じ
4．黒褐色(10Y R2/3)中撹まじり
5．暗褐色(10Y R3/4)性状「4」に同じ
6．暗褐色(10Y R3/3)性状「4」に同じ
7．黒褐色(10Y R2/2～2/3)性状(4」に同じ
8．黒褐色(10Y R3/2)暗褐色(10Y R3/3)性状「4」に同じ
9．黒褐色(10Y R3/2)中撹まじり
10．暗褐色(10Y R3/3)
11．黒色(10Y R2/1)中撹まじり
12．黒褐色(10Y R2/1)　中撹まじり
13．黒色(10Y R2/1)中撹まじり



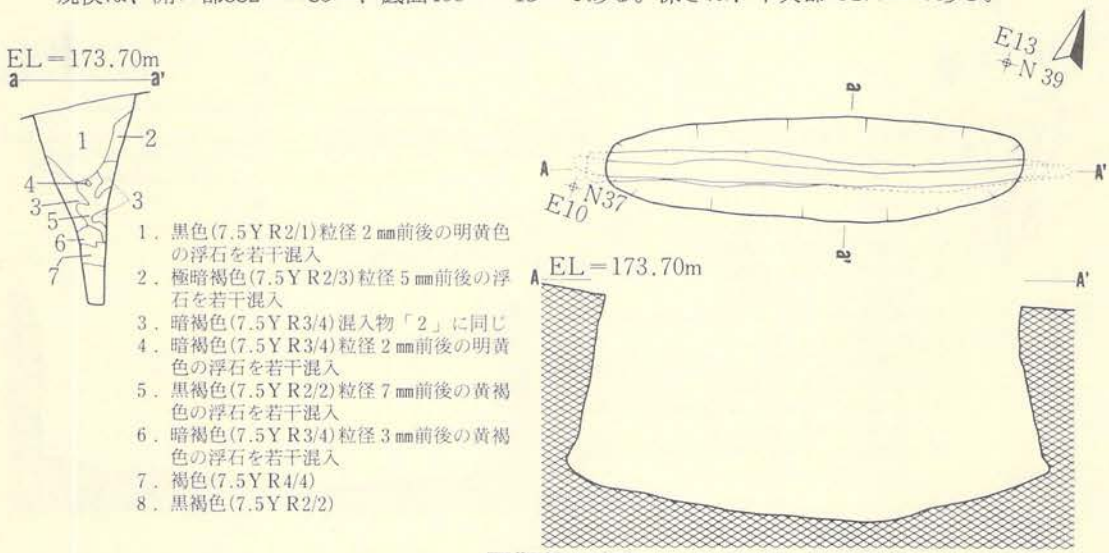
250号陥し穴状遺構

図版第121図

251号　陥し穴状遺構

A地区西谷の谷底に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は、「ロート」状を呈している。長軸両端の壁は、内に傾斜して立ち上がっている。底面は、中央が僅かに低くなっている。長軸の向きは、N72.5°Eである。

規模は、開口部332cm×85cm、底面400cm×13cmである。深さは、中央部で170cmである。



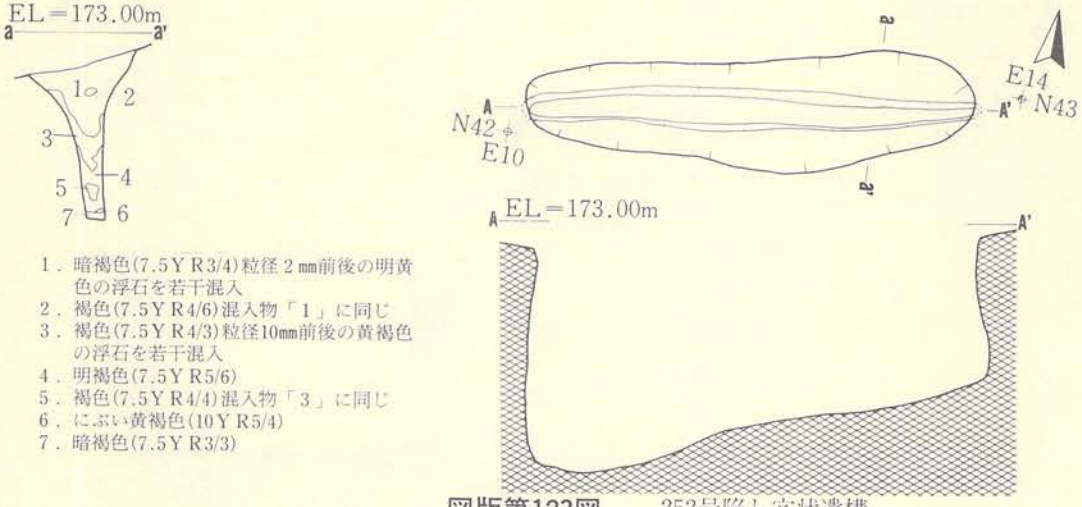
1．黒色(7.5Y R2/1)粒径2㎜前後の明黄色の浮石を若干混入
2．極暗褐色(7.5Y R2/3)粒径5㎜前後の浮石を若干混入
3．暗褐色(7.5Y R3/4)混入物「2」に同じ
4．暗褐色(7.5Y R3/4)粒径2㎜前後の明黄色の浮石を若干混入
5．黒褐色(7.5Y R2/2)粒径7㎜前後の黄褐色の浮石を若干混入
6．暗褐色(7.5Y R3/4)粒径3㎜前後の黄褐色の浮石を若干混入
7．褐色(7.5Y R4/4)
8．黒褐色(7.5Y R2/2)

図版第122図　251号陥し穴状遺構

252号　陥し穴状遺構

A地区西谷の谷底に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は、「ロート」状を呈している。長軸両端の壁は、内傾して立ち上がっている。底面は、西の方向へ下っている。長軸の向きは、N80°Eである。

規模は、開口部335cm×85cm、底面367cm×19cmである。深さは、中央部で147cmである。



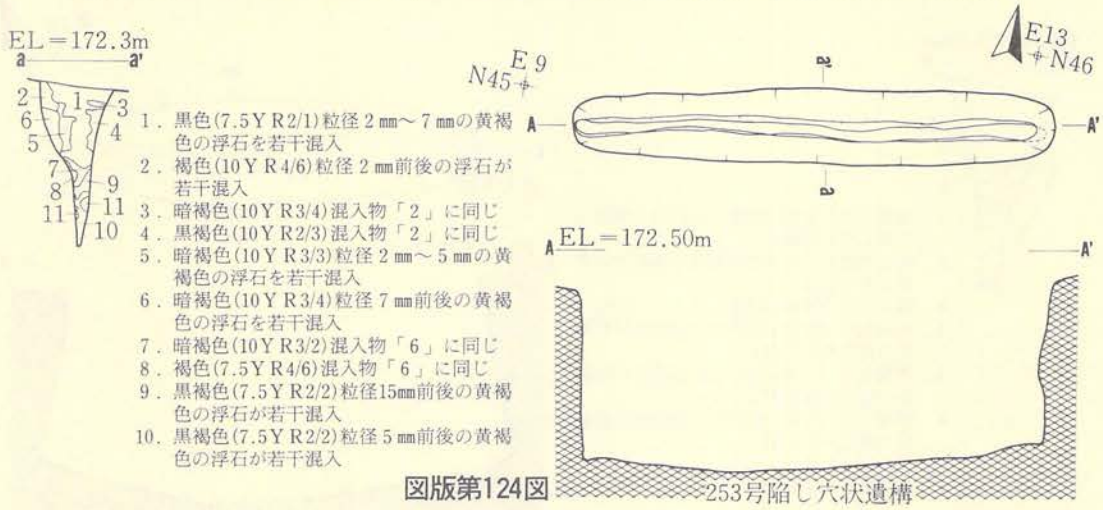
1．暗褐色(7.5Y R3/4)粒径2㎜前後の明黄色の浮石を若干混入
2．褐色(7.5Y R4/6)混入物「1」に同じ
3．褐色(7.5Y R4/3)粒径10㎜前後の黄褐色の浮石を若干混入
4．明褐色(7.5Y R5/6)
5．褐色(7.5Y R4/4)混入物「3」に同じ
6．にぶい黄褐色(10Y R5/4)
7．暗褐色(7.5Y R3/3)

図版第123図　252号陥し穴状遺構

253号　陥し穴状遺構

A地区西谷の谷底に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は「V」字状を呈している。長軸両端の壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、中央が僅かに低くなっている。長軸の向きは、N79°Eである。

規模は、開口部387cm×60cm、底面378cm×7cmである。深さは、中央部で147cmである。



1．黒色(7.5YR2/1)粒径2mm～7mmの黄褐色の浮石を若干混入
2．褐色(10YR4/6)粒径2mm前後の浮石が若干混入
3．暗褐色(10YR3/4)混入物「2」に同じ
4．黒褐色(10YR2/3)混入物「2」に同じ
5．暗褐色(10YR3/3)粒径2mm～5mmの黄褐色の浮石を若干混入
6．暗褐色(10YR3/4)粒径7mm前後の黄褐色の浮石を若干混入
7．暗褐色(10YR3/2)混入物「6」に同じ
8．褐色(7.5YR4/6)混入物「6」に同じ
9．黒褐色(7.5YR2/2)粒径15mm前後の黄褐色の浮石が若干混入
10．黒褐色(7.5YR2/2)粒径5mm前後の黄褐色の浮石が若干混入

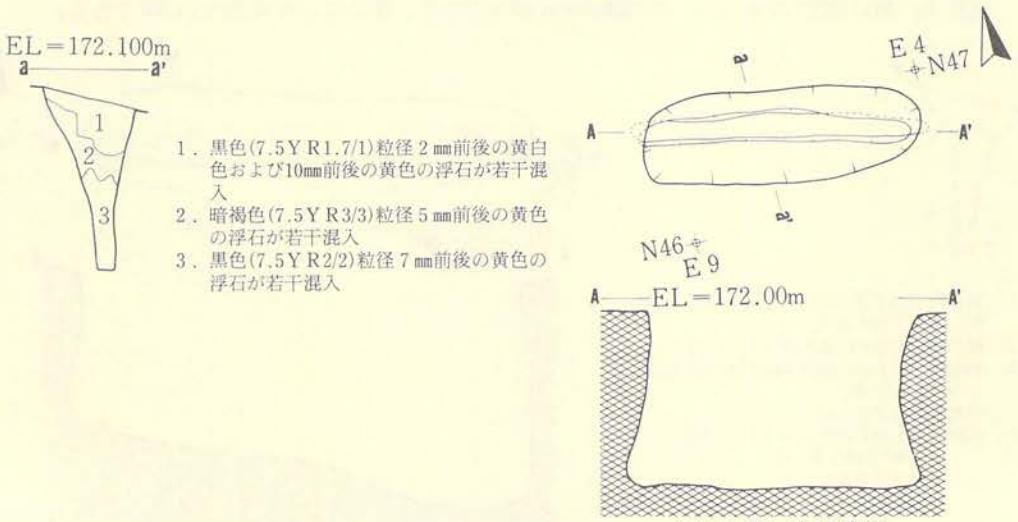
253号陥し穴状遺構

図版第124図

254号　陥し穴状遺構

A地区西谷の谷底に位置している。平面形は楕円形で、短軸の断面形は、「ロート」状を呈している。長軸両端の壁は、下半で内傾し、上半で外傾して立ち上がっている。底面は、平坦である。長軸の向きは、N78°Eである。

規模は、開口部223cm×75cm、底面216cm×19cmである。深さは、中央部で142cmである。



1．黒色(7.5YR1.7/1)粒径2mm前後の黄白色および10mm前後の黄色の浮石が若干混入
2．暗褐色(7.5YR3/3)粒径5mm前後の黄色の浮石が若干混入
3．黒色(7.5YR2/2)粒径7mm前後の黄色の浮石が若干混入

254号陥し穴状遺構

図版第125図

B地区平坦地に位置する陥し穴状遺構

平坦地に位置している遺構は20基である。平坦地の北東端は、小井田川に落ちる崖となっており、この崖寄りの縁辺から北側縁辺付近にかけて255～270号が位置し、北端縁辺のA地区から下がる急斜面下に271号～275号が位置している。

遺構の検出面は、255～258号が現地表面下40cmに位置する黒褐色を呈している中掘浮石に明黄色の浮石が15%混入している再堆積上面で、259号～270号が現地表面下15～30cmに位置する八戸降下火山灰層上面である。271号～275号は、中掘浮石に粒径極小～大までの黄橙の浮石が20%混入している再堆積層の上面である。

255号　陥し穴状遺構

B地区平坦地の東側縁辺部に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸東端の壁は内に傾斜し、西端の壁は底部付近が掘り込まれて内彎した後、垂直に立ち上がっている。底面は、緩く起伏している。長軸の向きは、N78°Eである。

規模は、開口部373cm×87cm、底面387cm×12cmである。深さは、中央部を150cmである。

256号　陥し穴状遺構

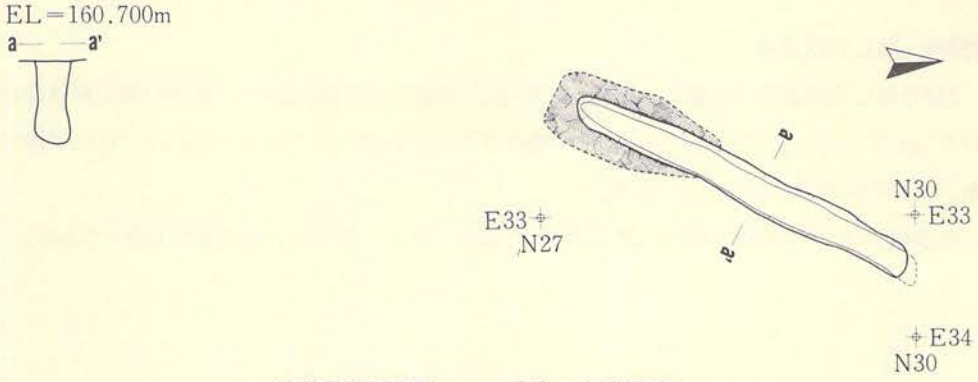
255号陥し穴状遺構の西隣りに位置している。平面形は楕円形で、短軸の断面形は「U」字状を呈している。長軸北端の壁は凹凸しながら内傾し、南端の壁は凹凸しながらほぼ垂直ぎみに立ち上がっている。底面は、中央が僅かに底くなっている。長軸の向きは、N13°Eである。

規模は、開口部290cm×112cm、底面295cm×27×である。深さは、中央部を150cmである。

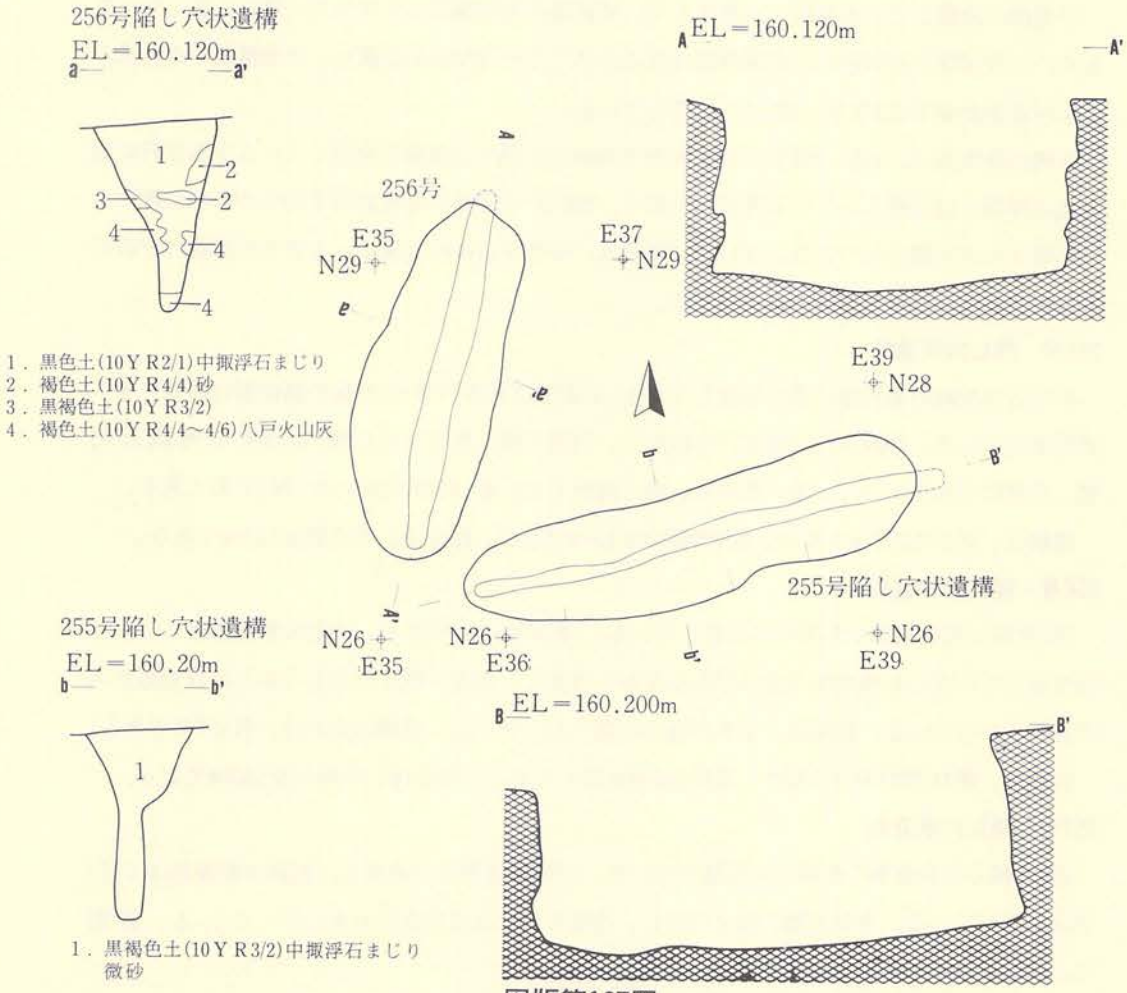
257号　陥し穴状遺構

256号陥し穴状遺構の西隣りに位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は「U」字状を呈している。長軸北端の壁は内傾し、南端の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。長軸の向きは、N28°Eである。

規模は、開口部296cm×31cm、底面298cm×23cmである。深さは、中央部で66cmである。



図版第126図　257号陥し穴状遺構

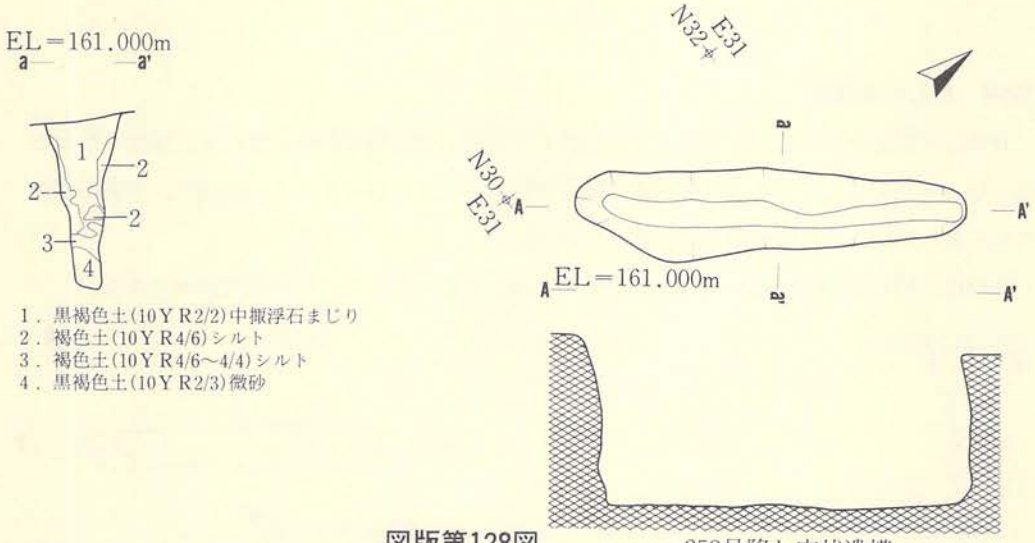


図版第127図

258号　陥し穴状遺構

257号陥し穴状遺構の北隣りに位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸両端の壁は、ほぼ垂直ぎみに立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。長軸の向きは、N36°Eである。

規模は、開口部313cm×62cm、底面287cm×15cmである。深さは、中央部で130cmである。



258号陥し穴状遺構

図版第128図

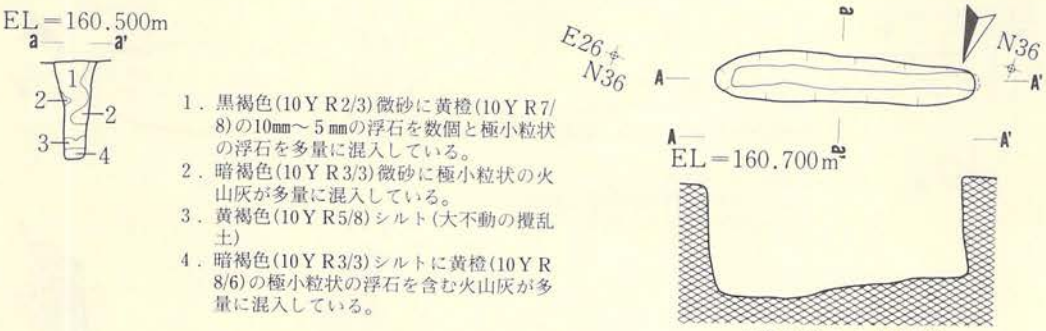
259号　陥し穴状遺構

B地区平坦地の北東縁辺付近に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸両端の壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、緩く起伏している。長軸の向きは、N73°Eである。

規模は、開口部208㎝×25㎝、底面198㎝×16㎝である。深さは、中央部で78㎝である。

出土遺物（図版第142図１～７、写真図版第77図１～７）

底面から縄文時代早期に属する土器片が７点出土した。（１～４）は口縁部片である。（１）は、口唇部がほぼ平坦で、口唇部及び口縁部に貝殻腹縁圧痕文を斜条に施している。（２）は、口唇部が器表面方向に傾斜し、口唇部には貝殻腹縁圧痕文を斜条に、口縁部には貝殻腹縁圧痕文を横条に施文している。（３・４）は、口唇部に刻目を有し、口縁部には貝殻腹縁圧痕文を左右の斜条に施文している。（５）は胴部片で、貝殻腹縁圧痕文を斜条に施文している。（６・７）は尖底深鉢土器の底部片で、無文のものである。



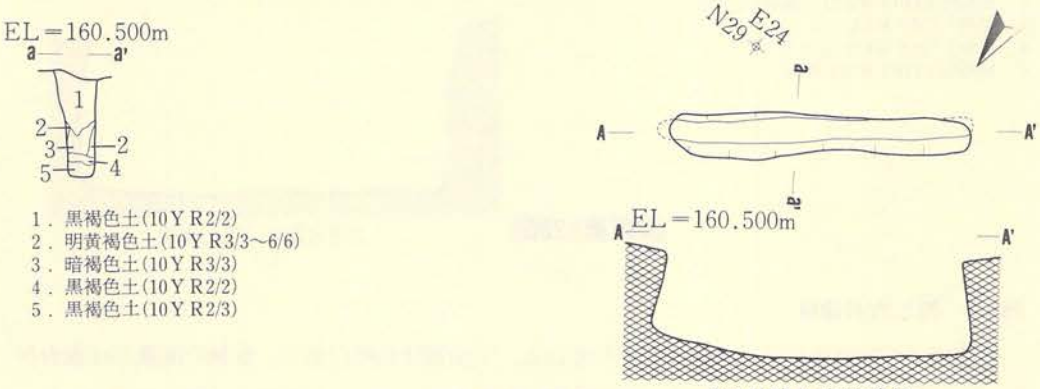
259号陥し穴状遺構

図版第129図

260号　陥し穴状遺構

B地区平坦地の中央からやや東寄りに位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は「U」字状を呈している。長軸両端の壁は内傾して立ち上がっている。底面は、中央が僅かに低くなっている。長軸の向きは、N58°Eである。

規模は、開口部240cm×35cm、底面252cm×20cmである。深さは、中央部で80cmである。



1．黒褐色土(10YR2/2)
2．明黄褐色土(10YR3/3～6/6)
3．暗褐色土(10YR3/3)
4．黒褐色土(10YR2/2)
5．黒褐色土(10YR2/3)

260号陥し穴状遺構

図版第130図

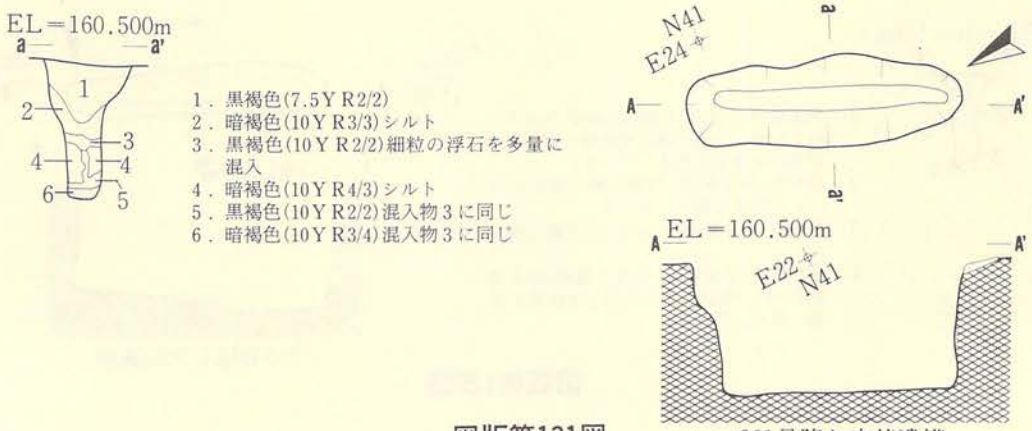
261号　陥し穴状遺構

B地区平坦地の北縁辺付近に位置している。平面形は楕円形で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸北端の壁は垂直ぎみに、南端の壁は下半が垂直に、上半が外傾した後、垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。長軸の向きは、N28°Eである。

規模は、開口部220cm×73cm、底面188cm×18cmである。深さは、中央部で108cmである。

出土遺物（図版第142図８～10、写真図版第77図８～10）

埋土から縄文時代早期に属する土器片３片が出土した。（８・10）は胴部片で、（９）は底部片である。（８・９）には、貝殻腹縁圧痕文を斜条に施し、（10）には、貝殻腹縁押し引き文を施文している。



1．黒褐色(7.5YR2/2)
2．暗褐色(10YR3/3)シルト
3．黒褐色(10YR2/2)細粒の浮石を多量に混入
4．暗褐色(10YR4/3)シルト
5．黒褐色(10YR2/2)混入物３に同じ
6．暗褐色(10YR3/4)混入物３に同じ

261号陥し穴状遺構

図版第131図

262号・263号　陥し穴状遺構

B地区平坦地の北縁辺付近に位置している。262号・263号の平面形は共に長楕円形で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。

262号の長軸南端の壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。長軸の向きは、N20°Wである。

263号の長軸東端の壁は内に傾斜し、西端の壁は外に傾斜して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。長軸の向きは、N53°Eである。

規模は、262号が開口部の短軸120㎝、底面の短軸20㎝、中央部の深さ138㎝、263号が開口部360㎝×120㎝、底面350㎝×16㎝、中央部の深さ178㎝である。

262号と263号は重複しており、262号の北端を263号の東端が切り込んで遺構を築いている。

出土遺物　（図版第142図11～第143図28、写真図版第77図11～第78図28）

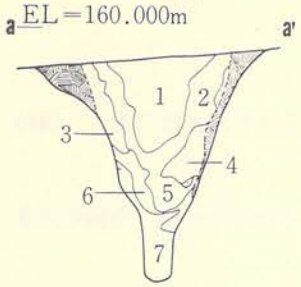
262号陥し穴状遺構の底面から4片、埋土下層から5片、埋土中層から7片の縄文時代早期に属する土器片が出土した。

（11～14）は底面から出土した土器片である。（11）は口縁部片で（12・13）は底部片である。いずれも無文のものである。（14）は胴部片で、縦条に貝殻腹縁圧痕文を施文している。

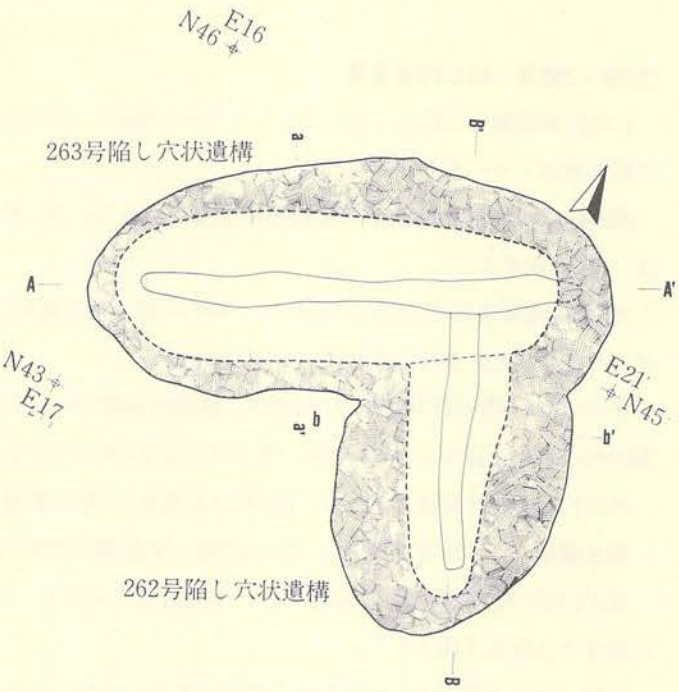
（15～19）は、底面直上から出土した土器片である。（19）は口縁部片で、口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施し、口縁部には横条に貝殻腹縁圧痕文を数条施した下部に爪による上方からの刺突を2段重ねて横方向に巡らしている。（15～18）は胴部片で、（15）は無文のもので、（16～18）には貝殻腹縁圧痕文を左右の斜条に施文している。

（20～28）は、埋土中層から出土した土器片である。（26・27）は口縁部片である。（26）の口唇部には貝殻腹縁圧痕文を斜条に施し、口縁部に棒状工具による刺突を3段重ねて横方向に巡らし、その下部に貝殻腹縁圧痕文を施文している。（27）の口唇部には刻目を巡らし、口縁部には爪による上方からの刺突を数段重ねて横方向に連続的に巡らしている。（20～25・28）は胴部片である。（20～24）には、貝殻腹縁圧痕文を施文し、（25）には片刃平棒工具による上方からの刺突を数段重ねて横方向に巡らした下部に貝殻腹縁圧痕文を施文している。（28）は貝殻条痕文を横条に施文している。

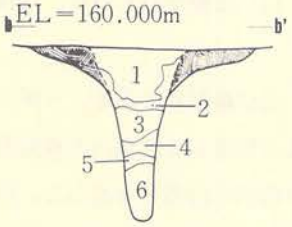
263号陥し穴状遺構



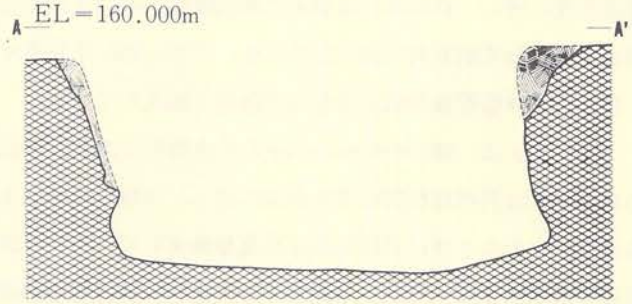
1．黒色(10Y R1.7/1)微砂に粒径1㎜以下の褐色(10Y R4/6)の浮石及びその黒色化したもの、粒径0.3㎜以下の白色・透明なガラス質の火山灰を多量に含んでいる。
2．黒褐色(10Y R3/2)微砂。性状、混入物は1に同じで色調のみが異っている。
3．暗褐色(10Y R3/4)微砂。性状、混入物は1・2に同じで色調のみが異っている。
4．褐色(10Y R4/4～4/6)シルトに極小粒状の極めて軟弱な暗褐色(10Y R3/3～3/4)の浮石を多量に含んでいる。
5．明黄褐色(2.5Y R7/6)の極小粒状の浮石と極小粒状の白色火山墳出物が混入しあっている砂質土(中撹)
6．褐色(10Y R4/6)シルトに極小粒状の軟弱な黒褐色(10Y R3/2)の浮石を多量に含んでいる。(八戸火山灰か大不動の攪乱土)
7．黄褐色(10Y R5/6)～褐色(10Y R4/6)シルトに軟弱な極小粒状の浮石が多量に混入(八戸火山灰か大不動の攪乱土)



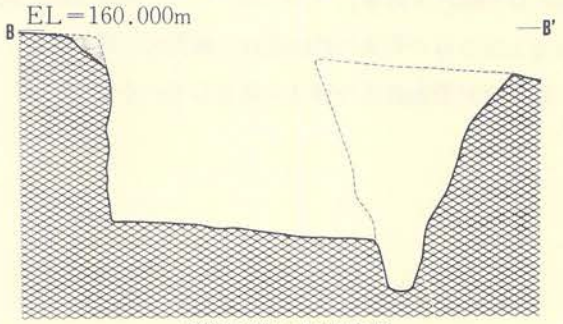
262号陥し穴状遺構



1．黒色(10Y R2/1～1.7/1)微砂に粒径5～20㎜の黄橙(10Y R8/8)の浮石が十数個混入し、粒径1㎜以下の浅黄橙(10Y R8/4)及び粒径0.3㎜以下のガラス質の火山灰が多量に混入している。
2．褐色(10Y R4/4)シルトに粒径5㎜～10㎜の明黄褐色(10Y R7/6)の軟弱な浮石が3％，粒径2㎜以下の同じ浮石が20％均一に混入している。
3．暗褐色(10Y R3/3)シルトに褐色(10Y R4/6)シルトが斑に混入している。
4．暗褐色(10Y R4/4～4/6)シルト
5．暗褐色(10Y R3/3)～黒褐色(10Y R2/3)シルトに粒径3㎜前後の明黄褐色(10Y R6/6)の軟弱な浮石が若干混入している。
6．明黄褐色(10Y R6/6)シルトに粒径5㎜以下の軟弱な浮石が若干混入している。



263号陥し穴状遺構



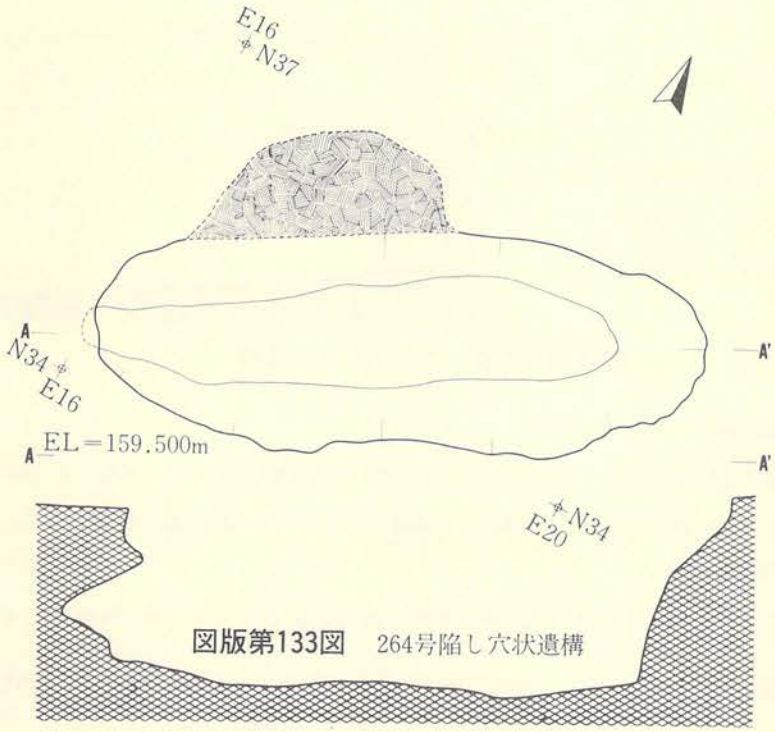
262号陥し穴状遺構

図版第132図

264号　陥し穴状遺構

B地区平坦地の中央からやや北寄りに位置している。平面形は楕円形で、短軸の断面形は逆台形状である。長軸北東端の壁は外傾し、南西端の壁は凹凸して立ち上がっている。底面は、緩く起伏している。長軸の向きは、N73°Eである。

規模は、開口部480cm×170cm、底面430cm×80cmである。深さは、中央部で130cmである。



図版第133図　264号陥し穴状遺構

265号　陥し穴状遺構

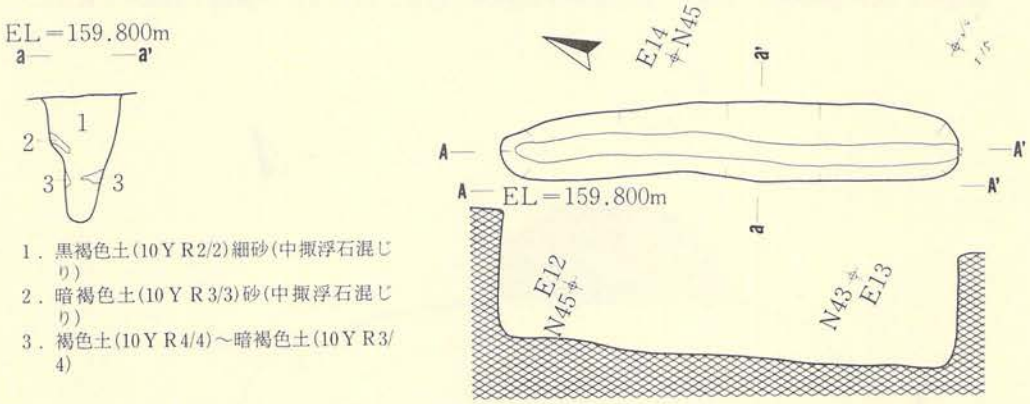
B地区平坦の北縁辺付近に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は「V」字状を呈している。長軸両端の壁は、垂直に立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。長軸の向きは、N21.5°Wである。

規模は、開口部368cm×60cm、底面358cm×15cmである。深さは、中央部で100cmである。
本遺構と1号住居址が重複しており、1号住居址の東端を本遺構が切り込んで遺構を築いている。

出土遺物　（図版第143図29～35、写真図版第78図29～35）

埋土中層から7片の縄文時代早期に属する土器片が出土した。（29）は口縁部片で無文のも

のである。(30～34) は胴部片である。(30) は無文のもので円孔を有している。(31～33) には貝殻腹縁圧痕文を施文し、(34) には横条に貝殻腹縁圧痕文を施した下部に片刃平棒工具による上方からの刺突を数段重ねて横方向に巡らしている。(35) は底部片で、貝殻腹縁圧痕文を縦条に施文している。

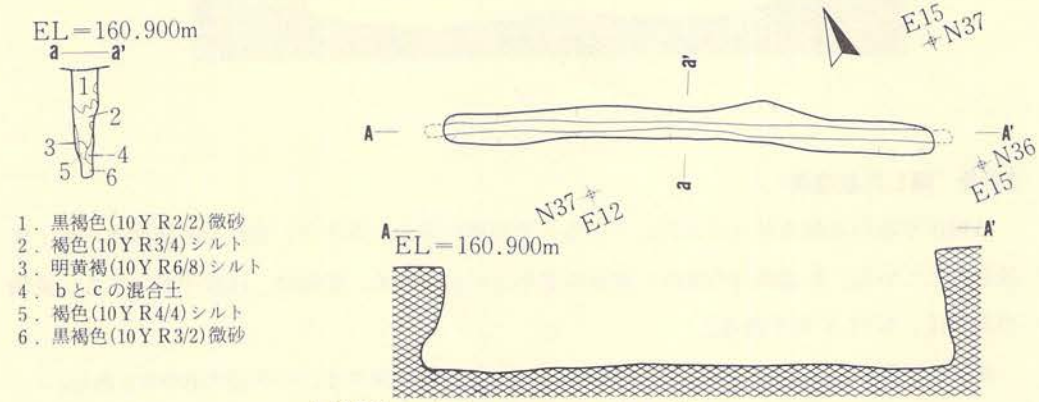


図版第134図　265号陥し穴状遺構

266号　陥し穴状遺構

B地区平坦地の北側縁辺付近に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は逆台形を呈している。長軸両端の壁は、内傾して立ち上がっている。底面は、平坦である。長軸の向きは、N63°Wである。

規模は、開口部393cm×21cm、底面422cm×6cmである。深さは、中央部で85cmである。



図版第135図　266号陥し穴状遺構

267号　陥し穴状遺構

B地区平坦地の北側縁辺付近に位置している。平面形は細長い溝状で南東が脹らんでいる。

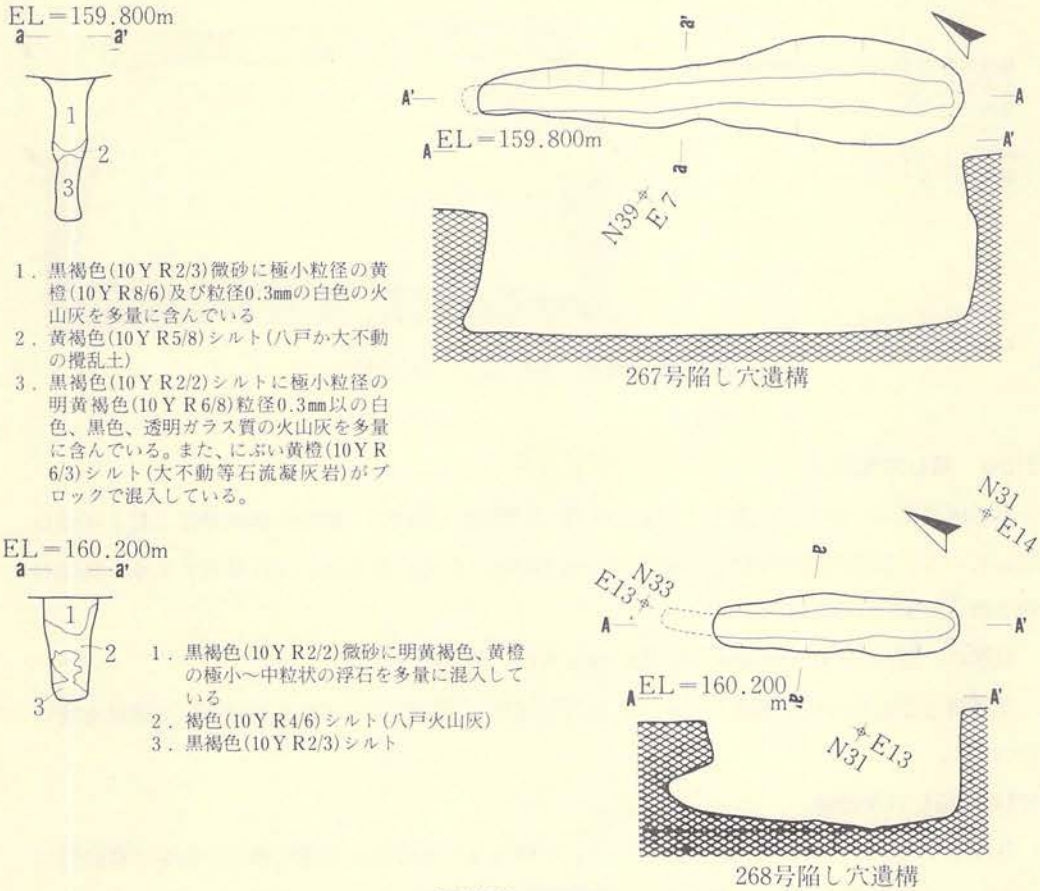
短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸北西の壁は内傾し、南東の壁は内彎して立ち上がっている。底面は、平坦である。長軸の向きは、N37°Eである。

規模は、開口部388cm×43cm、底面392cm×19cmである。深さは、中央部で113cmである。

268号　陥し穴状遺構

B地区平坦地の中央からやや北寄りに位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸北西端の壁は底部付近で掘り込まれ、南東端の壁は垂直に立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。長軸の向きは、N29°Wである。

規模は、開口部197cm×48cm、底面234cm×26cm、深さ83cmである。

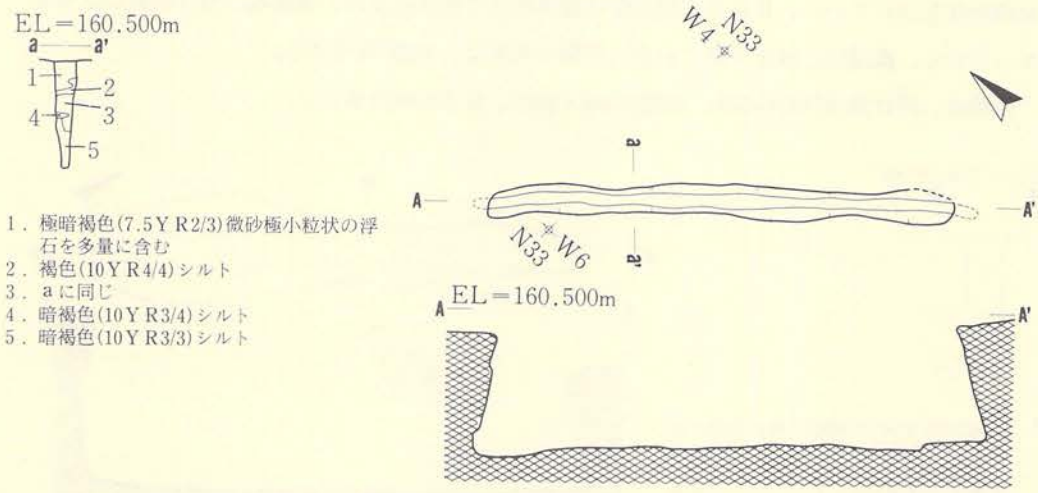


図版第136図

269号　陥し穴状遺構

B地区平坦地の北西側縁辺付近に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は「V」字状を呈している。長軸両端の壁は、内傾して立ち上がっている。底面は緩く起伏し南東方向へ下っている。長軸の向きは、N40°Wである。

規模は、開口部375cm×25cm、底面403cm×10cm、深さ95cmである。



図版第137図　269号陥し穴状遺構

270号　陥し穴状遺構

B地区平坦地の西側に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は「U」字状を呈している。長軸両端の壁は、内傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。長軸の向きは、N85.5°Eである。

規模は、開口部330cm×33cm、底面360cm×9cm、深さ82cmである。

本遺構と2号住居址が重複しており、2号住居址の南端壁を本遺構が切り込んで遺構を築いている。

271号　陥し穴状遺構

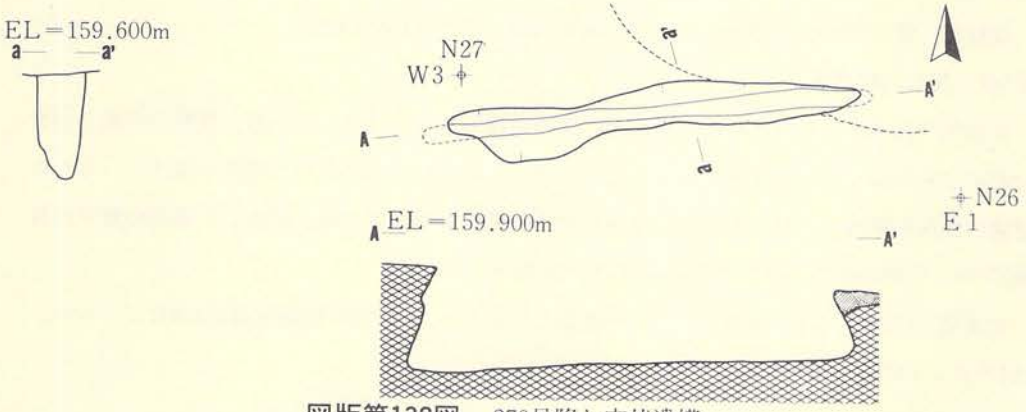
B地区平坦地の南側縁辺に位置している。平面形は中央が脹らむ楕円形で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸両端の壁は、下半が内彎し、上半が垂直ぎみに立ち上がっている。底面は、段差があり北東端が一段高くなっている。長軸の向きは、N49°Eである。

規模は、開口部393cm×117cm、底面408cm×28cm、深さ146cmである。

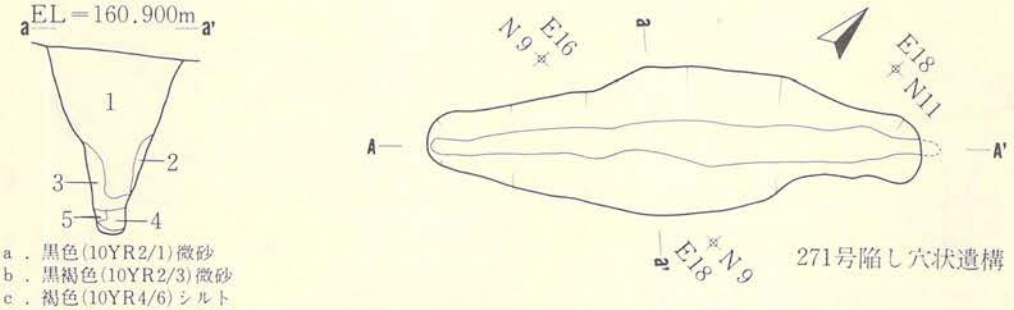
出土遺物　（図版第143図36～39、写真図版第78図36～39）

埋土から縄文時代早期に属する土器片4点が出土した。（36・37）は口縁部片である。

（36）は、口唇部に貝殻腹縁圧痕文を斜条に施し、口縁部は無文となっている。（37）は、口唇部及び口縁部に貝殻腹縁圧痕文を施文している。（38・39）は胴部片である。（38）は無文のもので、（39）は貝殻腹縁押し引き文を施した下部下部に片刃平棒工具による刺突を数段重ねて横方向に連続的に巡らしている。



図版第138図　270号陥し穴状遺構



a．黒色(10YR2/1)微砂
b．黒褐色(10YR2/3)微砂
c．褐色(10YR4/6)シルト
d．黒褐色(10YR2/3)微砂
e．黒褐黄色(2.5YR6/4)シルト

271号陥し穴状遺構

図版第139図　271号陥し穴状遺構

272号　陥し穴状遺構

B地区平坦地の南側縁辺に位置している。平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は「ロート」状を呈している。長軸両端の壁は、底部付近が掘り込まれ、内傾して立ち上がっている。底面は、緩く起伏している。長軸の向きは、N47.5°Eである。

規模は、開口部278cm×45cm、底面328cm×15cm、深さ122cmである。

273号　陥し穴状遺構

B地区平坦地の南側縁辺に位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸両端の壁は、垂直に立ち上がっている。底面は、平坦である。長軸の向きは、N81.5°Wである。

規模は、開口部244cm×53cm、底面240cm×18cm、深さ107cmである。

274号　陥し穴状遺構

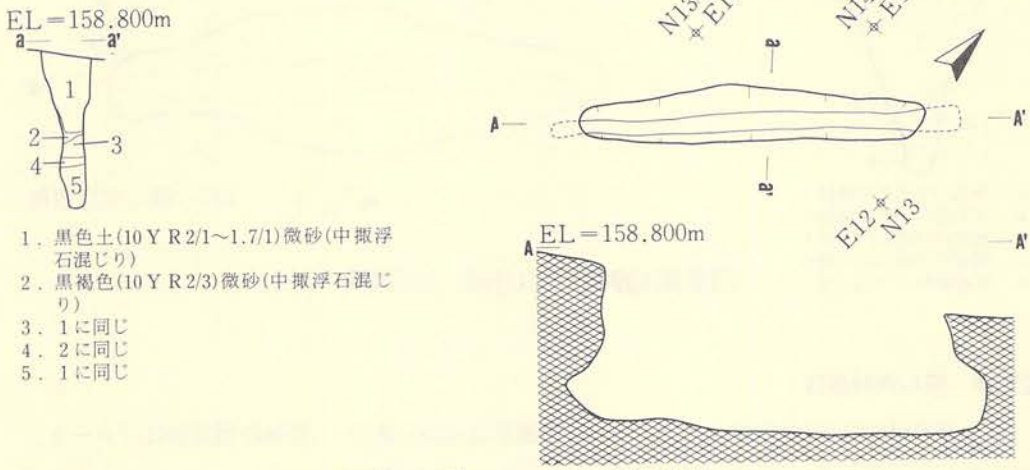
273号陥し穴状遺構の北隣りに位置している。平面形は長楕円形で、短軸の断面形は逆台形状を呈している。長軸両端の壁は、垂直に立ち上がっている。底面は、東方向に下がっている。長軸の向きは、N78°Wである。

規模は、開口部266cm×50cm、底面269cm×20cm、深さ111cmである。

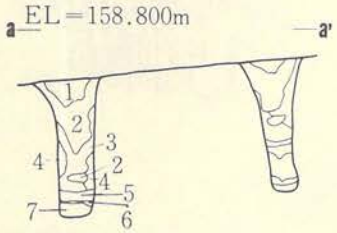
275号　陥し穴状遺構

B地区平坦地から南西へのびる緩斜面の北西側縁辺付近に位置している。長軸の西端と中央付近がピットによって切られているうえ、遺構の底部から上部にかけて攪乱を受けているため遺構の底面を検出しただけである。全体形状や規模は不明であるが、検出した底面の規模は長軸276cm、短軸16cmである。長軸の向きは、N70°Wである。

本遺構と138号ピットと139号ピットが重複しており、本遺構の長軸西端が139号ピットに、138号ピットに切られている。

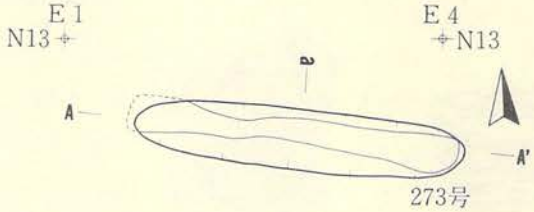


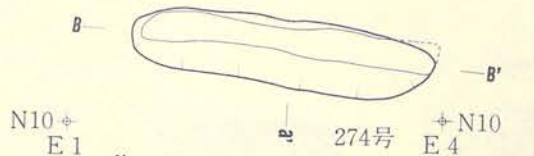
図版第140図　272号陥し穴状遺構

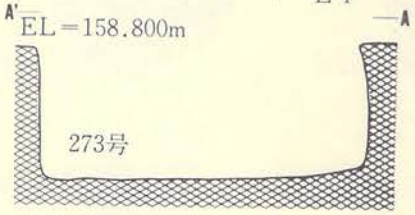


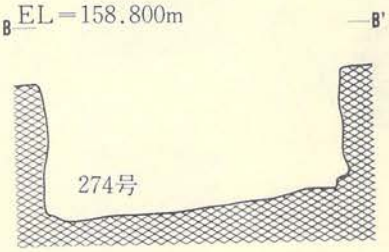
273号
1．黒褐色(10Y R2/3)微砂
2．暗褐色(10Y R3/3)砂(中撹まじり)
3．褐色(10Y R4/6)シルト(八戸火山灰)
4．黄褐色(10Y R5/8)(大不動の攪乱土)
5．暗褐色(10Y R3/4)微砂(中撹まじり)
6．褐色(10Y R4/4)シルト(八戸火山灰)
7．黄褐色(2.5Y5/4)シルト(大不動)

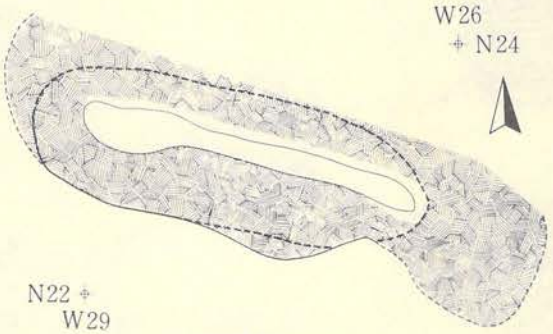
274号
1．黒褐色(10Y R2/3)微砂
2．暗褐色(10Y R3/3)砂(中撹まじり)
3．黄褐色(10Y R5/8)シルト(大不動の攪乱土)
4．褐色(10Y R4/6)シルト(大不動の攪乱土)
5．暗褐色(10Y R3/4)微砂(中撹まじり)
6．褐色(10Y R4/4)シルト(八戸火山灰)





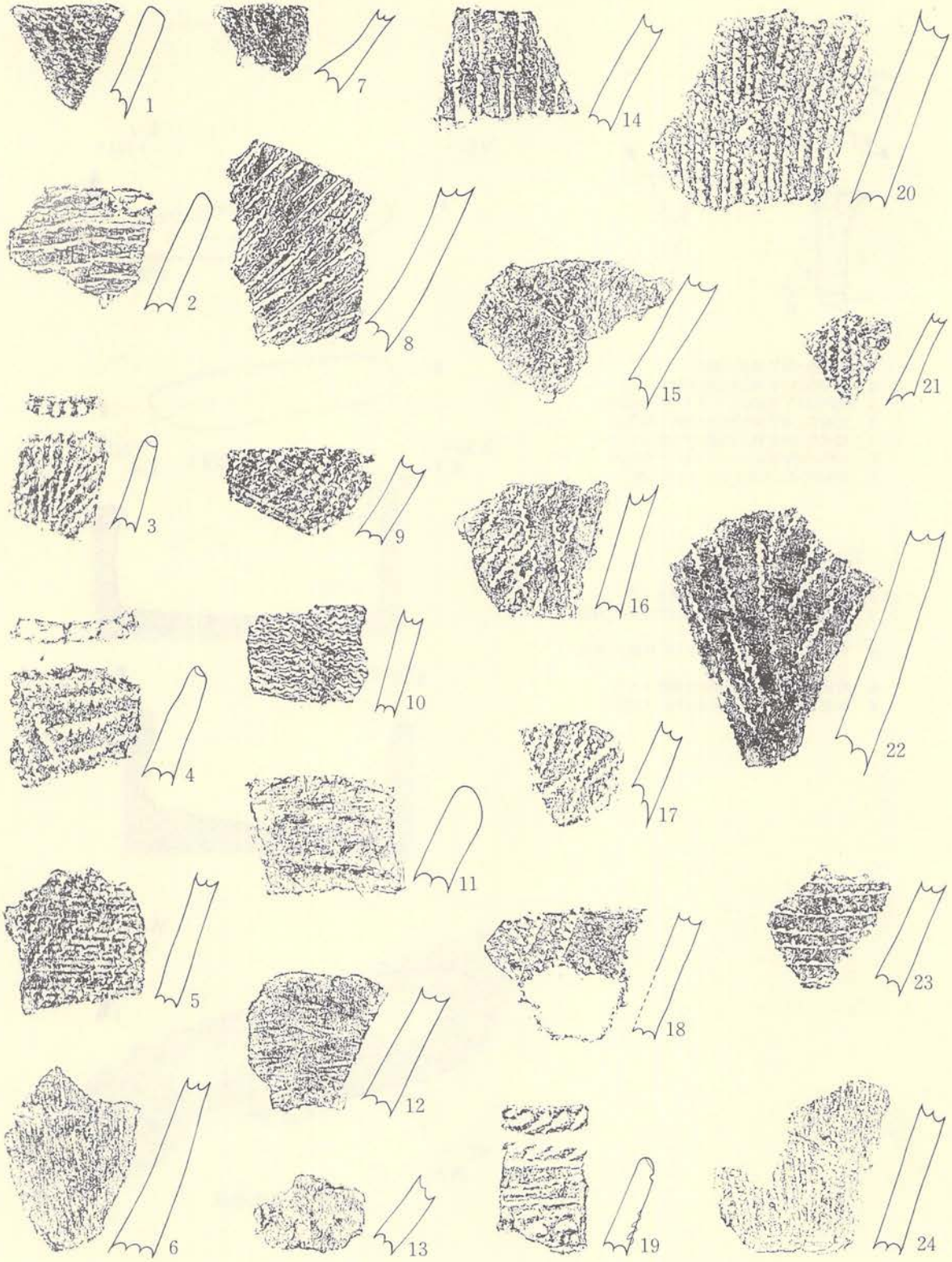






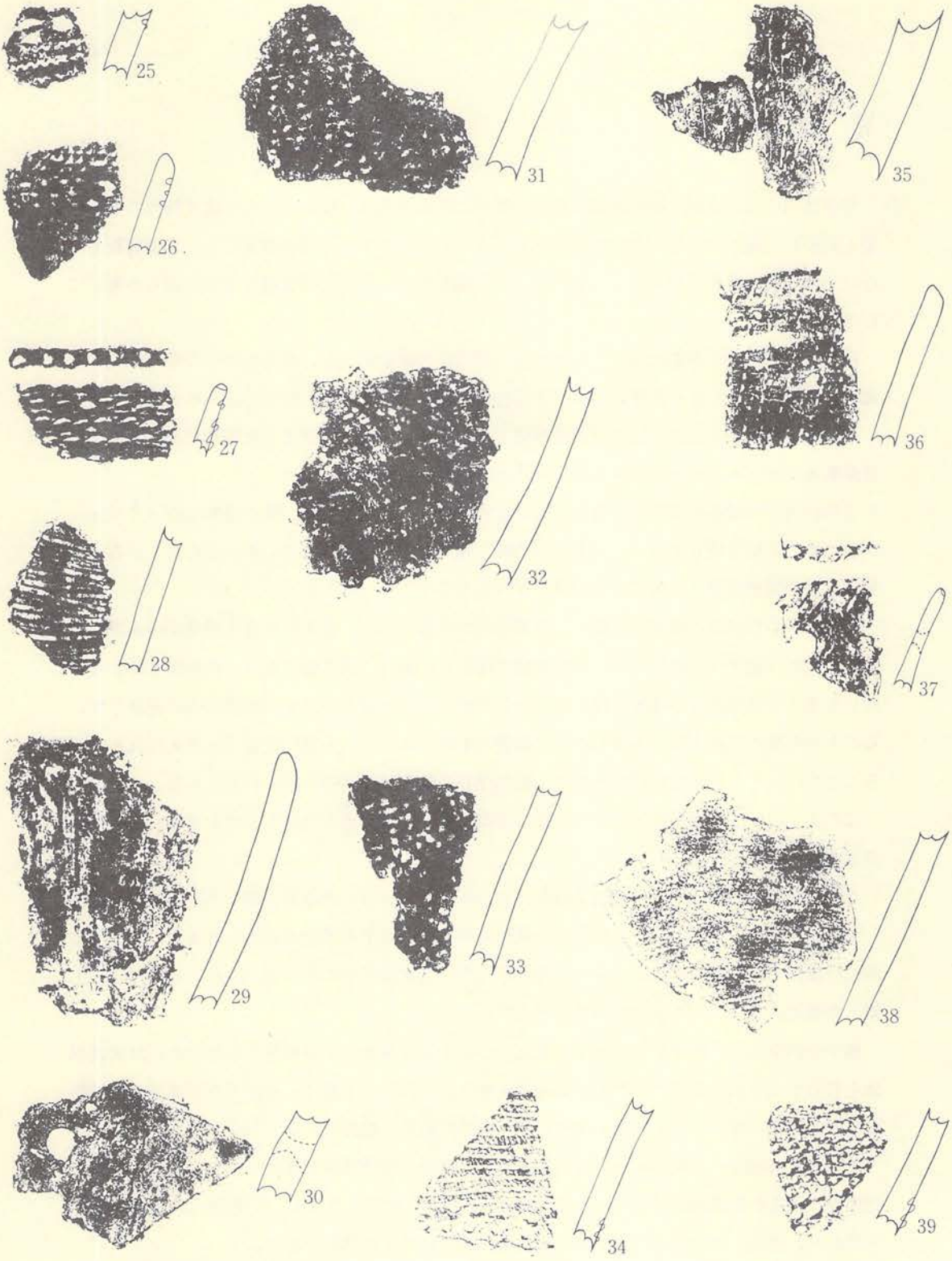
275陥し穴状遺構

図版第141図



259号陥し穴状遺構（1～7）　261号陥し穴状遺構（8～10）　262号陥し穴状遺構（11～28）

図版第142図　陥し穴状遺構内出土遺物　1～24　S＝$\frac{1}{2}$



265号陥し穴状遺構（29～35）　271号陥し穴状遺構（36～39）　25～39　S＝$\frac{1}{2}$

図版第143図　陥し穴状遺構内出土遺物

Ⅶ まとめ

岩手県内における縄文時代早期に属する遺構の検出状況は、現在のところ縄文時代の他の時期と比較して極めて少ないのが実状である。こうしたなかで、今回の調査によって遺構数が少ないものの縄文時代早期に属する竪穴住居址２棟を検出したことは貴重な成果であると考えている。

検出した縄文時代早期に属する２棟の竪穴住居址の構築年代を、住居址埋土の南部浮石の堆積状況からみると、１号住居址と２号住居址の構築年代には時間的差位が認められる。

一戸町における本遺跡周辺の南部浮石降下時の被覆状態は、成層化した堆積状況を示さず、層厚数センチメートルのブロック状で散在して堆積している。

２号住居址の埋土に堆積する南部浮石の堆積状況は、床面直上及び壁の傾斜に沿ってブロック状で壁に直接堆積しており、南部浮石の降下時の被覆状態を示している。このことから、２号住居址の構築時期は、南部浮石の降下年代より若干古いといえる。

一方、１号住居址の埋土に堆積する南部浮石の堆積状況は、底面から最大層厚65㎝と厚く堆積しており、南部浮石の降下時の被覆状態ではない。また、同じ面に載り、検出面もほとんど同じである２号住居址の堆積状況と、１号住居址の床面の掘り方痕まで南部浮石が充満していることから見て、流入による南部浮石の堆積とも考えにくく、人為的な投入と考えられる。このことから、１号住居址の構築時期は、南部浮石の降下年代よりも新しいといえる。

このように、１号住居址と２号住居址の構築年代は、南部浮石の降下年代を挟んで、それ以前とそれ以降に分れる。

２棟の住居址の床面出土の土器遺物を、青森県三戸町「寺の沢遺跡」出土の土器遺物と比較してみると、器内面の調整や口唇部（口端部）の角度に若干の相違が認められるものの、全体的には類似し、２棟の床面出土土器遺物の年代を、型式編年的にとらえると「寺の沢式土器」の時期にあてはまるものであると考えている。

極少の例をもって断定することはできないが、１号住居址と２号住居址から出土した尖底深鉢土器の型式を同一型式のものであると考えると、これらの土器は、南部浮石の降下年代以前からそれ以降にまたがって制作・使用されたものであると推論される。

陥し穴状遺構は、A地区から54基、B地区から21基、合計75基を検出した。これらの遺構の底面及び埋土から遺物が出土したのは、259号、261号、262号、265号、271号陥し穴状遺構の５基であり、出土した遺物は、いずれも縄文時代早期に属する遺物である。

遺物が出土した遺構は、75基中５基と少なく、また、この５基が位置する区域は縄文時代早期に属する遺物の散布地であり、出土した縄文時代早期に属する土器遺物も、中掫浮石火山灰

の堆積層を掘り込んでつくった陥し穴状遺構の底面からも出土するなど遺構の掘り込み時ないしそれ以降に流入したものと考えられ、出土遺物から遺構の構築年代を推定することは困難であるが、火山灰の堆積状況からみて、比較的構築年代を限定できるものもある。A地区の東側及び西側の埋積谷の谷底に位置する陥し穴状遺構は、中掫浮石層及び中掫浮石混じりの黒色土の再堆積の上面が検出面である。この検出面の上層には、十和田a降下火山灰の自然堆積層が存在する。このことから、これらの遺構は、中掫浮石火山灰の降下年代よりも新しく、十和田a降下火山灰の降下年代よりも古い時期に掘り込まれたものである。B地区平坦地の東側に位置する崖の縁辺付近に掘り込まれている255号～258号、271号～275号陥し穴状遺構も中掫浮石混じりの黒色土の再堆積層を掘り込んでつくられており、中掫浮石火山灰の降下年代よりも新しいといえる。その他の陥し穴状遺構については、検出面が、八戸降下火山灰面と大不動浮石流凝灰岩面であり、遺構が掘り込まれた年代については不明である。また、各陥し穴状遺構の構築年代に年代差があるかについても不明である。

検出した陥し穴状遺構を、他の遺構との重複による削平や攪乱等によって規模や形状を確認できないものを除いて、検出面での開口部の長軸・短軸の法量、底面の短軸幅の法量及び検出面での短軸と長軸の比率を表にしてみると、次のとおりである。

(1) 陥し穴状遺構の検出面での長軸法量

法量(cm)	150以上170以下	170以上190以下	190以上210以下	210以上230以下	230以上250以下	250以上270以下	270以上290以下	290以上310以下	310以上330以下	330以上350以下	350以上370以下	370以上390以下	390以上480以下
基数	1	10	7	4	2	9	4	5	6	10	3	5	4

(2) 陥し穴状遺構の検出面での短軸法量

法量(cm)	20以下	20以上40以下	40以上60以下	60以上80以下	80以上100以下	100以上120以下	120以上140以下	140以上160以下	160以上170以下
基数	2	22	17	19	5	3	2	0	1

(3) 陥し穴状遺構の底面での短軸法量

法量(cm)	4以上10以下	10以上15以下	15以上20以下	20以上25以下	25以上30以下	30以上35以下	40以上45以下	45以上50以下	50以上75以下	75以上80以下	80以上85以下
基数	14	18	24	8	3	2	0	0	1	1	1

(4) 陥し穴状遺構の検出での短軸と長軸の比率

比率	1:2	1:3	1:4	1:5	1:6	1:7	1:8	1:9	1:10	1:11	1:12	1:13	1:14	1:15	1:16	1:17	1:18
基数	1	16	10	10	8	4	6	3	3	2	1	1	1	2	0	0	2

検出した陥し穴状遺構の検出面での長軸の長さは155cmから480cmまで存在するが、ある一定法量に対する遺構の偏りは殆ど認められない。検出面での短軸の長さは17cmから170cmまで存在し、20cm～80cmの間に含まれるものが多い。底面での短軸の長さは4cmから80cmまで存在するが、4cm～20cmまでの間に含まれるものが56基と大多数を占める。

陥し穴状遺構の長軸の壁の状態は、①長軸の両端が垂直に立ち上がっているもの、②長軸の一方の壁が垂直に立ち上がり、他方は開口部よりも底面が奥に掘り込まれ、底面から開口部に向って内傾斜しているもの、③長軸両端の壁が底部で開口部よりも奥に掘り込まれ、両端の壁が底面から開口部に向って内傾斜しているもの、④長軸両端の壁が底部から開口部に向って外傾斜しているものの4種類がある。

また、短軸の壁の状態は、すべて底部から開口部に向って外傾斜するものであるが、短軸の断面形が①「V」字形を呈するもの、②「U」字形を呈するもの、③逆台形状を呈するもの、④壁の上半で開口部に向って傾斜角度が大きくなり「ロート」状を呈するものがある。

陥し穴状遺構の長軸の壁の形態と短軸の断面形状及び遺構の規模との間には、それぞれ相関関係は認められず、長軸の長さと短軸の長さの関係においても同様のことがいえる。

それぞれの陥し穴状遺構を比較して共通にいえることは、①長軸の長さに関係なく細長い溝状の形状を呈していること、②開口部から底面に向って短軸の幅が狭まり、特に底部においてはその幅が極端に狭いことである。

本遺跡から検出した陥し穴状遺構と同種のものが各地の遺跡から検出され、使用目的や機能についていくつかの説が唱えられているが、そのなかで「獣の陥し穴」とする考え方が優勢である。本遺跡で検出した陥し穴状遺構の用途についても、遺構に動物が落ち込んだ場合、壁に動物の胴部が挾まり脚部が中空となり動物の動きが封じられること(1)及び底部に小動物が落ち込んだ場合においても壁が急傾斜のため攀登れない形状を示し、機能的に見て、動物捕獲のための「陥し穴」であろうと考えている。

≪注≫

1）西本豊弘・梶光一・上野秀一：「人とエゾシカ」アニマ№121　1983.において、Tピット（陥し穴状遺構）の機能について「……その形態にもよるが、エゾシカ一頭分そのまま落ちるように作られたのではなく、前肢または後肢が落ちればよいように作られていたように思われる。」との見解を示している。

≪参考文献≫

岩手県農地林務部北上山系開発調査室：『北上山系開発地域土地分類基本調査　一戸』　1972.

松山力：「遺跡群の位置及び周辺の地形・地質」一戸バイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅰ　1981.

大池昭二・中川久夫・七崎修・松山力・米倉伸之：「馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰」第四紀研究　第5巻　第1号　1966.

杉山武：「白浜式・小舟渡平式土器にかかわる館平遺跡出土の早期貝殻文土器について」奥南　創刊号　1980.

杉山武：「白浜式・小舟渡平式土器にかかわる館平遺跡出土の早期貝殻文土器について（2）」奥南　第2号　1982.

名久井文明：「北日本縄文式早期編年に関する一試考」考古学雑誌　第60巻　第3号　1974.

庄内昭男：「施文原体　貝殻文」縄文文化の研究　第5巻　縄文土器Ⅲ　1983.

三宅徹也：『螢沢遺跡緊急発掘調査報告書』　1979.

吉良哲明：『原色日本貝類図鑑』　1980.

芹澤長介　編：『北海道亀田郡七館町峠下縄文時代遺跡出土資料　聖山』東北大学文学部考古学研究会考古学資料集　別冊2　1979.

西本豊弘・梶光一・上野秀一：「人とエゾシカ」アニマ №121　1983.

鈴木道之助：『図録　石器の基礎知識Ⅲ　縄文』　1981.

高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正：『岩手の土器』　1982.

小笠原善範：『青森県埋蔵文化財調査報告書　第62集　新納屋遺跡（2）』　1980.

岡本勇　編：『縄文土器大成1　早・前期』　1982.

横山英介：『函館空航・中野遺跡　東日本における縄文時代早期貝殻文土器文化の研究』　1979.

Ⅷ　2号住居址出土炭化物の放射性炭素年代測定結果

2号住居址（縄文時代早期）の床面及び埋土下層から検出した炭化材（炭化物粒）の放射性炭素年代測定を学習院大学に依頼した。

測定資料の「資料No.と採取地点」及び「測定結果」は、次のとおりである。

資料No.　IM—150……2号住居址の床面から採取

資料No.　IM—151……2号住居址の床面から採取

資料No.　IM—152……2号住居址の床面から床面直上約15cmの埋土にかけて採取

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1984，12月　3日

岩手県埋蔵文化財センター
所長　熊谷正男　殿

1984年　1月　13日受領致しました試料についての ^{14}C 年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には ^{14}C の半減期として Libby の半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は β 線計数値の標準偏差 σ にもとずいて算出した年数で，標準偏差（one sigma）に相当する年代です。試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは，3σ に相当する年代を下限とする年代値（B. P.）のみを表示してあります。また試料の，β 線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が 2σ 以下のときには，Modern と表示し，$\delta^{14}C$ ‰を付記してあります。

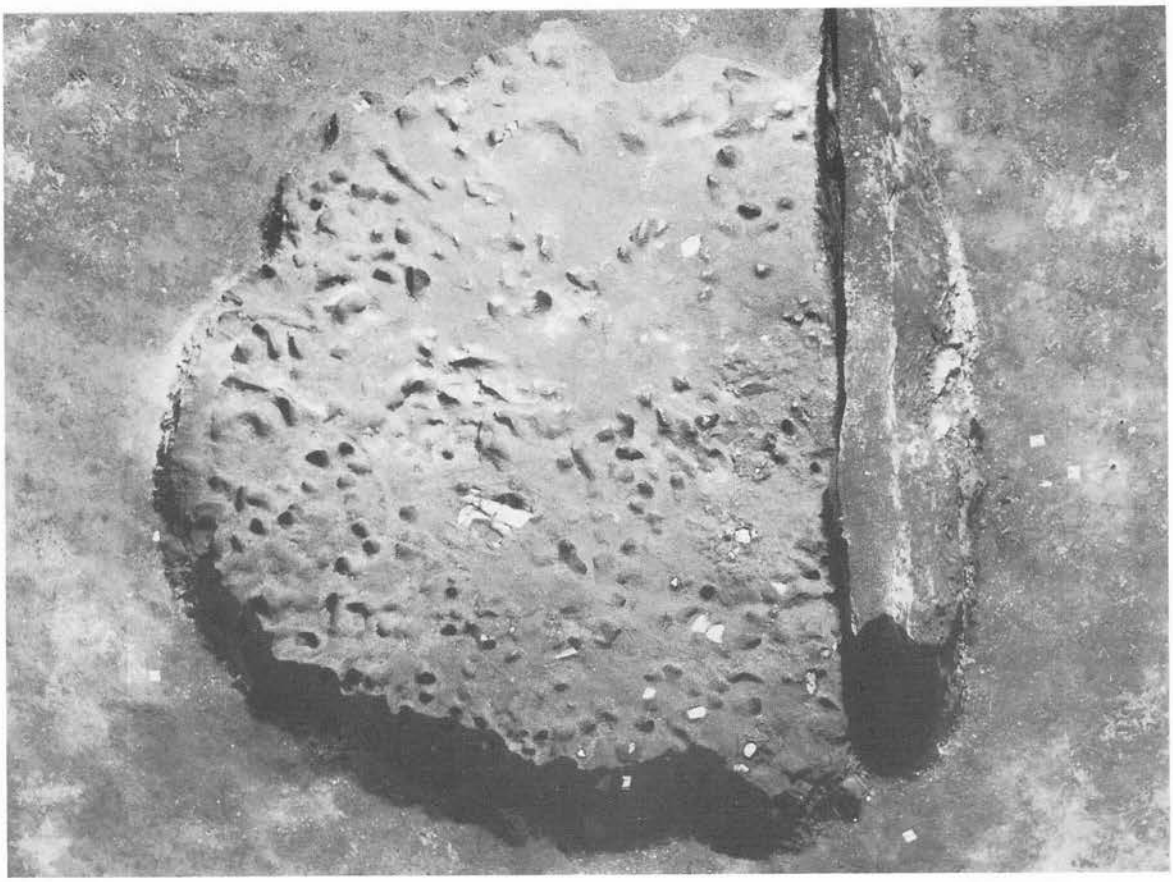
記

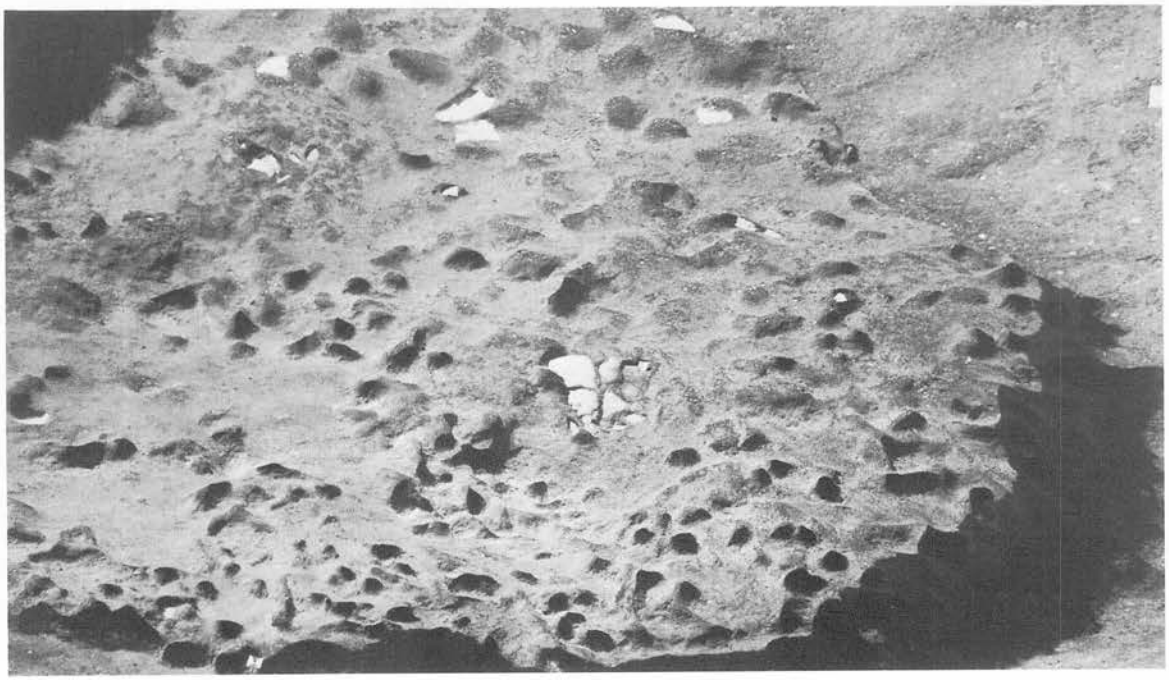
Code No.	試料	B. P. 年代（1950年よりの年数）
GaK-11600.	Wood charcoal from Koida. IM-150.	9180 ± 250 7230 B.C.
GaK-11601.	Wood charcoal from Koida. IM-151.	7290 ± 480 5340 B.C.
GaK-11602.	Wood charcoal from Koida. IM-152.	8390 ± 220 6440 B.C.

以上

木越邦彦

写　真　図　版



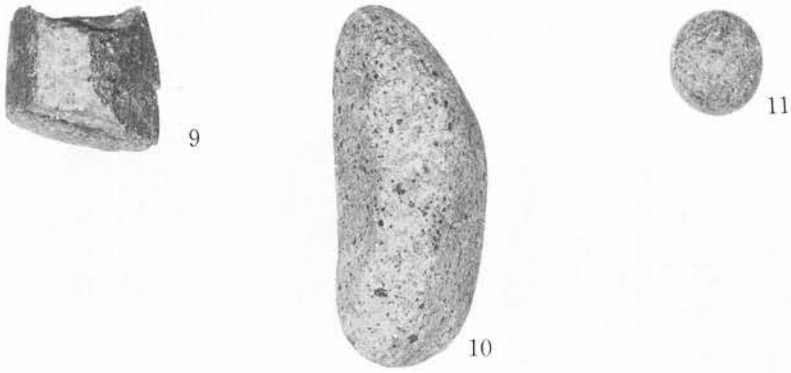


1号住居址全景(上)　1号住居址床面出土遺物状況(下)

写真図版第6図

写真図版第７図　１号住居址遺構内出土土器遺物

写真図版第８図　１号住居址遺構内出土土器・石器遺物

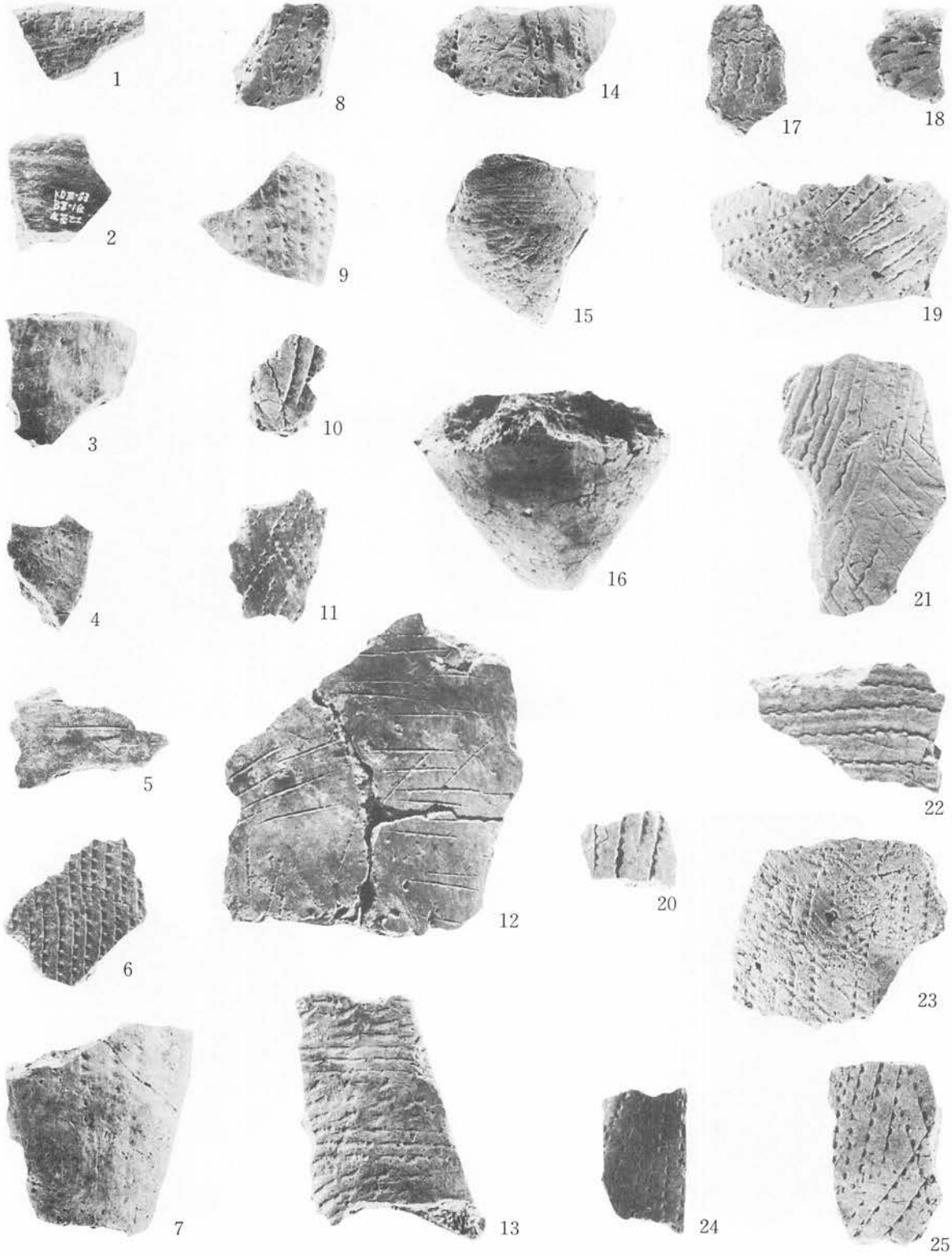


写真図版第９図　１号住居址遺構内出土石器遺物

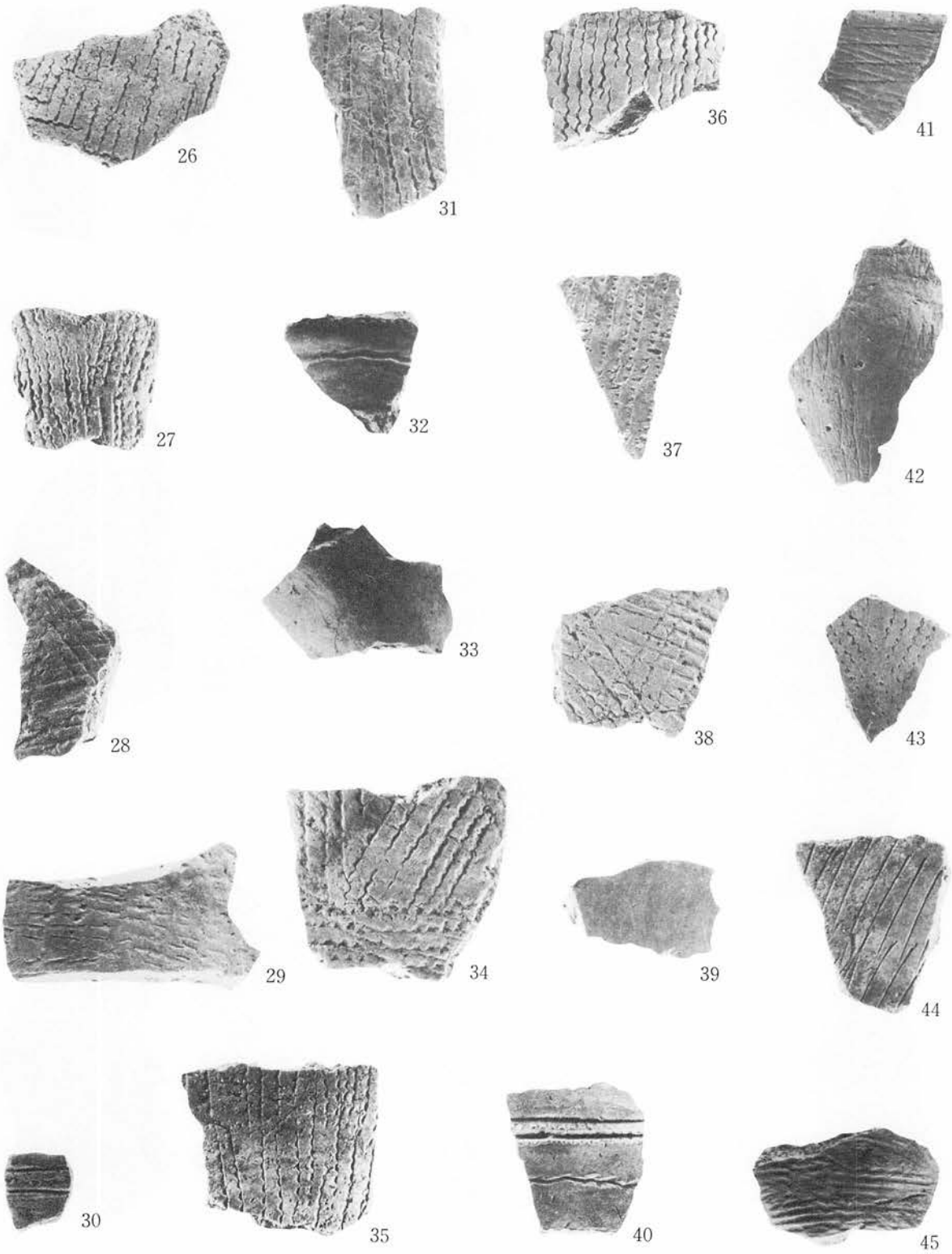
1

2

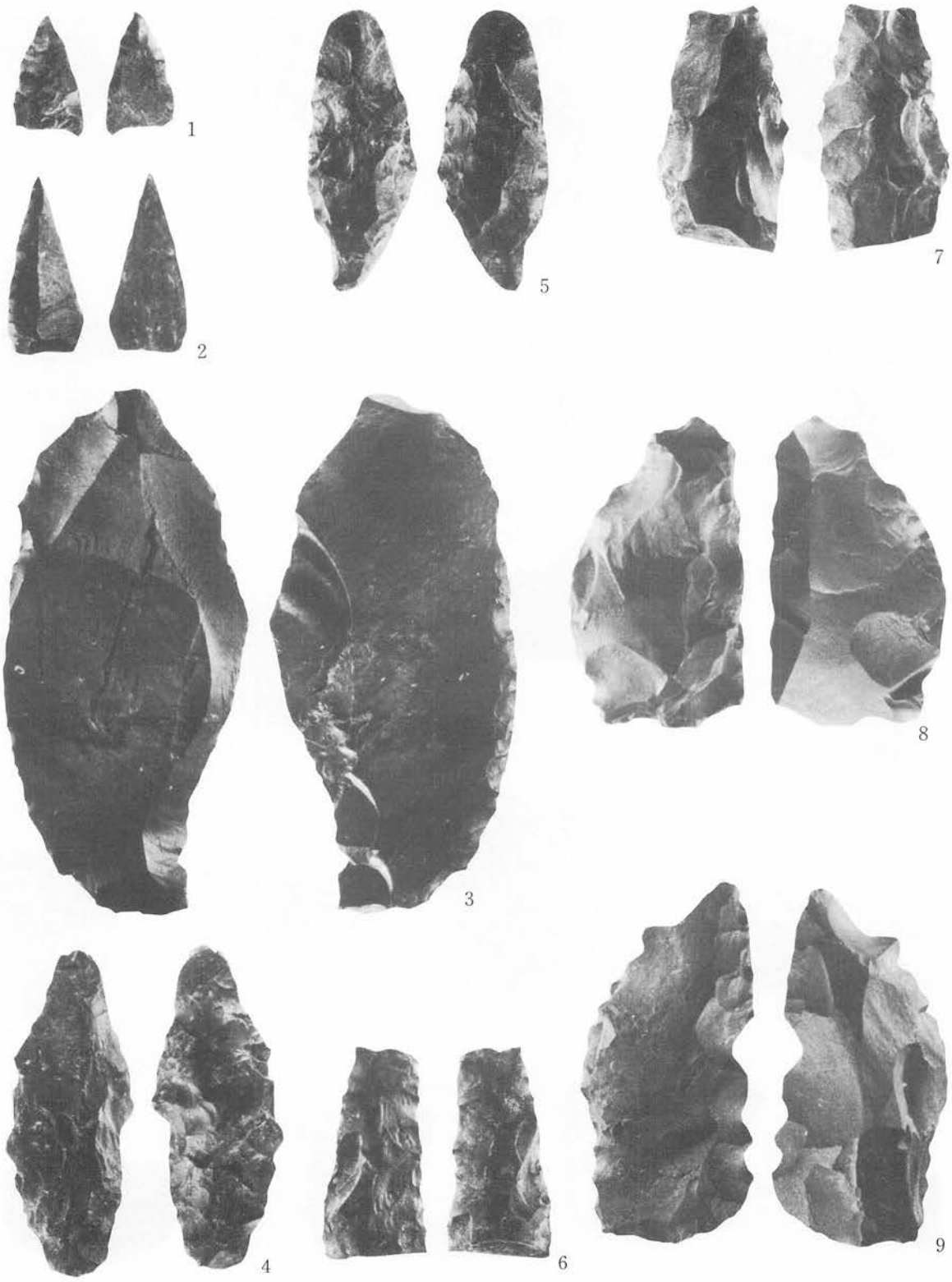
写真図版第10図　2号住居址全景・2号住居址遺構内出土土器遺物



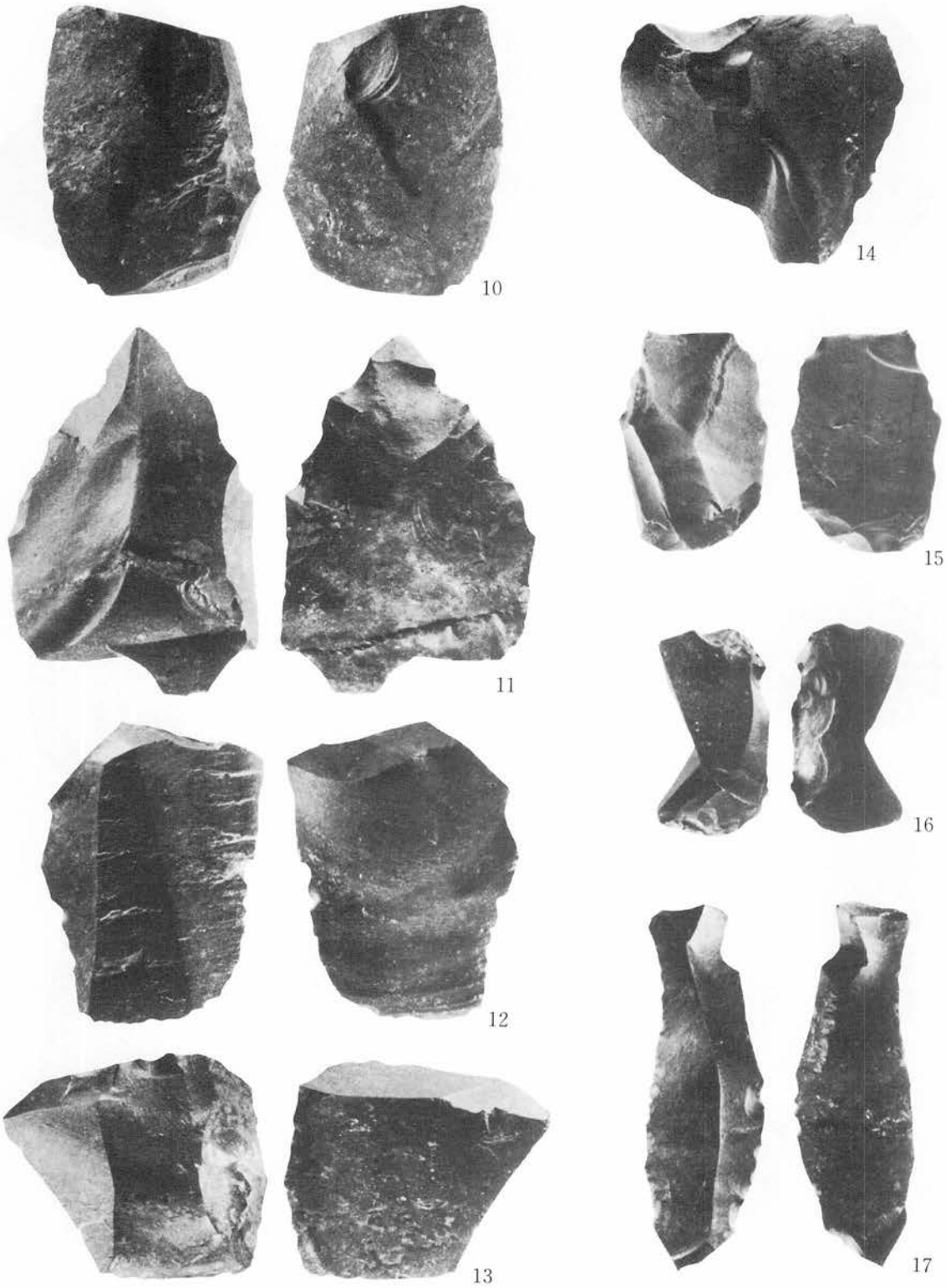
写真図版第11図　2号住居址遺構内出土土器遺物



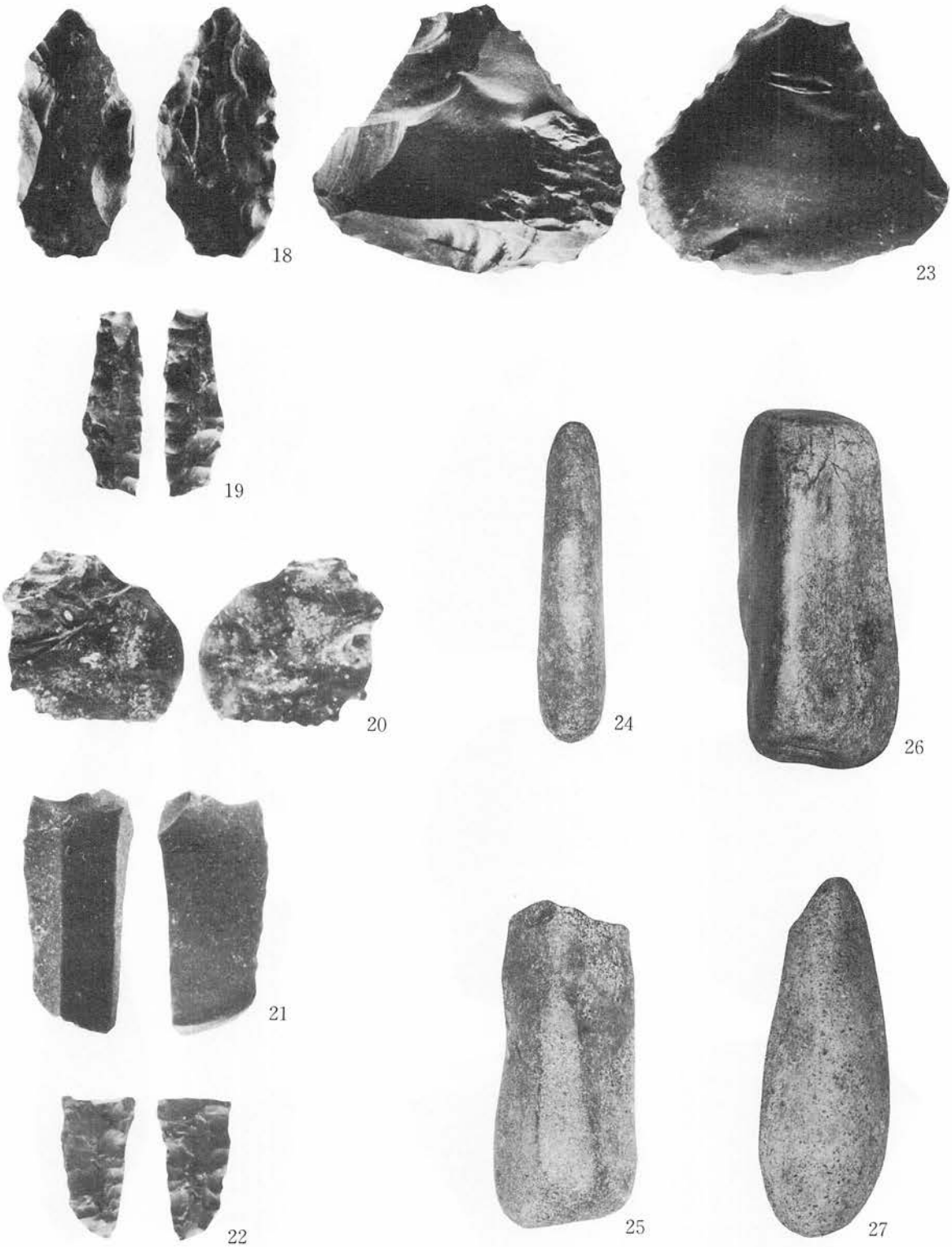
写真図版第12図　2号住居址遺構内出土土器遺物



写真図版第13図　2号住居址遺構内出土石器遺物

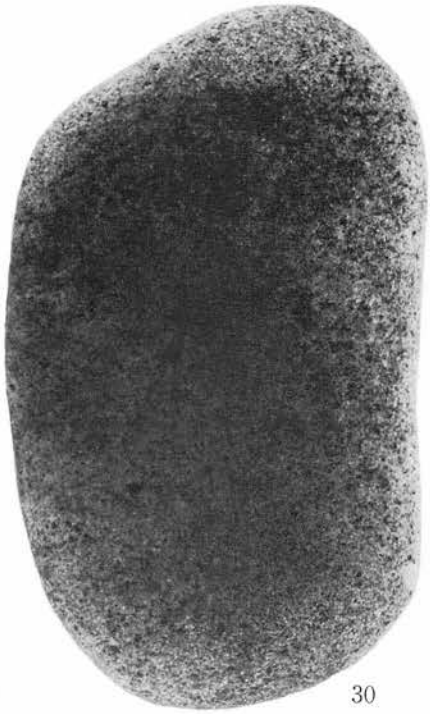


写真図版第14図　2号住居址遺構内出土石器遺物



写真図版第15図　2号住居址遺構内出土石器遺物

28


30

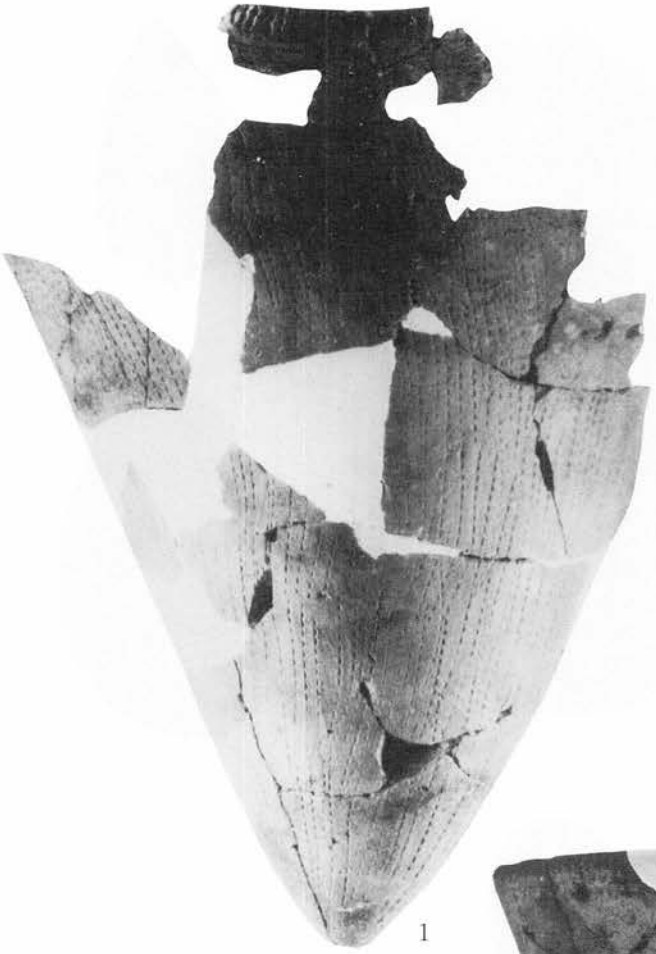
32

29

33

31

写真図版第16図　2号住居址遺構内出土石器遺物

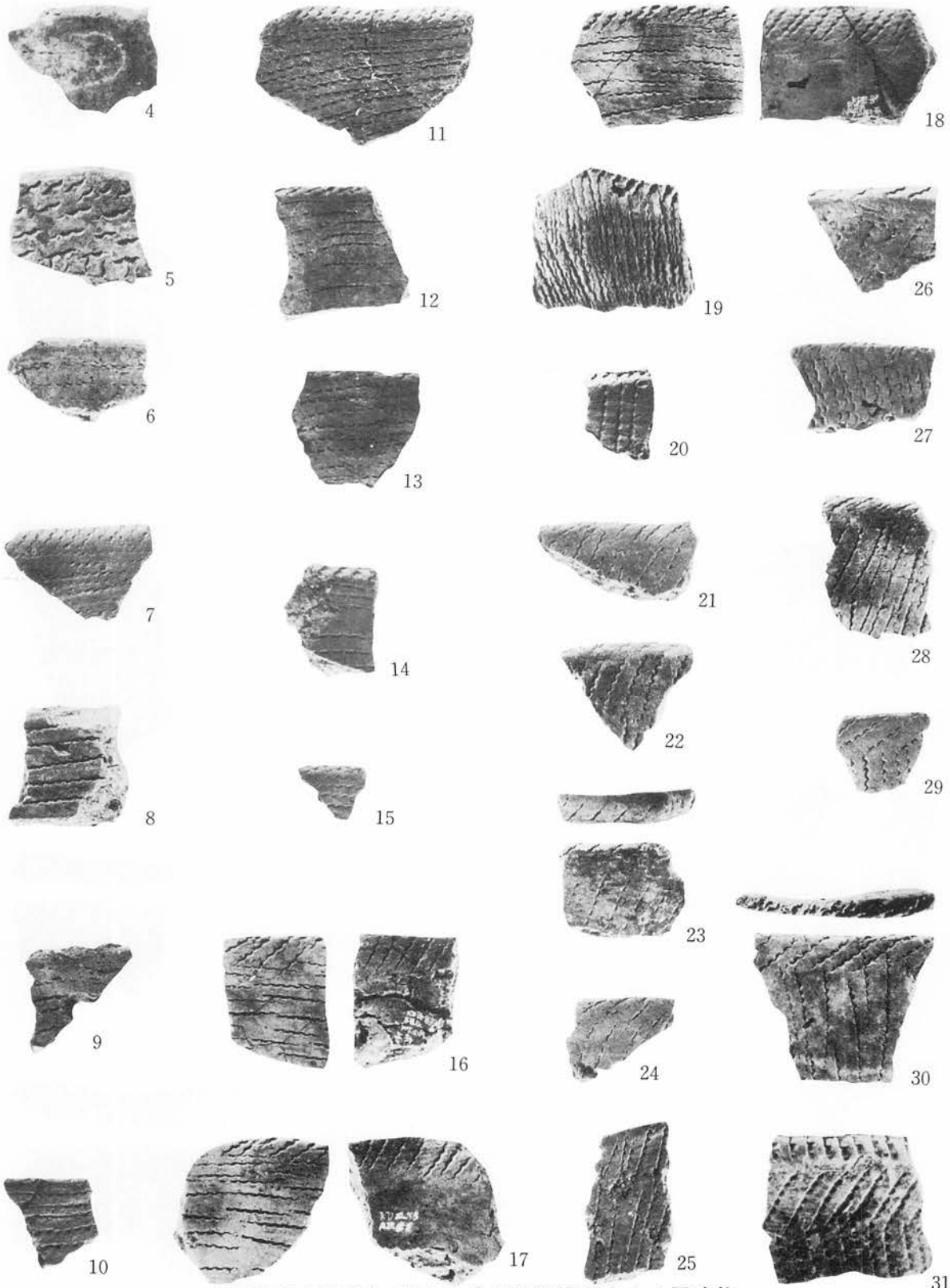


1

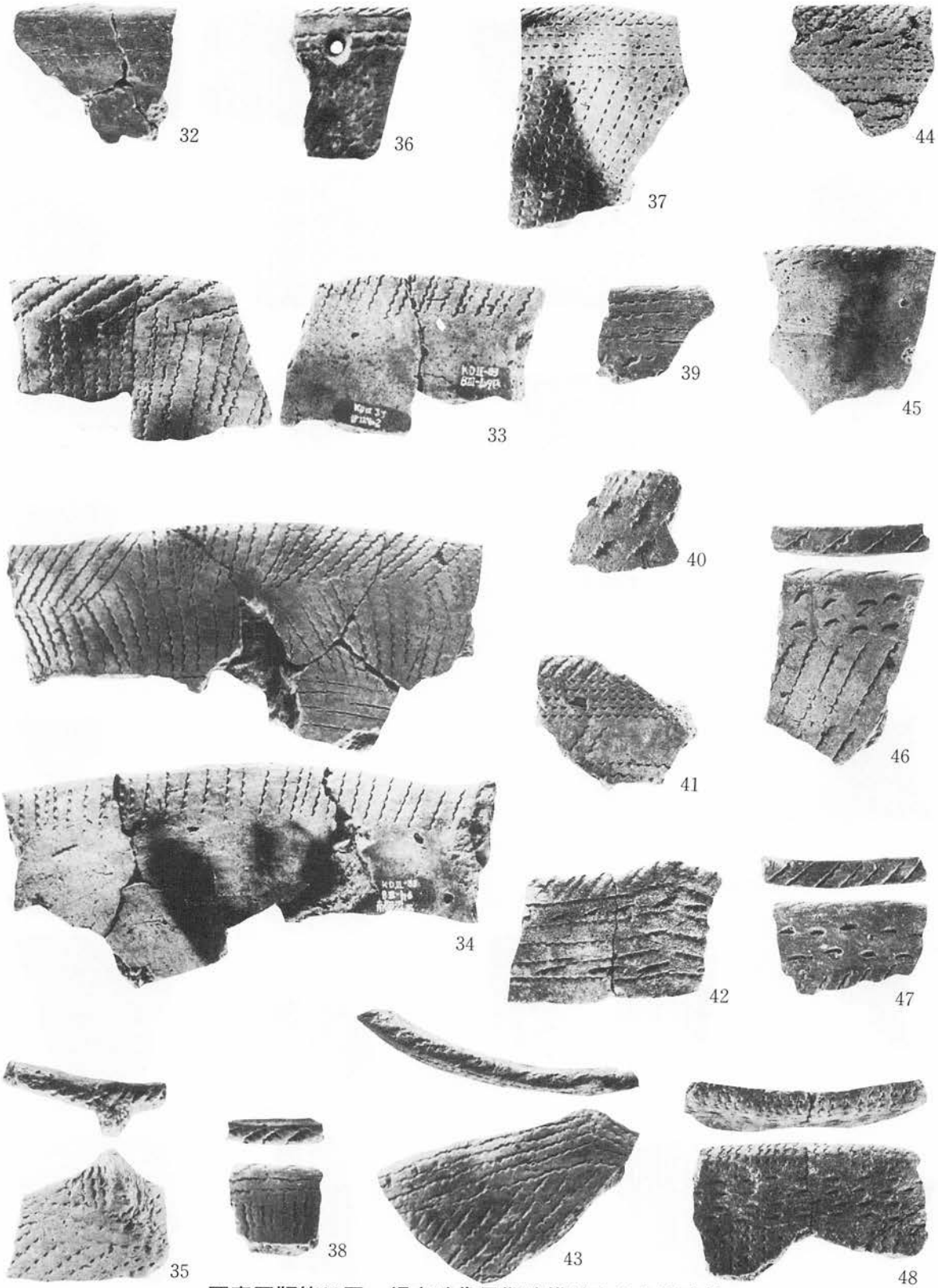
2

3

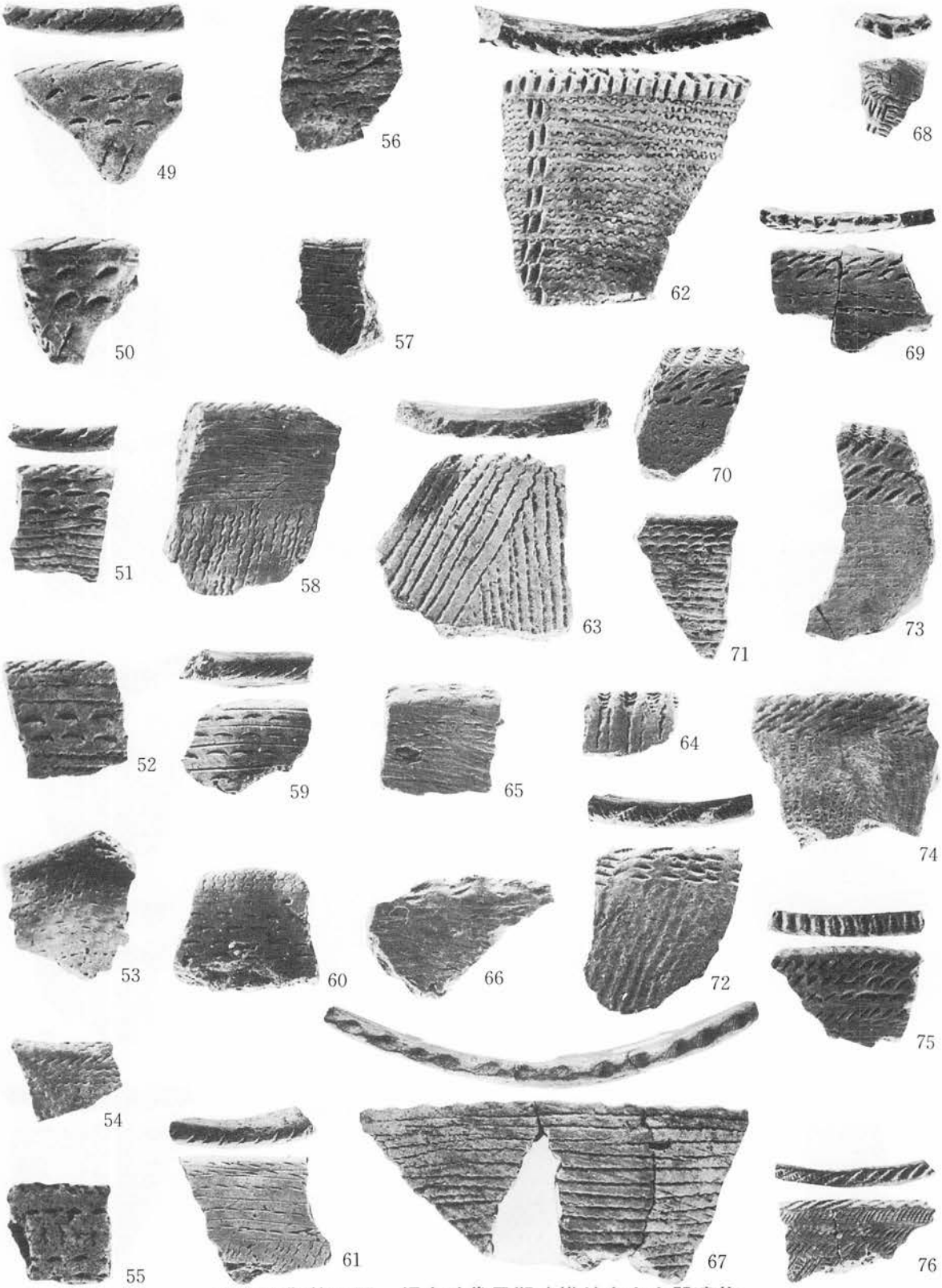
写真図版第17図　縄文時代早期遺構外出土遺物



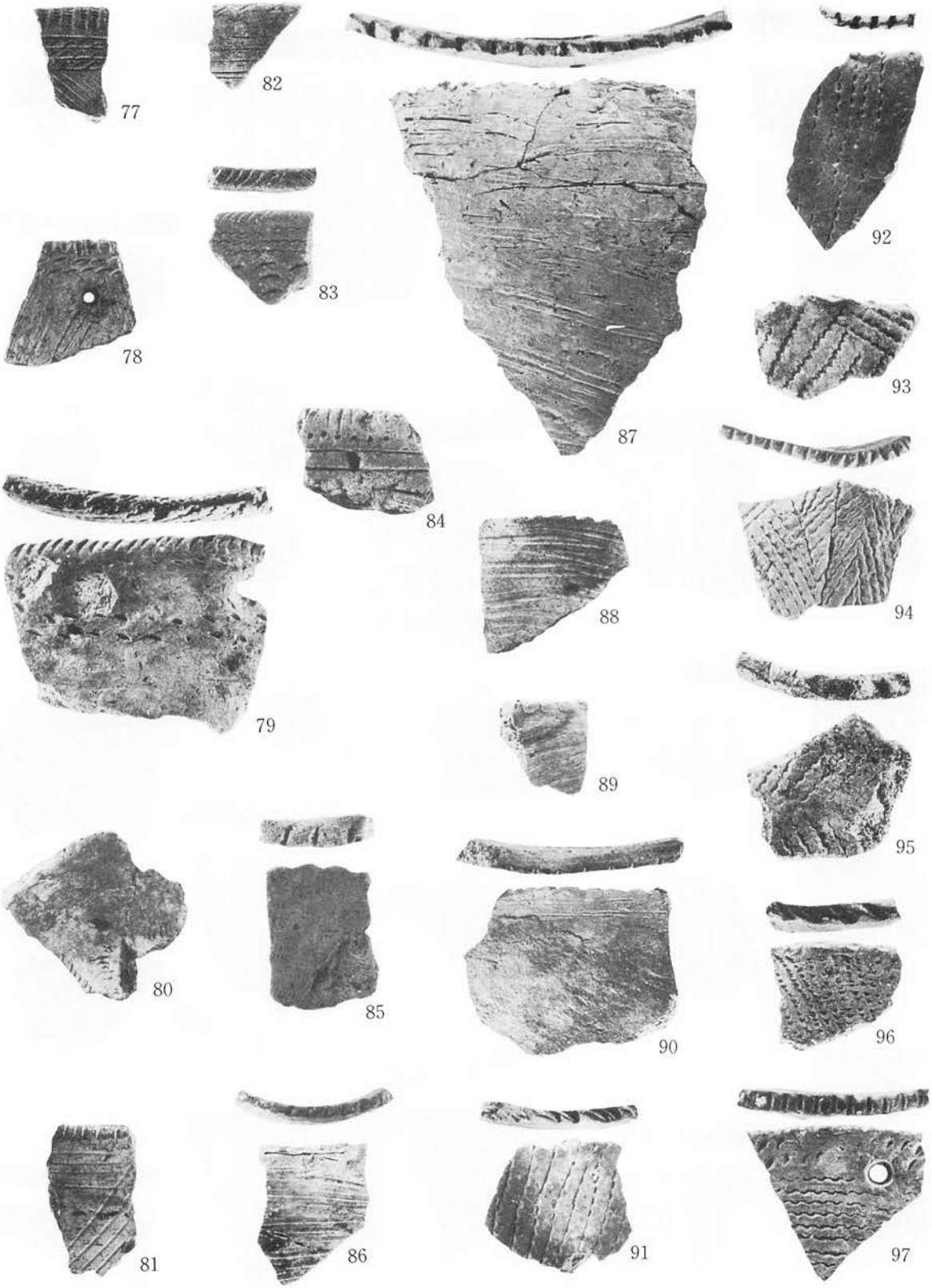
写真図版第18図　縄文時代早期遺構外出土土器遺物



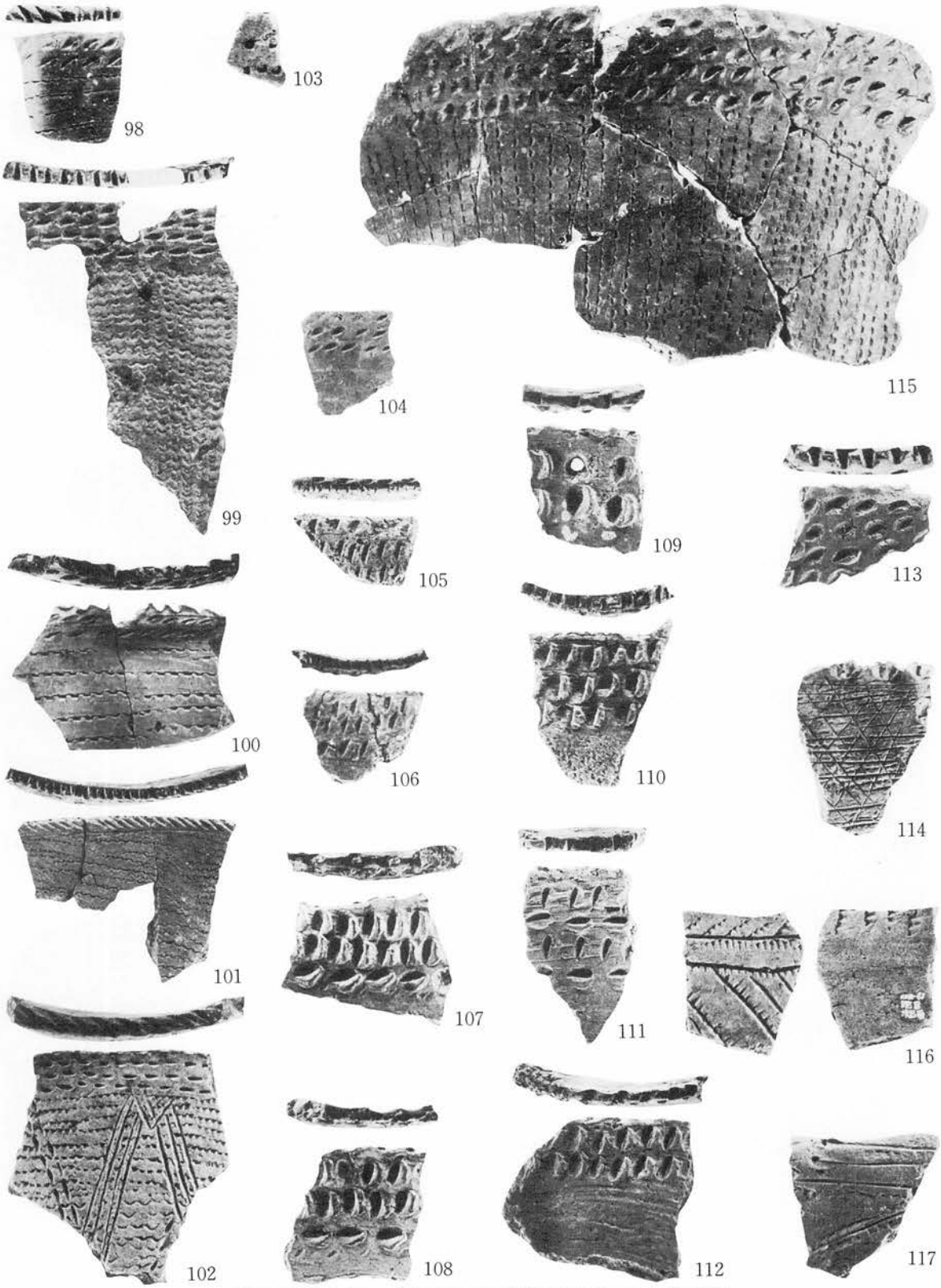
写真図版第19図　縄文時代早期遺構外出土土器遺物



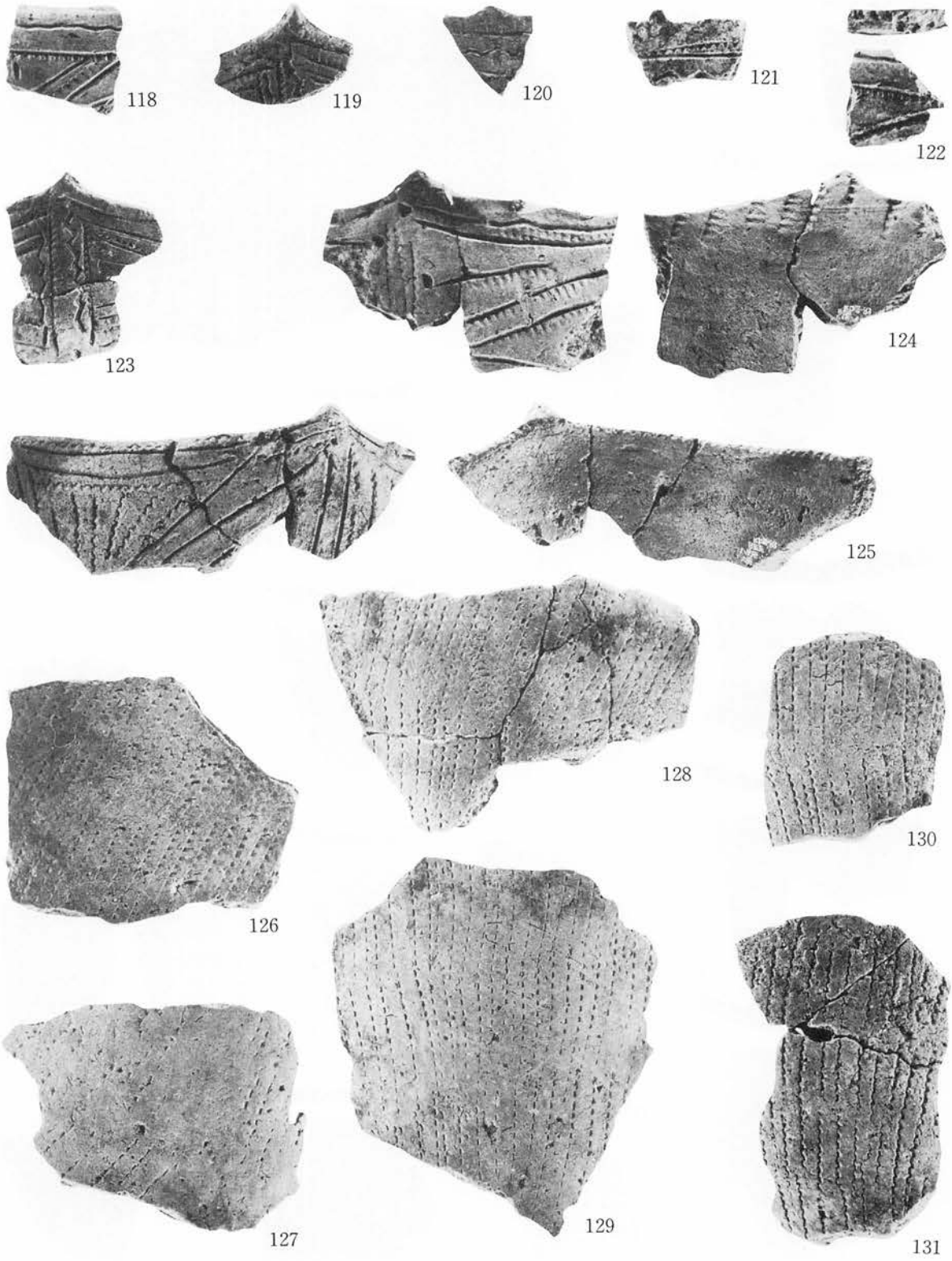
写真図版第20図　縄文時代早期遺構外出土土器遺物



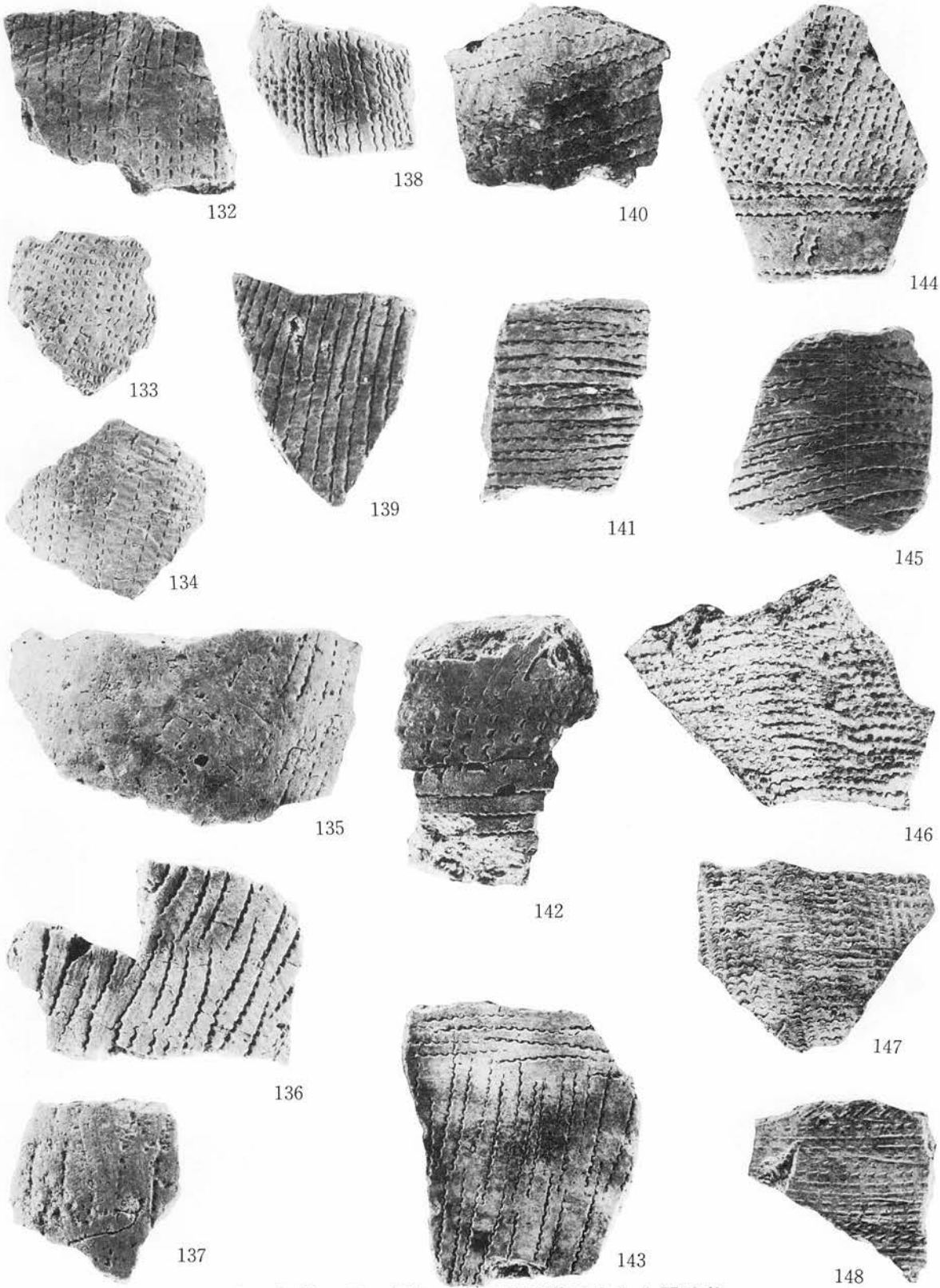
写真図版第21図　縄文時代早期遺構外出土土器遺物



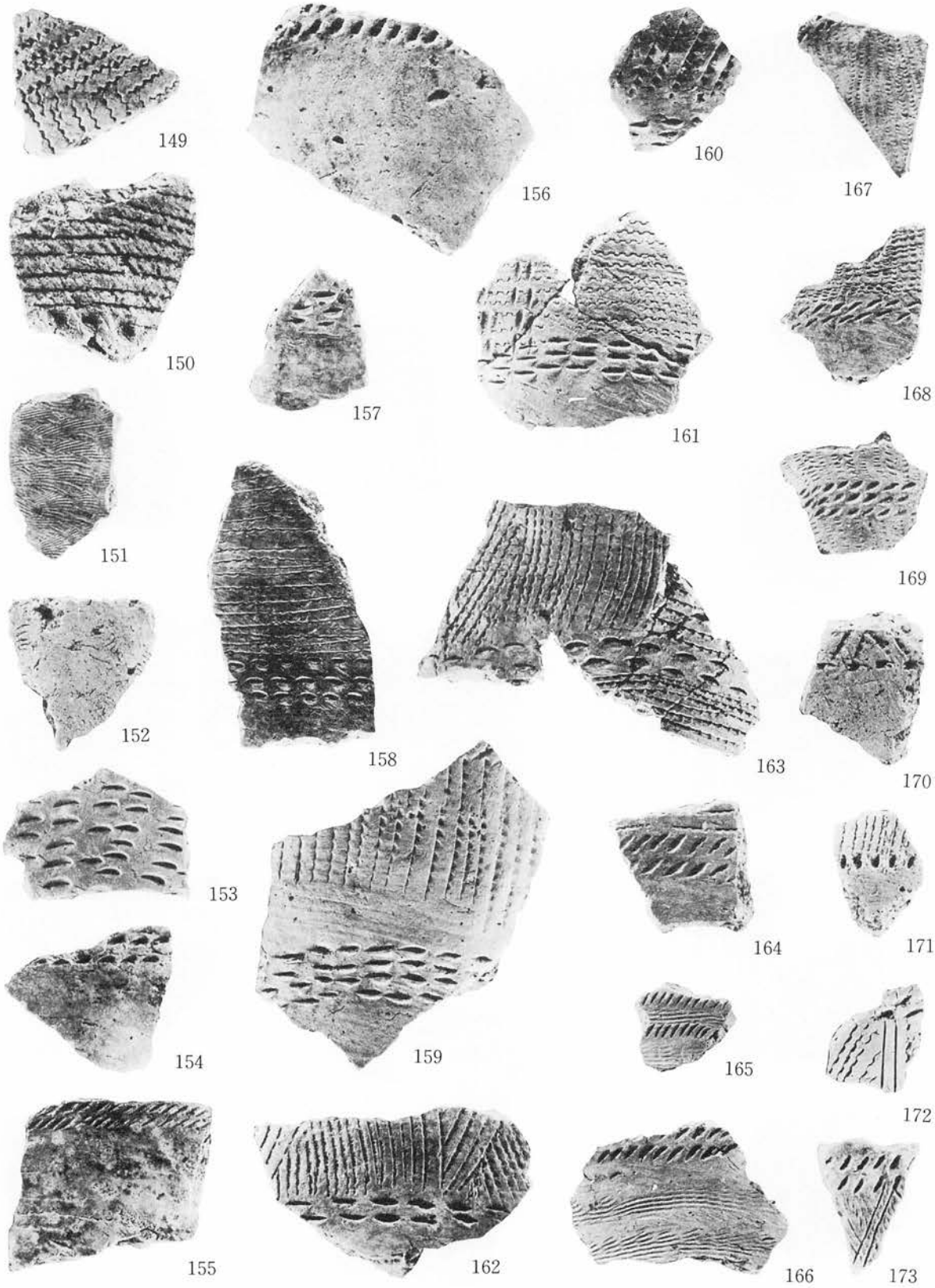
写真図版第22図　縄文時代早期遺構外出土土器遺物



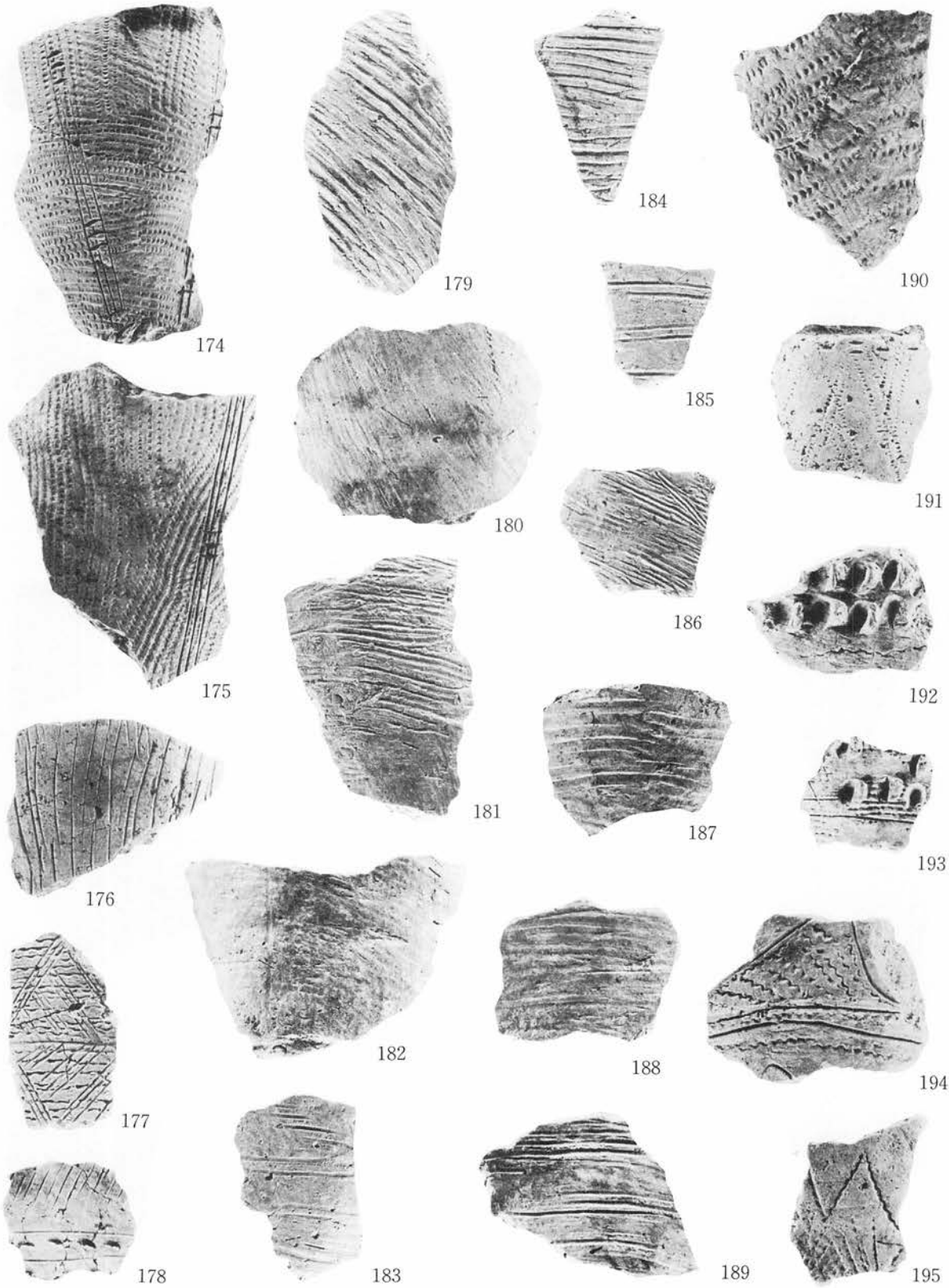
写真図版第23図　縄文時代早期遺構外出土土器遺物



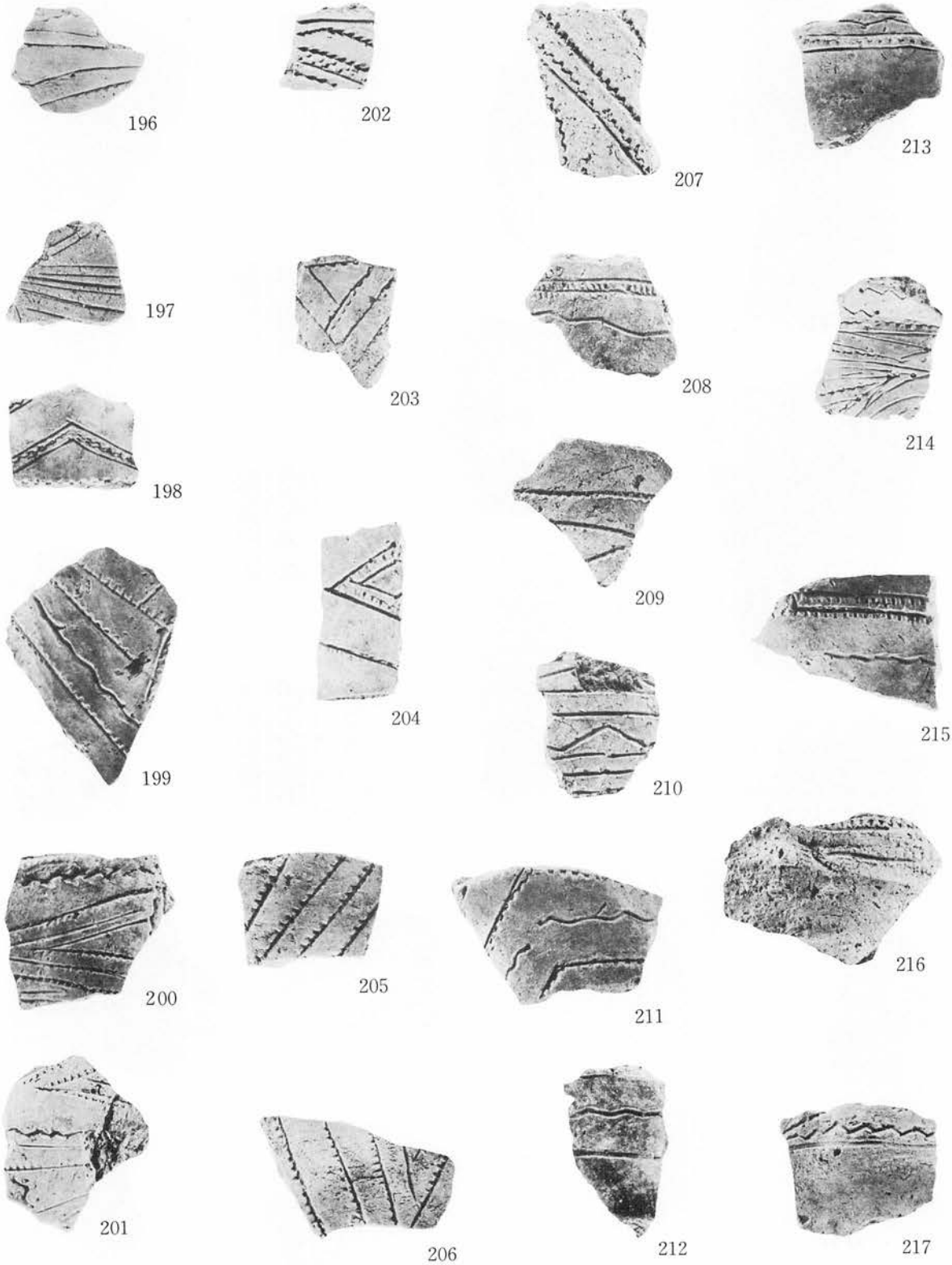
写真図版第24図　縄文時代早期遺構外出土土器遺物



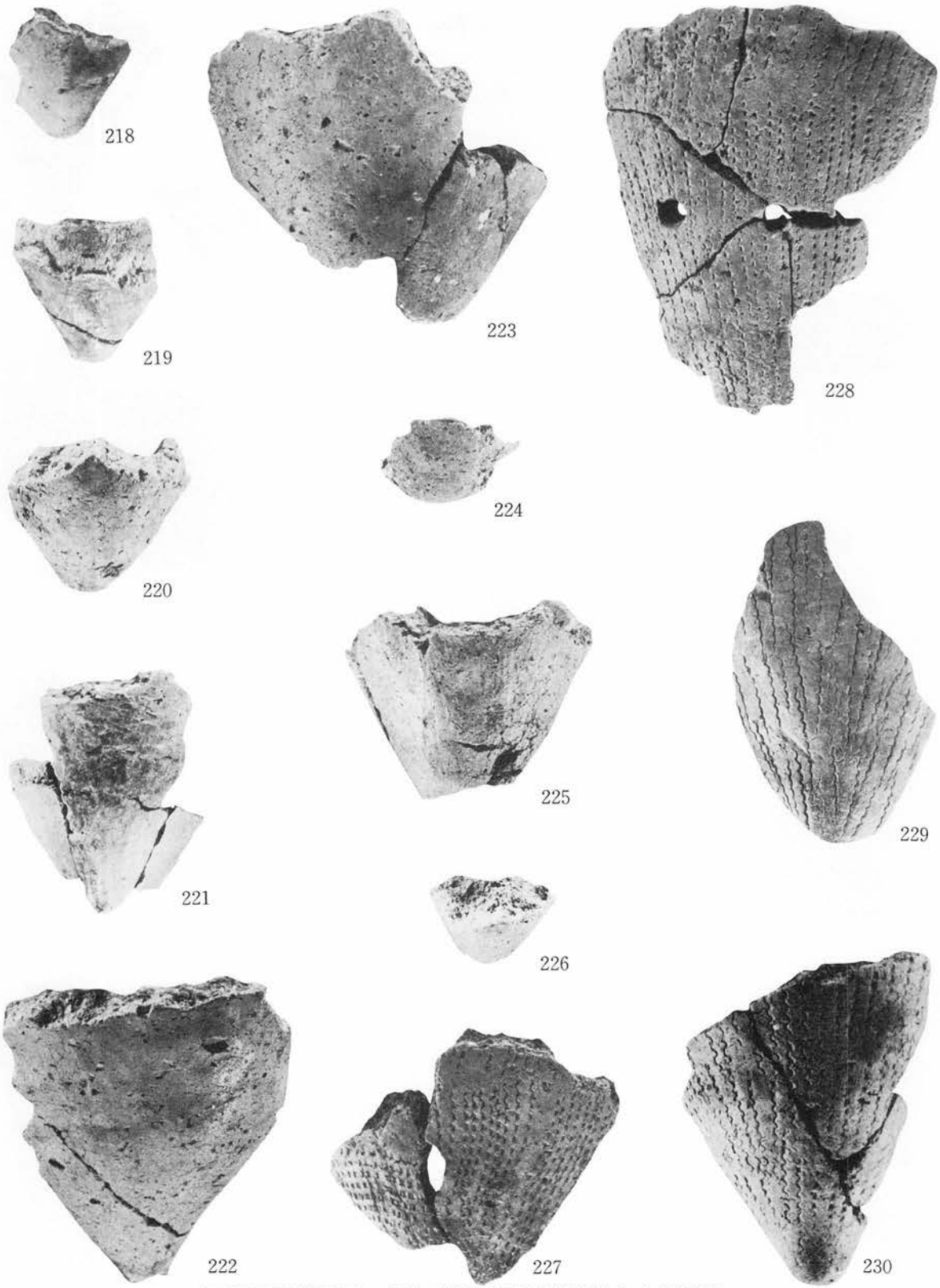
写真図版第25図　縄文時代早期遺構外出土土器遺物



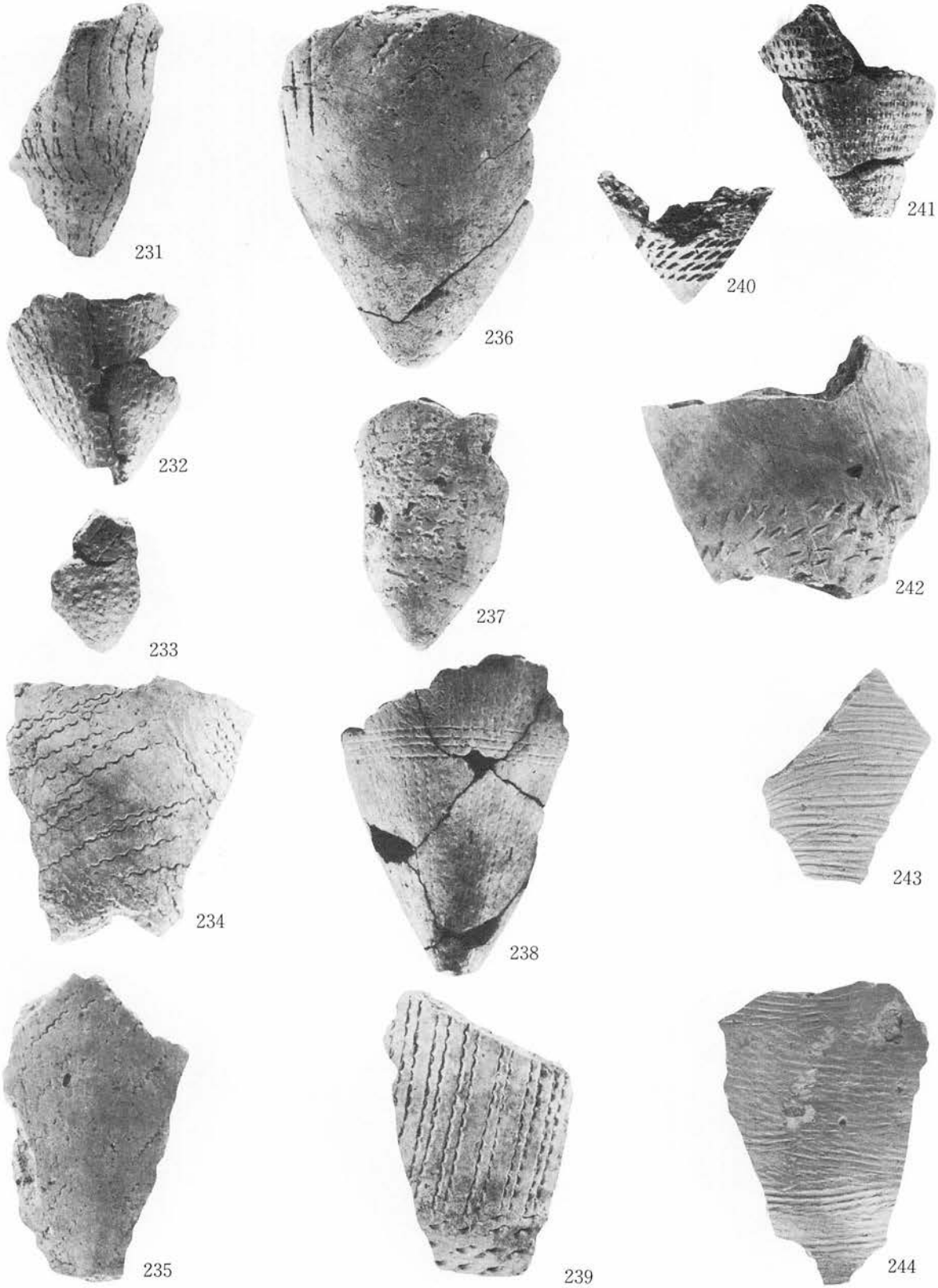
写真図版第26図　縄文時代早期遺構外出土土器遺物



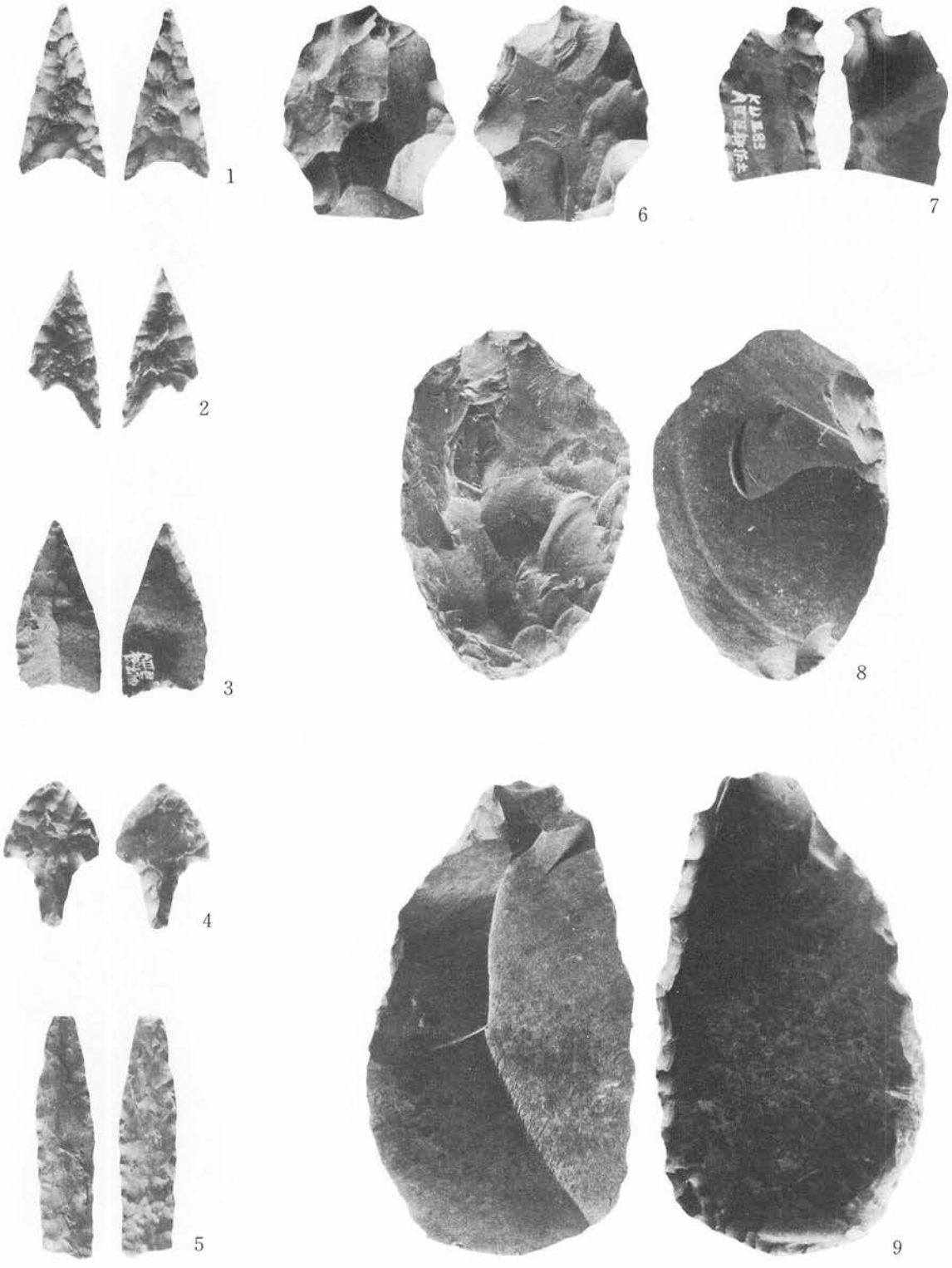
写真図版第27図　縄文時代早期遺構外出土土器遺物



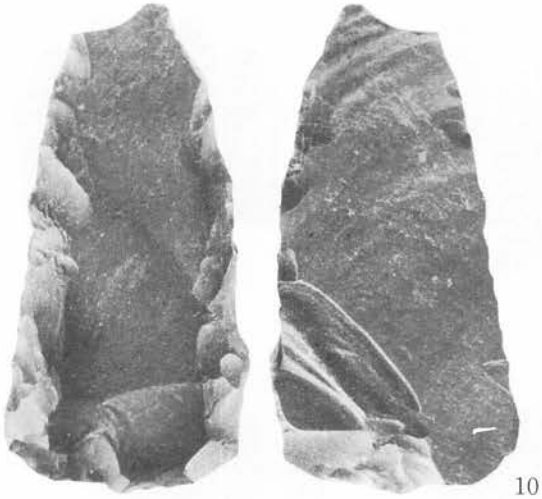
写真図版第28図　縄文時代早期遺構外出土土器遺物



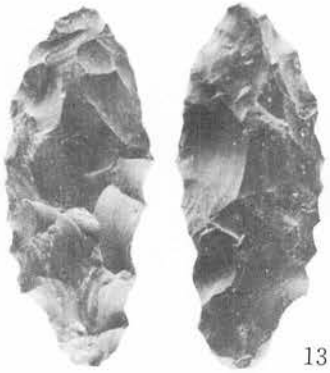
写真図版第29図　縄文時代早期遺構外出土土器遺物



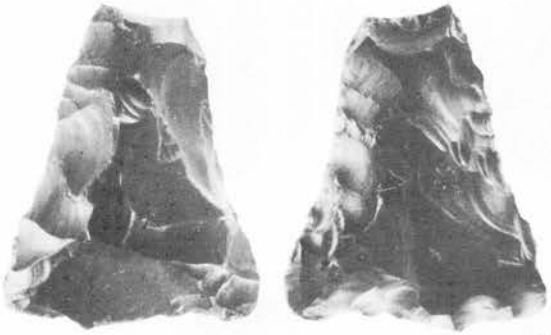
写真図版第30図　縄文時代早期遺構外出土石器遺物



10



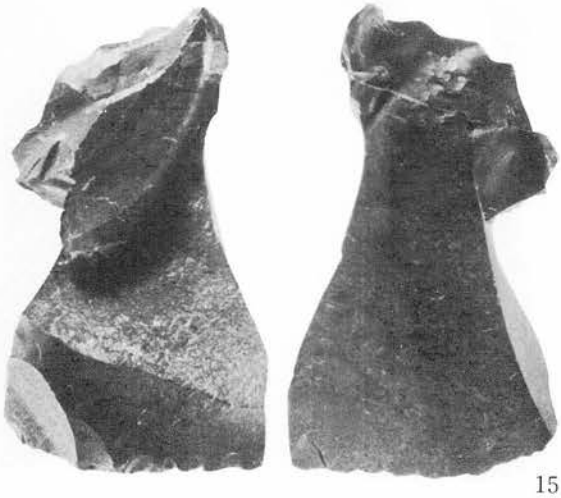
13



11

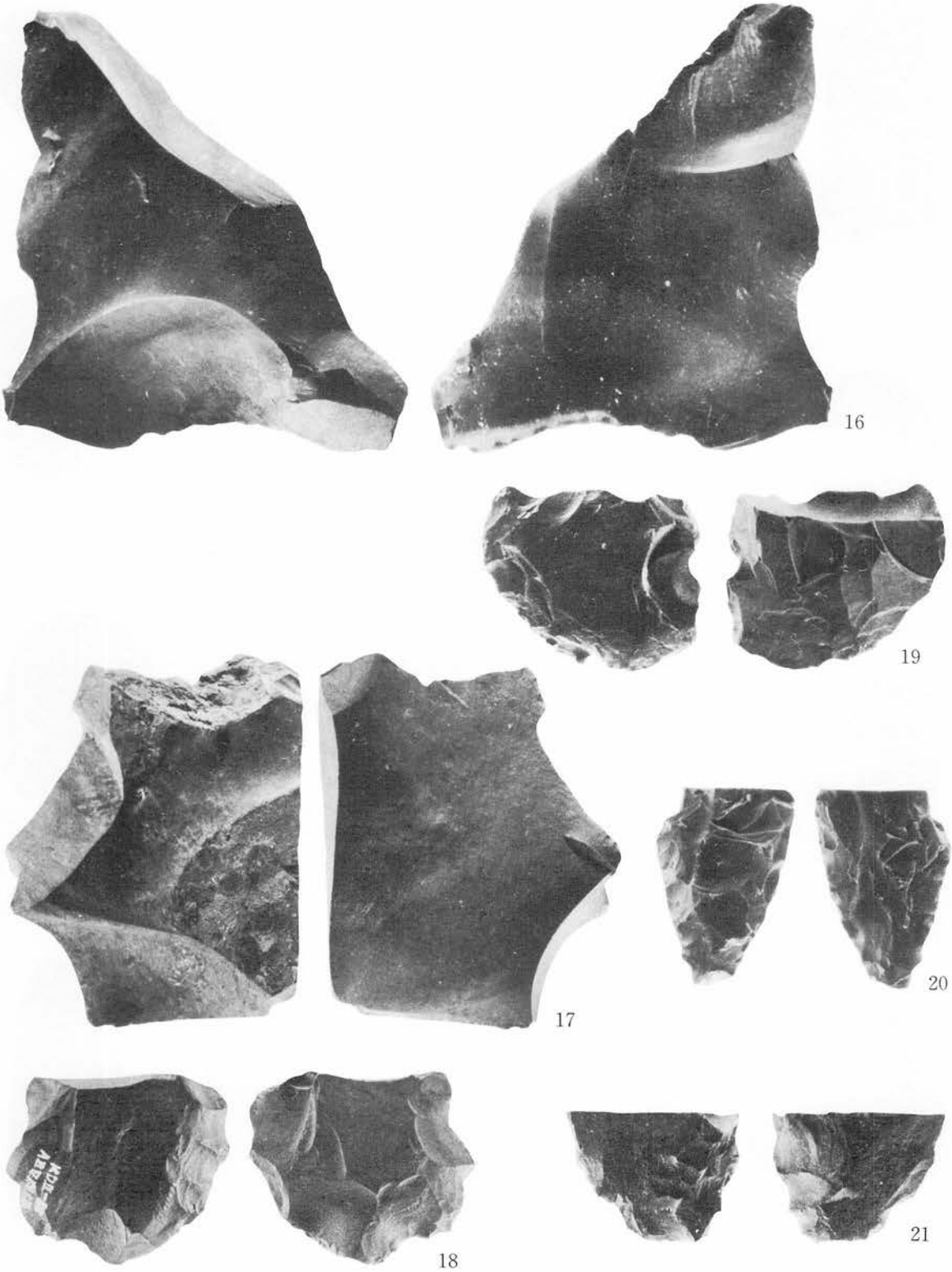
14

12



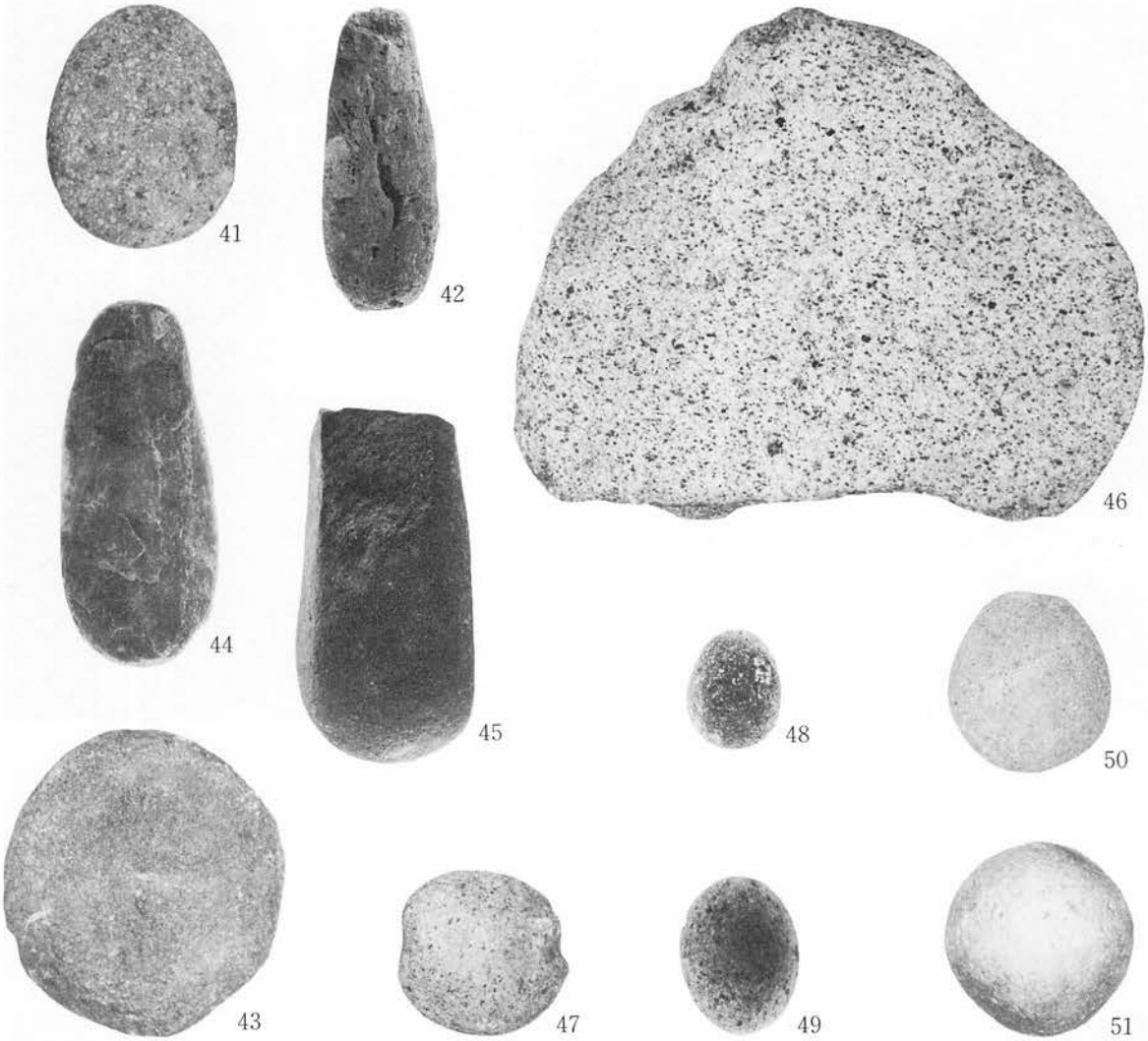
15

写真図版第31図　縄文時代早期遺構外出土石器遺物



写真図版第32図　縄文時代早期遺構外出土石器遺物

写真図版第33図　縄文時代早期遺構外出土石器遺物



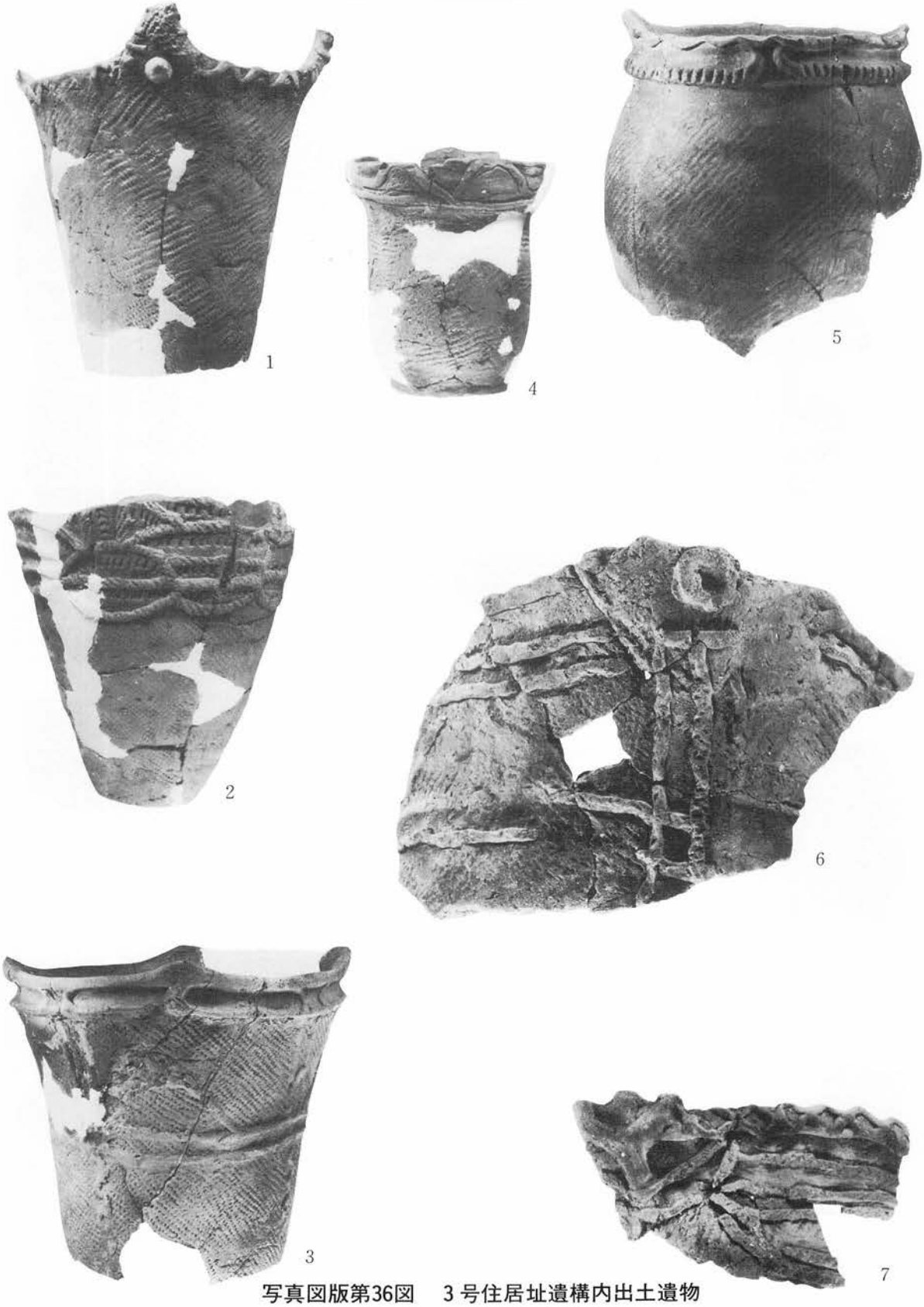
写真図版第34図　縄文時代早期遺構外出土石器遺物

3号住居址全景(縄文時代中期)

3号住居　址炉址

3号住居址 炉址断面

写真図版第35図

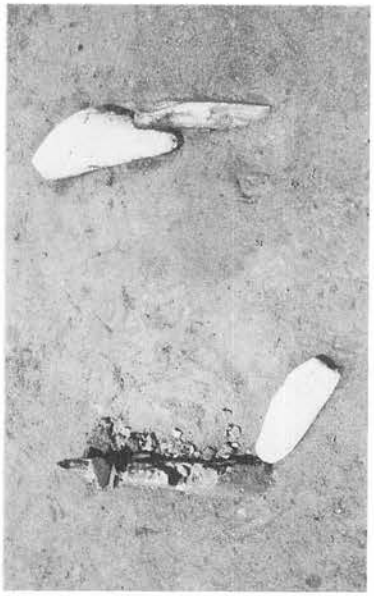


写真図版第36図　3号住居址遺構内出土遺物

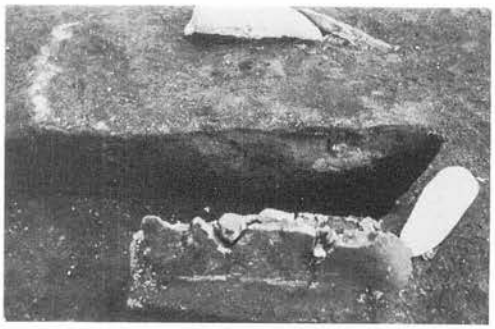
写真図版第37図　縄文時代中期遺構外出土土器遺物

写真図版第38図　縄文時代晩期遺構外出土土器遺物

4 号住居址全景(弥生時代)

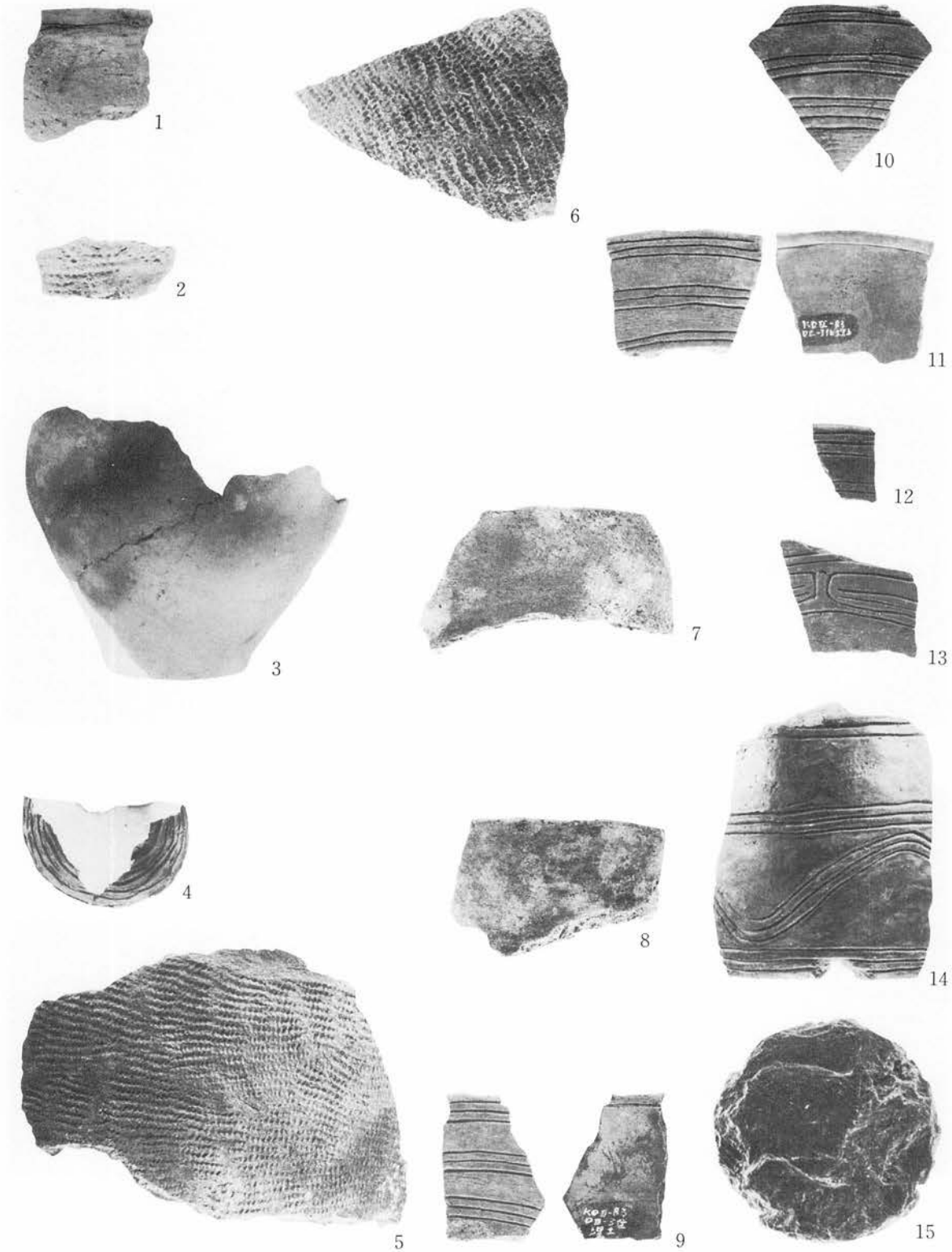


4 号住居址 炉址



4 号住居址 炉址断面

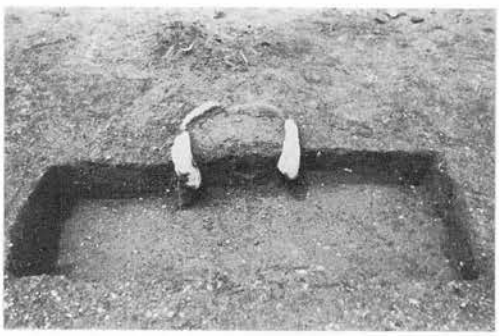
写真図版第39図



写真図版第40図　4号住居址遺構内出土土器・石器遺物

5号住居址全景(弥生時代)

5号住居址 炉址

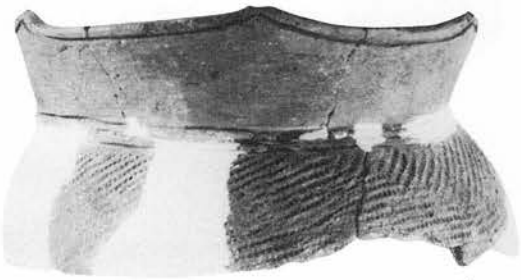


5号住居址 炉址断面

写真図版第41図

6 号住居址全景(弥生時代)

6 号住居址 炉址断面

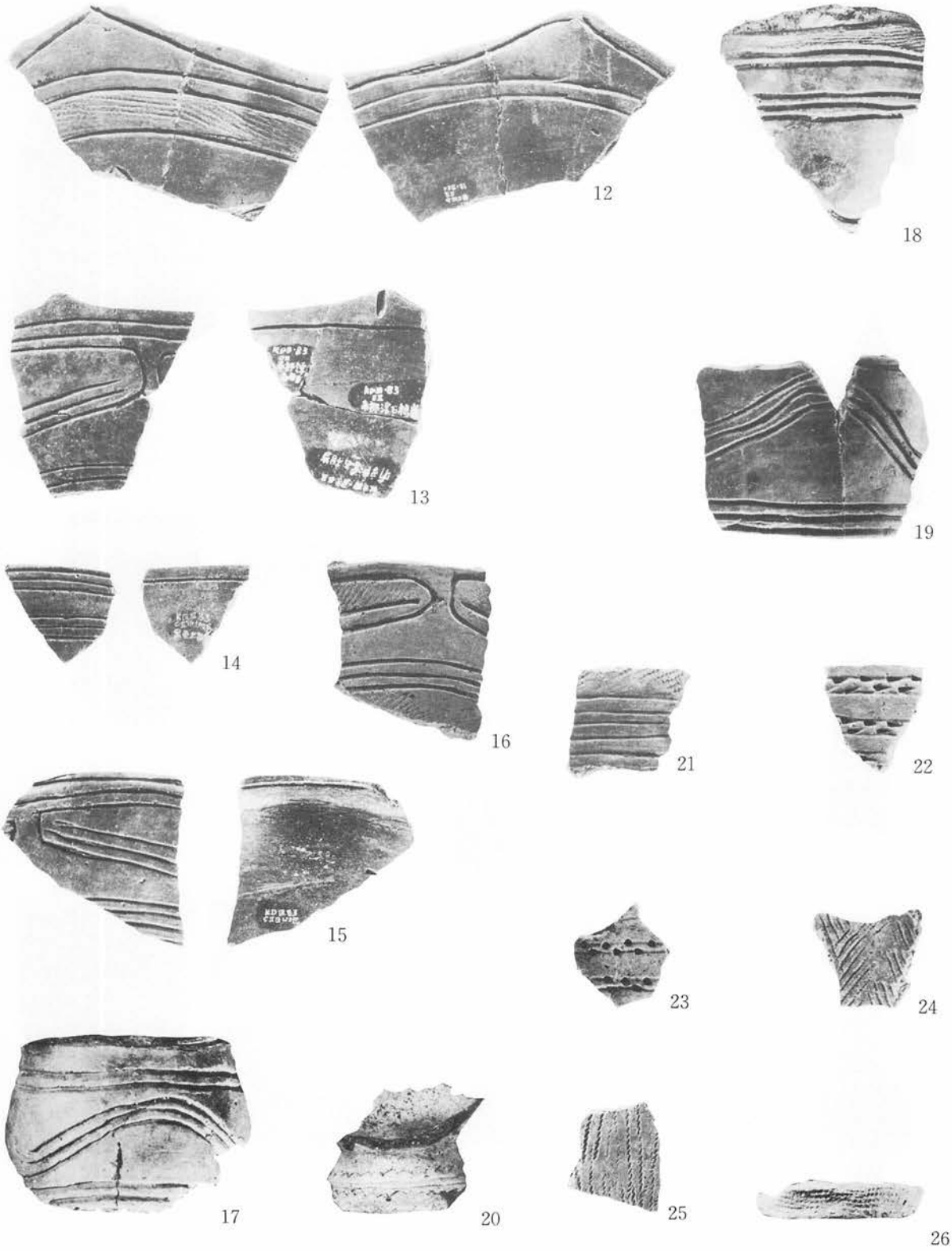


1

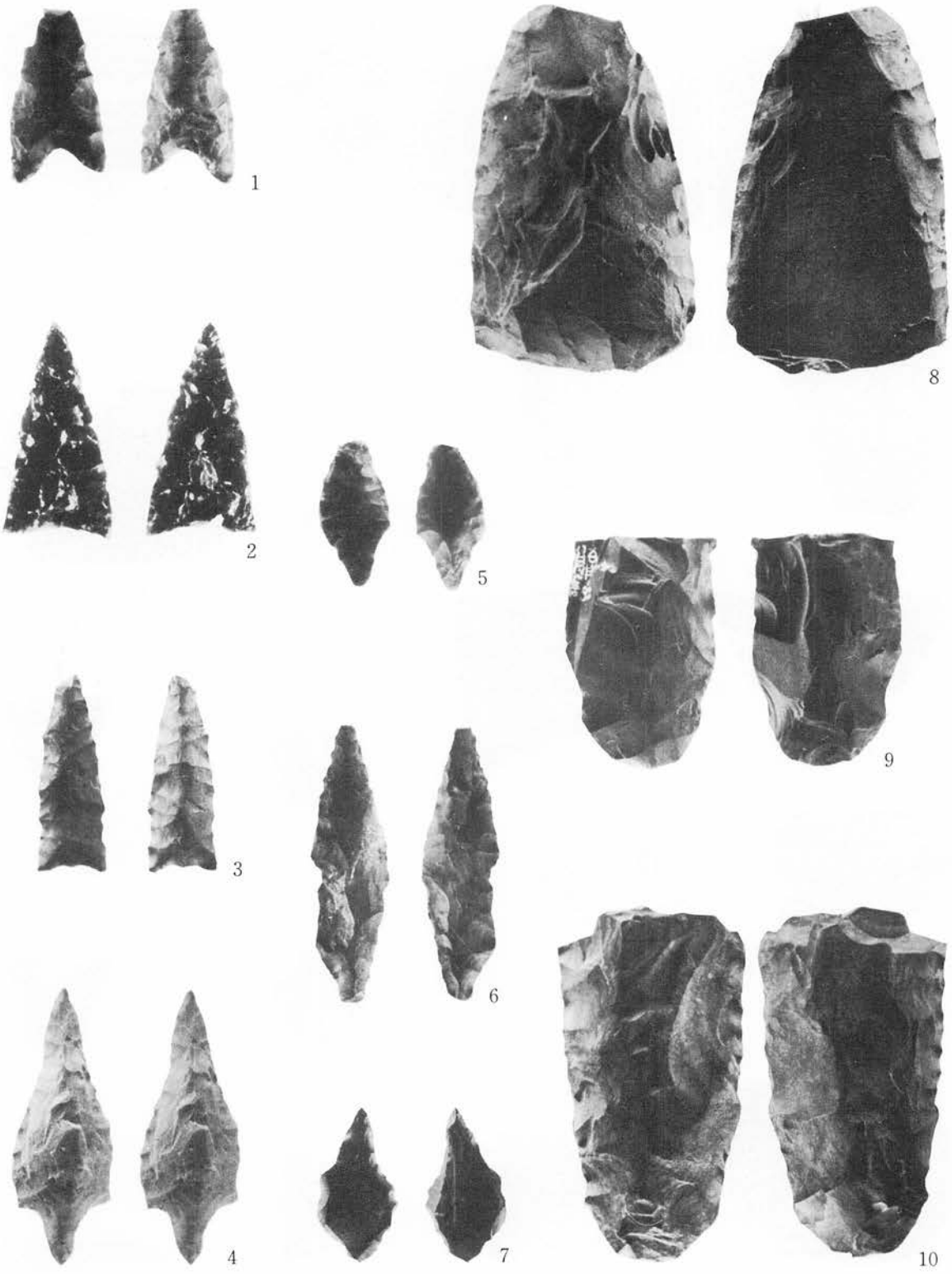
6 号住居址 炉埋設土器

写真図版第42図

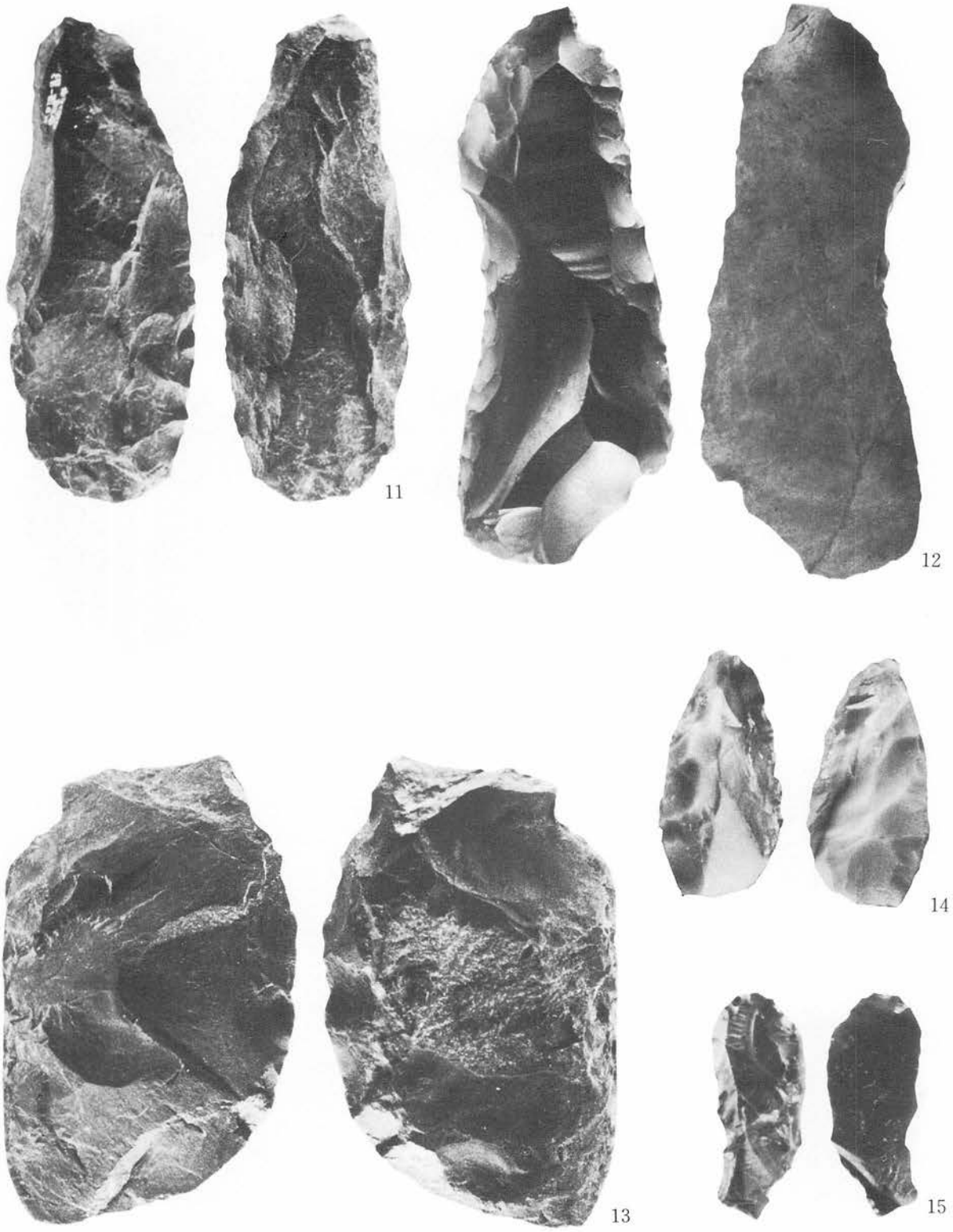
写真図版第43図　弥生時代遺構外出土土器遺物



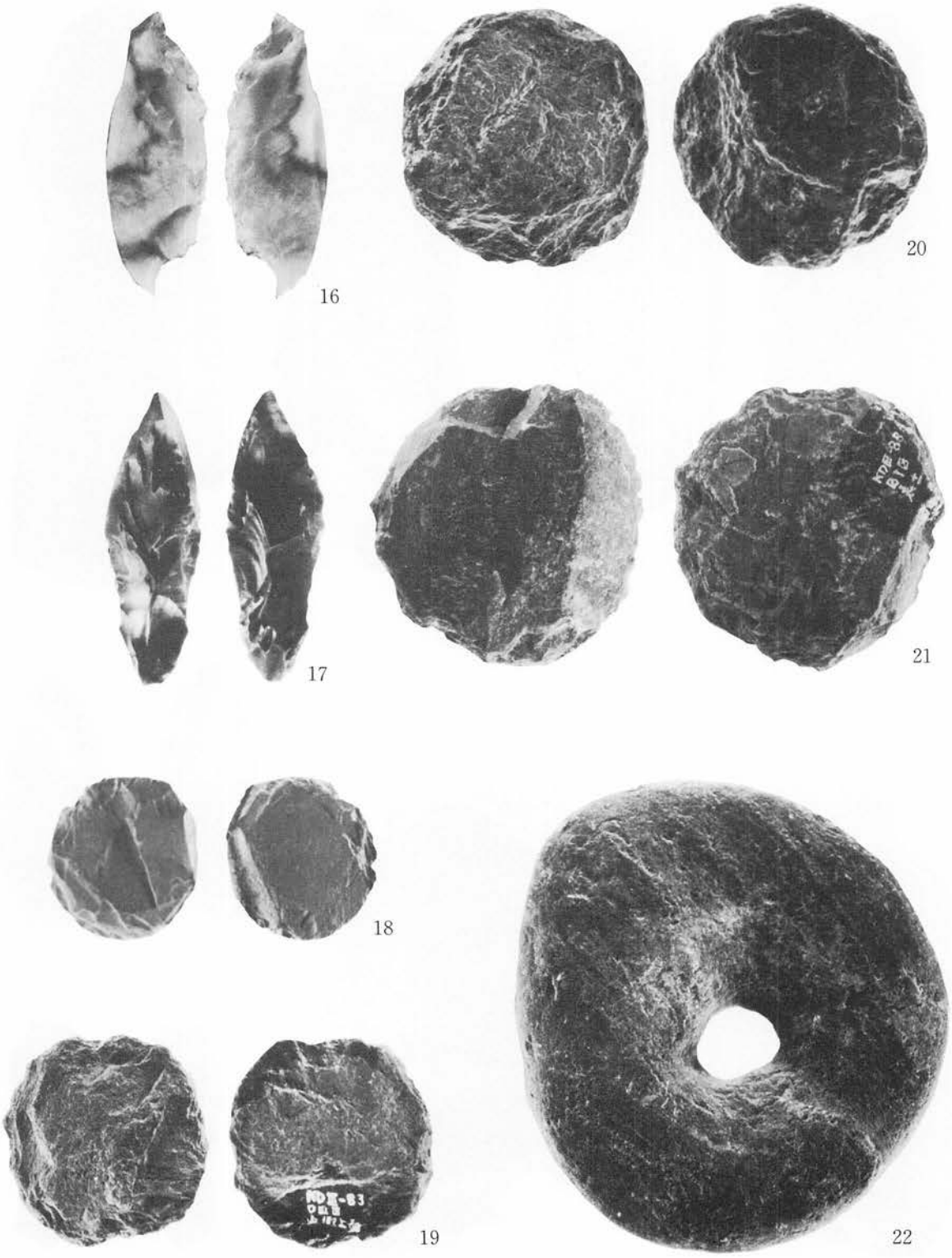
写真図版第44図　弥生時代遺構外出土土器遺物



写真図版第45図　遺構外出土土石器遺物



写真図版第46図　遺構外出土石器遺物



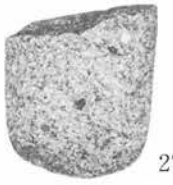
写真図版第47図　遺構外出土石器遺物

23

31

35

24



27

36

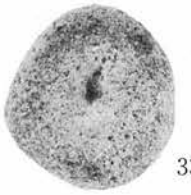
28

32

37

25

29

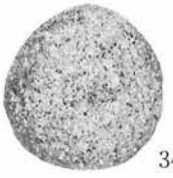


33

38

26

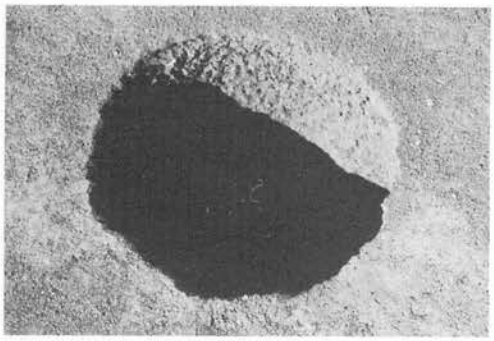
30



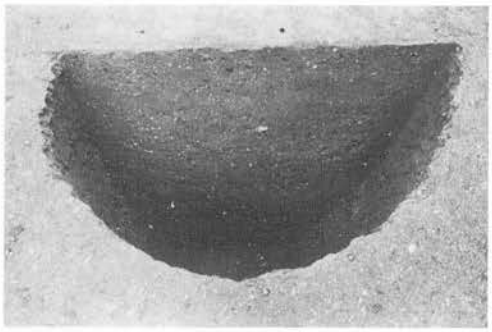
34

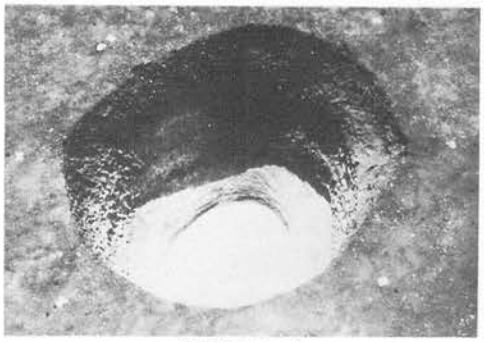
写真図版第48図　遺構外出土石器遺物

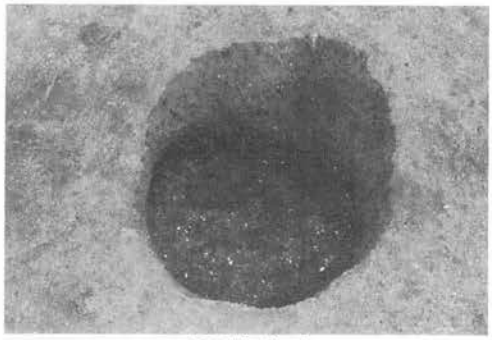
写真図版第49図　遺構外出土石器遺物

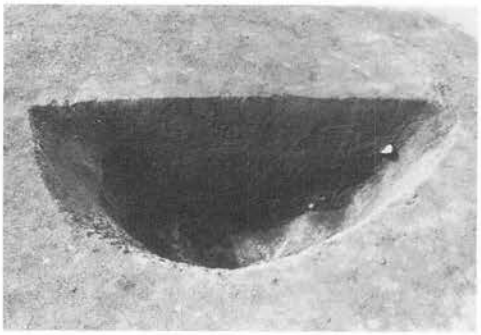

101号ピット

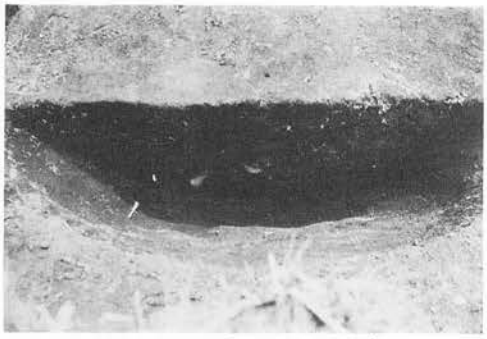
104号ピット


101号ピット埋土断面


106号ピット

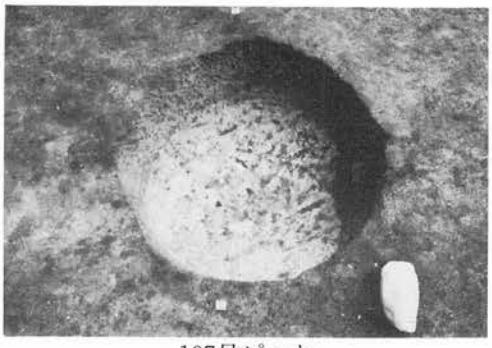

105号ピット

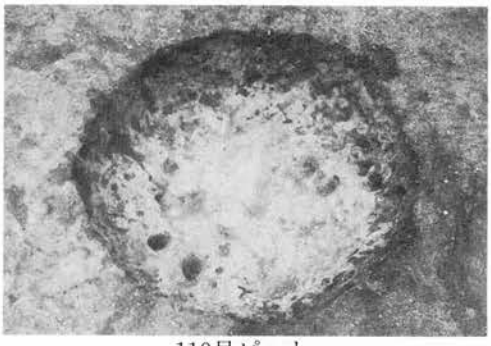

106号ピット断面

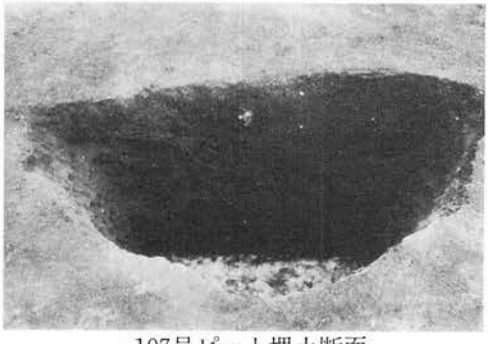

105号ピット埋土断面

109号ピット

写真図版第50図　ピット

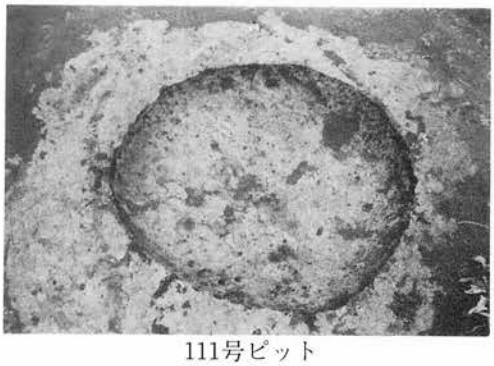

107号ピット


110号ピット


107号ピット埋土断面

110号ピット埋土断面

108号ピット


111号ピット

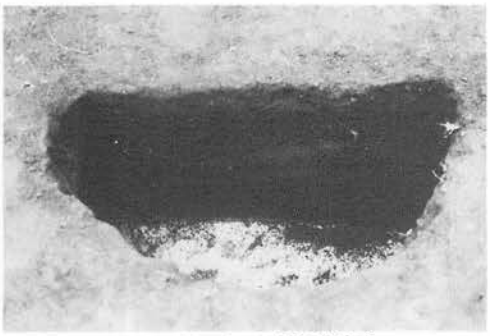
108号ピット埋土断面

111号ピット埋土断面

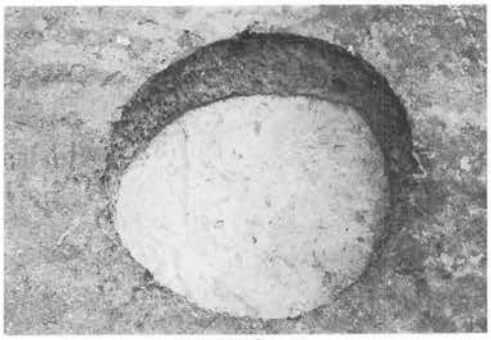
写真図版第51図　ピット

112号ピット

114号ピット



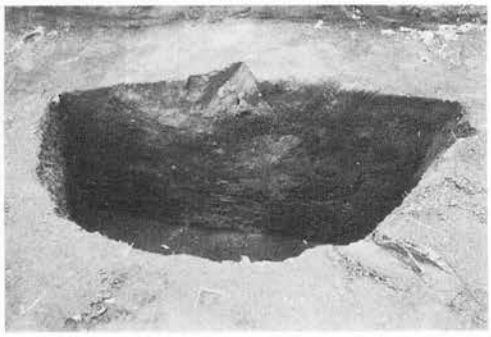
112号ピット埋土断面



115号ピット

113号ピット

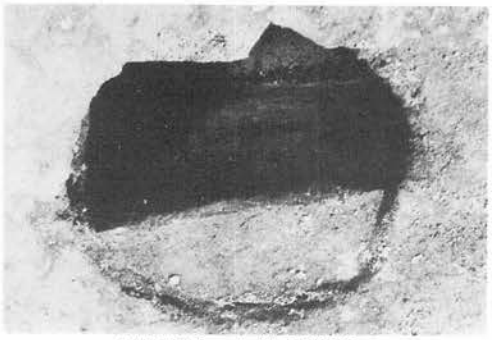
116号ピット



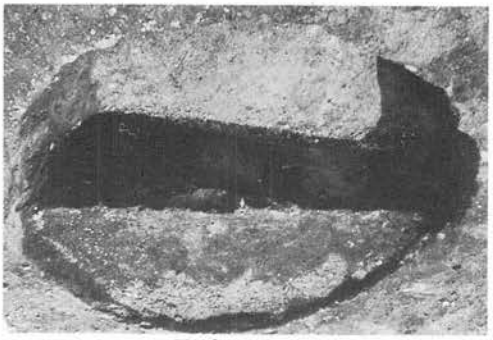
113号ピット埋土断面

117号ピット埋土断面

写真図版第52図　ピット

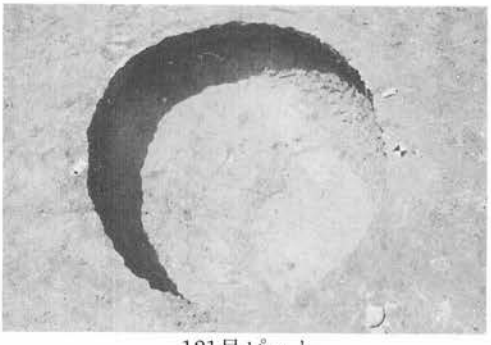


117号ピット埋土断面

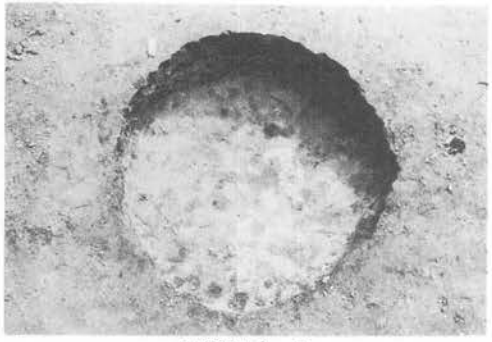


124号ピット埋土断面

118号ピット

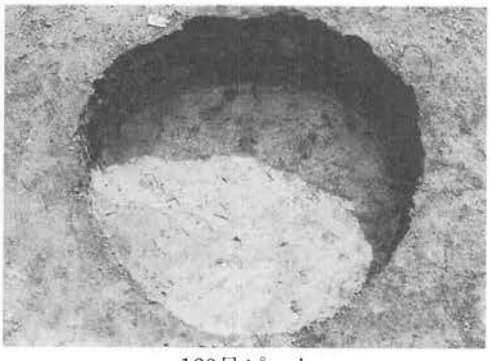


121号ピット

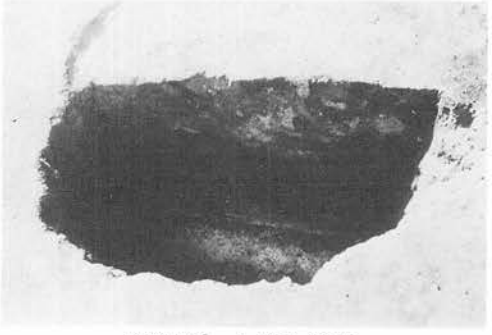


119号ピット

121号ピット埋土断面



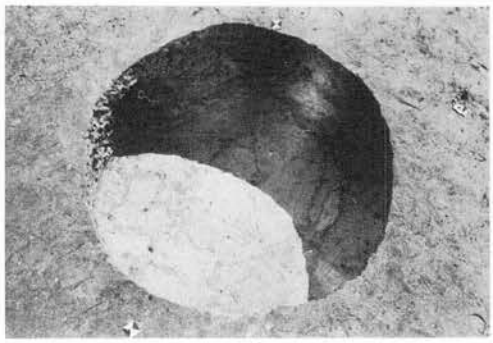
120号ピット



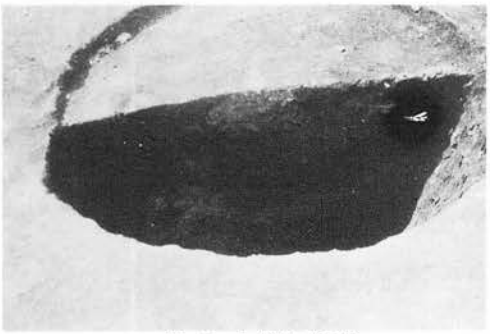
122号ピット埋土断面

写真図版第53図　ピット

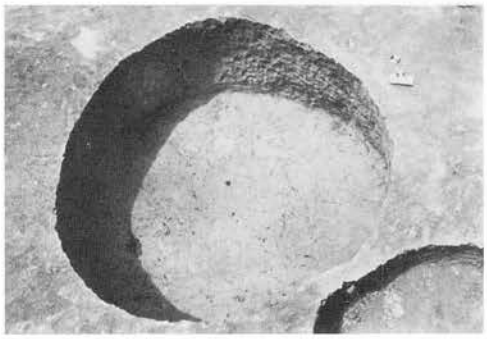
123号ピット



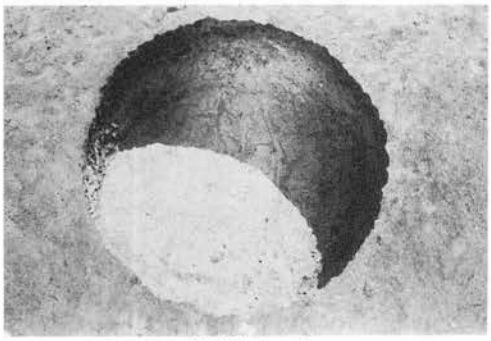
126号ピット



123号ピット埋土断面

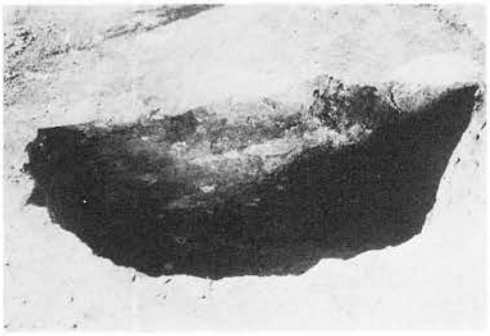


127号ピット

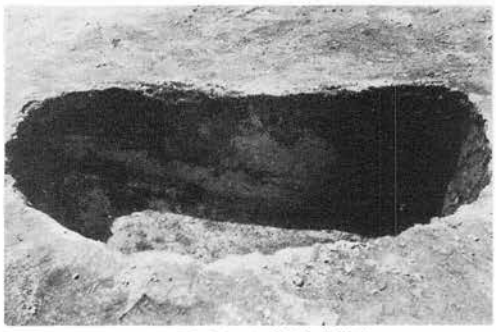


125号ピット

128号ピット

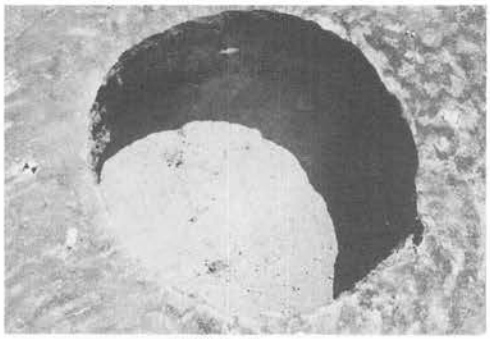


125号ピット埋土断面

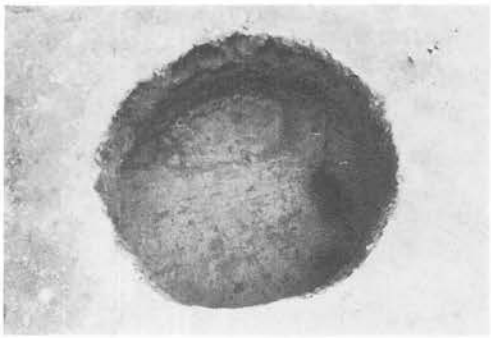


128号ピット埋土断面

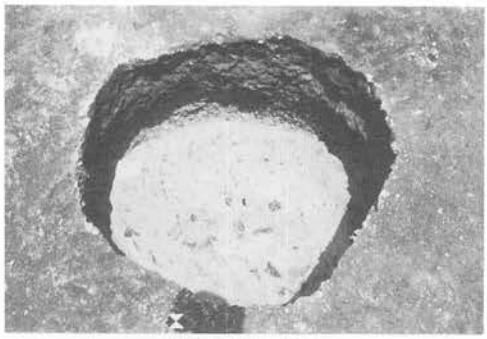
写真図版第54図　ピット



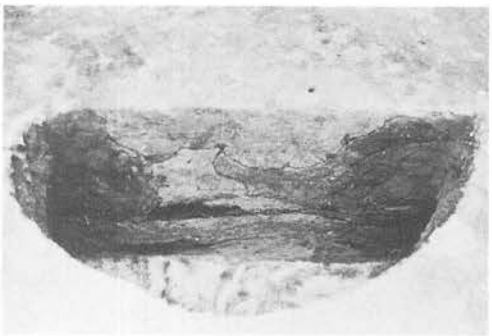
129号ピット



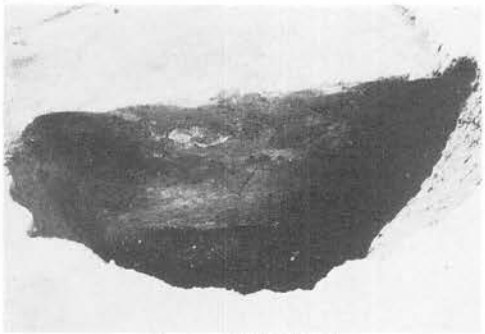
132号ピット



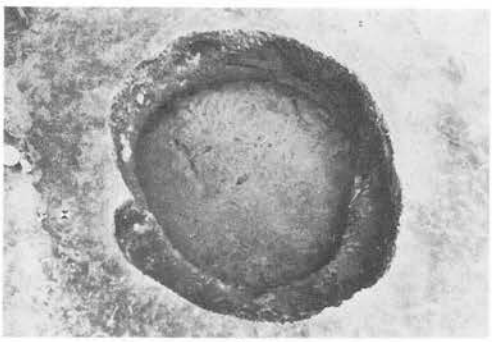
130号ピット



132号ピット埋土断面

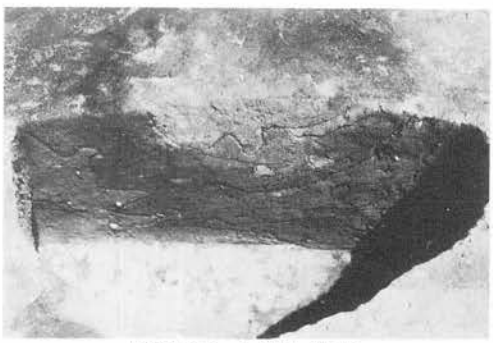


130号ピット埋土断面



133号ピット

131号ピット

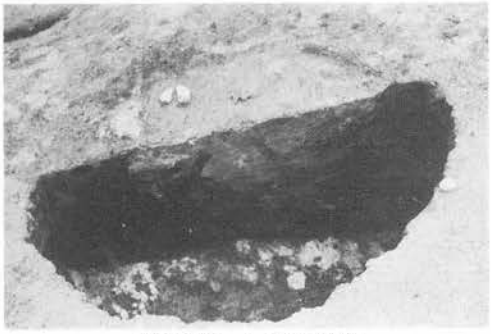


133号ピット埋土断面

写真図版第55図　ピット

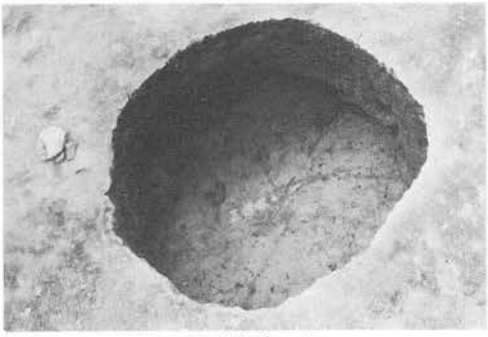
134号ピット

138号・139号ピット

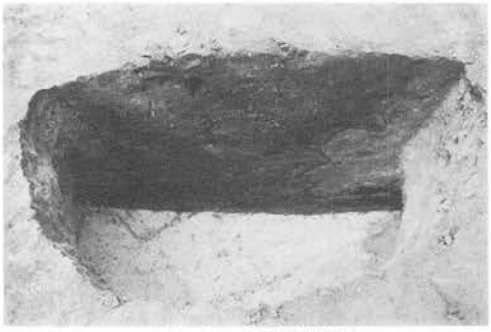


134号ピット埋土断面

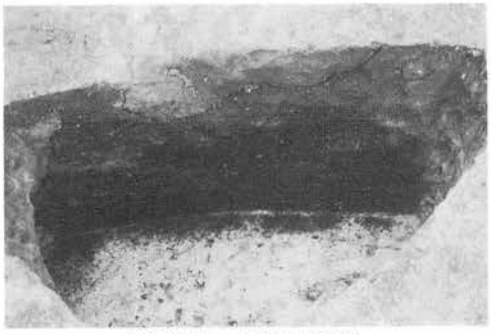
140号ピット



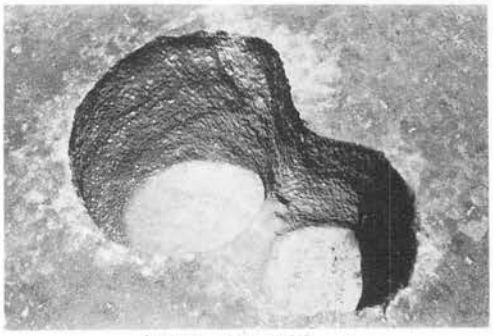
135号ピット



140号ピット埋土断面

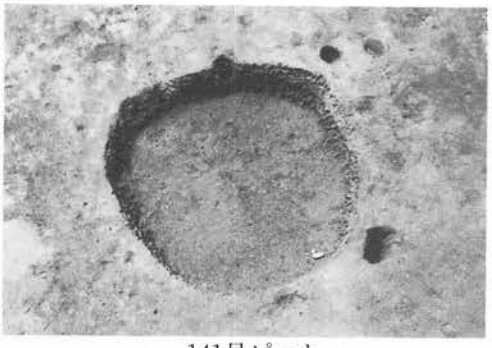


135号ピット埋土断面



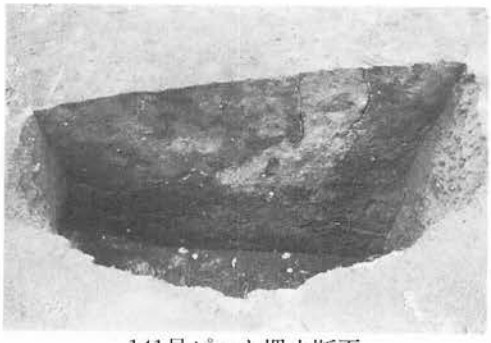
144号・145号ピット

写真図版第56図　ピット



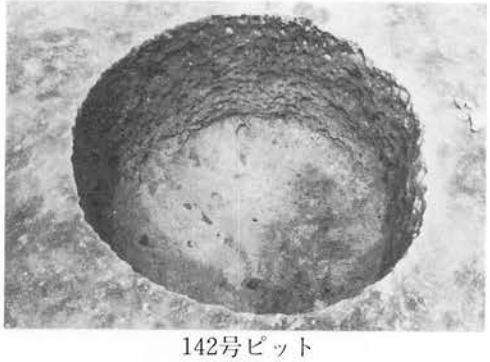
141号ピット

143号ピット



141号ピット埋土断面

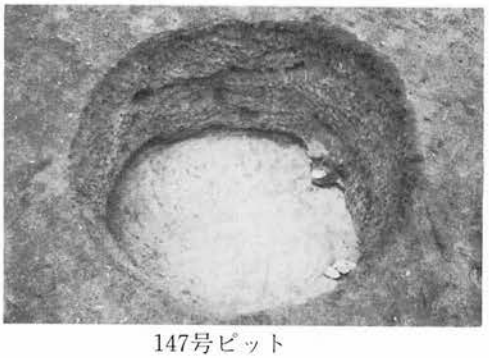
143号ピット埋土断面



142号ピット

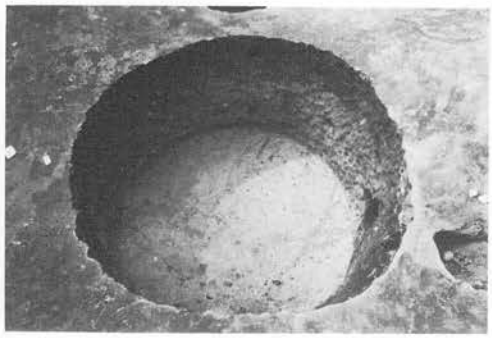
146号ピット

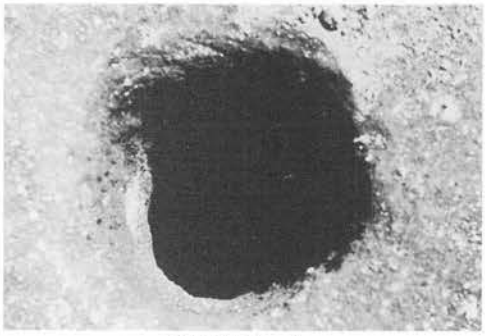
142号ピット埋土断面

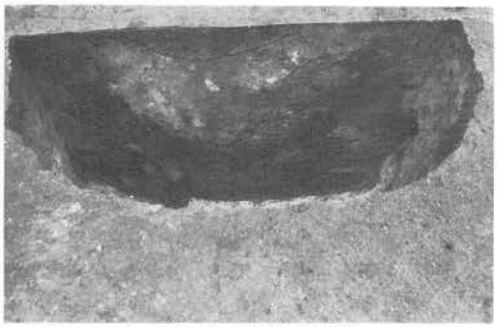


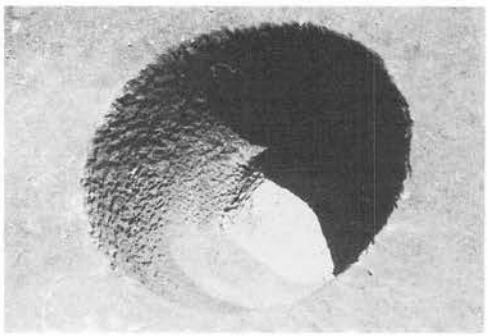
147号ピット

写真図版第57図　ピット

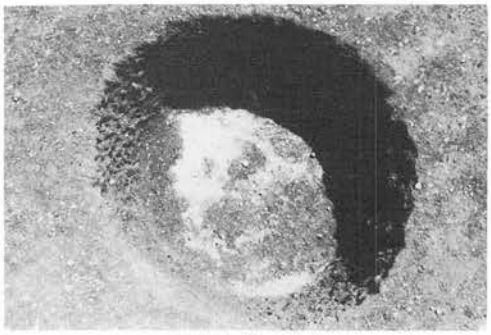

148号ピット


152号ピット

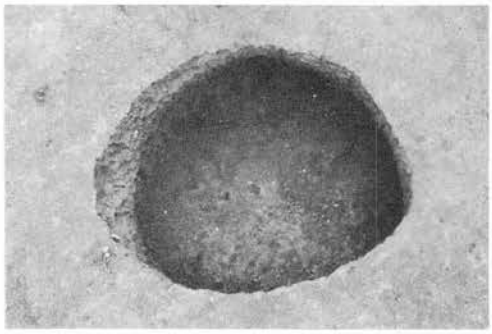

148号ピット埋土断面


150号ピット

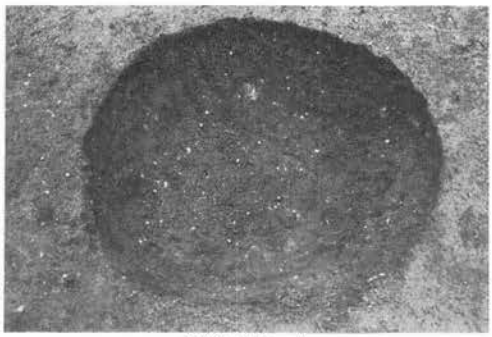
149号ピット


151号ピット

149号ピット埋土断面

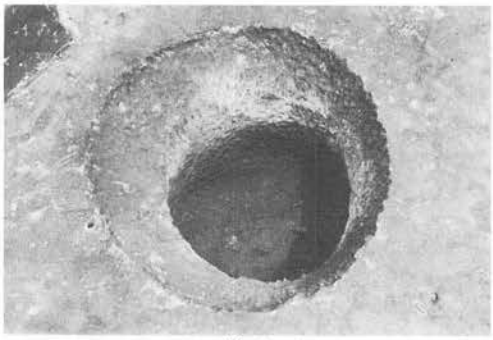

156号ピット

写真図版第58図　ピット

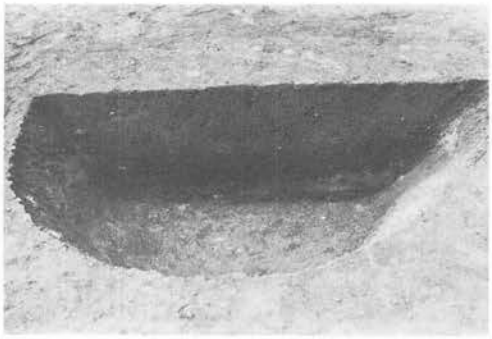


153号ピット

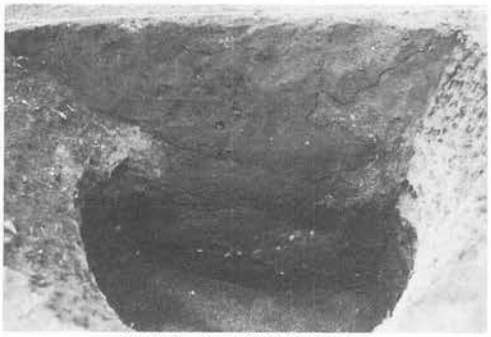
155号ピット



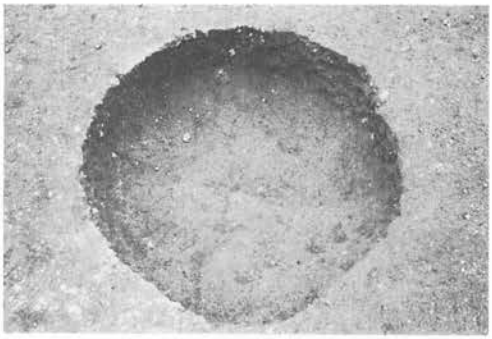
154号ピット



158号ピット



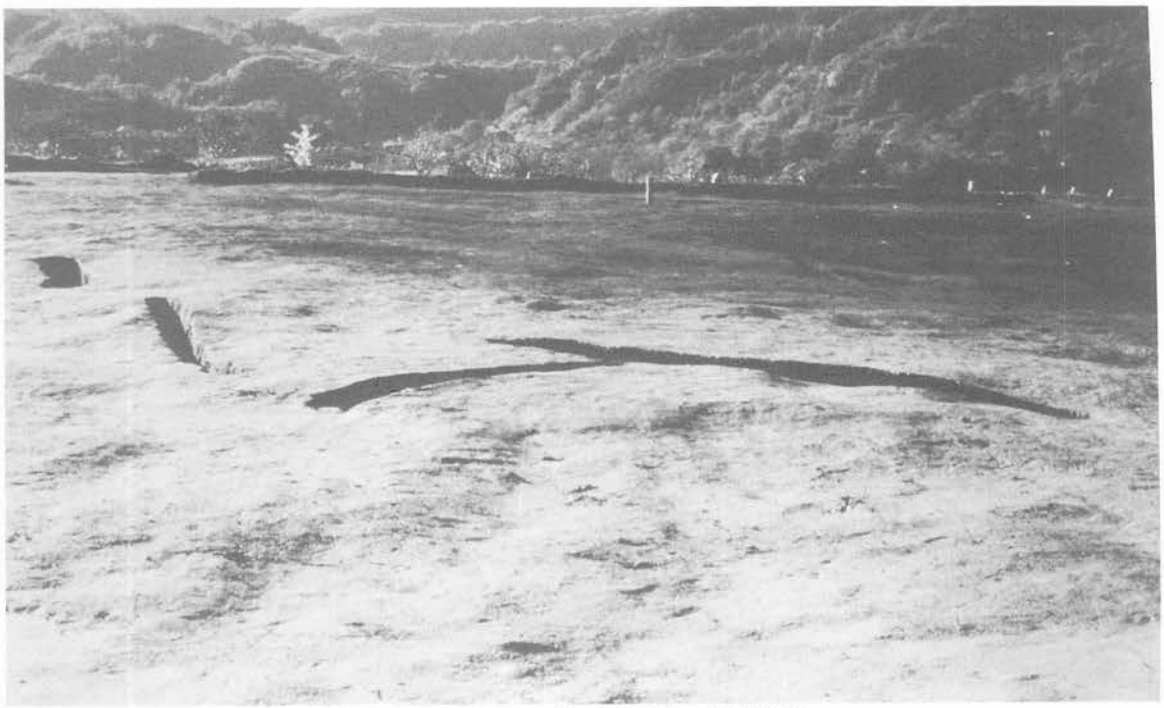
154号ピット埋土断面



155号ピット埋土断面

157号ピット

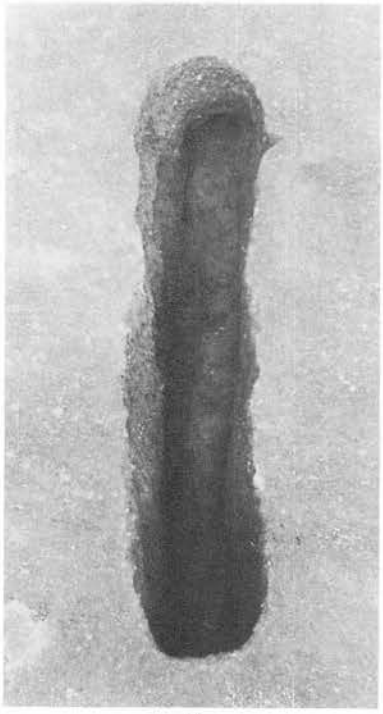
写真図版第59図　ピット

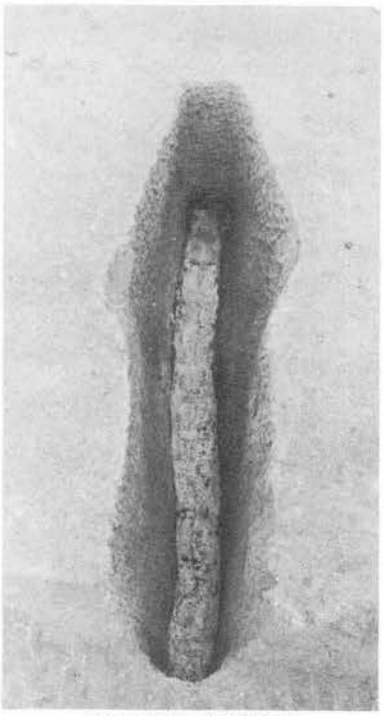


A地区平坦地に位置する陥し穴状遺構

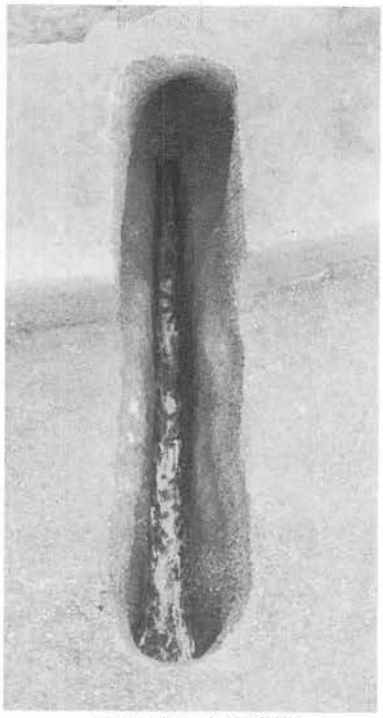
A地区西谷底に位置する陥し穴状遺構

写真図版第60図



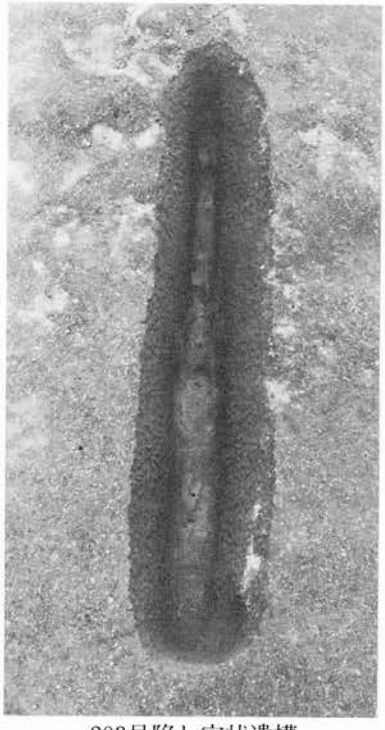


202号陥し穴状遺構

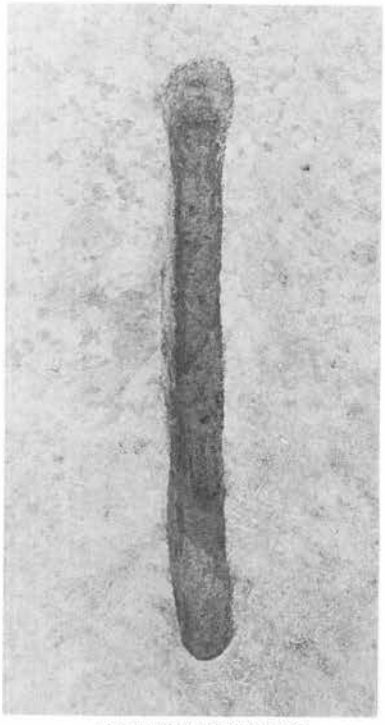


204号陥し穴状遺構

201号陥し穴状遺構

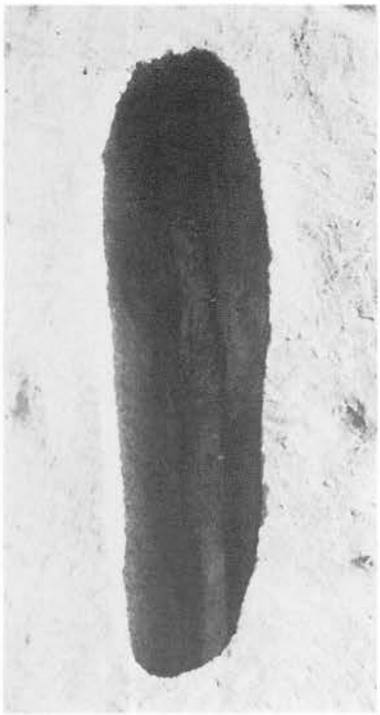


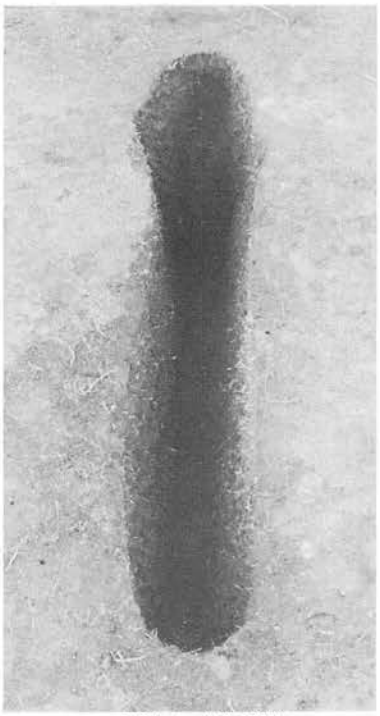
203号陥し穴状遺構



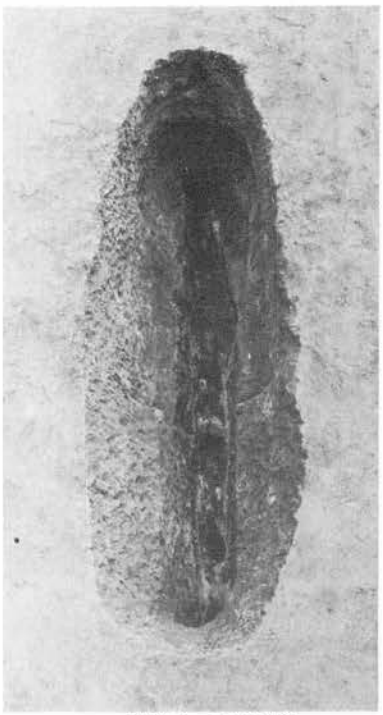
205号陥し穴状遺構

写真図版第61図　陥し穴状遺構



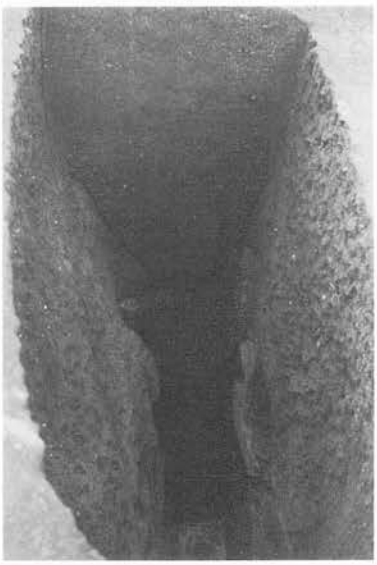


207号陥し穴状遺構



209号陥し穴状遺構

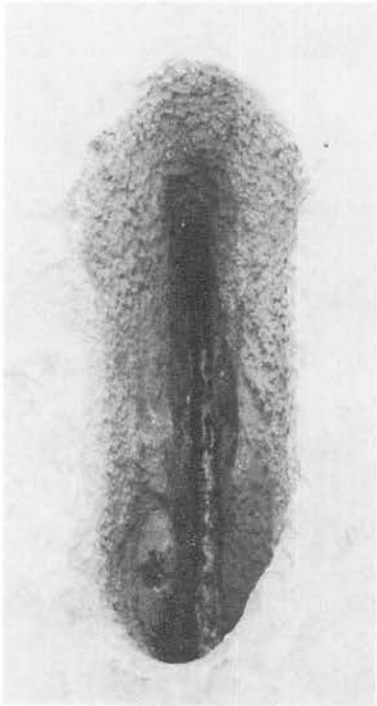
206号陥し穴状遺構



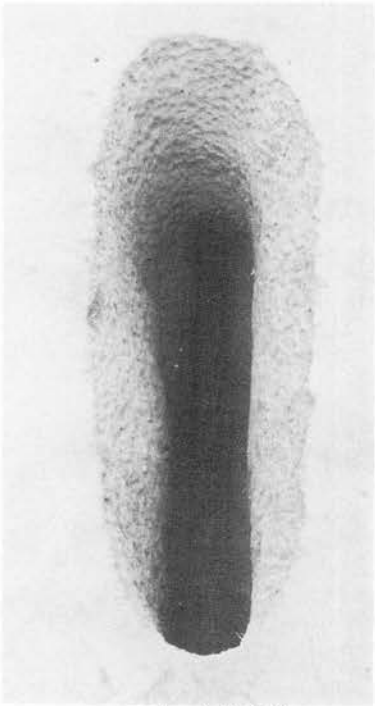
208号陥し穴状遺構

210号陥し穴状遺構

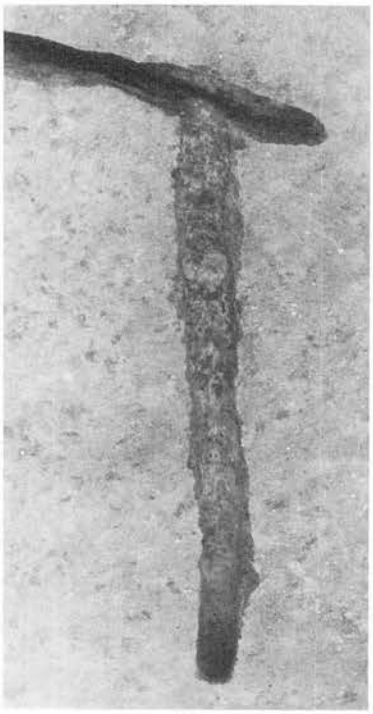
写真図版第62図　陥し穴状遺構



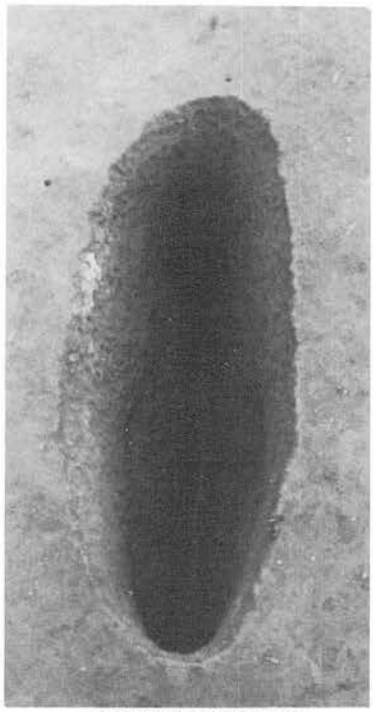
211号陥し穴状遺構



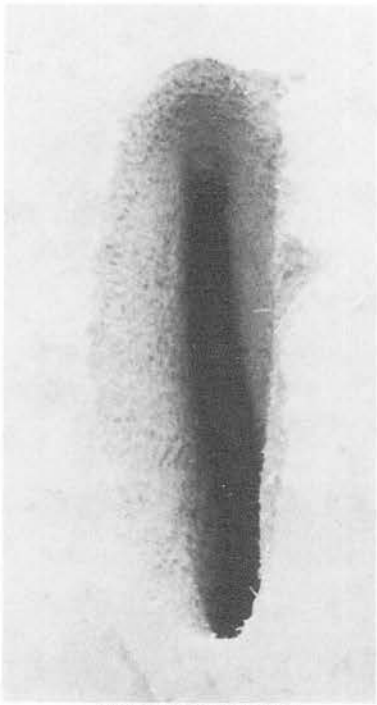
213号陥し穴状遺構



215号陥し穴状遺構

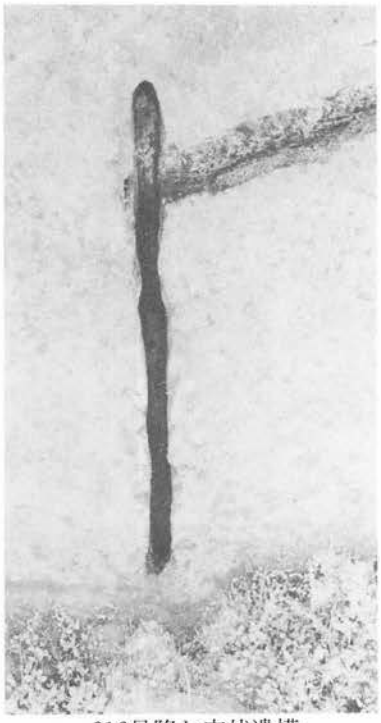


212号陥し穴状遺構

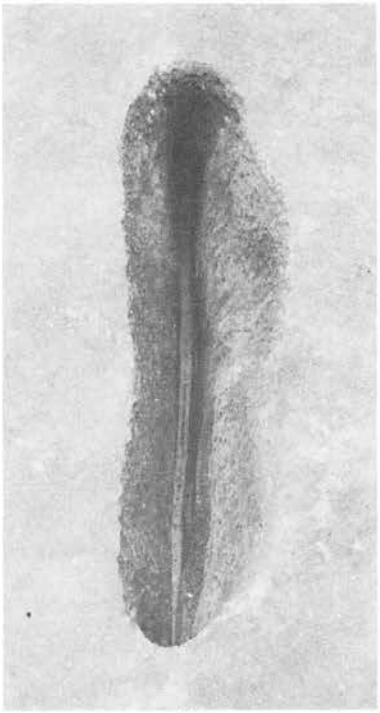


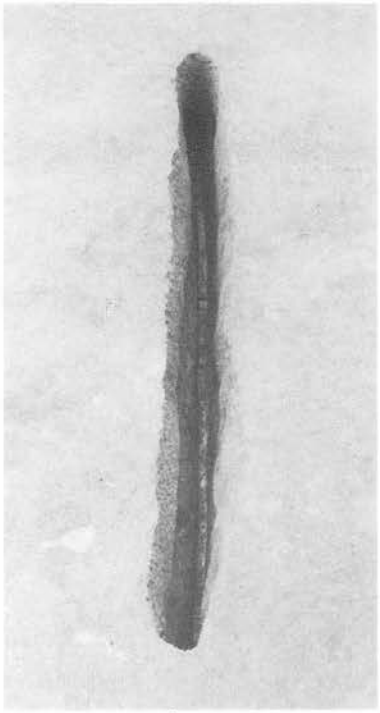
214号陥し穴状遺構

写真図版第63図　陥し穴状遺構



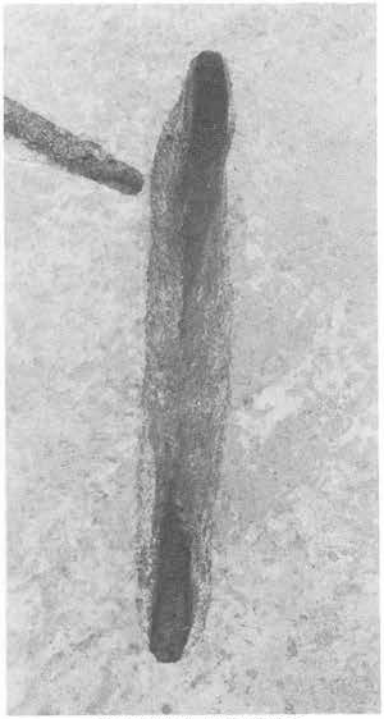
216号陥し穴状遺構





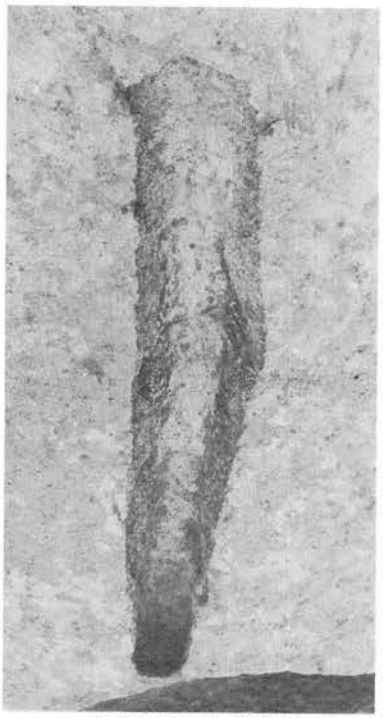
217号陥し穴状遺構

218号陥し穴状遺構

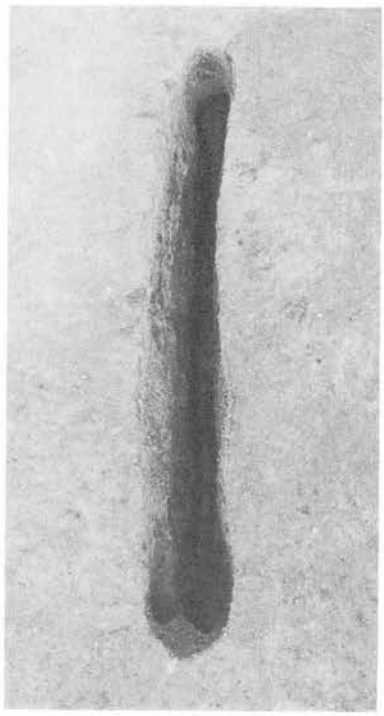


219号陥し穴状遺構

写真図版第64図　陥し穴状遺構

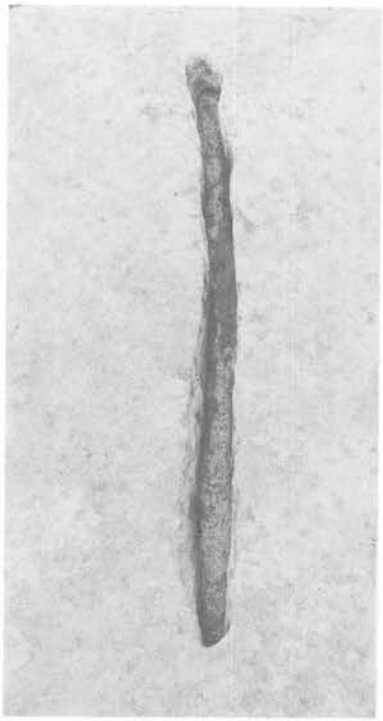


220号陥し穴状遺構



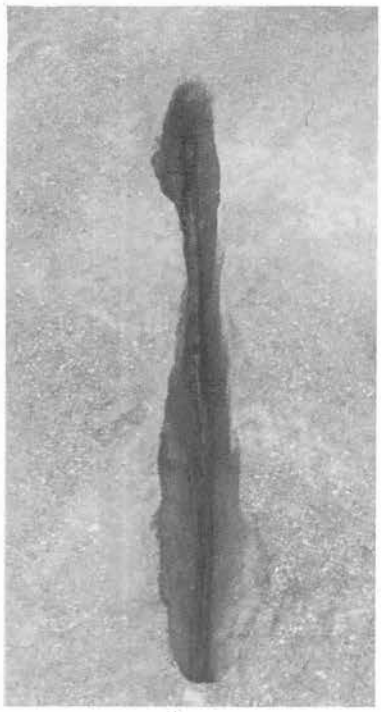
222号陥し穴状遺構

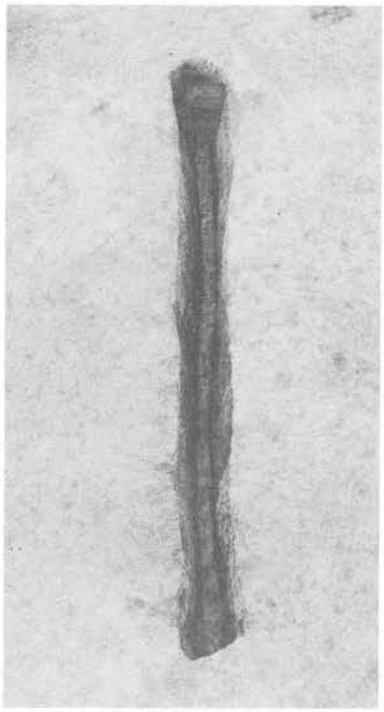
223号陥し穴状遺構

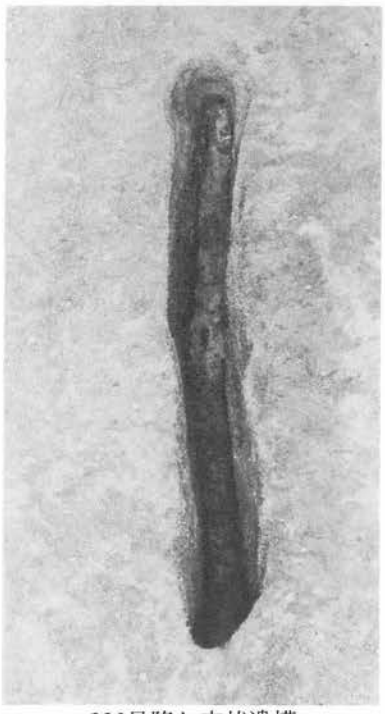


221号陥し穴状遺構

写真図版第65図　陥し穴状遺構



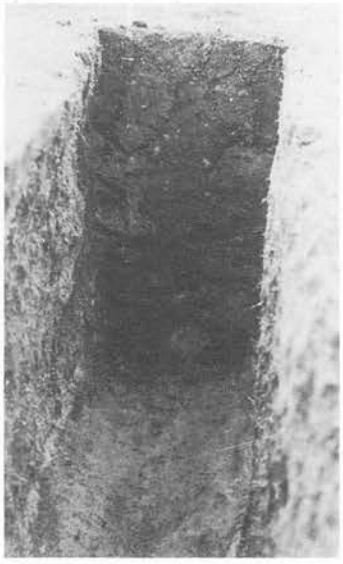


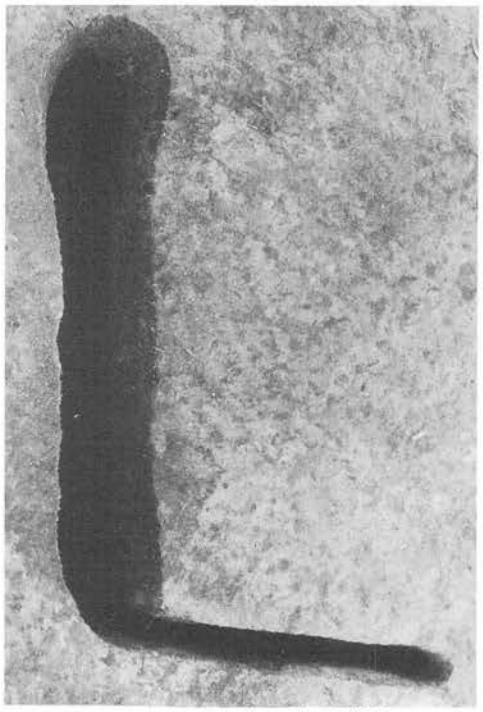


226号陥し穴状遺構

224号陥し穴状遺構

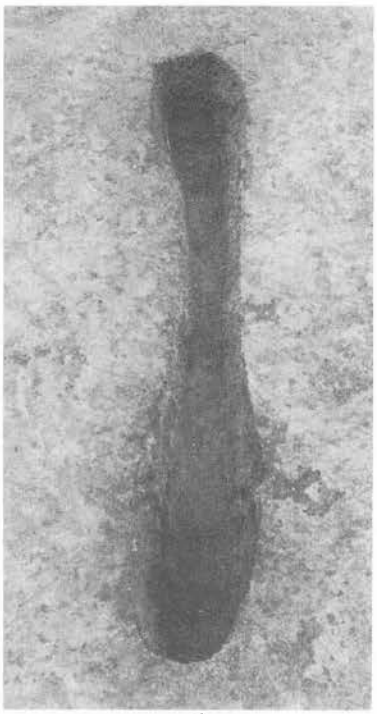
225号陥し穴状遺構

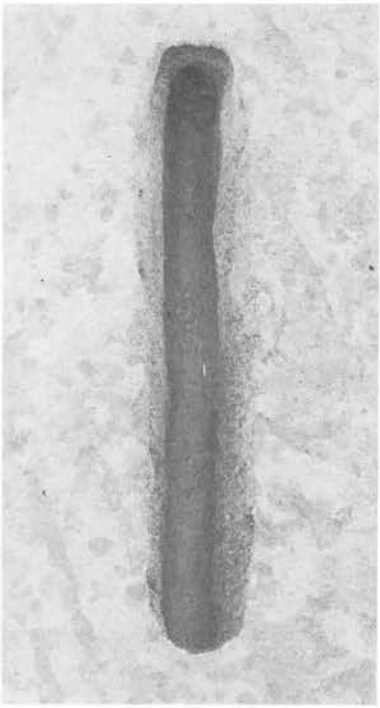




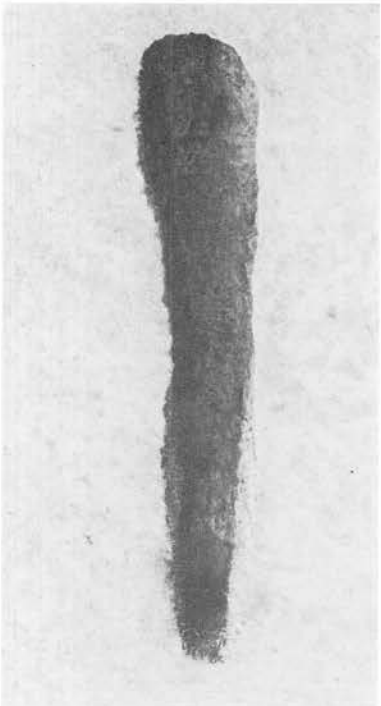
227号・228号陥し穴状遺構

写真図版第66図　陥し穴状遺構



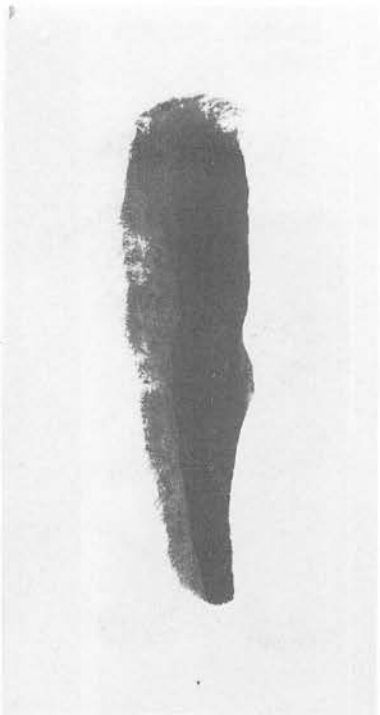


230号陥し穴状遺構



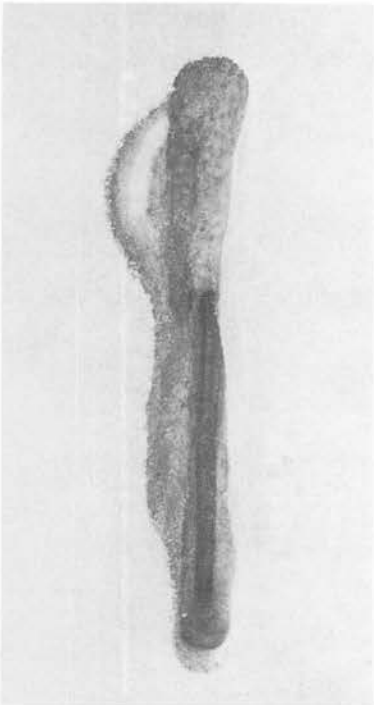
229号陥し穴状遺構

231号陥し穴状遺構

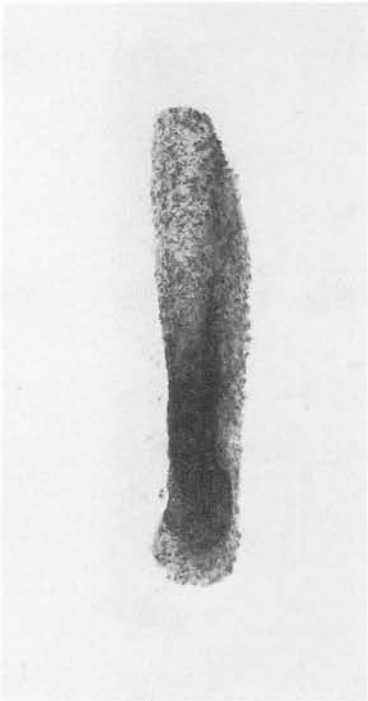


232号陥し穴状遺構

写真図版第67図　陥し穴状遺構



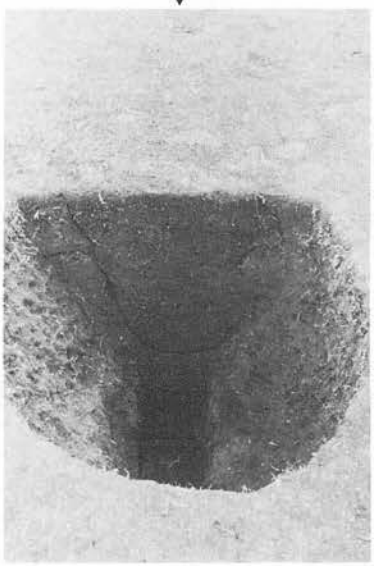
232号・234号陥し穴状遺構

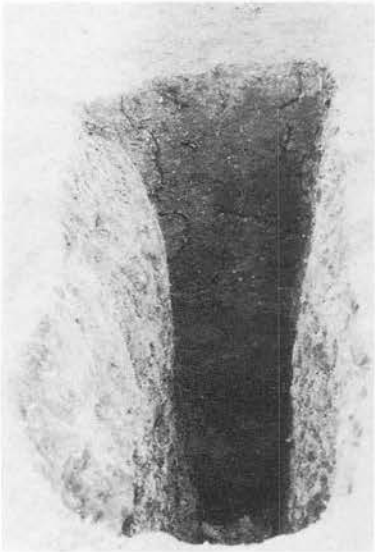


235号陥し穴状遺構

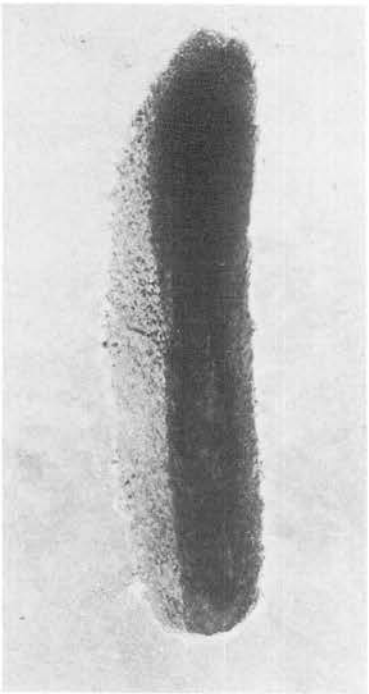
236号陥し穴状遺構

237号陥し穴状遺構

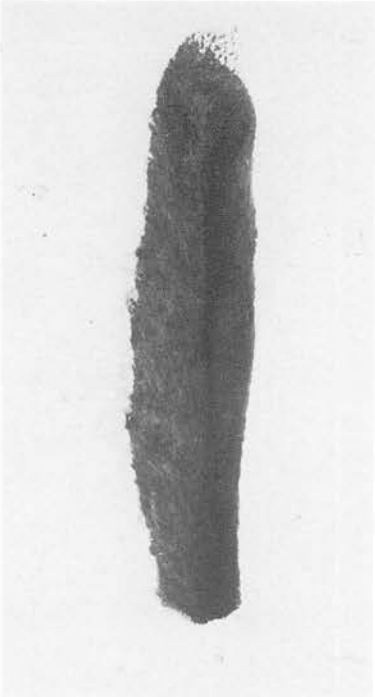




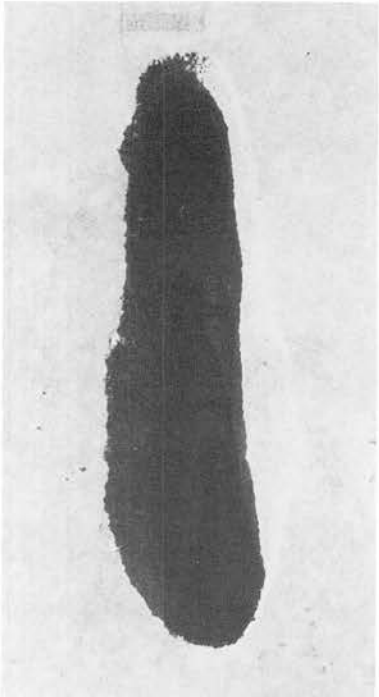
写真図版第68図　陥し穴状遺構

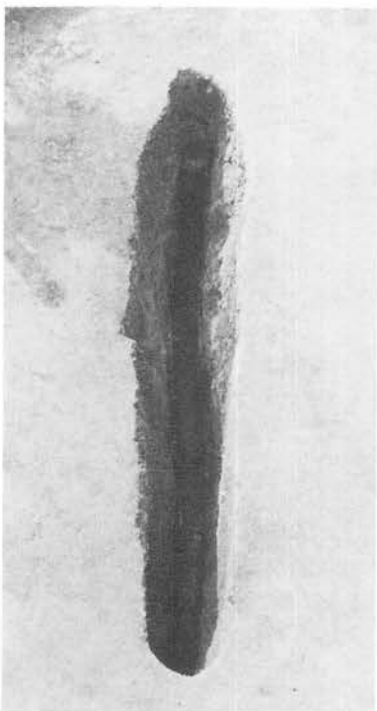


238号陥し穴状遺構



240号陥し穴状遺構

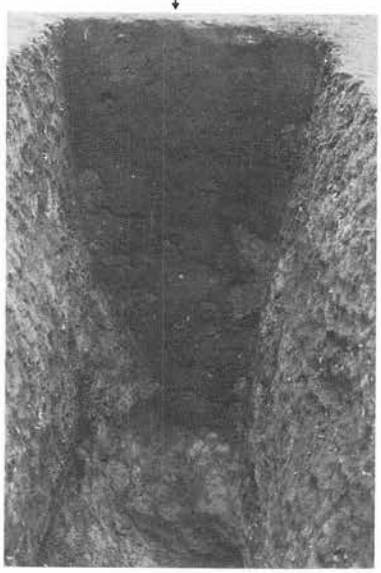




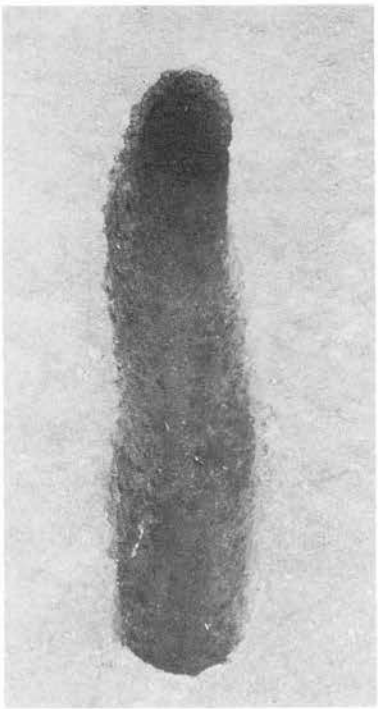
239号陥し穴状遺構

240号陥し穴状遺構

241号陥し穴状遺構

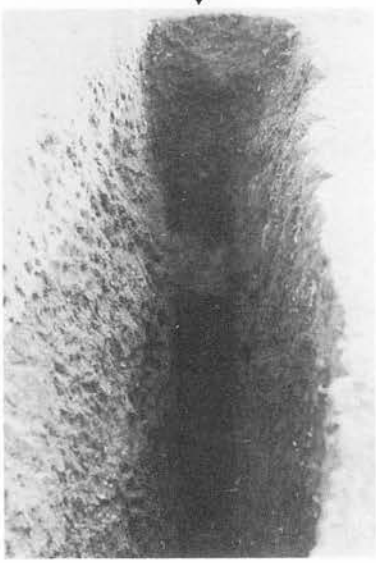


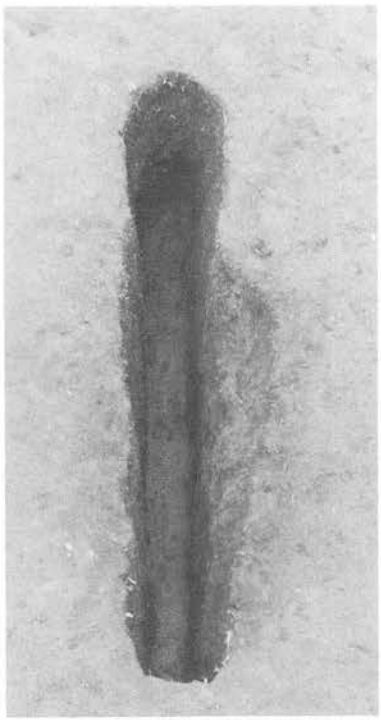
写真図版第69図　陥し穴状遺構



243号陥し穴状遺構

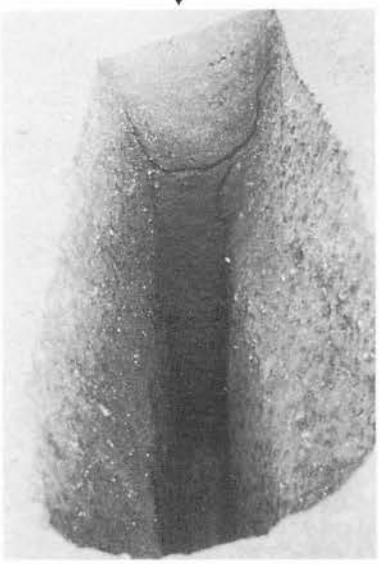
242号陥し穴状遺構



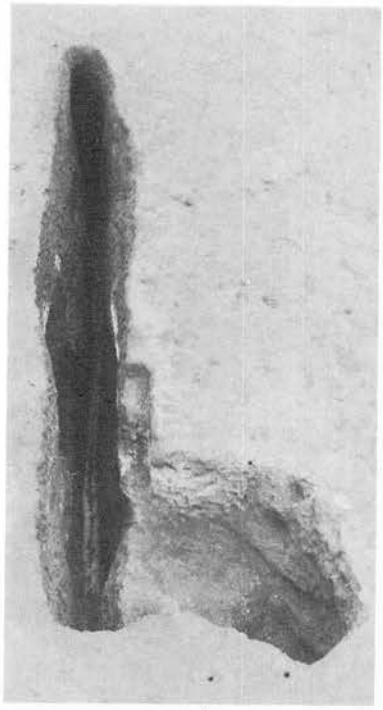


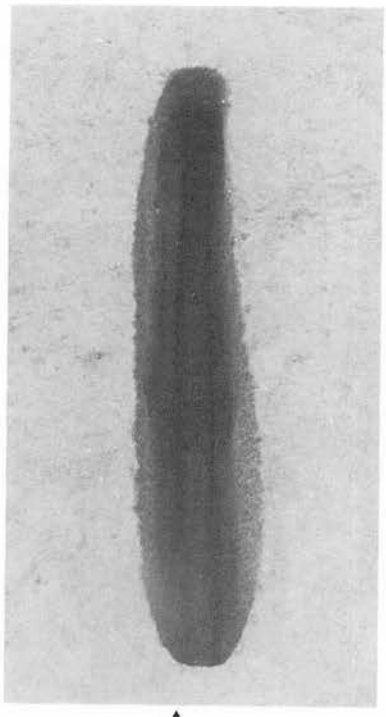
244号陥し穴状遺構

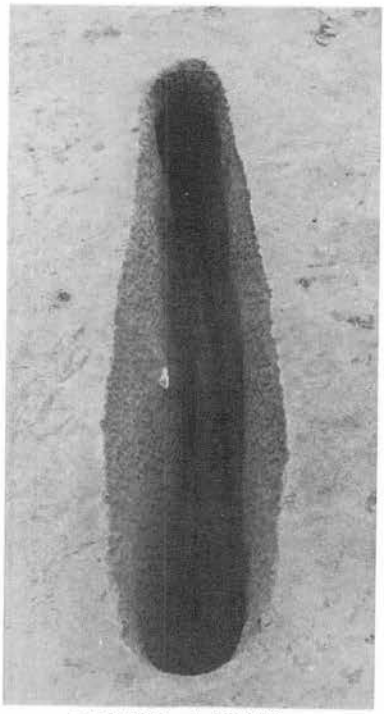
245号陥し穴状遺構



写真図版第70図　陥し穴状遺構



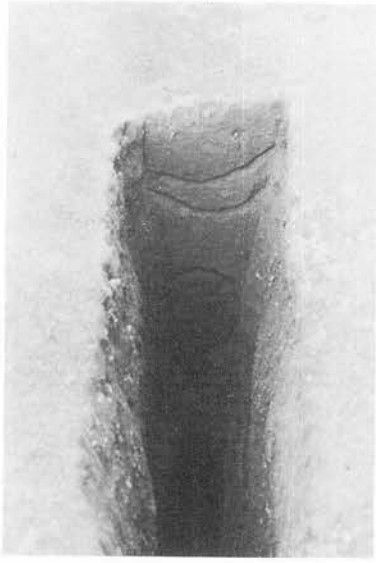


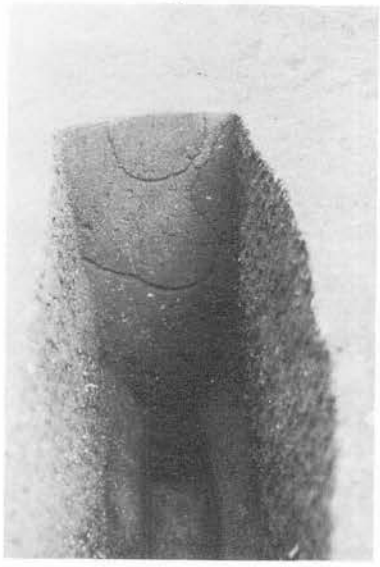


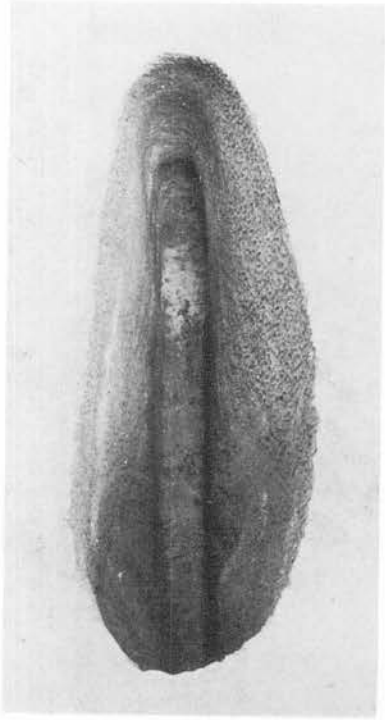
248号陥し穴状遺構

246号陥し穴状遺構

247号陥し穴状遺構

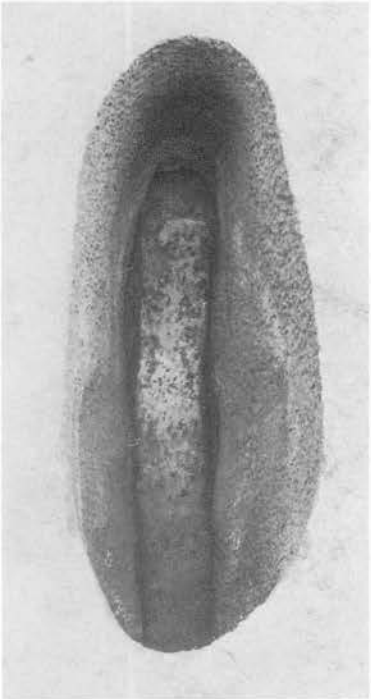




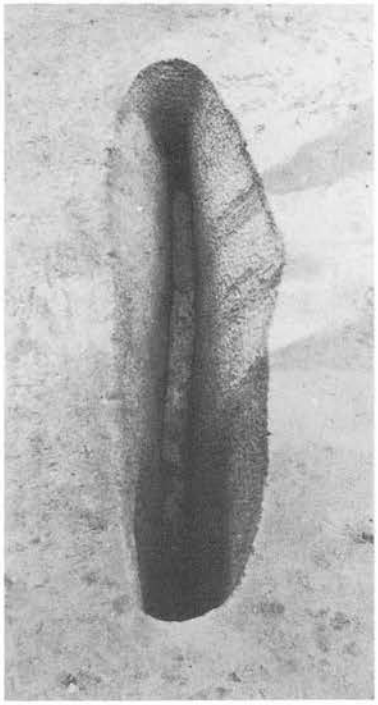


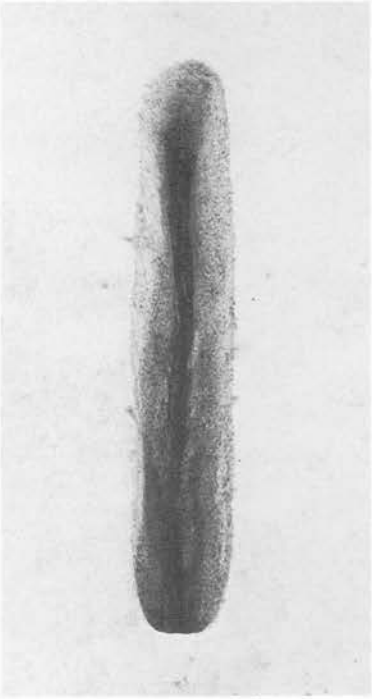
249号陥し穴状遺構

写真図版第71図　陥し穴状遺構



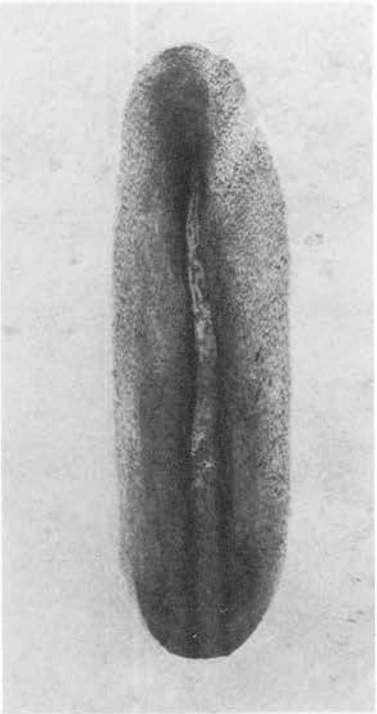
250号陥し穴状遺構



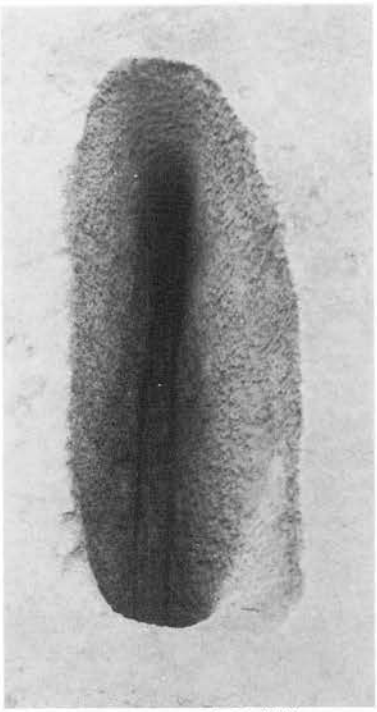


253号陥し穴状遺構

252号陥し穴状遺構

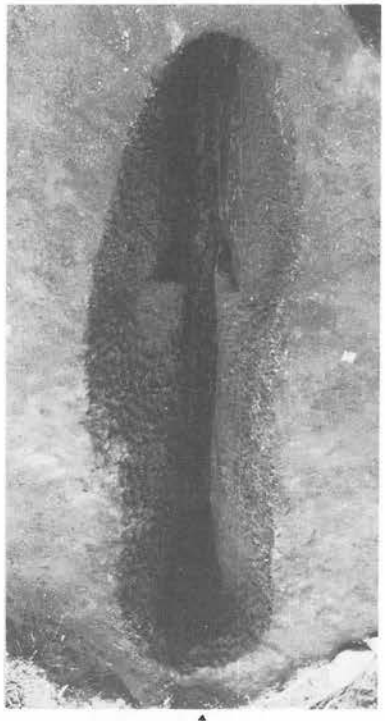


251号陥し穴状遺構



254号陥し穴状遺構

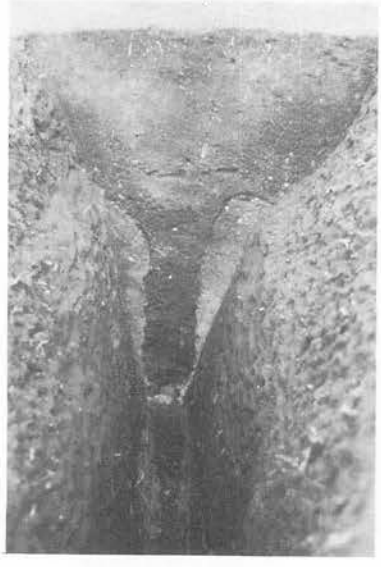
写真図版第72図　陥し穴状遺構



258号陥し穴状遺構

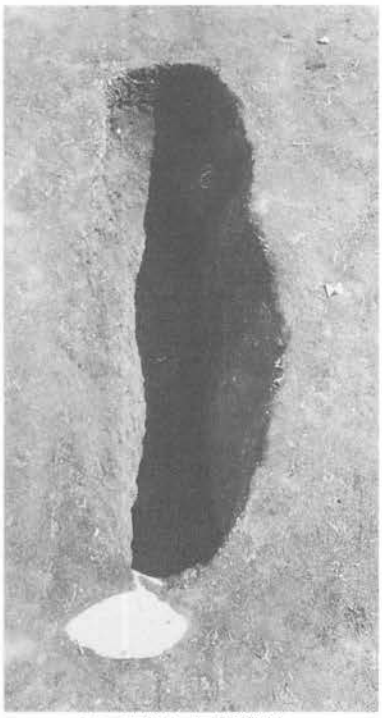
255号陥し穴状遺構

256号陥し穴状遺構

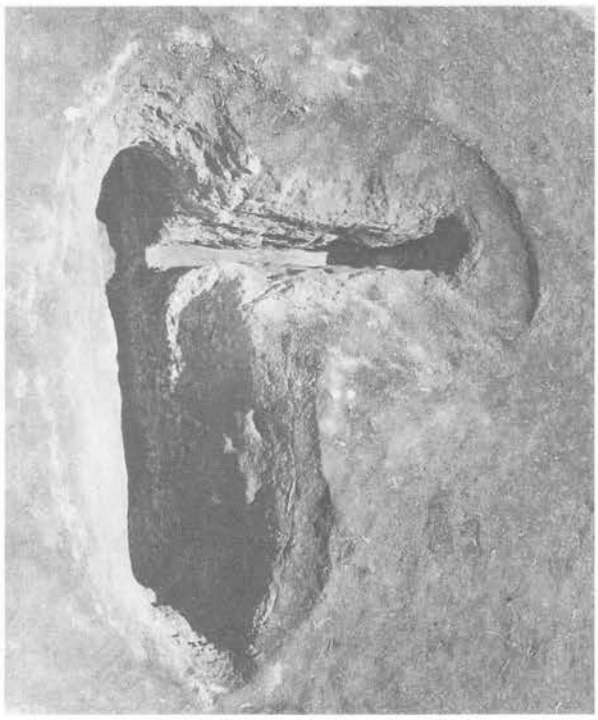


259号陥し穴状遺構断面

写真図版第73図　陥し穴状遺構

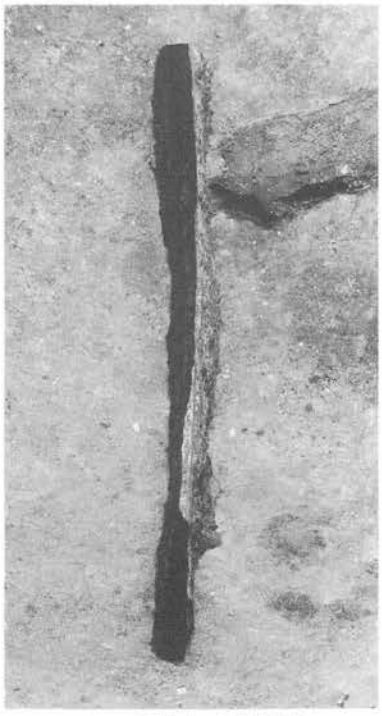


261号陥し穴状遺構

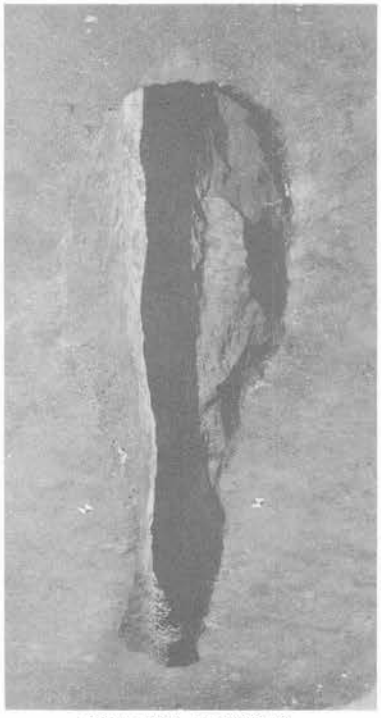


262号・263号陥し穴状遺構

264号陥し穴状遺構

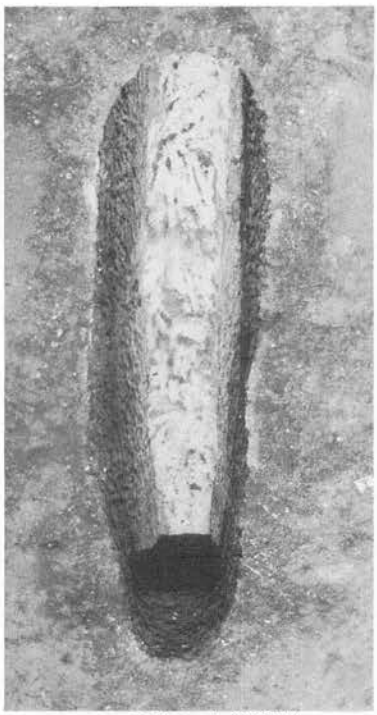


266号陥し穴状遺構

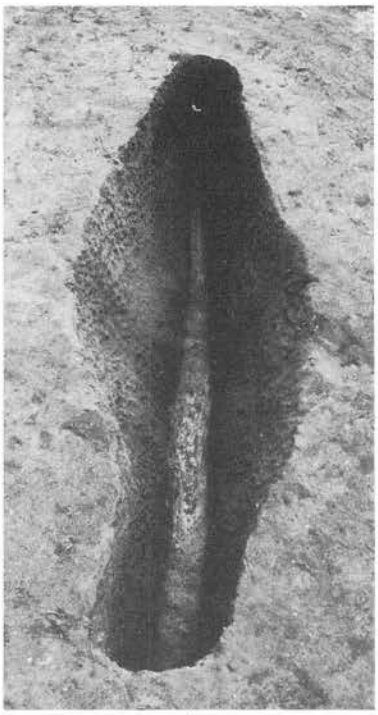


267号陥し穴状遺構

写真図版第74図　陥し穴状遺構

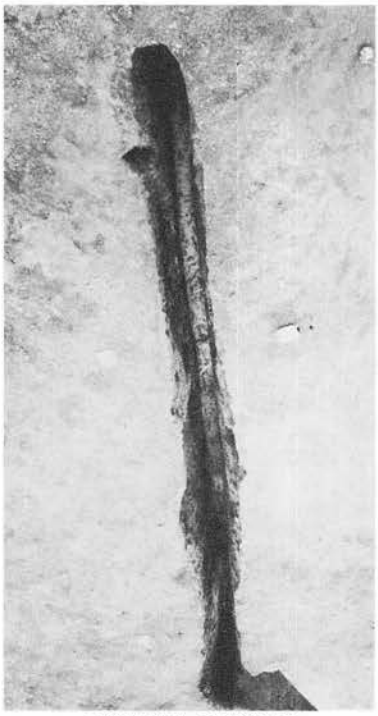


268号陥し穴状遺構

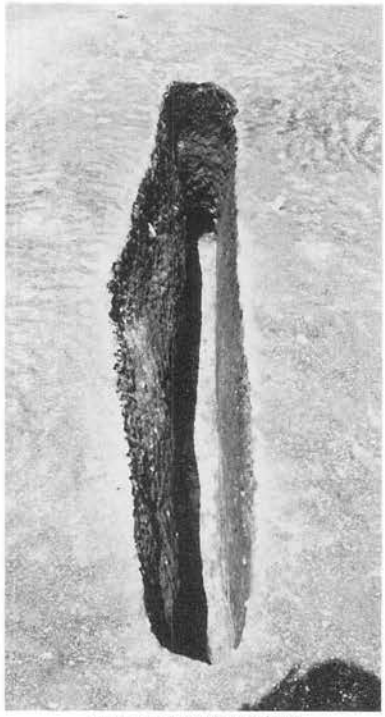


270号陥し穴状遺構

271号陥し穴状遺構

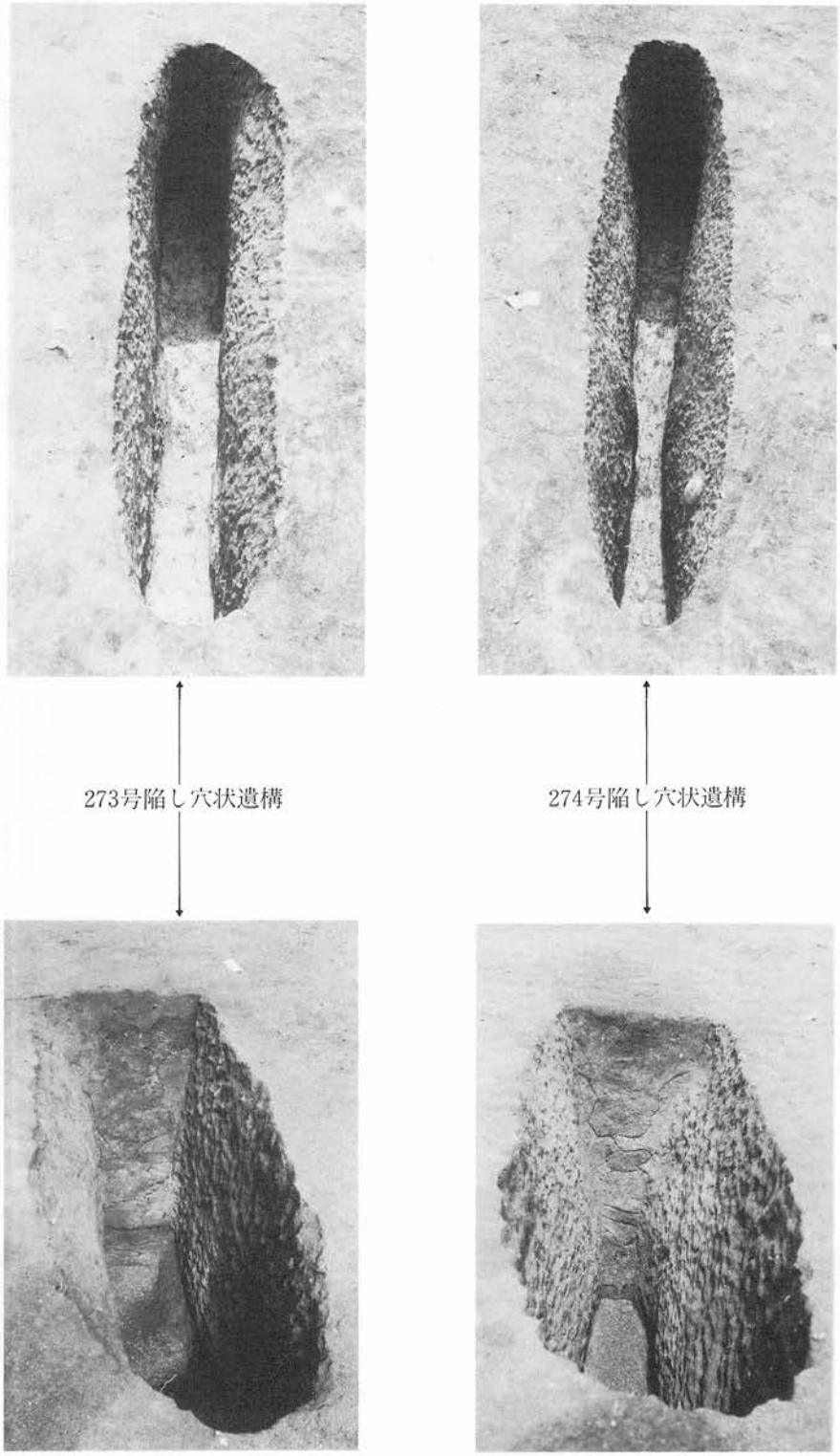


269号陥し穴状遺構

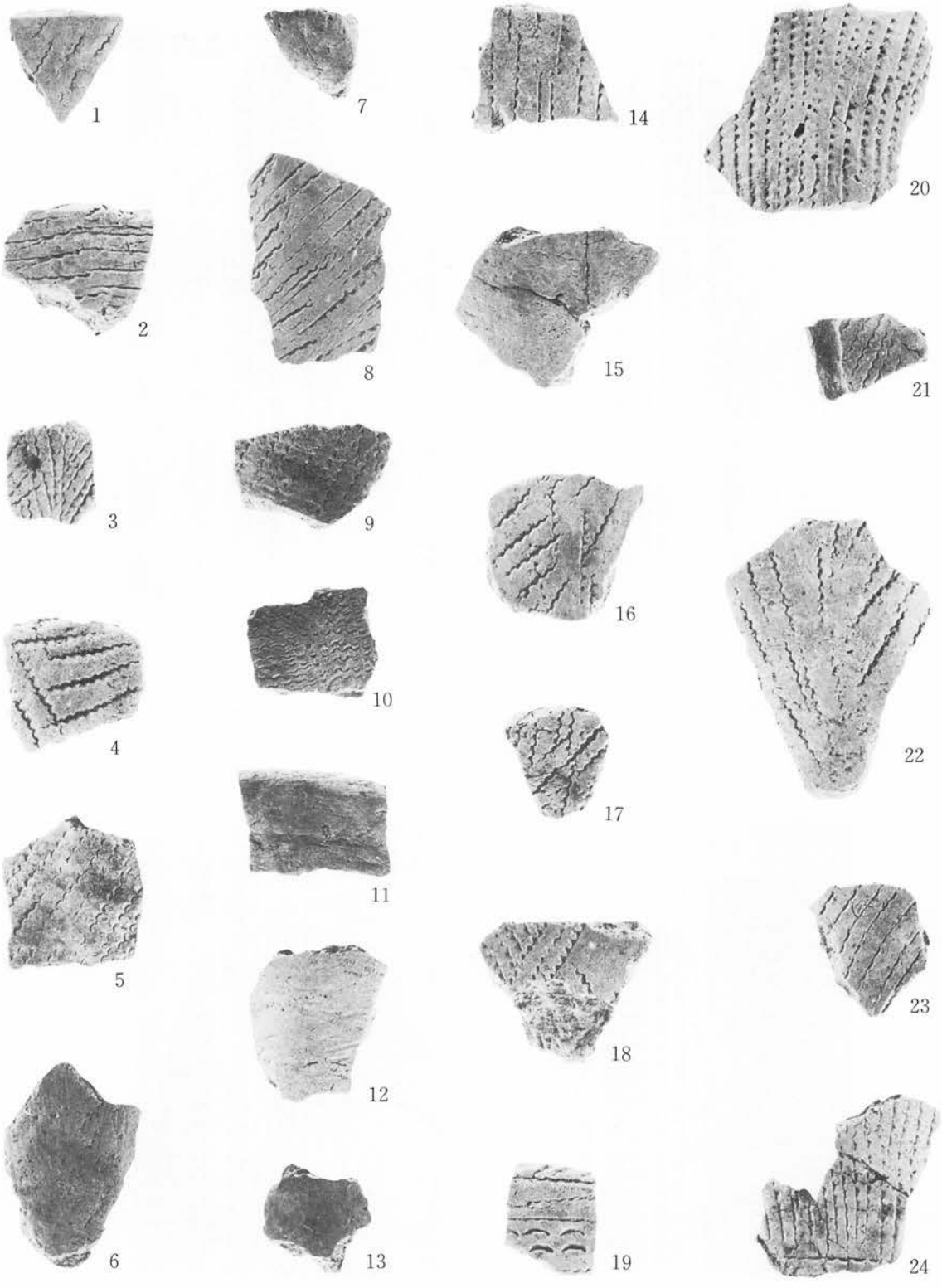


272号陥し穴状遺構

写真図版第75図　陥し穴状遺構

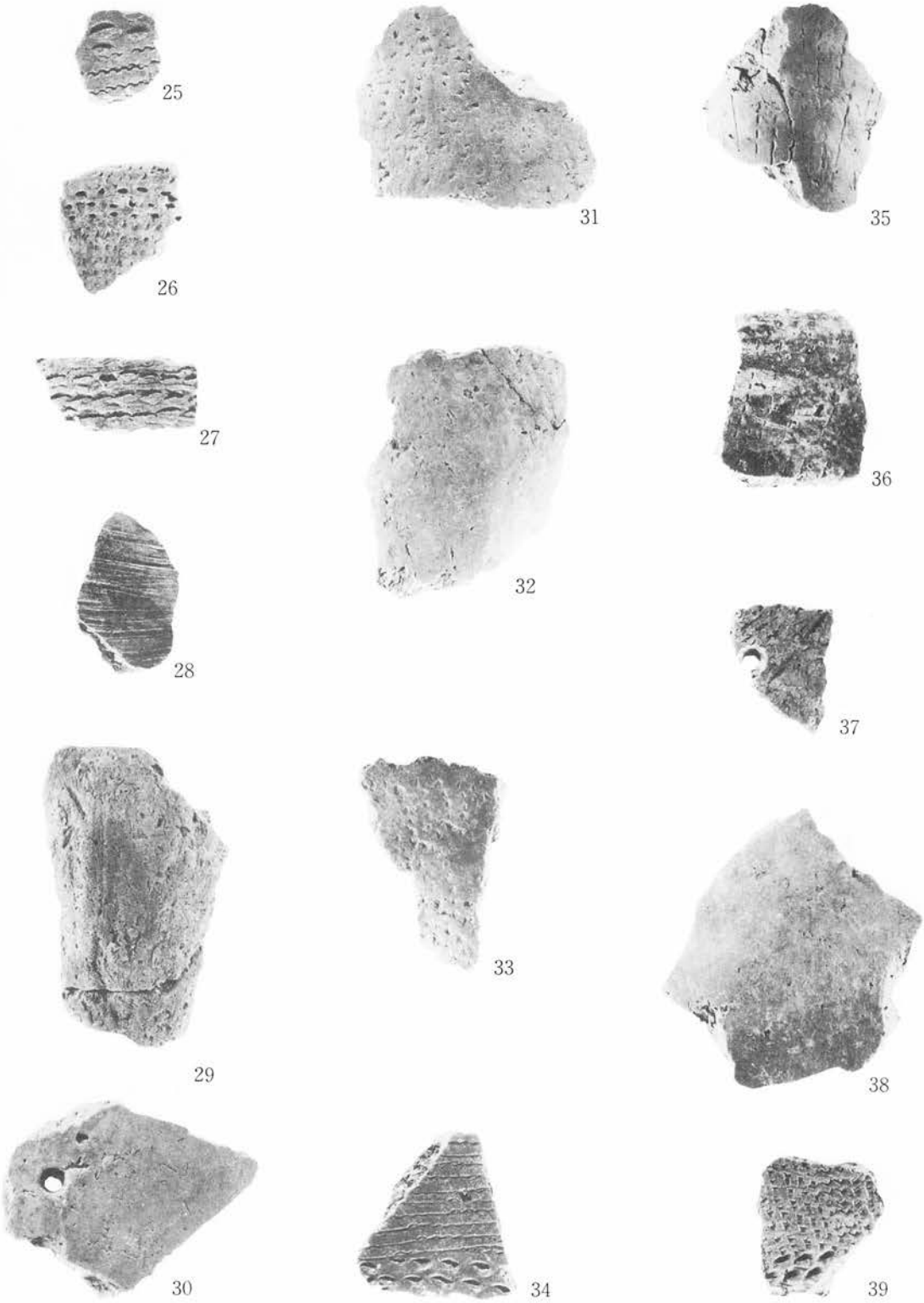


写真図版第76図　陥し穴状遺構



259号陥し穴状遺構（1～7）　261号陥し穴状遺構（8～10）　262号陥し穴状遺構（11～28）

写真図版第77図　陥し穴状遺構内出土遺物



265号陥し穴状遺構（29～35）　　271号陥し穴状遺構（36～39）

写真図版第78図　陥し穴状遺構内出土遺物

財団法人　岩手県埋蔵文化財センター役職員

役　員

理事長	金子彰吉	（県教育長）
副理事長	尾沢重遠	（県教育次長）
常務理事	熊谷正男	（県立埋蔵文化財センター所長）
理　事	吉田良和	（県農政部次長）
〃	高橋健之	（県林業水産部次長）
〃	穂積昭慈	（県土木部次長）
〃	板橋　源	（県立博物館長）
〃	草間俊一	（県立盛岡短期大学長）
〃	小形信夫	（元常務理事）
監　事	佐藤公志	（県教委総務課長）
〃	小野寺英二	（県教委財務課長）

職　員

所長	熊谷正男
副所長	宮　英一
所付	吉田　努
〔総務課〕	
総務課長	菊池　勉
庶務係長	阿部詔夫
主事	戸草内幸男
〃	立花多加志
技能員	佐藤春男
〔調査課〕	
調査課長	近藤宗光
主任専門調査員	昆野　靖
〃	国生　尚
専門調査員	片方宗明
〃	長沼　彬
〃	大原一則
〃	渡辺洋一
〃	田鎖寿夫
〃	佐々木嘉直
〃	栃澤満郎
〃	平井　進
専門調査員	中村良一
〃	田村壮一
〃	岩渕　久
〃	光井文行
〃	玉川英喜
〃	石川長喜
〃	三浦謙一
〃	高橋与右衛門
〃	高橋義介
〃	佐々木清文
〔資料課〕	
資料課長	名須川溢男
専門調査員	菊池利和
〃	工藤利幸
〃	中川重紀
〃	酒井宗孝

岩手県埋文センター文化財調査報告書第85集

小井田Ⅲ遺跡発掘調査報告書
東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

昭和60年2月25日印刷
昭和60年3月1日発行
発行　(財)岩手県埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡字高屋敷
TEL (0196) 38—9001～2
印刷　株式会社富士屋印刷所
〒020 盛岡市下ノ橋町2番9号
TEL (0196) 23—6391